

お お さ わ や ち  
大沢谷内遺跡Ⅲ 第18次調査

— 市道鎌倉横川線改良工事に伴う大沢谷内遺跡第2次発掘調査報告書 —



2012

新潟市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は新潟県新潟市秋葉区横川浜字牛ヶ島で実施した大沢谷内遺跡第18次調査の記録である。
- 2 調査は市道鎌倉横川1号線改良工事に伴うもので、新潟市秋葉区建設課の依頼に基づき行なった。
- 3 調査は新潟市教育委員会が主体となり、新潟市文化観光・スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センターが補助執行した。
- 4 平成22年度に発掘調査、平成23年度に報告書作成を行った。発掘調査と整理作業の体制は第三章のとおりである。
- 5 出土遺物および発掘調査・整理作業に係る記録類は、一括して新潟市文化財センターが保管している。
- 6 本書の作成は前山精明（新潟市文化財センター）が行った。
- 7 各種図版の作成・編集に関しては、(有)不二出版に委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 8 自然科学分析は火山灰研究所に委託し、前山が編集した。
- 9 火鑽白と下駄の樹種は、財団法人元興寺文化財研究所保存科学センターが同定した。
- 10 種実の前山が同定した。
- 11 層序図・遺構図・遺物出土微細図等の測量は、株式会社イビソクに委託した。
- 12 遺物実測は、土橋益美・熊野敦子・森岡綾子・内藤正義（新潟市文化財センター臨時職員）の協力をえて前山が行った。
- 13 遺構および土器のトレースは、不二出版に委託した。
- 14 土製品・石製品・木製品のトレースは前山が行った。
- 15 本書で用いた現地写真は、前山と潮田憲幸・八藤後智人（新潟市埋蔵文化財センター）が撮影した。
- 16 土器・石製品・土製品・木製品の写真は佐藤俊英氏（ビッグヘッド）に撮影を依頼した。
- 17 土器の一部とアスファルト・鉄弁・漆要具は前山が撮影した。
- 18 種実については、内藤正義の協力をえて前山が撮影した。
- 19 執筆は第七章第2節・第3節・第4節を火山灰研究所、これ以外を前山が行った。
- 20 古代土器について、春日真実氏（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）から御教示いただいた。
- 21 灰輪陶器と古代土器全般について、筑沢正史氏（新潟市教育委員会）から御教示いただいた。
- 22 中世陶器について、水澤幸一氏（胎内市教育委員会）から御教示いただいた。
- 23 漆要具について、三ツ井朋子氏（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）から御教示いただいた。
- 24 調査から本書作成までの間に下記の方々や機関から御教示・御協力を賜った。ここに記して篤く御礼申し上げます。  
伊藤秀和・伊比博和・岡本郁栄・春日真実・小林巖雄・筑沢正史・佐藤雅一・鈴木俊成・早田 勉・田中耕作・田中 靖・  
鶴巻康志・寺崎裕助・細野高伯・三ツ井朋子・水澤幸一・山田哲也・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

(所収・敬称略・五十音順)

## 凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。
- 3 掲載図面のうち、既存の地形図等を使用した場合は図面の作成者・作成年を示した。
- 4 層序図は、調査区北壁の全域で行った図面から大別層位の柱状図を示した。
- 5 発掘調査にあたり遺構番号は地区ごとに付したが、整理作業の段階で1区北部から4区南部に向かい通し番号に変更した。
- 6 遺構の実測図版は、1区北部から4区南部に向かい番号順に掲載した。
- 7 土器の実測図版は、遺構出土資料・包含層出土資料別に作成し、前者については所属時期順に掲載した。
- 8 遺構の個別実測図は、SE418の井戸側以外が40分の1である。
- 9 土器の実測図は3分の1を基本とし、これと異なる場合は図版に明示した。土製品・石製品・銭貨・木製品の縮尺は、各図版に示した。
- 10 遺物実測図版と遺物写真図版の縮尺は同一である。
- 11 種実・アスファルト写真のサイズは、資料ごとに示した。
- 12 遺物実測図に示す網は、各図版凡例のとおりである。
- 13 土器実測図に示す矢印は、ケズリ方向を示す。
- 14 石製品実測図に示す矢印は、断面表示箇所が磨耗範囲、遺物内表示箇所が研磨・磨耗方向を表す。
- 15 土層・土器・アスファルトは、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 1967）を用い、色調名と番号を示した。
- 16 本書掲載遺物は「土器」・「土製品」・「石製品」・「金属製品」・「木製品」ごとに通し番号を付した。「土器」・「木製品」は本文および観察表・写真図版の番号もこれと同一である。「金属製品」については、写真図版にのみ掲載した資料がある。
- 17 遺物の註記は、「10 大沢谷内市道」の後にグリッド名・遺構番号を記し、出土位置記録を行った資料については、遺構番号の後にNo.を記した。

# 目 次

## 第I章 序 章

第1節 遺跡概観	1
第2節 発掘調査に至る経緯	1

## 第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	2
A 新津丘陵	2
B 山麓低地	4
第2節 周辺の遺跡	5
A 縄文時代	5
B 弥生・古墳時代	5
C 飛鳥・奈良時代	9
D 平安時代	9
E 鎌倉・室町時代	9
第3節 歴史的環境	10

## 第III章 調査の概要

第1節 確認調査(第16次調査)	11
第2節 発掘調査(第18次調査)	11
A 調査方法	11
B 調査経過	14
C 調査体制	15
第3節 整理作業	16
A 整理方法	16
B 整理経過	16
C 整理体制	16

## 第IV章 遺 跡

第1節 概 要	17
第2節 微地形と層序	17
A 微 地 形	17
B 層 序	17
第3節 遺 構	18
A 概 要	18
B 遺構の区分	18
C 遺構各説	19

## 第V章 遺 物

第1節 概 要	33
第2節 平安時代以前の遺物	33
A 縄文土器	33
B 奈良時代の土器	33
第3節 平安時代・中世の遺物	34
A 土 器	34
B 土 製 品	44
C 鍛冶関連遺物	44
D 金属製品	45
E 石 製 品	45
F 搬 入 碟	46
G 木 製 品	46
H 漆 要 具	48

## 第VI章 土壌内堆積物

第1節 概 要	49
第2節 種 実	49
A 同定種実	49
B 種実の構成	50
C 種実の位置づけ	52
第3節 アスファルト塊	52
A 発掘時出土資料	52
B 篩選別資料	52
C アスファルト塊の位置づけ	54

## 第VII章 自然科学分析

第1節 概 要	55
第2節 プラント・オパール分析	56
A 分析試料	56
B 分析方法	56
C 分析結果	56
第3節 花粉分析	58
A 分析試料	58
B 分析方法	58
C 分析結果	59
第4節 樹種同定	60
A 同定試料	60
B 同定方法	60
C 同定結果	60

## 第Ⅷ章 総 括

第1節 古代の土器について	64
A 編年の位置づけ	64
B 胎 土	66
C タタキ整形	68
第2節 曲物の製作と流通	70
第3節 アスファルト塊をめぐって	72
第4節 古代・中世集落の植物食利用	74
引用・参考文献	75
別 表	77
報告書抄録・奥付	巻末

### 挿 図 目 次

第1図 阿賀野川河畔から見た越後平野	2	第15図 プラント・オパール顕微鏡写真	57
第2図 大沢谷内遺跡周辺の地形	3	第16図 プラント・オパールの検出量	57
第3図 遺跡周辺の地形と層序	4	第17図 花粉・麩子顕微鏡写真	59
第4図 周辺の遺跡分布図1(縄文・弥生・古墳)	7	第18図 SD228(畝状遺構2)の花粉ダイアグラム	60
第5図 周辺の遺跡分布図2(古代・中世)	8	第19図 樹種同定図1	61
第6図 試掘調査地の位置と層序	12	第20図 樹種同定図2	62
第7図 古代土器分類図	35	第21図 遺構別土器構成比率	64
第8図 土師器・須志器のタタキ整形痕分類	36	第22図 遺構別にみた土師器の形態	65
第9図 漆塗り布	48	第23図 Ⅰ期・Ⅱ期遺構出土の須志器無台杯	66
第10図 種子顕微鏡写真	50	第24図 越後平野周辺の砂粒組成と土師器の胎土構成	67
第11図 種実出現率	51	第25図 須志器・土師器のタタキ整形痕	69
第12図 アスファルト塊	53	第26図 新潟市域における古代・中世の井戸利用曲物	71
第13図 アスファルト塊のサイズと色調	54	第27図 越後平野周辺における古代・中世の石油関連資料	73
第14図 土壌サンプル採取地点	55		

### 表 目 次

第1表 大沢谷内遺跡周辺の縄文・弥生・古墳遺跡	5	第5表 植物珪酸体一覧	57
第2表 大沢谷内遺跡周辺の古代・中世遺跡	6	第6表 おもなプラント・オパール分類群の推定生産量	57
第3表 種実類一覧	50	第7表 検出花粉一覧	58
第4表 遺構内検出アスファルト塊の最大長	53	第8表 同定樹木一覧	63

### 別表目次

別表1 遺構計測表	77	別表4 木製品観察表	89
別表2 土器観察表	84	別表5 遺構出土古代土器器種構成率	89
別表3 土製品・石製品・金属製品観察表	89		

## 図版目次

- 図版 1 周辺の旧地形図 (1/50,000)  
図版 2 遺跡全体図 (1/10,000)  
図版 3 グリッド設定図  
図版 4 層序とIV層上面地形図  
図版 5 1区・2区遺構全体図  
図版 6 3区・4区遺構全体図  
図版 7 畝状遺構区分図  
図版 8 1区1列～10列の遺構  
図版 9 1区10列～16列の遺構  
図版 10 1区17列～21列の遺構・SX29・SD34の遺物分布  
図版 11 2区33列～42列の遺構  
図版 12 2区42列～49列の遺構  
図版 13 2区49列～58列の遺構  
図版 14 2区58列～73列の遺構  
図版 15 2区38列～40列の耕作痕  
図版 16 3区の遺構 (溝・畝状遺構・性格不明遺構)  
図版 17 3区の遺構 (土坑・ピット・性格不明遺構)  
図版 18 4区100列～108列の遺構  
図版 19 4区108列～114列の遺構  
図版 20 4区113列～122列の遺構  
図版 21 4区114列～125列の遺構  
図版 22 グリッド別出土遺物分布図  
図版 23 I期遺構の土器  
図版 24 II期遺構の土器 (SX29)  
図版 25 II期遺構の土器 (SD34)  
図版 26 II期遺構の土器 (SD34)  
図版 27 II期遺構の土器 (SD34)  
図版 28 II期遺構の土器 (SD34)  
図版 29 II期・III期遺構の土器  
図版 30 包含層の土器 (平安時代以前の土器・平安時代の土師器)  
図版 31 包含層の土器 (平安時代の土師器)  
図版 32 包含層の土器 (平安時代の須恵器)  
図版 33 包含層の土器 (平安時代の須恵器・灰輪陶器・中世土器)  
図版 34 土製品・石製品・金属製品  
図版 35 木製品 (火鑽白・下駄・箸・礎板・木柱)  
図版 36 木製品 (木柱)  
図版 37 木製品 (SE418 曲物 No.1・No.2)  
図版 38 木製品 (SE418 曲物 No.3・No.4)

## 写真図版目次

- 写真図版 1 上空から見た発掘調査区  
写真図版 2 1区・2区全景  
写真図版 3 3区・4区全景  
写真図版 4 基本層序  
写真図版 5 1区の遺構と流路 (I期区画溝、II期流路・土坑・性格不明遺構)  
写真図版 6 1区の遺構 (II期区画溝)  
写真図版 7 1区の遺構 (II期ピット)と遺物出土状況  
写真図版 8 2区の遺構 (I期流路・畝状遺構1・区画溝)  
写真図版 9 2区の遺構 (I期性格不明遺構・流路)  
写真図版 10 2区の遺構 (II期区画溝)と耕作痕  
写真図版 11 2区の遺構 (II期区画溝・ピット)  
写真図版 12 2区の遺構 (II期ピット、III期区画溝・性格不明遺構)  
写真図版 13 3区の遺構と流路 (I期畝状遺構)  
写真図版 14 3区の遺構 (I期畝状遺構・土坑・流路、II期区画溝・ピット・性格不明遺構)  
写真図版 15 4区の遺構 (I期畝状遺構)  
写真図版 16 4区の遺構 (I期畝状遺構、II期区画溝・ピット)  
写真図版 17 4区の遺構 (II期井戸、III期区画溝・ピット・井戸)  
写真図版 18 4区の遺構 (III期井戸)  
写真図版 19 I期遺構の土器  
写真図版 20 II期遺構の土器  
写真図版 21 II期遺構の土器  
写真図版 22 II期・III期遺構の土器  
写真図版 23 包含層出土土器 (平安時代以前・平安時代)  
写真図版 24 包含層出土土器 (平安時代)  
写真図版 25 包含層出土土器 (平安時代・中世)  
写真図版 26 土師器・須恵器の胎土  
写真図版 27 土師器・須恵器のタキ整形痕  
写真図版 28 土製品・石製品・金属製品  
写真図版 29 木製品 (火鑽白・下駄・箸・礎板・木柱根)  
写真図版 30 木製品 (木柱根)  
写真図版 31 木製品 (曲物)

# 第I章 序 章

## 第1節 遺跡概観

大沢谷内遺跡は、新潟市の南端付近、秋葉区横川浜地内に所在する。越後平野の東縁に連なる新津丘陵と信濃川に挟まれた沖積地に位置し、地表面の海拔は4m前後を測る。遺跡の存在は、昭和32(1957)年に行われた暗渠工事で古代の土器が発見されたことから明らかになった。本遺跡での本格的な調査は、昭和63(1988)年から平成元(1989)年にかけて小須戸町教育委員会が行った発掘調査(1次・2次調査)に始まる(川上1989)。その後、国道403号小須戸バイパス建設に伴う一連の調査(2次～15次・17次調査)が平成16(2005)年から現在に至るまで行われ、本遺跡に対する理解が飛躍的に進展した(前山2009・2010・2011、瀬田2011・2012)。

遺跡の広がりには東西800m、南北1,200mあまりにおよぶ。遺跡の形成は縄文時代晩期中葉に遡る。以後、弥生時代中期～後期、古墳時代前期～中期、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代において居住空間を変えながら断続的に利用されたことが明らかになっている。遺跡形成においてピークをなす時期は、縄文時代晩期・飛鳥～奈良時代・平安時代である。縄文時代の遺跡は、国道403号関連調査区内に中心をもつ。大規模な谷を挟んで北部地区と南部地区に分かれ、前者の北約100mに位置する大沢谷内北遺跡も同一遺跡群としてとらえられる。3地区はいずれも継続期間が短く、相互補完的な変遷をとげる。各地区では基本的な生活用具が完備されていない点から通年居住の場とみなし強く、何らかの目的で利用された季節的居住地と考えられる。

飛鳥～奈良時代の遺跡は、上記調査区の3区・4区に広がりをもつ。20軒あまりの掘立柱建物群が微高地上に分布し、南部に位置する谷周辺は祭祀空間として利用されていた。出土遺物の中には円面鏡・九木木簡・斎串などが含まれ、越後平野周辺で数少ない官的格をもった集落として注目される。平安時代の遺跡は、東部・中央部・北部に分布する。9世紀前半から10世紀初頭に中心があり、数軒を単位とした小規模集落が水田や畑を伴いながら点在していた可能性が高い。本次調査区は、その一角に位置している。

## 第2節 発掘調査に至る経緯

「市道鎌倉横川1号線」の改良工事計画が平成20年に示された。これは大沢谷内遺跡を南北に縦断する既設道路の両側を全長400mにわたり拡幅するもので、工事区域には大沢谷内遺跡の北端部が含まれていた。

新潟市教育委員会は、工事担当課秋葉区建設課の依頼を受け、工事予定区域2,500m<sup>2</sup>を対象とした遺跡確認調査(第16次調査)を平成21年10月10日から17日にかけて行なった。調査は新潟市埋蔵文化財センターが補助執行し、既設道路の両側29箇所まで遺跡確認にあたった。その結果、周知の遺跡範囲外にあたる区域を含む14箇所から遺物が出土し、遺跡の広がりがさらに北部へおよぶことが明らかになった。

新潟市文化観光・スポーツ部歴史文化課では、新潟県教育委員会に平成21年11月25日付文書で調査結果を報告するとともに、12月16日には遺跡範囲の変更通知を提出した。これを受けて新潟県教育委員会は、新潟市に対し平成21年12月22日付文書で発掘調査実施の通知を行った。同年11月25日には秋葉区建設課に調査の結果を伝え、今後の対応に関する協議に入った。以後協議を重ね、道路拡幅区域を対象とした発掘調査を23年の稲刈り後から11月末までの間に行うことで合意した。また、平成22年6月17日には秋葉区建設課から新潟市教育委員会に対して本調査依頼書が提出され、新潟市教育委員会は同年9月20日に9月23日から11月30日までを実施期間とする発掘調査の着手を新潟県教育委員会に報告した。



## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

大沢谷内遺跡は、越後平野の東縁に連なる「東山丘陵」の西麓に位置する。遺跡の前面には広大な平野が広がり、日本海からは直線にして19km内陸にあたる。現在の年平均気温は13℃弱、1日あたりの降水量は、梅雨や台風に伴ない集中豪雨が発生する6月～8月をピークとする。冬季の積雪量が1mを超えることはほとんどなく、新潟県内では少雪地帯にあたる。本遺跡を中心とした東西8km・南北12kmにおける地形区分を第2図に示す。この範囲の地形は丘陵・山地と沖積地に大別でき、その占有割合は前者2対後者8である。

#### A 新津丘陵

大沢谷内遺跡の背後に広がる山地帯は「東山丘陵」の北端に位置する。新津市街地付近から加茂川に至る南北17kmの間は一般に「新津丘陵」と呼ばれ、その大半が本遺跡中心半径10km圏内に含まれる。丘陵の幅は南部で6km～7kmを測るが、中央部に位置する「菩提寺山」付近で幅を狭め、それ以北では4kmほどとなる。

新津丘陵の地形は、金毘羅山(139m)を境に南北で特徴が異なる。南部では中～大起伏山地からなる「護摩堂山地」が展開し、加茂川までの間に標高200m以上の峰が点在する。新津丘陵中央部に位置する菩提寺山(248m)・高立山(276m)・護摩堂山(268m)、南部の猿毛山(326m)が代表的なものである。中でも、中央三峰の山並みは遠隔地からの眺望に優れ、北からの眺めは越後平野のランドマークとなりうる景観を備える(第1図)。これに対し、金毘羅山以北は標高100mにみたく、起伏に乏しい地形が展開する。

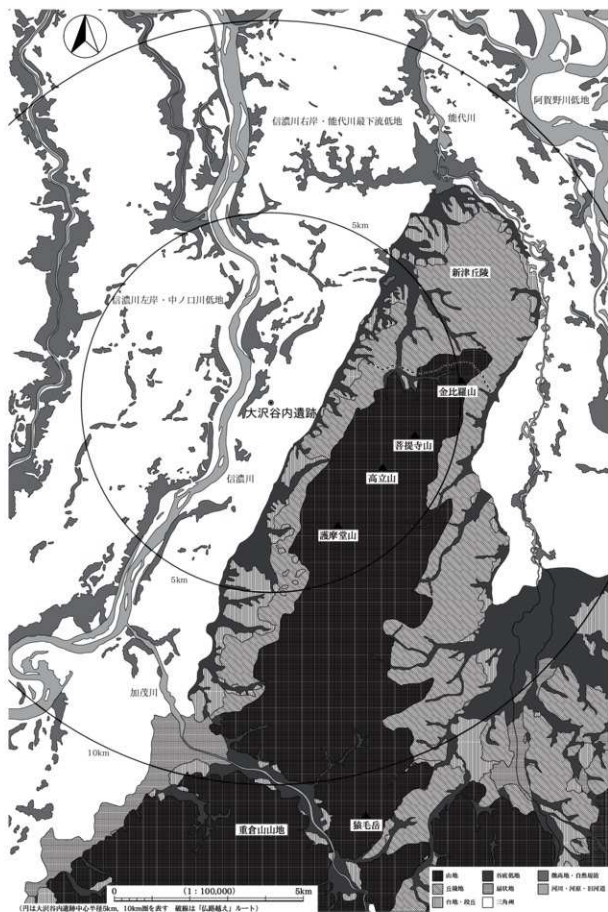
山裾には、「新津丘陵・護摩堂山地縁辺地」と呼ばれる段丘が形成され、上位・中位・下位面に区分される。これらは越後平野に面した西麓から北端部を中心に分布するが、いずれも規模が小さく、連続性にも欠ける。新津丘陵には、河川の浸食によって数多くの谷が形成される。しかし、制約された丘陵面積に由来して大規模な河川は存在しておらず、山裾扇状地も形成されていない。

新津丘陵の山裾部には、森林資源の継続的な利用をつうじ「里山」が形成されていた(小林1998)。また、本遺跡に近い矢代田地区では、かつて東麓の橋田地区との間に緊密な婚姻関係が結ばれていた。往来には金毘羅山の北方を通る「仏路越え」が利用され、その道程は4kmほどであった(斎藤・山名1983)。第2図中に示した破線は、明治44(1911)年測図に示された仏路越えルートである。

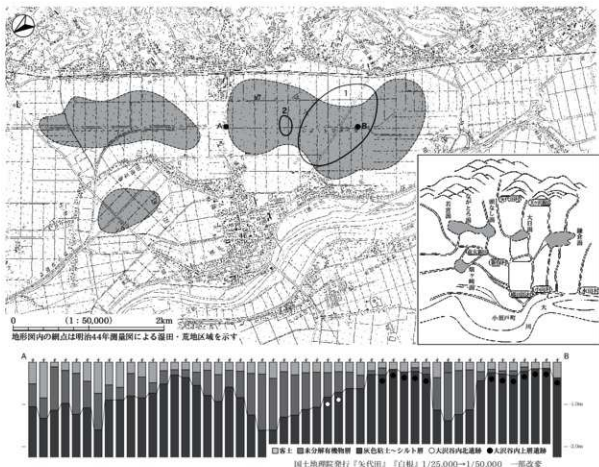


第1図 阿賀野川河畔から見た越後平野  
(新潟市北区灰塚付近から撮影)

新津丘陵は、石油の産出地として知られる。真柄仁兵衛によって油井が発見されたと言われ、慶長18(1613)年に天ヶ沢地内など4箇所での草水戸掘削工事願いが新発田藩に許可されて以来、採油が始まったとされる(新潟市2008)。原油の採掘は明治年間から本格化し、昭和30年代に至るまで新潟県最大の生産量を記録した。しかし、平成8(1997)年に掘削が停止され、400年あまりにわたる石油採掘に終止符が打たれた。図版1には、明治44(1911)年測図に示される油井の位置を「■」で表わした。本遺跡から直線距離で1.4km東に位置する鎌倉新田地内



第2図 大沢谷内遺跡周辺の地形



第3図 遺跡周辺の地形と層序 (1：大沢谷内遺跡・2：大沢谷内北遺跡)

では現在でも原油が湧出しており、天然アスファルトの生成地点をみることもできる (図版2)。

## B 山麓低地

大沢谷内遺跡中心半径10km圏内には多数の水系が存在する。新津丘陵西方には信濃川・中ノ口川、東麓には能代川、北麓には阿賀野川、南東部には早出川、南端部には加茂川が流れる。それぞれの流域には沖積低地が形成されており、本遺跡は「信濃川右岸・中ノ口低地」の一角に位置する。

越後平野における現在の地形は、ヴュルム氷期に存在した「古白根湖」の周辺を中心に沈下が著しい。そのため海拔5mラインが新津丘陵西麓の間近までおよび、本遺跡付近では3m台を測るにすぎない。西約500mに流れる信濃川は、ヴュルム氷期には弥彦・角田山の東麓に位置していた。その後流路が二つに分かれ、近世初期には「信濃東川」が現在地付近に流れていた [鈴木 1989]。

新津丘陵西麓の沖積地には、数多くの潟がかつて存在した。第3図右は、新発田市立図書館が所蔵する「元禄絵図」を簡略化したもので [斉藤・山名 1983]、17世紀末～18世紀初頭の状況がうかがえる。地形図に示した網かけ区域は、明治44(1911)年測量図に表記された湿田・湿地の範囲を示したものである。「元禄絵図」に描かれる5箇所のは潟はその範囲に概ね反映されており、本次調査区が湿田分布域の縁辺部に位置する状況を読みとることができる。

第3図下は、小須戸バイパス予定地で実施した全長2kmにおよぶ試掘・確認調査地点の層序を簡略化して示したものである。本遺跡や隣接する大沢谷内北遺跡でこれまでえられた知見によれば、表土下に堆積する未分解有機物層 (いわゆるガツゴ層) は、主として中世以降の堆積物であることが判明している。本次調査区も含め、低

城部の遺物包含層上面や中世の遺構覆土では未分解有機物層が堆積しており、何らかの地殻変動によって上記の溝が生成した可能性を強く示唆している。

## 第2節 周辺の遺跡

大沢谷内遺跡の北部で行った本次調査では、縄文時代晩期・奈良時代・平安時代・鎌倉時代の遺物が出土した。

本節では、時代区分の上でこれと平行する縄文時代～中世を対象とし、本遺跡を中心とした南北12km、東西8kmの範囲内に分布する遺跡から各時代の動きを概観する。この範囲は、行政区分のうえで新潟市秋葉区（旧新潟市・小須戸町）と田上町の全域を包括し、新潟市南区（旧白根市・味方村）、五泉市（旧五泉市・村松町）、加茂市、三条市の一部が含まれる。

### A 縄文時代

縄文時代の遺跡は74箇所を数える。このうち草創期から晩期に至る6期区分への帰属が明らかな遺跡は46箇所ある。内訳は、草創期1（1%）・前期8（11%）・中期24（33%）・後期26（36%）・晩期14（19%）である。新潟県内における遺跡数の推移と比較した場合、中期の割合が低く、後期・晩期への比重が高い点に特徴がある。

地形別に見ると、丘陵・台地・山地上の遺跡が60箇所（81%）にのぼる。沖積低地の遺跡は14箇所を数え、越後平野周辺の中では高い割合を示す。現時点で最古となるのは、大野中遺跡（第4図No.8）と横川浜堤外地遺跡（No.36）である。ともに中期前葉の土器が少量確認されており、越後平野周辺における低地立地遺跡の初現となる〔小黒2002〕。低地遺跡は晩期後半に増加する。各遺跡の性格は一律でなく、季節的な居住地とみられる大沢谷内遺跡（No.39・40）や墓を伴う保明浦遺跡（No.53）のような例がみられる。

### B 弥生・古墳時代

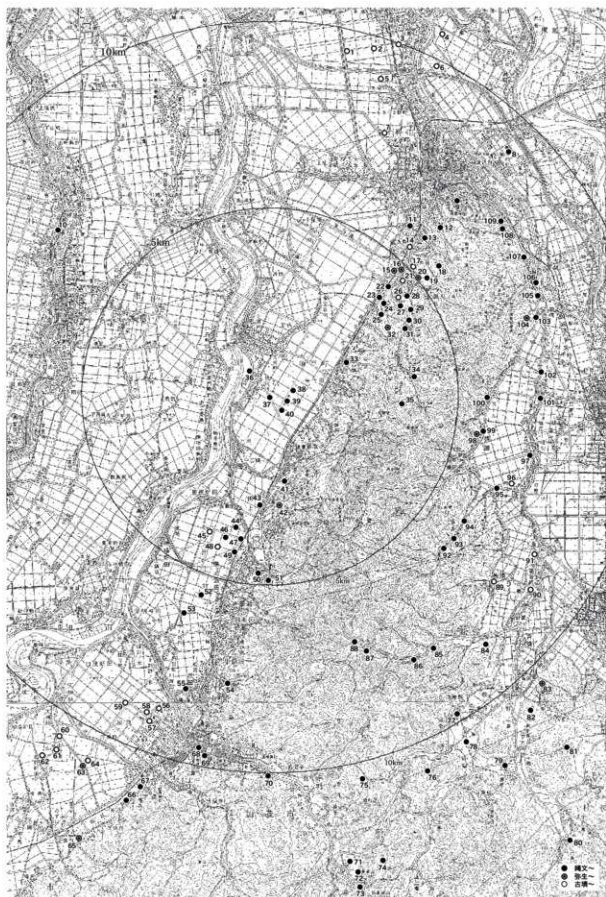
弥生時代の遺跡は18箇所を数え、縄文晩期と較べてさしたる増加はみられない。この時代の遺跡は古津八幡山高地性集落（第4図No.27）に代表されるが、沖積地の遺跡は本遺跡（No.40）と加茂川左岸の古津川遺跡（No.63）に限られる。弥生時代に現れる沖積地の遺跡は後者に限定されており、未発見遺跡が少なからず存在することも予想される。

第1表 大沢谷内遺跡周辺の縄文・弥生・古墳遺跡

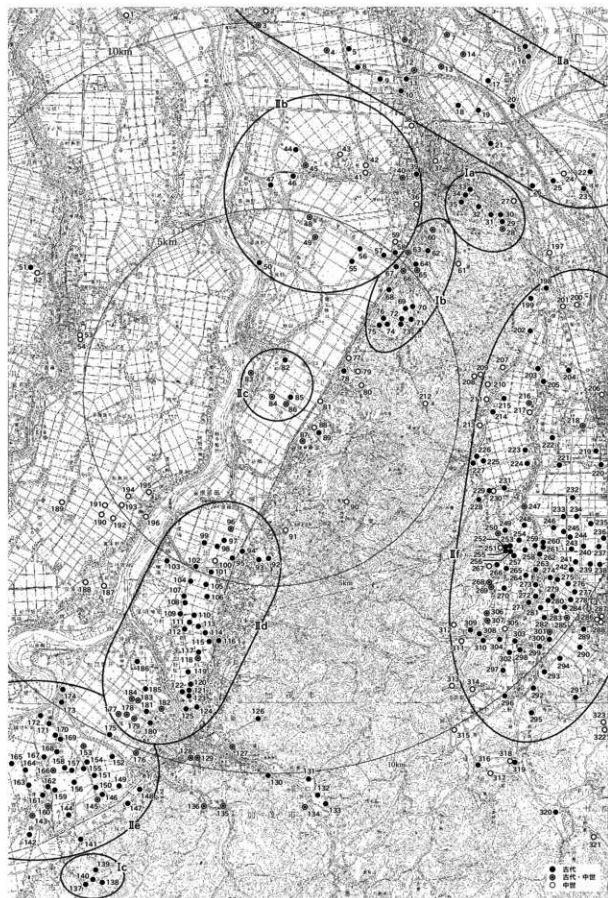
No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	結	古墳	29	埴原地	縄文	57	雲田	古墳	85	刈原	縄文
2	中田	古墳	30	沼川	縄文(中・後)	58	高津	古墳	86	若ノ原	縄文
3	結七島	古墳	31	沼川	縄文・弥生	59	丸沼	古墳	87	大沢沢内	縄文(後)
4	中谷内	古墳	32	沼川	弥生	60	白山A	古墳	88	大沢	縄文(中)
5	上浦	古墳	33	二波原	縄文(前)	61	白山B	古墳	89	上ノ坪南	古墳
6	沖ノ原	古墳	34	十ヶ沢	縄文(後)・弥生	62	柳田	古墳	90	中川	古墳
7	山田北	古墳	35	野ノ入	縄文	63	津田川	弥生・古墳	91	湯西	古墳
8	大野中	縄文(中・後)・弥生	36	柳田高地	縄文(中)	64	新田川	古墳	92	菅古	縄文(中)
9	秋葉	縄文(中・後)・弥生	37	大沢谷内古道	縄文(後)	65	石川	弥生・古墳	93	八幡寺	縄文(後)
10	味方津水橋南	縄文(中)	38	大沢谷内北	縄文(後)	66	加茂甲	縄文	94	八幡	縄文
11	山崎	縄文(後)	39	大沢谷内北部	縄文(後)・弥生・古墳	67	高津	縄文	95	南坪西	古墳
12	城見山	縄文	40	大沢谷内南部	縄文(後)・弥生・古墳	68	加茂寺政所	縄文(中・後)	96	住吉川南	古墳
13	原	縄文(中・後)・弥生	41	五社神社	縄文(後)	69	湯島南	縄文	97	五乃地	縄文
14	粟島大遺跡	古墳	42	野田	弥生	70	都川	縄文	98	小舟山	弥生
15	舟子	弥生・古墳	43	向島橋	縄文	71	野野原A・C・D	縄文(中・後・晩)	99	西十九沢	縄文
16	塩平	弥生・古墳	44	柳田	縄文	72	野野原B	縄文(中)	100	高田	縄文(前・中・後)
17	山崎	古墳	45	長沢	古墳	73	七坪志成塚	縄文(中・後)	101	比ノ野・新田	縄文(中・後)
18	平林	縄文	46	三浦	縄文	74	都ノ沢	縄文(中)	102	野下	縄文(後)
19	山崎	縄文(前・中)・弥生	47	加茂原	縄文(前・中)	75	新七山	縄文	103	下野山	縄文(後)
20	藤田	弥生・古墳	48	上野下	古墳	76	下王寺	縄文(前・中)	104	湯田	弥生
21	森尻	古墳	49	野田	縄文	77	都川	縄文(中・後・晩)	105	小舟山	縄文(中・後)・弥生
22	上谷	縄文	50	柳田	縄文(中・後)	78	大野・B	縄文	106	平	縄文(中・後)
23	下谷	縄文	51	白ノ下	縄文(中)	79	湯田	縄文(後)	107	野下	縄文(中)
24	鳥居塚	縄文(後)	52	平ノ木	縄文	80	野入・B	縄文	108	高津	縄文(中)
25	津田	縄文	53	保明浦	縄文(後)	81	ノ沢	縄文	109	北野町2丁目	縄文(前)
26	古津八幡山古墳	古墳	54	向島河	縄文(中・後・晩)	82	野田	縄文(後)			
27	古津八幡山	縄文(後)・弥生・古墳	55	野ノ北	縄文(中・後)	83	野田A	弥生			
28	宮ノ木	縄文(後)	56	石川	古墳	84	柳田	古墳			

第2表 大沢谷内遺跡周辺の古代・中世遺跡

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	稲葉の瓦輪堀	中世(鎌倉)	82	藤原1	古代(平安)-中世(室町)	162	藤原1	古代(平安)
2	田原堀	中世	83	藤原2	古代(平安)-中世(室町)	163	藤原1	古代(平安)
3	下野宮	古代-中世	84	大沢谷内古道	古代(平安)-中世(室町)	164	堀田	古代(平安)
4	長沼	古墳(古墳)	85	大沢谷内北	古代(平安)	165	堀田	古代(平安)
5	堀	古墳(古墳)	86	大沢谷内	古墳(古墳)-中世(平安)-中世(室町)	166	堀本ノ	古代(平安)-中世
6	結七島	古墳	87	大塚	古墳(古墳)	167	堀田	古代(平安)
7	中野内	古代(平安)-中世	87	大塚	古墳(平安)	168	山崎	古代(平安)
8	上野内	古代(平安)	88	大塚	古墳(平安)	169	山崎	古代(平安)
9	上野内	古墳	89	大塚	古墳	170	高古津	古代(平安)
10	田口乙	古代(平安)	90	蓮華寺城跡	中世(室町)	171	藤土原	古代
11	田口甲	古代(平安)	91	山崎古蹟出土地	中世(鎌倉)	172	藤原	古代
12	江内	古代(平安)-中世	92	蓮華寺前	古代(平安)	173	藤原	古代
13	津ノ原	古代-中世	93	中野	古代(平安)	174	堀田	古代
14	内野	古代(平安)-中世	94	中野	古代(平安)	175	堀田	古代
15	岡田城跡	古代(平安)-鎌倉	95	堀田	古代(平安)	176	堀田	古代(平安)
16	下野宮	古代(平安)-中世(鎌倉)	96	堀田	古代(平安)-中世	177	大沢田	古代(平安)
17	堀田	古代(平安)	97	二波	古代(平安)	178	大沢田	古代(平安)
18	山上遺跡	古代(平安)	98	土師下	古代(平安)	179	藤原	古代(平安)
19	大下	古代(平安)	99	新井	古代(平安)	180	堀田	古代
20	久保	古代(平安)	100	田上遺跡	中世(室町)	181	堀田	古代
21	大野中	古代(平安)	101	新井	古代(平安)-中世	182	堀田	古代(平安)
22	下久保	古代(平安)	102	藤原	古代(平安)	183	堀田	古代(平安)
23	堀上	古代(平安)	103	藤原	古代(平安)	184	堀田	古代(平安)
24	藤原寺石仏	中世	104	上野内	古代(平安)-中世	185	堀田	古代(平安)
25	新井寺遺址	古墳(平安)-中世(鎌倉-室町)	105	中野内	古代(平安)-中世	186	堀田	古代
26	西ノ原	古代(平安)	106	平ノ本	古代(平安)-中世	187	堀田	中世(室町)
27	田原の塚	古代(平安)	107	八反田	古代(平安)-中世	188	堀田	中世(平安)-中世
28	粟ノ原	古代(平安)-中世	108	竹ノ尾	古代(平安)-中世	189	堀田	中世(鎌倉)
29	谷本野丁下段跡	古代(平安)-鎌倉	109	藤原	古代(平安)	190	堀田	古代(平安)
30	谷本野丁上段跡	古代(平安)	110	堀田	古代(平安)	191	石ノ尾	古代(平安)
31	南宮城跡	古代(平安)	111	新井中野内	古代(平安)-中世	192	藤原	中世(室町)
32	七ヶ丘城跡群	古代(平安)	112	堀田	古代(平安)-中世	193	高古津	中世(室町)
33	秋葉丁下段跡	古代(平安)	113	古高津	古代(平安)-中世	194	堀田	中世(室町)
34	小倉平	古代(平安)	114	村裏	古代(平安)-中世	195	下野宮跡	中世(室町)
35	萩原	古代(平安)	115	田上丘陵地	古代(平安)-中世	196	堀田	中世(室町)
36	堀田城跡	中世(鎌倉)	116	新井中野内	古代(平安)	197	堀田	中世(室町)
37	本郷石仏	古代(平安)	117	藤原	古代(平安)-中世	198	堀田	古代(平安)
38	堀田	古代(平安)	118	大塚	古代(平安)-中世(鎌倉)	199	小塚山	古代(平安)
39	菅池	古墳	119	新井	古代(平安)-中世	200	藤原	中世
40	新井城跡	古墳(平安)-中世(鎌倉)	120	大塚上	古代(平安)-中世	201	藤原	中世
41	藤原寺石仏	中世	121	白地	古代(平安)-中世	202	藤原	中世
42	藤原	中世(鎌倉)	122	下野	古代(平安)-中世	203	堀田	中世
43	藤原	中世(鎌倉)	123	藤原	古代(平安)-中世	204	堀田	中世
44	西野	古代(平安)	124	藤原	古代	205	村野	古代(平安)-中世
45	谷ノ下	古墳(平安)-中世(鎌倉)	125	村野	古代	206	大塚	中世
46	具足ノ門跡	古代(平安)	126	堀田	古代	207	石ノ尾	中世
47	堀田	古墳(平安)-中世(鎌倉)	127	藤原	古代-中世	208	藤原	中世
48	下野ノ本	古墳(平安)-中世(鎌倉)	128	古高津城跡	古代-中世	209	堀田	中世
49	菅池	古墳(平安)-中世(鎌倉)	129	新井城跡	古代-中世	210	大塚	中世
50	藤原	古墳	130	堀田	古代	211	藤原	中世
51	藤原本郷	古代(平安)	131	古高津	古代(平安)-中世(室町)	212	新井	古代
52	江内	中世(鎌倉)	132	堀田	古代	213	大塚山正寺跡	中世
53	堀田	中世(鎌倉)	133	藤原	古代	214	藤原	古代(平安)-中世
54	藤原	中世(鎌倉)-室町	134	平ノ本	古代-中世	215	堀田	古代(平安)
55	中野	古代(平安)	135	堀田	古代-中世	216	堀田	古代(平安)-中世
56	古高津	古代(平安)	136	新井	古代-中世	217	堀田	中世(鎌倉)-中世
57	古高津内	古代(平安)	137	上ノ本	古代(平安)-中世	218	堀田	古代(平安)-中世
58	堀田門	古代(平安)	138	堀田	古代(平安)-中世	219	ソノア	古代(平安)-中世
59	古高津跡	中世	139	上野	古代(平安)-中世	220	石ノ尾	古代(平安)-中世
60	城見山	古代-中世	140	大塚	古代(平安)	221	藤原	古代(平安)-中世
61	粟田城跡	中世(室町)	141	堀田	古代	222	堀田	古代
62	大塚	古代(平安)-中世	142	平ノ本	古代(平安)	223	新井	古代(平安)
63	粟田大塚下	古代-中世	143	藤原中学校跡	古代(平安)-中世	224	藤原	古代(平安)-中世
64	田原	古代(平安)	144	藤原	古代(平安)	225	藤原	古代(平安)-日
65	堀田	古代(平安)-中世	145	堀田	古代(平安)-中世(室町)	226	堀田	古代(平安)-中世
66	堀田	古代-中世	146	中野	古代(平安)	227	堀田	古代
67	村野	古代(平安)	147	藤原	古代	228	堀田	古代
68	石ノ尾	古代	148	藤原	古代	229	藤原	古代(平安)
69	古高津山	古代(平安)-中世	149	山崎	古代	230	藤原	中世(室町)
70	古高津城跡	古代(平安)-中世	150	堀田	古代(平安)	231	堀田	古代(平安)
71	藤原城跡	古代(平安)	151	藤原	古代(平安)	232	藤原	古代(平安)
72	大塚	古代(平安)-中世	152	藤原	古代	233	藤原	古代(平安)
73	藤原	古代(平安)-中世	153	藤原	古代-中世	234	藤原	古代(平安)
74	藤原	古代(平安)	154	新井	古代(平安)	235	藤原	古代(平安)
75	藤原	古代(平安)	155	古高津	古代(平安)	236	藤原	古代(平安)
76	堀田	古代(平安)	156	堀田	古代(平安)	237	藤原	古代(平安)
77	二波	古代(平安)	157	堀田	古代(平安)	238	藤原	古代(平安)
78	藤原	古代(平安)	158	藤原	古代(平安)	239	藤原	古代(平安)
79	下野宮	中世	159	堀田	古代(平安)	240	藤原	古代(平安)
80	西野寺石仏	中世	160	藤原	古代(平安)-中世	241	藤原	古代(平安)
81	五ヶ丘城跡	中世(鎌倉)	161	平ノ本	古代(平安)	242	堀田	中世(鎌倉)



第4図 周辺の遺跡分布図1 (縄文・弥生・古墳)



第5図 周辺の遺跡分布図2(古代・中世)

古墳時代の遺跡は32箇所が増加する。沖積地の遺跡は18箇所を数える。このうち信濃川右岸・能代川最下流低地の7遺跡(No.1~7)と加茂川左岸扇状地の8遺跡(No.56~62・64)は、いずれも古墳時代に入って出現しており、沖積地への本格的な進出を強く印象づける。丘陵上には、新潟県内最大規模の円墳である古津八幡山古墳(No.26)が造営される。山麓に位置する舟戸遺跡(No.15)や塩辛遺跡(No.16)は、古墳造営に関与した可能性が高い集落である。

### C 飛鳥・奈良時代

古墳時代において沖積地への進出が目立つ中で飛鳥時代の遺跡数は大きく減少し、長沼遺跡(第5図No.4)と大沢谷内遺跡(No.86)の2箇所が確認できるのみとなる。その要因は明らかでないが、各時代の存続期間を考慮しても遺跡分布密度が低下したことは確実である。こうした中で、20棟あまりの掘立柱建物とともに円面硯・九九木簡・各種祭祀具・製作途上の資料を含む木製品などが大沢谷内遺跡から出土した。この時期は「淳足櫛」の存続期間にあたり、内水面を経由した密接な結びつきも想定できる。

奈良時代の遺跡は56箇所が増加する。丘陵上では八幡山遺跡付近に7箇所が密集し(No.69~74・76)、沖積地では加茂川右岸(No.104~115<sub>ㄷ</sub>)と能代川流域(No.218~221<sub>ㄷ</sub>)で密な分布域を形成する。このほか、加茂川左岸の馬越遺跡(No.153)では鈎帯金具や斎串・石製分銅などが出土し、官衛的な性格をうかがわせる。新津丘陵の北部で須恵器の生産が始まるのもこの時代の特徴で、東麓の山崎窯跡(No.202)は代表例の一つである。

### D 平安時代

平安時代の遺跡は、前時代の4倍にあたる190箇所を数える。遺跡の分布にはまとまりがあり、丘陵上の3ブロックと沖積地の6ブロックに分けられる。

丘陵上では、I a:新津丘陵北端部に位置する秋葉~草水町周辺(第5図No.28~33)、I b:その南方に位置する塩谷周辺(No.70~76<sub>ㄷ</sub>)、I c:三条市上保内南部(No.137~139)に区分できる。I aブロックでは草水町2丁目窯跡などの須恵器・土師器生産遺跡、I bブロックでは居村遺跡などの製鉄址を伴う点が特徴である。

沖積地では、II a:信濃川右岸・能代川最下流低地(No.10~14<sub>ㄷ</sub>)、II b:その南方に位置する小戸周辺(No.46~49<sub>ㄷ</sub>)、II c:大沢谷内遺跡周辺(No.82~86)、II d:加茂川付近から田上にかけて(No.102~122<sub>ㄷ</sub>)、II e:加茂川左岸の扇状地や低地(No.153~169<sub>ㄷ</sub>)、II f:能代川流域(No.232~246・273~285<sub>ㄷ</sub>)に区分できる。このうちII cブロックとII fブロックでは、背後の丘陵部に須恵器窯跡(No.87・202)が付随する。

以上のような分布を示す平安時代の遺跡は、大半が9世紀代~10世紀前半の間に形成される。大規模な集落は確認されておらず、耕地を伴いながら数軒の建物から構成される集落が一般的な形態とみられる。

### E 鎌倉・室町時代

現在登録される中世遺跡は70箇所を数える。時代区分が明らかな遺跡は47箇所あり、内訳は鎌倉時代10箇所、鎌倉~室町時代7箇所、室町時代30箇所である。中世に入り、中ノ口川に接する白根付近(第5図No.51~54)で遺跡数が増加するとともに、信濃川左岸の庄瀬付近(No.189~196)で新たなブロックが現れる。丘陵上では一般集落が消失し、加茂川右岸でも遺跡数の減少が著しい。能代川流域の遺跡が山麓に偏る点も新たな動きと言える。



### 第3節 歴史的環境

大沢谷内遺跡では、これまでの調査をつうじ縄文時代晩期から中世に至るまでの断続的な利用が確認されている。越後平野の周辺では、砂丘地遺跡で各時代の遺物が少量ながら出土する現象が知られている。しかし、沖積地においてこれほど長期にわたり利用されたケースは稀であり、前節で述べた周辺区域の中でも本遺跡は特異な存在をなしている。以下では大沢谷内遺跡の消長をたどるなかでこの遺跡に備わる立地の特性を考える。

縄文時代晩期の主な利用空間は、北に隣接した大沢谷内北遺跡を合わせ三つの地区からなる。各地区の形成時期には異なりがあり、①大沢谷内遺跡中央北部地区（晩期中葉）、②大沢谷内北遺跡（晩期中葉終末）、③大沢谷内遺跡中央南部地区（晩期後葉）の順に目まぐるしく移動する。各地区からは、粗製深鉢を中心とした土器が比較的多く出土した。これに対し、石器では基本的な用具の欠落が目立ち、石鏃などの製作を活発に行なった形跡がみられない点が大きな特徴である。食料残渣にも偏りがある。動物遺体ではサケ・イトヨ、植物遺体ではヒシの実に集中し、この時期の集落で一般的に利用された哺乳動物やトチの実・クリは皆無に等しい。

一方、大沢谷内遺跡の中央北部地区からは多量のアスファルト塊が出土した。縄文時代において重要な交易品として流通していたもので、遺跡内に集積された後各地に供給された可能性が高い。大沢谷内北遺跡では、丸木舟の繋留施設とみられる杭をなして分布し、その一角から櫂が出土した。各地区出土の土器胎土はバラエティーに富んでおり、越後平野周辺に分布する複数遺跡との関連性をうかがわせる。ここに列記したことがらに基づけば、当時の大沢谷内遺跡は限定された季節に利用された集落とみられ、広大な内水面が展開する縄文時代において交易拠点として機能した集落と考えられる。背後の山並みが遠隔地からの眺望に優れ、越後平野のランドマークをなすことも遺跡成立に関わる重要な要素と言える。

弥生・古墳時代の遺物は断片的な資料がえられていない。しかし、本遺跡がもつ広大な面積を考慮すると、未調査区域の中に生活拠点が存在する可能性も否定できず、両時代における遺跡の性格は不明と言わざるをえない。飛鳥時代に入り、中央北部地区に再び集落が現れる。大規模な谷に面した微高地に飛鳥～奈良時代の居住空間が広がり、南部の谷が祭祀空間として利用される集落である。出土遺物には畜車・舟形木製品・有孔土製品などの律令祭祀具や丸木舟・円面硯などが含まれ、7～8世紀代の越後平野周辺では数少ない官的性格をもった集落とみなされる。谷の斜面からは多数の伐採木や木製品も出土した。後者の中には曲物などの未成品が含まれ、木器製作が活発に行なわれていたことを物語る。集落の形成時期が『日本書紀』に記された「淳足棚」の存続期間に重なる点は注目に値する。微高地上の井戸には丸木舟を転用したものがあり、内水面を経由し様々な物資が「淳足棚」に供給されていたことも考えられる。

9世紀～10世紀代の集落は中央北部・東部・北部の各地区に分散する。中央南部地区や北部地区では水田や畑とみられる遺構が確認されており、一般的な農村集落の特徴を備えている。このうち北部地区では多量のアスファルト塊が出土しており、石油資源の利用が活発に行われていたようである。若干の空白期間を置いたのち、13世紀代を中心とした集落が北部地区などに形成される。耕地の広がりには明らかでないが、この時期の井戸が広範囲にわたり点在するところから、依然として農村集落として機能していたことをうかがわせる。北部地区や中央南部地区ではアスファルト塊が出土し、油井と見られる井戸が前者から確認された。井戸に埋設された曲物には特異な整形法がみられ、集落内で曲物製作が行われた可能性を強く示唆する。

以上のように、大沢谷内遺跡の集落形態は時代によって異なりがあり、各時代の利用空間も大きく変動する。こうした中で、遺跡の形成要因を考える上で重視されるのは、新津丘陵に産出する石油の存在である。縄文時代晩期集落はこれを誘因として成立した可能性が高く、以後その利用は中世まで受け継がれる。背後の丘陵から供給される森林資源や内水面での活動が容易な水域環境の展開も遺跡形成に関わる重要な背景となる。これらの要素が相まって、長期にわたる遺跡形成環境が醸成されたものと考えられる。

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 第1節 確認調査(第16次調査)

市道鎌倉横川線改良工事に伴う遺跡確認調査である。工事は既設道路の両側を幅5m拡幅し、車道および歩道の整備を計画するものである。確認調査は、工事計画区域における遺物包含層や遺構の存否確認を目的とし、平成22(2009)年11月10日・13日・16日・17日の計4日間にわたり実施した。

調査は拡幅が計画される400mの区間全域を対象とした。この区域は大沢谷内遺跡の北端部に位置し、南部が周知の遺跡範囲内に含まれていた。工事予定区域の南端は、国道403号関連調査区から250mほど北に位置する。

調査地は既設道路の両側に20m前後の間隔をおきながら設定した。最終的なトレンチ数は、東側18箇所、西側11箇所、調査総面積は43.5 $\text{m}^2$ となる。掘削作業にあたってはバックホーを使用した。

各トレンチ壁面における層序を第6図の柱状図に示す。確認された層序は、同図右下のような7層に大別できた。柱状図横に示したドットは、遺物出土レベルを表わす。遺物はT6～10・20・21・24～28の11箇所から出土した。包含層位はいずれも暗茶褐色土である。出土遺物は、9世紀代から10世紀前半とみられる土師器111点と須恵器19点からなる。南部のT26・27では井戸または円形土坑とみられる落ち込みも確認され、古代集落の一部をなすことが明らかになった。

暗茶褐色土の堆積レベルを東側トレンチで見ると、調査区域中ほどのT1～10に平坦地が広がり、北に向かって緩やかに下降しながらT15付近で谷底に至る状況が見て取れる。一方、T5以南は暗茶褐色土が消失するが、下面に堆積する明灰白色粘土が南に向かって次第に下降するところから、国道403号関連調査区との間に低地が介在することも判明した。

以上のような知見に基づき、微高地上にあたるT5から谷中央部に位置するT15までの間で発掘調査が必要であると判断された。

### 第2節 発掘調査(第18次調査)

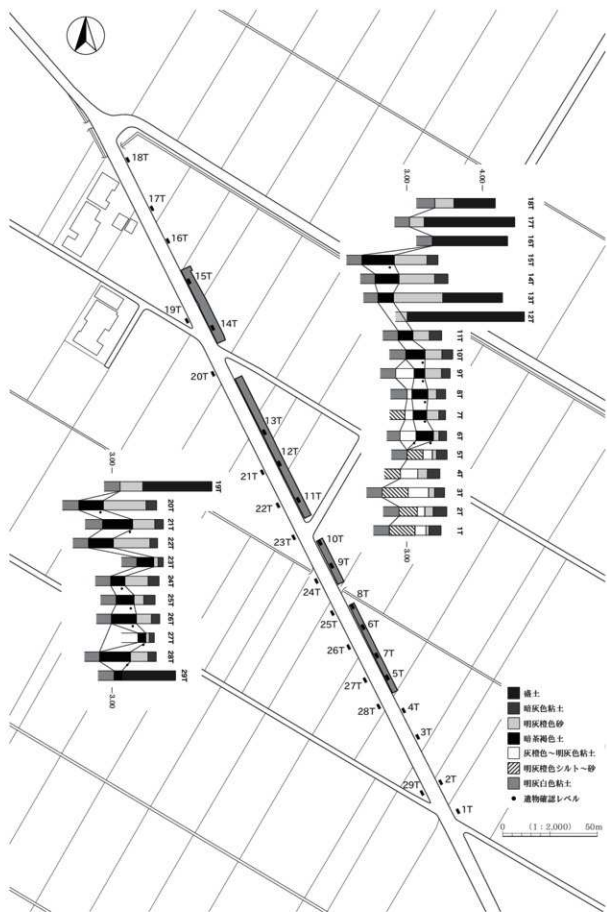
#### A 調査方法

##### 1) 現況

発掘調査の対象となった市道周辺は長らく水田として利用されていた。調査対象区域は広域農道と水路によって4区域に分断されることから、北から順に1区～4区と命名した。このうち1区・3区・4区は用地買収後荒地をなしていたが、1区では夏場においても湿気に富んだ状況にあった。1区の北部隣接地と2区は現道と同一レベルまで盛土が行われ、畑に使用されると共に、2区の一部は廃材の投棄場所としても利用されていた。

##### 2) グリッドの設定

本次調査は、市道の北側に沿った幅5m、全長250mほどの直線区間が対象となった。この区間の方位は真北から北西方向25°を示す。本遺跡では方位を基準とした一辺10mの大グリッドが設定されている。確認調査の知見によれば、調査区内からは相当量に及ぶ遺物の出土が予想された。本遺跡全体に設定される大グリッドに基づき調査を実施した場合、調査区を斜行するグリッドが増加し、発掘作業の効率低下をまねくことが懸念された。そのため、市道に沿って2m間隔のグリッドを設定し、短軸方向を市道側からA～C列、長軸方向を1



第6図 試掘調査地の位置と層序

区北東部を基点に1～125列とした。

### 3) 調査方法

#### ① 調査区の設定

調査対象地では、調査に先立つ平成22年3月に市道東側に設置された埋設管を買収区域北東に移設する工事が行われた。掘削幅は50cmほどにとどまるが、管の設置レベルが遺物包含層まで達しており、層序記録用壁面の確保のためにも調査範囲の縮小を余儀なくされる状況にあった。そのため、表土掘削前に擾乱範囲を人力で確認し、調査範囲を確定させた。

#### ② 矢板の打設

本次調査区は1区・2区を中心に軟弱な地盤をなしている。西側が市道に接することからも、1区～4区の周囲に矢板を打設し、道路保護と作業上の安全対策とした。

#### ③ 表土除去と掘削土の搬出

遺物包含量が多い1区～2区70列付近の間ではII層下面までをバックホーで除去した。一方、遺物の包含量が低下すると予想される3区・4区についてはIII層下面までバックホーで掘削した。このうち3区では予想に反し相当量の遺物が出土したが、調査期間の制約上遺物採取を慎重に進めながら作業にあたった。

調査区域は耕作地に接し土砂の捨場が確保できないところから、調査区の北東側全域を借地し、幅3mの仮設道路を設けてバックホーの作業空間およびダンプによる排土の搬出空間とした。

#### ④ 包含層調査

1区と2区ではIII層の堆積深度が20cm前後に達した。この区域では遺物量も多いことから、上下2層に別けて手作業による掘り下げを行った。遺物の取上げは一辺2mのグリッド単位で行ったが、重要と考えられる一部の遺物については出土位置の記録を行った。

#### ⑤ 遺構調査

遺構確認はIV層上面で行い、平面プランの確認、断面記録、完掘・平面記録の順に作業を進めた。

調査区内の遺構は埋積土砂のあり方から大きく3種に別けられた。このうち古代に属す遺構については色調がIV層と類似することから、粘性の違いや微妙な色調差に基づき平面確認を行った後サブトレンチを設け、断面を視察しながら調査にあたった。

#### ⑥ 下層遺跡の探査

本次調査区ではIII層や中世遺構の覆土から縄文土器が少量出土した。しかし、調査区内に設けた土側溝やサブトレンチのIV層中から縄文時代の遺物や炭化物が見出されなかったことから、面的な調査は行わなかった。

#### ⑦ 微細遺物の採取

調査区域は概ね低湿な環境下に置かれることから、有機質遺物が何らかの形で保存される条件にあり、一部の遺構ではアスファルト塊や炭化物が多量に包含されていた。そのため、これらの採取に適した遺構の埋積土砂を土糞に入れて回収した。

#### ⑧ 自然科学分析試料の採取

古環境復元に適した地層断面を調査担当が選定し、壁面の写真撮影を行ったのち一辺5cmの分析用土壌サンプルを採取した。

#### ⑨ 層序記録

1区西壁および1区～4区北壁に接して基本層序記録を兼ねた土側溝を設け、その全域で地表面から下底面までの連続的な層序記録を行った。1区については現地での実測作業、2区～4区についてはデジタル写真データから図化した。

#### ⑩ 遺構図の作成

原則として総ての遺構を対象に1/20の平面図・断面図を作成した。作業はトータルステーションを用い、こ

れによってえられたデータに基づき作図した。

① 耕作痕の平面記録

デジタルカメラによって撮影し、その画像をもとに耕作痕の輪郭を1/20で作図した。

② 遺物微細図の作成

一括性が高い遺構出土遺物については、デジタルカメラによる写真撮影とトータルステーションによる位置記録によって1/10の微細図を作成した。

③ 写真撮影

遺構の平面および主要な遺物の出土状況について、35mmリバーサルフィルム・35mmモノクロフィルム・デジタルカメラを用いて撮影した。

## B 調査経過

9月10日～20日の間に調査予定地外周の矢板打設、プレハブ設置、発掘器材の搬入などを行った。

発掘作業は9月24日に1区から着手した。1区の調査範囲を同日確定し、9月27日～30日に同地区での表土除去を行った。10月1日には排水用の側溝を設けた後、手作業による包含層掘削を開始した。1区では土器の出土量が調査区の中では最も多く、これに混じってアスファルト塊が多数存在することが作業の過程で判明した。そのため、作業効率の低下をまねき、10月12日をもって包含層調査をようやく終了した。遺構調査は、2区・3区の調査と平行し、10月13日から行ったが、多量の土器を伴うSD34の記録作業に長時間を要し、11月7日に主要遺構の調査を終了した。

2区では南部を除く区域で盛土が行われていた。そのため10月1日～2日に盛土を撤出し、2日に範囲を確定した後、4日～8日に表土除去を行った。包含層調査は10月8日～18日、遺構調査は10月18日～11月22日に行った。

3区は10月8日に調査範囲を確定し、同日から10月12日までの間に表土除去を行なった。4区は10月13日に範囲を確定したのち、13日・14日に表土除去を行なった。3区・4区での作業はその後2週間の中断期間をおいた。1区・2区における調査の遅れに伴い、11月3日からは八藤後が調査員として加わり、主として3区の調査にあたった。同地区では遺物量が相対的に少ないものと予想されたことから、11月3日にバックホーを使用して包含層掘削を行なった。11月4日には4区の包含層掘削に移り、11月6日に4区全域の掘り下げ作業を完了した。

また、その後予想される天候悪化に備え、移動式ビニールハウスを11月4日から設置し、以後調査終了時まで天候に関わらず作業を進めることができた。

3区の遺構調査は11月8日に開始した。同地区では西部の広い範囲で攪乱が著しく実質的な調査面積は40m<sup>2</sup>あまりにとどまったが、畝状遺構やピットが切りあい関係をもちながら密集していたことから作業が難航し、11月24日に遺構調査を終了した。

4区の遺構調査は11月13日に開始した。ほぼ全域にわたって遺構が分布しており、この中には記録や取り上げに時間を要する曲物埋設井戸が含まれていた。そのため作業員を増員する中で調査の迅速化をはかり、12月1日に遺構調査を終了した。なお、調査終盤の11月24日には潮田が調査員として加わり、11月30までの間に1区・2区における未調査遺構の検討を行なった。

遺構調査が終了した12月1日には、調査区全域の清掃作業を急ピッチで進め、翌12月2日に空中撮影を行なった。以後、壁面層序の記録、遺構測量や自然科学分析用の土壌サンプル採取などの残務作業を行い、12月6日に現地調査をすべて終了した。



発掘調査直前の1区



発掘調査直前の4区



1区SD34調査風景



2区調査風景

## C 調査体制

【試掘調査】平成21年度

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：鈴木廣志）
主管課	新潟市文化・観光・スポーツ部歴史文化課（課長：倉地一則・課長補佐：頼所洋一・係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	廣野耕造（歴史文化課埋蔵文化財係主査）

【本調査】平成22年度

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：鈴木廣志）
主管課	新潟市文化・観光・スポーツ部歴史文化課（課長：倉地一則・課長補佐：頼所洋一・係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	前山精明（新潟市埋蔵文化財センター副主幹）
調査員	潮田憲幸（新潟市埋蔵文化財センター副主査）・八藤後智人（新潟市埋蔵文化財センター臨時職員）

## 第3節 整理作業

### A 整理方法

#### ① 遺構番号

発掘調査に際しては、複数地区の調査を同時に進めたことから、各地区ごとに別個の遺構番号を用いた。現地調査終了後、すべての遺構を通し番号に改め、1区から順に新たな番号を付した。

#### ② 遺構図の作成

測量会社に作成を委託した平面図・断面図・微細図を校正し、平面図をデジタルデータとした。

#### ③ 註記

発掘調査年度「10」・「大沢谷内市道」・「グリッド」に続き、遺構出土資料については「遺構名」・「出土層位」・「取上番号」、包含層出土資料については「層位」の順とした。

#### ④ 土器の接合・復元

胎土観察のため、復元は最小限度にとどめた。

#### ⑤ 微細遺物の抽出

5mmおよび1mmメッシュ篩を用いた土壌水洗を行い、自然乾燥後選別作業を行った。

### B 整理経過

平成22年12月から平成23年6月にかけて現場調査事務所、同年9月から平成24年3月にかけて新潟市文化財センターで整理作業を行った。

平成22年12月から翌年1月には、遺構の検討・遺構図面の整理・遺構番号の修正にあたった。遺物の洗浄は発掘作業と平行して進め、12月に終了した。土壌水洗は12月上旬に行った。1月から2月に遺物の註記、2月に土器の接合、3月に土器の器種区分と集計を行い、基礎的な整理作業を終了した。

4月に入り土器・石製品の抽出を行い、小形木製品を含む実測作業を6月までの間に行った。その後2ヶ月間の中断期間をおいたのち、9月に曲物・木柱根の実測作業を行った。10月から1月にかけては、遺物の分析・遺物一覧表の作成・遺物写真の撮影・木製品のトレース、2月には種実とアスファルト塊の写真撮影を行った。

報告書の作成作業は平成23年12月から本格的に開始し、2月下旬までの間に図版作成、3月上旬までの間に本文作成作業にあたった。

### C 整理体制

【平成22年度】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：鈴木廣志）
主管課	新潟市文化・観光・スポーツ部歴史文化課（課長：倉地一則・課長補佐：頼所洋一・係長：渡邊明和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	前山精明（新潟市埋蔵文化財センター副主幹）
調査員	潮田恵幸（新潟市埋蔵文化財センター副主査）・八藤後智人（新潟市埋蔵文化財センター臨時職員）

【平成23年度】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：鈴木廣志）
所管課・事務局	新潟市文化財センター（所長：高橋保・所長補佐：丸山恵幸・主任：渡邊明和）
調査担当	前山精明（新潟市文化財センター副主幹）

## 第IV章 遺 跡

### 第1節 概 要

本次調査区は信濃川の東700mに位置し、大沢谷内遺跡の北端部にあたる。地表面での海拔は3.5m前後を測る。調査区内の堆積層はⅠ層～Ⅳ層に大別される。遺物包含層はⅢ層で、主としてⅣ層上面で遺構を確認した。

調査区内のⅣ層上面地形は、北部の1区・2区と南部の3区・4区で様相を異にする。後者は微高地上に位置する。前者は北に向かって緩やかに傾斜し、1区に至り低湿な環境へと移行する。

確認された遺構は、9世紀代を中心とした古代と13世紀代の中世からなる。1区には古代の区画溝と掘立柱建物、2区には古代の畝状遺構・区画溝と古代～中世の掘立柱建物、3区・4区には古代の畝状遺構と古代～中世の井戸や掘立柱建物が分布する。1区～2区では、遺物包含層の上面に未分解有機物層が堆積していた。Ⅱ層との層界はきわめて明瞭で、遺跡の廃絶に関わる急激な環境変化が生じたことをうかがわせる。

### 第2節 微地形と層序

#### A 微 地 形

次項で述べるように、本次調査区の層序はⅠ層からⅣ層に大別される。このうち遺物はⅢ層に包含され、主としてⅣ層上面で遺構を確認した。図版4にⅣ層上面地形を示す。同図右下は、調査区北壁で確認された堆積層序を10m間隔の柱状図で表わしたものである。

Ⅳ層の上面レベルは、3区南部で3.1m台、1区北部で2.3m台を測る。調査区は東西に連なる微高地(自然堤防)を横断するかたちで設定されており、緩やかながらも起伏に富んだ地形をなしている。調査区内の地形は、以下の4エリアに区分できる。

**微高地上平坦面** 海拔3.0m以上の高域部である。3区南半から4区全域がこれにあたる。平坦面の広がり幅80m以上におよぶが、4区北部から南に向かって緩やかに下降し始める。

**微高地北側緩斜面** 3区の北部から2区中央部に至る60mほどの間では、北に向かって緩やかに下降する。高低差は50cmあまりを測り、調査区の中では最も起伏が大きい区域である。

**微高地下平坦面** 2区の中央部55列付近から1区南部の20列付近に至る南北70mほどの間では、海拔2.6m前後の平坦面が微妙な凹凸を伴いながら展開する。

**北部低地** 1区の北部に広がる低地である。確認調査でえられた知見によれば微高地間低地に位置しており、調査区北端付近が最下面にあたることが判明している。

#### B 層 序

図版4の上段は、北端に位置する1区北壁の層序である。同図に示す柱状図は、調査区の東壁全域を対象に行った層序記録をもとに2m間隔で作成した。4区については攪乱を免れた北部のみを示す。調査区内の堆積層序は、以下のⅠ層～Ⅳ層に大別できる。

**Ⅰ 層** 層厚10cm前後の耕作土。全体に砂質を帯びた青灰色(5B6/1)粘土層で、小礫が僅かに含まれる。

**Ⅱ 層** 2区中央部の55列付近に境に様相を異にする。55列以北は、地形区分のうえで微高地下平坦面～北部低地にあたる。Ⅱ層の厚さは40cm前後を測り、4層にわたる細分が可能である。これに対し55列以南で



は急激に厚層を減じるとともに分層が困難になり、3区に至ると単層化する。以下は前者の概要である。

Ⅱ-1層は緻密な土質をもった青灰色(10BG6/1)粘土、Ⅱ-2層は同一色調の砂質粘土である。Ⅱ-3層は微細な未分解有機物を含む青灰色軟質粘土層で、厚さ2mm前後の灰色粘土層がラミナをなして介在する。Ⅱ-4層は、さらに軟質な青灰色粘土層で、未分解有機物を微量に含む。

Ⅲ層 Ⅱ層下に堆積する黒褐色(10YR3/1)～褐灰色(10YR4/1)土である。Ⅱ層との境界はきわめて明瞭である。本次調査区における遺物包含層にあたり、全域にわたって堆積する。視乱が著しい4区を除けば、各地区の厚層に大差はなく、30cm前後が一般的である。本層の土質は区域によって特徴が異なる。

Ⅲ層は砂質粘土を基本とするが、2区の南半では粘性が強い。2区ではⅣ層に由来するシルト粒子が上部を中心として多量に含まれる。3区では下部が淡色化し、褐灰色を呈する砂質粘土(Ⅲb層)が堆積する。2区の南部ではシルト粒子が稀薄な層準が最下部に存在することから、Ⅲa～Ⅲc層に細分できた。北部低地では、低湿な環境に置かれることから、植根・葉・茎などの微細な未分解有機物が含まれる。

Ⅳ層 粘性、しまりに乏しいシルト層～砂層である。色調は緑灰色(7.5GY6/1)を基本とする。図版4上段の1区北壁に示すⅣ-1層はシルト層、Ⅳ-2層は砂層である。

## 第3節 遺 構

### A 概 要

全長200mにわたる調査区の全域から古代・中世の遺構と流路が確認された。確認面は、主としてⅣ層上面である。調査範囲が幅約4m前後に限定されるところから、全体の広がりか把握できた遺構は限られた。ピットの中には柱根や礎板を残すものもあったが、調査範囲の制約により建物プランを明確にすることはできなかった。

初期の遺構は9世紀前半に属す。微高地下平坦面を中心に水田の一部とみられる区画溝、微高地上から微高地北側緩斜面にかけて畝状遺構が分布する。建物跡は確認できず、主として生産の場として利用されていたと考えられる。微高地北側緩斜面以北では複数の流路が確認された。

これに後続するのは9世半ばから10世紀前半の遺構である。調査区全域にピットと区画溝が分布し、微高地上には井戸も分布する。ピットには掘立柱建物と考えられる有意な配列がいくつか見られ、調査区内が居住空間として変化したことをうかがわせる。

中世の遺構は、微高地上に井戸・ピットや区画溝、微高地北側緩斜面に道路遺構とみられる区画溝が分布する。微高地下平坦面で確認された耕作痕はこの時期に属す水田跡の可能性もある。このほか、微高地下平坦面のピット内から銭貨が出土しており、付近で祭祀行為が行われた可能性もある。

### B 遺 構 の 区 分

#### 1) 遺 構 名 称

##### ① 井 戸 (SE)

平面形が円を基調とし、長軸1m以上、深度50cm以上の掘り込みを「井戸」とした。「素掘井戸」と「曲物井戸」に二分できるが、遺構表記は同一とする。

##### ② 土 坑 (SK)

柱穴とは見なしがたい遺構のうち、円ないし楕円形を基調とし、長軸1m未満、深度50cm未満の落ち込みを「土坑」とした。

##### ③ ピット (P)

平面形態は土坑と類似するものの、長軸50cm未満、深度5cm以上の落ち込みを「ピット」とした。木柱根

が遺存する柱穴の規模に基づき、深度 20cm を目安に建物プランの検討を行った。

#### ④ 区画溝 (SD)

本次調査区から確認された溝のうち、直線的に走行し規則的な断面形をもつものは、南北や東西に軸をもつ例が多い。本書ではこれらを何らかの区画を意図した遺構とみなし、「区画溝」とした。

#### ⑤ 畝状遺構 (SD)

2区～4区では、幅の狭い数条の溝が若干の間隔を置きながら併走していた。視覚的に「畑」に類似するところから「畝状遺構」とし、溝の規模や走行から図版7のような区分を行った。

#### ⑥ 流路 (SD)

屈曲した走行をもつものや、深度が浅く傾斜が緩やかなものである。レンズ状堆積を認めるところから、多くは自然河川とみられるが、人為的な間与を排除できないものもあるため、「流路」とした。

#### ⑦ 性格不明遺構 (SX)

以上に該当しない遺構をこれとした。

### 2) 覆土による区分 (図版5・6)

本次調査区の遺構覆土は、堆積土のあり方から以下の3グループに大別できる。各グループの共存遺物はそれぞれ時期を異にしており、埋積時期の新・旧を概ね良好に反映するものとみなされる。本書では、これに基づきⅠ期～Ⅲ期の遺構とする。

#### Ⅰ 期

Ⅳ層と同色ないしはいくぶん暗い色調をもち、均質な砂質粘土～シルトに覆われる遺構である。本次調査区の主要な遺物包含層にあたるⅢa層の堆積以前に形成された遺構と考えられる。この中には、Ⅳ層と色調では区分できず、粘性によって確認できた遺構が含まれる。本グループの中では初期に位置づけられる可能性が高いことからこれをⅠa期、色調によって識別可能な遺構をⅠb期とする。Ⅰa期の構築時期を特定できる遺物は確認できなかったが、Ⅰb期の遺構覆土から9世紀前半の土器が出土した。

#### Ⅱ 期

Ⅲa層と同様な色調をもつ砂質粘土や粘質シルトに覆われる遺構である。Ⅳ層に近い暗色土に黒褐色土の粒子を混じえた土砂が堆積する遺構については、埋め戻し行為によるものとみなされるため本段階の遺構とした。遺構内からは、主として9世紀半ば～10世紀前半の土器が出土したが、中世遺物を伴うケースもみられた。本次調査区を含め、中世遺物の出土量はきわめて少ない。したがって、本段階における所属時期の実態としては、中世初期まで下降する遺構が少なからず含まれることが予想される。

#### Ⅲ 期

植根や茎などかなる未分解有機物を含む粘土～シルト層が覆土上部に堆積する遺構である。微高地から微高地北側緩斜面にかけて分布する遺構から13世紀代の土器が出土しており、本遺跡の廃絶段階またはそれに近い時期に属す遺構とみなされる。なお、2区の40列以北の遺構では覆土内に未分解有機物を含む場合がある。上記の区域とは堆積環境を異にし、古代の遺物を伴うことからⅡ期の遺構とする。

## C 遺 構 各 説

調査区が全長200mにおよぶため、1区～4区の順に記述する。以下では3時期区分別に記述するが、土坑・ピット・性格不明遺構については、特徴的なものに限定する。本次調査の設定グリッドは北西に25°傾いており、遺構位置の表記にあたっては便宜上調査区の長軸を南北とする。

### 1) 1 区 の 遺 構 (図版8～10、写真図版5～7)

1区は微高地下平坦面の北端から北部低地にあたる。本次調査区の中では最も低湿な環境に置かれ、遺構覆土には微細な未分解有機物が含まれる。調査区東側の1列～17列に暗渠管理設による擾乱を認めるほかは遺構が

良好に保存されていた。本地区の遺構はⅠ期とⅡ期に属す。確認面はいずれもⅣ層上面である。

### Ⅰ 期

区画溝5条とピット11基からなる。いずれも色調から確認できたものである。ピットは全域にわたり点在するが、区画溝は微高地下平坦面に分布域が限定される。遺構内からの出土遺物は限定される。

#### ① ピット (図版8～10)

6列から18列にかけて11基が散発的に確認された。柱痕を認めるピットはなく、覆土の多くは単層をなす。建物遺構などの可能性が考慮される有意な配列は見出せない。

#### ② 区画溝 (図版10、写真図版5)

#### SD46・SD47 (図版10、写真図版5)

18列～20列に位置する。ともに小規模な溝で、SD46は幅26cm・深さ12cm、SD47は幅65cm・深さ11cmを測るのみである。二つの溝は3.4mの間隔を置いて併走し、方位はほぼ南北を指す。同一個体の長甕が両者の第1層から出土した(図版23-2・3)。

#### SD48・SD51 (図版10、写真図版5)

SD47とSD48に西端が切られる溝である。SD51は東西に走行するが、SD48は軸を異にする。前者は幅42cm・深さ20cm、後者は幅43cm・深さ12cmを測る。

#### SD52 (図版10、写真図版5)

SD47を直角に断ち切り、東西に走行する溝である。最大幅1.34m・最大深度27cmあまりを測る。覆土はレンズ状に堆積する。4層に区分され、第3層から微細な土器が出土した。このほか、第1層で行った土壌水洗をつうじ微細なアスファルト塊や種実が検出されており、第Ⅵ章で記述する。

### Ⅱ 期

土坑3基・ピット27基、区画溝3条からなり、調査区の北端付近では流路が確認された。Ⅱ期に至り遺構内からの遺物量が増加し、集中的な遺物廃棄がなされたケースもみられる。掘立柱建物の一部とみられるピットが現れるのも特徴的である。本地区におけるⅡ期の遺構群は、共伴遺物から見ていずれも古代に属すと考えられる。

#### ① 土 坑 (図版8、写真図版5)

北部低地の2列～10列で3基確認され、うち2基から土器が出土した。

#### SK1 (図版8、写真図版5)

後述のような流路SD2の北に隣接する。平面形は楕円をなし、長軸81cm・短軸54cmを測る。断面形態は、最大深度38cmの「台形状」を呈する。覆土は3層に分かれ、未分解有機物を含む粘土が堆積する。第2層から須恵器無台杯(図版29-104)が出土した。

#### SK6 (図版8)

5Bに位置する。不整楕円形を呈し、長軸73cm・短軸55cm・最大深度25cmを測る。覆土はレンズ状に堆積し、第2層から土師器長甕の微細な破片が出土した。

#### ② ピット (図版8～10、写真図版5～7)

4列～17列にかけて27基が分布する。このうち建物プランの想定が可能な7基と礎板を伴う1基について記述する。

#### P9・P13・P15・P16 (図版8)

7列～9列に位置する。P13・P15・P16は最大幅30cm～40cm、最大深度19cm～26cmを測り、2m前後の間隔で南北に並ぶ。P13の西1mには最大深度25cmのP9が位置しており、これらをもって掘立柱建物の一部とみなすこともできる。

#### P27 (図版9、写真図版7)

12列～13列に位置する。最大幅31cmを測る不整円形ピットである。深さ28cmの基底部に長さ20cm・

幅15cm・厚5cm前後の板材2枚が重なり合い、最下部に長さ13cmと8cmの削材が平行に置かれていた。礎板と考えられるが、調査区内から同一建物とみられるピットは確認できなかった。最上面の板材を図版35～6に示す。

#### P35・P36・P37 (図版9、写真図版7)

SD34の東に接して南北に並ぶピットである。P36・P37では、土層断面において柱痕が確認できた。最大幅は30cm～34cm、最大深度は19cm～31cmの範囲内にある。互いの間隔は1.8m前後を測り、掘立柱建物の一部と考えられる。

#### ③ 区画溝 (図版8～10、写真図版6)

##### SD22 (図版9)

11列に位置する。幅34cm・深さ26cmの溝で、東端を確認したにとどまる。覆土には多量のシルトブロックが含まれる。第1層から土師器無台椀(図版29-105)が出土した。

##### SD34 (図版9・10、写真図版6)

12列～17列に位置し、全体構造が把握できる唯一の溝である。幅1.0m・最大深度18cmを測り、全長7.1mほどの規模をもつ。軸はほぼ南北を指す。両端の平面形は隅丸方形をなし、両側の掘りこみラインは直線的で均一な幅をもつ。断面形は一樣でないが、ほぼ全域にわたり平坦な底面をもつ。基底面は北に向かって下降しており、南北でのレベル差は30cmあまりに及ぶ。

覆土は2層に分かれる。第1層を中心に土師器の無台椀・長甕などが多量に出土し(図版25～28)、層内からは炭化物・焼土粒子・アスファルト塊の存在も確認された。いずれも廃棄された資料とみられる。本遺構では土壌水洗をつうじて微細遺物が検出されており、第VI章にその内容を記す。このほか、特異な形態をもつ石製品(図版34-19)が南端部の第1層から出土した。

##### SD53 (図版10)

1区南端に位置する。SD52を切りながら東西に走行する溝である。最大幅65cm・最大深度18cmを測る。断面形は「U」字形をなし、覆土はシルト・砂質粘土の順に堆積する。第1層から須恵器の無台杯と杯蓋(図版29-109・110)が出土した。

#### ④ 性格不明遺構 (図版9・10、写真図版5・7)

##### SX29 (図版9・10、写真図版5・7)

SD34の北西に隣接する。隅丸長方形の平面形をもち、長軸2.5m・短軸1.7mを測る。深さは17cmにとどまり、全体に緩やかな窪地をなす。埋積土はレンズ状に堆積する。第1層を中心にまとまった量の土師器とともに炭化物や大型アスファルト塊が出土した。主要な土器を図版24、遺物の出土状況を写真図版7に示す。土壌水洗によって微細遺物が検出されており、その内容については第VI章で記述する。

#### ⑤ 道 路 (図版8、写真図版6)

##### SD2 (図版8、写真図版5)

北部低地の北端付近に位置し、グリッド線に沿って調査区を横断する溝である。最大幅2mあまり、最大深度20cmを測る。断面形は「皿状」を呈す。上部に未分解有機物を含む粘土と砂質粘土、下部にシルトがレンズ状に堆積する。第1層から微細な土師器が出土した。

#### 2) 2 区 の 遺 構 (図版11～15、写真図版8～12)

2区は55列付近を境に地形を異にしており、60列～74列が微高地北側緩斜面、30列～50列が微高地下平坦面にあたる。本地区の遺構はI期～III期に属す。54列～60列の北半部が擾乱されていたほかは良好に保存されていた。確認面はいずれもIV層上面である。

#### I 期

土坑8基・ピット22基・区画溝25条・畝状遺構1箇所からなる。いずれも色調によって識別できた遺構で

ある。このほか5箇所の流路も確認された。本次調査区の中では区画溝と流路の密度が高い傾向にある。遺物を伴う遺構は少ないが、畝状遺構の覆土から比較的まとまった量の土器が出土した。

① 土 坑 (図版 11～14)

調査区のほぼ全域にあたる 36 列～67 列の範囲に 8 基が分布する。このうち 1 基から土器が出土した。

SK90 (図版 11・12)

42 列～43 列に位置する。長軸 54cm・短軸 49cm の不整形を呈し、深さ 10cm 程度の浅い掘り込みである。断面形は「台形状」をなしており、褐灰色砂質粘土からなる単層の覆土から須恵器の有台杯 1 点が出土した。微細な破片のため図示しなかった。

② ビット (図版 11～14)

35 列～62 列の間に 22 基が分布する。柱痕を伴うビットは確認できず、建物跡と考えられる有意な配列も見られなかった。

③ 区画溝 (図版 11～14、写真図版 8)

主として微高地下平坦面から確認された。SD80 から微細な土器が出土したのみで、構築時期を明確にできる遺物は確認できなかった。

SD55 (図版 11)

2 区北部の 33 列～35 列に位置する。最大幅 77cm・深度 41cm を測り、「台形状」の断面形をもつ。南東～北西方向に直線的に走行するが、南部が SD56 (流路) に切られる。埋積土には粘質シルトがレンズ状に堆積する。

SD70・SD73 (図版 11)

37 列～38 列に位置する。SD70 は幅 9cm、深さ 20cm 前後、SD73 は幅 44cm・深度 24cm を測る。前者は南北、後者は東西を軸として概ね直線的に走行し、38 列で直角に交差する。両者の先後関係は明らかでない。

SD79 (図版 11)

38 列～40 列に位置する。幅 42cm・深さ 9cm を測り、ほぼ南北方向に直線的に走行する。北部が SD73、南部が SD80 に切られる。

SD80 (図版 11)

40 列～41 列に位置する。最大幅 72cm、最大深度 28cm を測り、ほぼ南北を軸として走行する。40 列で SD79 を切り、41 列で SD92 と直角に交差する。単層をなした覆土から土師器無台碗と須恵器長頸壺各 1 点が出土したが、微細破片のため図示しなかった。

SD92 (図版 11・12)

42 列～43 列に位置する。ほぼ東西に走行し、西部で SD80、東部で SD98 と直角に合流する溝である。長さ 3.1m を測る。幅が 20cm～67cm と不均一で、断面は最大深度 23cm の「深皿状」を呈する。

SD97 (図版 12)

44 列で西端部が確認された。SD98 の北部に直角に交わり、東西に走行する溝とみられる。幅 35cm を測る。

SD98 (図版 12)

SD92 の東端に接し、南北に走行する。調査区内での全長は 5.1m ほどで、北端部で東に角度を変えるようである。幅 45cm を測り、断面は深さ 6cm 足らずの「皿状」を呈する。

SD100・SD101 (図版 12、写真図版 8)

44 列～46 列に位置する。互いに接近しながら東西に走行する溝で、ともに東を SD98、西を SX99 に切られる。前者は SD98、後者は SD112 との交点を東端とし、幅 30cm 台を測る。

SD112 (図版 12、写真図版 8)

46 列に位置する不整形 U 字状の溝を便宜上これとする。区画の意図をはかりかねる溝であり、複数の遺構が重

複している可能性もある。幅 50cm、深度 17cm を測る。

**SD118** (図版 12、写真図版 8)

SD112 の南端から SD438 と交差する 47 列までの 2m ほどの間で南北に走行する溝である。幅 22cm を測る。

**SD438** (図版 12)

47 列西部に位置する。東西に走行し SD118 との交差点付近から北に向かってカーブする。東部では幅 24cm ほどを測るが、南部では立ち上がり不明瞭になる。

**SD127** (図版 12)

47 列～48 列に位置する。後述の SD130 との交点を東端とし、東西方向に走行する溝である。幅 33cm を測り、断面形は深さ 12cm の「半円形」を呈する。

**SD131・SD133** (図版 12・13、写真図版 8)

48 列～49 列に位置し、ともに SX132 に切られる溝である。SD133 は SD129 にも切れ、長さ 30cm ほどが遺存するのみである。SD131 は南北に走行し、現存部の全長 2m ほどを測る。

**SD157** (図版 13、写真図版 8)

55 列に位置する。SD154 との交点を西端とし、東西に走行する溝とみられる。幅 28cm を測る。

**SD161** (図版 13、写真図版 8)

54 列～55 列に位置する。緩やかな弧を描きながら調査区を東西に横断する溝である。中央部で SD153 と SD154 に切れ、頭部が SD167 と交差する。幅 38cm・深さ 12cm を測り、断面形は「深皿状」を呈する。

**SD162** (図版 13、写真図版 8)

55 列に位置し、SD153・SD161 の交点付近を東端とする。幅 17cm を測り、SD153 に切られる。

**SD172** (図版 14)

59 列～61 列に、発掘区の中央をグリッドラインに沿って走行する溝である。北部が SD171、南部が SD448 に切られる。現存長は 5m 弱を測り、北部が樹枝状に分岐する。深さは 7cm にすぎず、「皿状」の断面形をもつ。

**SD203** (図版 14)

66 列～67 列に位置する。南北に走行する溝で、北端部が SD200 に断り切られる。現存長 3.3m・幅 24cm・最大深度 9cm を測る。断面形は「半円状」を呈する。

**SD207** (図版 14)

68 列に位置し、北西部のみ確認できた。幅 34cm を測り、調査区東壁付近でいくぶんカーブする。

**SD212** (図版 14)

71 列～72 列に位置する。「く」の字状をなして屈折する溝で、その長さは北部で 2.1m、南部 3m ほどを測る。最大幅 52cm・深さ 9cm を測り、断面形は「深皿状」を呈する。

**SD214** (図版 14)

SD212 の 1m ほど南に位置する。「く」の字状をなした溝の屈折部から 1 条の溝が分岐する。最大幅 42cm、深度 17cm を測る。

**SD215** (図版 14)

2 区の南端に位置し、SD214 の北端部と並走する。幅 34cm、深さ 20cm を測る。

④ 畝状遺構 (図版 12・13、写真図版 8)

**畝状遺構 1** (図版 12・13、写真図版 8)

47 列から 55 列にかけて並列する 7 条の溝 (SD129・SD130・SD134・SD135・SD151・SD153・SD154) をこれとする。調査区内での全長は 18.5m を測る。これらはいずれも南北を軸として走行し、方位のズレは 6 度の範囲内に含まれる。溝の最大幅は 40cm～68cm、最大深度は 2cm～17cm を測る。条の間隔は 0.6m～

2.2mの範囲内にある。遺構覆土には粘土が堆積し、上下2層に分層されるものが多い。SD129・130・134・135・153の第1層から土器が出土した。SD129・130・134から所属時期が明らかな土器が出土しており、図版23に主要な資料を掲載した。SD129・130における土器の出土状況を写真図版8に示す。

⑤ 流 路 (図版11・13・14・16、写真図版9)

SD56 (図版11、写真図版9)

2区の北端付近に位置し、いくぶんカーブしながら東西に走行する。最大幅1.07m、最大深度44cmを測り、断面形は緩やかな「V」字をなす。砂質粘土が4層にわたり堆積しており、第1層・2層・4層から合計51点の土器が出土した。このうち4点を図版23-5～8、遺物の出土状況を写真図版9に示す。

SD167 (図版13)

55列～57列に位置する。1mほどの幅をもち直線的に南北に走行するが、最大深度11cmを測るのみである。立ち上がりも不明瞭なところから流路とした。SD135を断ち切る。遺物は出土しなかった。

SD448 (図版14、写真図版9)

60列～62列に分布する。幅1.43m、最大深度35cmを測り、概ね均一な幅をもって走行する。緩やかにカーブした断面形をもち、シルトが4層にわたって堆積する。遺物は出土しなかった。

SD62 (図版14、写真図版9)

SD448の4m南に併走する。幅1.3m・最大深度52cmを測り、平面形や断面形もSD448に類似する。砂質粘土とシルトが互層をなして堆積し、第1層から土師器の小破片が出土した。

SD206 (図版14、写真図版9)

68列～70列に分布する。いくぶん蛇行しながら南北に走行する溝である。幅94cm・最大深度31cmを測り、左右非対称の断面形をもつ。上部に粘土、下部に砂質粘土が堆積する。遺物は出土しなかった。

## Ⅱ 期

土坑1基・ビット34基・区画溝7条などからなる。このほか、調査区の一部から耕作痕とみられる多数の窪みも確認された。本地区ではⅡ期のビット内から中世の銭貨が出土しており、中世まで下降する遺構が何らかの形で存在することが予想される。

① 土 坑 (図版12)

SK122 (図版12)

47Aに位置する。長軸1m・短軸77cmを測る不整楕円形の土坑である。基底は幅50cmほどの平坦面をなす。最大深度は22cmを測り、多量のシルトブロックを含む砂質粘土やシルトによって覆われる。須恵器無台杯・土師器長甕・鍋が第1層・3層から出土した。いずれも小破片のため図示しなかった。

② ビット (図版11～14、写真図版11)

微高地下平坦面にあたる34列から51列までの範囲を中心に分布する。このうち2基で木柱根が遺存し、10基の覆土断面で柱痕の存在が確認された。以下では、配列から建物跡の一部をなす可能性がある7基のビットと中世の銭貨が出土した1基について記述する。

P57・P58 (図版11、写真図版11)

2区の北端付近に位置する。P57は径40cm・深度47cmの円形ビットで、覆土には砂質粘土がレンズ状に堆積する。P58はその東2.5mに位置し、調査区東壁で存在が確認された。上端幅50cm、深度51cmを測り、覆土断面で柱痕が確認された。両者を結ぶラインは東西を指しており、南北に主軸をもった建物跡の可能性が有る。

P60・P64・P69 (図版11・15、写真図版11)

3基のビットは35列～37列に位置する。P60とP64、P64とP69を結ぶラインが南北および東西に近いことから掘立柱建物の一部をなす可能性がある。互いの間隔は、前者が3.4m、後者が2.2mを測る。掘り込

み規模は、幅 53cm～56cm、深さ 46cm～56cm を有する。

一方、3 基における埋積土のあり方には次のような異なりが見られる。P60 は砂質粘土やシルトが 4 層にわたり自然堆積する。P64 はシルトブロックを多量に含む砂質粘土が 2 層にわたり堆積し、人為的に埋められた可能性が高い。P69 は上部にシルトブロックを多量に含む粘土層、下部に混入物の乏しい粘土層が堆積し、東壁際にカツラを材とした径 17cm の木柱が遺存していた（図版 36-10）。柱の下端はピットの基底面から 38cm 下位まで沈下する。

#### P106・P121（図版 12、写真図版 11）

P106 は 45 列、P121 は 47 列に位置する。2 基の間隔は 3.2m を測り、両者を結ぶラインは南北を指す。前者は最大幅 37cm、最大深度 39cm のピット内にカツラを材とした径 14.6cm の木柱根が遺存する。覆土には砂質粘土や粘土が 3 層にわたり堆積し、柱根の下端はピット基底から 22cm の深さまで沈下する。P121 はピット本体の最大幅 30cm、深さ 58cm を測る。覆土にはシルト粒子を多量に含む砂質粘土が堆積し、断面中央に径 15cm ほどの木柱痕がしまりにかける軟質土として残される。

#### P136（図版 13、写真図版 12）

50A に位置する。最大幅 31cm、最大深度 32cm の小型ピットである。覆土には粘土や砂質粘土が 3 層にわたり堆積し、中ほどにあたる第 2 層から中世銭貨 1 点が単独で出土した。1068 年初跡の「熙寧通宝」である。ピットの東 30cm ならずの地点で 1086 年初跡の「天祐通宝」2 点が密着した状態で出土しており、その出土状況を写真図版 12 に示した。

#### ③ 区画溝（図版 11・14・15、写真図版 10・12）

##### SD71（図版 11・15、写真図版 10）

42 列に位置する。木柱根が遺存する P69 の一部を切りながら、グリッド沿って調査区を横断する溝である。幅 70cm、最大深度 14cm を測り、底面は平坦な形状をなす。覆土は 2 層に区分され、第 1 層から微細な土器が少量出土した（図版 29-111）。

##### SD179・SD180（図版 14、写真図版 10）

59 列～61 列に位置する。ともにグリッドに沿って東西に走行し、Ⅲ期遺構の SX188 によって西側が切られる。両者は 3.2m の間隔をもち、SD179 は東側、SD180 は西側がカーブする。前者は幅 22cm・最大深度 4cm、後者は幅 28cm・最大深度 11cm を測る。

##### SD189（図版 14、写真図版 10）

62 列・63 列に位置する。東西に走行する最大深度 8cm ならずの浅い溝である。溝の幅は東端で 46cm、西端で 20cm を測り、調査区中央で小さく屈折する。

##### SD190（図版 14、写真図版 10）

南北に走行し、北端が SD189 の中央部で切られる溝である。現存長は 1.2m 弱にすぎない。幅 22cm・深さ 4cm を測るのみである。

##### SD195（図版 14、写真図版 10）

SD189 の南 2m に位置し、東西方向に並走する溝である。西端部が確認されたにとどまる。幅 38cm、深さ 6cm を測るのみである。

##### SD200（図版 14）

SD189 の 9m 南に位置し、同一方位をもって調査区を横断する溝である。幅 44cm・深さ 9cm を測る。

#### ④ 耕作痕（図版 15、写真図版 10）

2 区北部の 38 列～40 列を中心として、Ⅳ層上面に規則性をもった窪みが多数分布していた。図版 15 は真上から撮影した写真をもとに個々の輪郭を図化したものである。密集域では形状把握が難しい部分があり、図示したような切り合い関係には想定ラインが含まれる。



密集範囲は南北方向で5mほどを測り、東西の広がりも調査区域外に及ぶ。個々の形状は概ね長方形を基本とし、その大きさは長さ20cm・幅10cm前後に集中する。下底部までの最大深度は5cmにみえないものが多い。長軸方向の断面形は不整形をなし、明確な規則性は見出しがたい。

長軸方位に基づけば、上記のような分布域は二つのエリアに大別することも可能である。調査区の設定方位に対し、「右傾」・「同一方向」・「左傾」に区分すると、北西部では「右傾」が多数を占めるなかで「同一方向」も含まれる。南東部では「同一方向」や「左傾」を中心とし、これに若干の「右傾」が付随する。

以上のような窺みの性格を検討するため、39B北壁のⅢ層から採取した土壌でプラント・オパール分析を行った。分析結果は第Ⅶ章第2節のとおりである。土壌内からはイネのプラント・オパールが多量に検出され、水田耕作に伴う耕作痕の可能性を強く示唆する。

図版15では、「耕作痕」と同質の覆土が堆積するⅡ期の遺構を示した。図示した範囲内には北に隣接してSD71が存在する。この区画溝は木柱根が遺存するP69を切っており、建物の廃絶後、異なる空間として付近が利用されたことを物語る。Ⅱ期の遺構の一部が中世に下降する点をふまえると、SD171の南部が中世の段階において水田として利用された可能性があり、Ⅲ層内に畦畔が存在したことも考えられる。

### Ⅲ 期

道路遺構の可能性のある区画溝2条と性格不明遺構1箇所からなる。60列以南では、Ⅳ層に由来するシルトブロックや粒子がⅢ層上部に多量に含まれており、大規模な整地作業がこの時期行われたことをうかがわせる。

#### ① 区画溝 (図版13・14、写真図版12)

##### SD168・SD171 (図版13・14、写真図版12)

前者は56列～57列、後者は58列～59列に位置する。最大幅は前者で1.22m、後者で2mを測り、最大1.6mの間隔で調査区をほぼ直角に横断する。

SD168は、1.4mほどの均一な幅をもって直線的に走行する。最大深度60cmを測り、断面形は「V」字状をなす。上部に4層からなる粘土層、下部に3層からなる砂質粘土がレンズ状に堆積し、前者の中には未分解有機物が多量に含まれる。中世遺物は見られないが、下部にあたる第6層から須恵器大甕が出土した(図版29-123)。

SD171は、構築時期を異にした2条の溝が重複する。土層断面第8層・9層が古段階、北半の第1層～7層が新段階の溝における堆積土である。前者の最大深度は33cmを測り、砂質粘土が堆積する。後者の幅は90cm前後を有する。急斜な掘り込みと平坦な底面をもち、最大深度は37cmを測る。埋積土はレンズ状に堆積しており、下部の粘土層内に多量の未分解有機物が含まれる。後者の第1層・3層からは13世紀代の中世陶器が出土しており(図版29-120・121)、中世前半に機能した溝とみなされる。

以上のような特徴が見られるSD168・SD171は、堆積土の類似性から同時存在した可能性が高い。周囲に関連性が考慮される溝も存在しないことから、両側に溝を伴う道路遺構と考えるのが妥当であろう。

#### ② 性格不明遺構 (図版14、写真図版12)

##### SX188 (図版14、写真図版12)

SD171の南1.4mほどに位置する大規模な掘り込みである。東側の直線的な掘り込みラインとSD188に平行する北側ラインの一部が確認された。調査区内での最大長は4.88m、最大深度は36cmを測る。全体に急斜な角度で掘り込まれ、基底には平坦面が広がる。埋積土はレンズ状堆積をみせる。最下部に砂質粘土が堆積するほかは粘土で覆われており、層内には多量の未分解有機物がラミナを形成しながら堆積する。最下部の第7層から磁石1点が出土した(図版34-12)。本遺構の具体的な時期や性格は不明であるが、近接するSD171と掘り込みラインに共通性がみられることから、互いに密接な関係にあったものと考えられる。

### 3) 3 区 の 遺 構 (図版16・17、写真図版13・14)

3区は南半が微高地上平坦面にあたり、北部で北側緩斜面に移行する。後者の81列～82列では掘乱が著しく、遺構の空白域をなしている。北壁下も暗渠管の埋設により掘乱されていた。本地区に分布する遺構は、大半がⅠ

期に属す。確認面はⅢb層およびⅣ層上面である。

本地区の遺構で留意されるのは、調査区西側において5箇所の性格不明遺構(SX219・SX223・SX224・SX241・SX282)が帯状に連なり、しかもその範囲が西へ向かって広がる点である。調査区西端ラインは矢板に接するところから、打設時の引き込みによって地盤が沈下した恐れもあり、遺構認定自体の妥当性に問題を残している。

#### I 期

土坑27基・ピット24基・畝状遺構5箇所などからなる。畝状遺構の一角からは流路が確認された。この段階の遺構は重複が著しく、土坑やピットに先行して畝状遺構が構築される。

後述のように、本地区の土坑やピットは掘り込み深度が浅いものが多い。ピットの中に柱穴と特定できるものはなく、自然地形が少なからず含まれることも考えられる。

##### ① 土 坑 (図版17, 写真図版13・14)

確認数27基にのぼる。本次調査区の中では最も分布密度が高く、25基が後述のような畝状遺構と重複する。平面形は、不整形円形・不整形楕円形・円形をなすものが多い。長軸では30cm～50cm台を中心とし、最大深度は10cm以上20cm未満が主体を占める。覆土は単層をなすものが多く、3層以上に分層できる土坑はSK288に限定される。遺物を伴う例は少なく、SK245・285・303・306の4基を数えるのみである。いずれも土師器の小破片1点ずつが確認された。

##### ② ピット (図版16・17, 写真図版14)

総数24基にのぼる。単独で存在するピットは2基に限られ、上記の土坑と同様の分布状況を示す。平面形態としては幅広いものも多く、長軸20cm台が8基、30cm以上が10基ある。これに対し、最大深度20cm以上のピットは7基にとどまる。埋積土は24基が単層をなす。柱痕が確認できるものは含まれておらず、建物などの可能性が考慮される有意な配列も見られない。

##### ③ 畝状遺構 (図版16, 写真図版13・14)

視乱区域以外の全域に分布する。溝の走行と幅に基づき、図版7に示す5グループに区分できる。このうち4箇所が重複しており、①畝状遺構3・5、②畝状遺構6、③畝状遺構4、の順に構築されたことがうかがえる。

##### 畝状遺構2 (図版16, 写真図版13)

85列～86列に分布する6条の溝(SD225～SD230)をこれとする。いずれもⅣ層と色調に変わりがなく、粘性の異なりによって確認できた遺構である。後述の畝状遺構3～5に比べ、軸がいくぶん北東に偏る。調査区内での全長は2.5m、幅は2.3mを測る。北側の3条では北端が確認された。南側の3条は調査区の両側に延びる。個別に見た条の幅は11cm～23cm、深さは2cm～3cmならずである。溝の間隔は30cm前後が多く、他の畝状遺構に比べて狭い傾向にある。覆土には粘質シルトが堆積する。

##### 畝状遺構3 (図版16, 写真図版13)

87列～90列に分布する7条の溝(SD250～SD253・SD261～SD263)をこれとする。覆土には粘質シルトが堆積しており、粘性によって存在が確認できた。溝の走行は北東3度前後である。調査区内での全長は6m、幅は3.2mを測る。南側の3条は、北への連なりが調査区内で完結する。条の幅は16cm～27cm、深さは4cm～8cmである。溝の間隔は15cm～50cmの範囲に含まれるが、南側の3条では接近した位置関係をもつ。

##### 畝状遺構4 (図版16, 写真図版14)

畝状遺構3の北東に接したSD265・SD290・SD291をこれとする。覆土には粘質シルトが堆積し、色調によって遺構確認ができた。溝の走行は畝状遺構3に類似する。調査区内での全長は6mを測り、いずれの溝も調査区外へ延びる。分布幅は2.4mあまりである。溝の幅は46cm～58cm、深さ7cm～18cmを測り、畝状遺構2・3・5に比べ掘り込み規模が大きい。SD290から土師器の無台碗と長裏・須恵器の無台杯と大甕の小破片が出土した。本遺構は畝状遺構5を切っており、本地区の畝状遺構の中では構築時期が最も新しい。

**畝状遺構 5** (図版 16、写真図版 14)

2区南端のSD297・SD298・SD300・SD301をこれとする。溝の走行は、近接する畝状遺構4より若干北に傾く。畝状遺構2・3と同様に、粘性によって確認できた遺構である。覆土には粘質シルトが堆積する。いずれも調査区外に延びており、全長3.2m、幅1.9mが確認できたのみである。溝の幅は均一で、26cm～34cmの範囲にまとまる。深さは6cm～9cmを測る。互いの間隔は25cm前後である。

**畝状遺構 6** (図版 16、写真図版 14)

上記のような4箇所とは異なり、溝が東西に走行する5条の溝(SD260・SD264・SD295・SD445・SD449)をこれとする。本遺構は畝状遺構4に先行し、3を切る関係にある。北側の2条(SD260・SD264)は均一な幅と間隔をもつが、南側の3条は、走行や幅・間隔のうえで規則性に欠ける。覆土には粘質シルトや砂質シルトが堆積する。最大幅は32cm～60cmの範囲内にあり、深さは3cm～16cmを測る。

**④ 流路** (図版 16、写真図版 14)**SD242** (図版 16・写真図版 14)

86列～87列に位置する。畝状遺構3の一部を切りながら、北東36度の走行で調査区を横断する溝である。1.4mの均一な幅をもって走行するが、きわめて緩やかな断面形をなしており、最大深度は12cmを測るにすぎない。覆土にはⅢb層と類似した粘質シルトが堆積する。遺物は出土しなかった。

**Ⅱ 期**

土坑1基・ビット8基・区画溝3条が確認されたにとどまる。

**① 土坑** (図版 17、写真図版 14)**SK277** (図版 17)

畝状遺構4の一角を構成するSD290と一部が重複する。不整形をなした土坑で、長軸52cmを測る。皿状の断面形をもち、最大深度は12cmにすぎない。粘質シルトが2層にわたり堆積しており、第1層から多量の炭化物とともに土師器の無台鉢9点と長養2点が出土した。いずれも小破片のため図示しなかった。

**② ビット** (図版 16・17)

SD218や畝状遺構4と重複して5基確認されたにとどまる。前述のような1期のビットと規模や埋積土のうえで変わりなく、遺物も出土しなかった。

**③ 区画溝** (図版 16、写真図版 14)

調査区北端・南端と掘乱区域の壁面で確認された3条の溝を区画溝とする。いずれも部分的な調査にとどまっており、存在を確認したにすぎない。出土遺物もない。

**SD218** (図版 16、写真図版 14)

3区の北端コーナーに位置する。Ⅲb層と2基のビット(P216・P217)を切つて北東11度ほどの方向で走行する溝である。最大幅61cm・最大深度14cmを測る。平坦な底面をもち、覆土には粘質シルトが堆積する。

**SD222** (図版 16)

掘乱区域の中央部に位置する83B区の東壁で確認された。走行は明らかでない。幅54cm・深さ36cmを測り、Ⅲb層上面から掘り込まれる。断面形は「U」字状をなし、粘質シルトが3層にわたりレンズ状に堆積する。

**SD296** (図版 16)

3区の南端コーナーに位置する。畝状遺構5の南部を切りながら北西-南東方向に走行する溝である。一部を確認したにすぎない。Ⅲb層上面から掘り込まれ、最大深度は21cmを測る。覆土には粘質シルトが堆積する。

**4) 4 区 の 遺 構** (図版 18～21、写真図版 15～18)

4区は南に向かって緩やかに傾斜した微高地上に位置する。北壁際が暗渠で掘乱されるが、これ以外の区域では遺構が良好に保存されていた。本地区では1期～Ⅲ期の遺構が分布する。確認面はいずれもⅣ層上面である。

## I 期

ピット 12 基と畝状遺構 7 箇所からなり、北に隣接した 3 区と似た様相をみせる。I a 期の遺構が大半を占め、遺物の出土量はきわめて少ない。

## ① ピット (図版 18・20・21)

調査区北端付近の 101 列～105 列と南端部付近の 117 列～121 列に 12 基が分布する。埋積土区分に基づけば、I a 期 4 基・I b 期 8 基からなる。長軸では 20cm 台に集中するが、深度 20cm 以上のピットは 4 例に限られる。建物などの可能性が考慮される有意な配列はみられなかった。

## ② 畝状遺構 (図版 18～21、写真図版 15・16)

南部を除くほぼ全域から畝状遺構が確認された。前述の 3 区に較べて分布密度は低く、重複例もみられない。いずれも色調はIV層と変わりなく、粘性によって確認できた遺構である。全般的に遺存状態が良好でなく、部分的な確認にとどまったものが多いが、ここでは便宜的に 6 箇所に分ける。畝状遺構 7・8・10・13 から土師器が出土したが、いずれも細片のため図示しなかった。

## 畝状遺構 7 (図版 18、写真図版 15)

調査区北部の 102 列～105 列に分布する 11 条の溝 (SD316・SD318～323・SD332・SD333・SD335・SD336) を畝状遺構 7 とする。溝の走行は概ね南北を指し、調査区内での全体幅は 8.2m、全長は 10m あまりを測る。西部の 3 条と東部の 8 条では、条の幅や溝の間隔に違いが見られる。西部に位置する SD316・318・319 はいずれも北部が試掘坑によって切られる。東側の 8 条に較べて規模が大きく、幅 20cm～40cm、条の間隔 60cm～90cm を測る。東側 8 条の幅は 20cm 前後で、条の間隔は 50cm 以下にとどまる。深さはいずれも 5cm 前後である。

## 畝状遺構 8 (図版 18)

畝状遺構 7 の南に位置し、南北方向に並走する SD339・SD344 を畝状遺構 8 とする。両者は 105 列を北端とし、畝状遺構 7 に較びくぶん西寄りの角度をもって走行する。調査区内での全長は 10.6m を測る。個々の幅は 35cm～40cm、両者の間隔は 1m ほどである。深さは 10cm 前後を測る。

## 畝状遺構 9 (図版 18・19)

108 列～109 列に位置する 4 条の溝 (SD353～SD356) を畝状遺構 9 とする。本遺構では条の軸が他と異なり、北西 40～50 度の角度をもって走行する。4 区では 108 列以南で溝の幅が狭まり、条の走行が次第に不連続になる。本遺構では 4 条の溝が並列し、30cm 前後の間隔を置いて走行していたとみられる。調査区内で確認できた全長は 2.4m を測る。深さは 3cm～8cm にすぎない。

## 畝状遺構 10 (図版 19)

畝状遺構 9 の南に隣接する SD358・SD361・SD364 と 2.4m ほど東に位置する SD369 を畝状遺構 10 として便宜的に一括する。いずれも南北を軸として走行する。西端の SD361 は幅 31cm・深さ 10cm・全長 2.4m 以上を測る。これと 50cm ほどの間隔を置いて並走する SD358・364 は、幅 14cm・深さ 3cm～4cm を測り、本来的には一連の溝をなした可能性が高い。東部の SD369 は、幅 18cm・深さ 8cm、調査区内での全長 2.1m を測る。これに接した溝は確認できなかったが、形状から畝状遺構の一部と判断した。

## 畝状遺構 11 (図版 19・20、写真図版 15)

112 列～114 列に位置する 7 条の溝 (SD377・SD379・SD381～SD385) を畝状遺構 11 とする。南北を軸として走行し、全体幅は 3.4m、全長は 5.8m を測る。7 条にわたる溝の規模は類似性が高く、幅では 7cm～16cm、深さでは 2cm～7cm の範囲に含まれる。いずれも痕跡的に残存するため並列区域は限られるが、30cm～50cm 程度の間隔で並走するようである。

## 畝状遺構 12 (図版 20・21、写真図版 15)

116 列～117 列に位置する 7 条の溝 (SD394～SD400) を畝状遺構 12 とする。SD391 の南部に接して痕跡

的に残存しており、全長2mの間で存在が確認できたのみである。全体幅は2.6mを測る。7条の溝は幅7cm～16cm、深さ2cm～4cmならずで、最大20cmの間隔を以て並走する。本次調査で確認された畝状遺構の中では最も規模が小さなものである。

#### 畝状遺構 13 (図版 20・21, 写真図版 15)

畝状遺構 12 の南に隣接し、117 列～119 列に分布する 12 条の溝 (SD402～SD410・SD412・SD413・SD415) を畝状遺構 13 として便宜上一括する。規模と走行からみて、117 列～118 列の SD402～SD406 と 118 列～119 列の SD407～SD410・SD412・413・415 に二分できる可能性がある。

前者は幅 12cm～27cm、深さ 3cm～4cm を測る。調査区内での全体幅 3m、全長 4.1m を有し、条の間隔は 50cm 前後である。後者は本来的に 4 条の溝からなるものと考えられる。前者に較べ主軸がいくぶん西に傾く。個々の規模は幅 8cm～12cm、深さ 2cm～4cm を測る。調査区内での全体幅は 2m、全長は 4.5m である。

## Ⅱ 期

井戸 2 基・土坑 3 基・ピット 41 基・区画溝 1 条からなる。本段階の井戸は 4 区にのみ分布する。ピットの中には建物遺構の一部の可能性をもつ有意な配列や木柱根を遺存するものがみられる。このほか、調査区西端の排水溝掘削時に木柱根を伴うピット 2 基 (P326・P392) を確認した。掘り込み下端だけが遺存するため所属時期は明らかでないが、古代の木柱と類似性が高いことから、本項で記述する。

### ① 井 戸 (図版 21, 写真図版 17)

#### SE417 (図版 20・21, 写真図版 17)

119B の東壁際に位置する。Ⅲ期の SE418 に南半部が切られるところから、全体の 1/4 ほどの調査にとどまる。現存部での最大深度は 84cm を測る。覆土は大きく 4 層に大別できる。表層下の第 3 層と下底部の第 6 層では混入物が乏しい粘土や砂質粘土が堆積する。上部の第 2 層と中部の第 4 層・5 層ではシルトの粒子や大形ブロックが多量に含まれる。第 3 層から火鑽白 (図版 35-1) が出土した。

#### SE433 (図版 20・21, 写真図版 17)

122B の東壁際に位置する。遺構の一部が調査区内に含まれ、上半部の大半は暗渠によって失われる。西端部は SK432 に切られるが、残存区域の上部において砂質粘土の堆積が確認されたところからⅡ期の遺構と判断できた。下半部では最下部北側の第 7 層・8 層にシルトブロックが多量に含まれる。第 5 層・6 層はこれを切った掘り込み内の堆積土で、混入物に乏しい砂質粘土やシルトがレンズ状に堆積する。これらの上部には未分解有機物を微量に含む砂質粘土が全体を覆う。第 1 層から厚さ 3mm ほどの薄板が出土した。同層で行った土壌水洗で微細なアスファルト塊が検出されており、第Ⅵ章で記述する。

### ② 土 坑 (図版 18・19・21)

103 列～122 列の間に 3 基が点在する。いずれも深さ 10cm 台～20cm 強の浅い掘り込みである。遺物は出土しなかった。

### ③ ピット (図版 18～21, 写真図版 16)

調査区ほぼ全域にあたる 100 列～118 列の範囲から 39 基確認された。最大幅は 20cm～30cm 台に中心があり、最大深度では全体の 7 割強が 20cm 以上の深度をもつ。このうち 3 基で木柱根が遺存しており、柱根を残すピットも 6 基ほどみられる。

#### P334・P345 (図版 18, 写真図版 16)

104B と 106A において南北に並ぶピットである。北に位置する P334 は、幅 23cm・深さ 63cm を測る。上部に砂質粘土、下部にシルトが堆積し、最下部が柱痕に類似した形状をもつ。南に位置する P345 は、長軸 52cm を測る隅丸方形のピットで、覆土には砂質粘土が堆積する。深さ 44cm を測り、東側に柱痕状の掘り込みをもつ。2 基の間隔は、3.1m である。

**P359** (図版 19, 写真図版 16)

109Bに位置する。排水溝で東半部が失われるが、垂直に掘られたビットの南壁に接して木柱根が遺存する。木柱はコナラを使用した径 10.7cm の丸木材である。現存長 55cm を測り、その下端は深度 61cm の掘り込み下にまでおよぶ。覆土には砂質粘土が堆積する。

**P367** (図版 19, 写真図版 16)

P359の南 3.1m に位置する。径 37cm の円形ビットで、東壁に接して木柱が遺存する。木柱はクリを使用した径 12.8cm の丸木材である。現存長 64cm を測り、下端はビットの底面下 10cm ほどにおよぶ。掘り込み深度は 65cm ほどを測り、覆土下部にシルト、上部に粘土や砂質粘土が堆積する。

**P386** (図版 19, 写真図版 16)

113列に位置する。長軸 31cm を測る不整形円形ビットで、深度 50cm ほどの掘り込み下面に木柱の先端部が遺存していた。覆土には粘土が 2 層にわたり水平堆積する。

**P326** (図版 18)

南部の 103A に位置する。調査区西端の排水溝掘削時に木柱根が出土した。木柱は径 18cm のカツラ材を使用した丸木柱で、51cm の長さで遺存する。下端部に掘り込みが残り、黒褐色砂質粘土が堆積していた。この木柱に対応するビットは確認できない。

**P392** (図版 20)

南部の 116A に位置し、排水溝の掘削時に木柱根が出土した。木柱は径 14.6cm のクリ材を用いた丸木柱で、現存長 52cm を測る。掘り込みは木柱の中ほどまで遺存しており、ビット内にはシルトが堆積する。P326 と同様に対応するビットは確認できない。

## ④ 区画溝 (図版 18, 写真図版 16)

**SD343** (図版 18, 写真図版 16)

畝状遺構 7・8 に沿って南北に走行する区画溝である。最大幅 56cm、調査区での全長は 5m あまりを測る。断面形は皿状を呈し、最大深度は 8cm 程度である。埋積土には砂質粘土が堆積する。第 1 層から土師器無台碗の細片が 1 点出土した。本遺構は P341・P348・P350・P351 を切っており、後述のような想定建物以後に構築されたものである。

## Ⅲ 期

いずれも覆土上面に未分解有機物層を混じえた土砂が堆積する遺構である。井戸 2 基・ビット 13 基・区画溝 1 条からなる。この時期においても建物遺構の一部をなすことが確実なビットが存在する。

## ① 井 戸 (図版 20・21, 写真図版 17・18)

**SE389** (図版 20, 写真図版 17)

115A に位置する。全体構造が把握できた唯一の井戸である。平面形は径 1.1m 前後の円をなす。断面は台形を呈し、基底部には幅 60cm ほどの平坦面をもつ。最大深度 71cm を測り、埋積土は上部と下部で特徴が異なる。

第 1 層・2 層には、未分解有機物を多量に含むシルトが堆積する。第 4 層・5 層は、埋積過程で掘り込まれた落ち込み内部の堆積土である。掘り込み規模は、径 35cm・深度 37cm 前後を測る。内部には未分解有機物を含むシルトが堆積する。第 4 層から珠洲焼 (図版 29-125) とアスファルト塊が出土した。

下部の第 7 層～9 層には、細粒砂を帯状に含む粘質シルトや砂質粘土がレンズ状に堆積する。最下部の第 10 層は細粒砂からなる浸水層である。その周囲に堆積した第 11 層には、IV 層ブロックを混じえた粘質シルトが堆積する。

**SE418** (図版 20・21, 写真図版 18)

119 列～120 列に位置する。本次調査で確認された唯一の曲物埋設井戸で、西側の 1/2 強が調査区内に含まれる。平面形は径 1.8m 前後の円をなす。掘り込み深度は 1.69m ほどを測る。本遺構の構造は、IV 層上面下

75cmあまりに存在する小テラスを境に上下二段に分かれる。

遺構上段は箱形に掘り込まれるが、上部と下部で埋積状況を異にする。上部層（第1層～6層）は自然堆積土で覆われる。第1層・5層・6層に未分解有機物を多量に含むシルトや粘質シルトがレンズ状に堆積し、第4層ではラミナを形成する。本遺構でも埋積過程で中央部が掘り込まれる。幅46cm・深さ50cmほどの掘り込みで、内部にはIV層ブロックを含むシルト～粘質シルトが堆積する。これに切られる第8層・9層にもIV層ブロックが混入しており、人為的な埋積後掘り込みが行われたことがうかがえる。中段テラスまでの第10～13層はレンズ状に堆積し、上部の第10層ではラミナが形成される。第2層から2.5g、4層から17.3gのアスファルト塊が出土した。

中段テラスは、曲物上面を取り囲み30cm～40cmの幅で設けた平坦面である。その上面には多数の木羽板が全面にわたって敷きつめられる。木羽板は最大8cmの砂質粘土を間層として2層にわたり敷かれる。木羽板の厚さは2mm～3mmで、使用材はスギとみられる。木目の走行から個々の形状がうかがえるものがあり、図版内にその輪郭と木目の走行を示した。上面から下駄や箸が出土しており（図版35-2～5）、西半部で行った土壌水洗をつうじアスファルトの微細粒子176gと多数の種実が検出された。後者の詳細な内容は第VI章で記述する。

下段は階段状に掘り込まれる。その中央には4個体の曲物が3段にわたって埋設される。内部上面の第14層はシルトブロックを多量に含むことから、人為的な埋積土とみなされる。以下底面までの間に未分解有機物を微量に含む粘土層が70cmほどの厚さで堆積する。内部からは、中段テラスに敷かれた木羽板の一部や木片・炭化物・アスファルト塊が出土した。土壌水洗をつうじ、微細粒子を中心とする337gのアスファルト塊が検出された。曲物の周囲に堆積する第21層～24層は、黒褐色粘土粒子を含む砂質粘土やシルト層である。

なお、本遺構では第2層・4層・14層から計8点の土器片が出土しているが、中世の資料は含まれておらず、所属時期の詳細は明らかでない。

#### ② ビット（図版18～21、写真図版17）

調査区のほぼ全域にあたる101列～121列の範囲に13基が分布する。最大深度30cm以上のビットが8基あり、のうち1基で木柱根、6基で柱痕が確認された。

#### P357・P362（図版19）

109列～110列に位置する。1.8mの間隔において南北に並び、建物遺構の一部をなした可能性があるビットである。前者は最大幅29cm・深度44cmを測る。覆土上部に粘質シルト、下部に砂質粘土がレンズ状に堆積する。後者の最大幅は49cmにおよぶ。断面右に粘質シルトと砂質粘土が3層にわたり堆積し、ビット左に偏る位置に最大幅22cm、深度40cmほどの柱痕が残る。柱痕の下半部には炭化物を多く含む砂質粘土が堆積する。

#### P372（図版19、写真図版17）

112Aに位置する。最大幅50cmの不整形な平面形態をもち、最大深度53cmの断面「U」字形のビットである。下部にはIV層ブロックを含むシルト層が堆積する。中部層は砂質粘土・シルト・細粒砂からなり、中央の砂質粘土内に木柱根が遺存する。木柱はコナラを材とする径19cmたらずの丸木柱である。

#### ③ 区画溝（図版20・21、写真図版16）

#### SD391（図版20・21、写真図版16）

115列～116列に位置する。東西に走行する最大幅1.08mの区画溝である。深さ30cmを測り、断面形は深皿状を呈する。覆土は3層に分かれ、未分解有機物を多量に含むシルト層が堆積する。第1層から土師器・須恵器の小破片6点が出土した。中世遺物は含まれない。

## 第V章 遺 物

### 第1節 概 要

縄文時代から中世に至るまでの遺物がコンテナ(内法54.5cm×33.6cm×10.0cm)で92箱出土した。内訳は、縄文土器1箱、古代土器60箱、中世土器1箱、土製品および焼成粘土塊1箱・鍛冶関連遺物1箱・金属製品1箱・石製品1箱・搬入礫5箱・木製品15箱・漆要具1箱・アスファルト塊3箱・炭化物1箱・種実および焼骨1箱である。図版22に主要遺物の分布状況を示す。

出土遺物の主体をなすのは、9世紀代を中心とした土師器である。これに次いで、同時期の須恵器が多数出土した。土製品・鍛冶関連遺物・石製品・搬入礫は平安時代～中世に属す資料と考えられるが、所属時期の特定が困難なものが多いため、以下では時代を二分し、平安時代以前を第2節、平安時代～中世を第3節で記述する。

種実とアスファルト塊は古代～中世に属す。種実の中には食料残渣が含まれるが、自然堆積物が大多数を占める。アスファルト塊は付近で湧出した原油が調査区内で自然固結した可能性が高く、種実とともに第VI章で扱う。焼骨はSD34出土の微細骨片3点に限定される。保存状態が良好でなく同定が困難なため、存在を記すにとどめる。

### 第2節 平安時代以前の遺物

#### A 縄文土器

1区の北部から2区の北部にかけて、4個体の縄文土器が出土した。このうち3個体を図版30に示す。

126は44Bに位置するSD97の覆土から出土した。口縁部が波状をなした深鉢形土器で、大きく外反した口縁の波頂部破片である。器面に文様はなく、全体にわたって平滑に整形される。胎土には、磨耗した石英や岩石、破砕した石英・長石・岩石粒子を含む。

127は7列から出土した。細密条痕を施す深鉢形土器の体部破片である。磨耗した石英・岩石粒子とともに破砕した石英・岩石粒子を多量に含む。128は同一グリッドから出土した深鉢形土器の底部である。底面から体部下端の無文部までが遺存し、胎土は127に類似する。このほか単節縄文LRを施す微細な体部破片が2区北部の33Bから1点出土した。海綿骨針を含むが、含有粒子のあり方は127・128と変わらない。

以上4点の縄文土器のうち、126の所属時期は明確でない。127は晩期終末の粗製土器である。胎土が類似する他の2点もこれと同時期の可能性が高い。近隣に位置する同時期の遺跡としては、南東550mほどにあたる本遺跡2009年・2010年調査区があげられる。多数の焼土遺構が確認された地区であるが、遺物量が乏しい点に特徴があり、本次調査区の周辺に類似した性格をもつ遺跡が存在することも考えられる。

#### B 奈良時代の土器

1区と3区から、奈良時代に属す土師器と須恵器が1個体ずつ出土した。

##### 1) 土 師 器 (図版30)

129は3区86AのⅢ層から出土した。口径15cmほどと推定される小型甕で、口端・頸部・体部の区分が明瞭である。器厚は5mmほどにとどまり、体部外面と口縁部内面に横位のナデ、体部外面の一部に繊細なハケ目調整を行う。胎土には磨耗した石英・岩石と、多量の破砕石英・岩石を含む。



## 2) 須 惠 器 (図版 24)

49 は 1 区 SX29 の覆土から 9 世紀代の土器に混じって出土した。きわめて厚手に作出された須惠器無台杯の底部破片で、底径 8cm ほどと推定される。含有物が皆無に等しく、次節で述べるような須惠器の胎土分類にもとづけば、IV 類にあたるものである。

# 第 3 節 平安時代・中世の遺物

## A 土 器

平安時代と中世の土器が総重量にして 68,519g 出土した。全体の 99.3% を平安時代が占めており、中世土器は 8 個体の出土にとどまる。平安時代の土器は、重量比のうえで土師器 76.6%・黒色土器 0.8%・須惠器 22.6%・灰釉陶器 0.04% からなる。

### 1) 分 類

土師器と須惠器について、以下のような分類を行う。

#### 1 土師器

##### ① 器種と器形 (第 7 図)

食膳具と煮炊具に大別できる。食膳具は無台碗 (15%)、煮炊具は長甕 (72%)・小甕 (7%)・鍋 (6%) からなる。このうち、無台碗・長甕・小甕について、以下のように区分する。

**無台碗** 内外面をロクロナデによって整形するものが大半を占める。法量を知りうる資料が限られるため、口縁部の形態から以下のような区分を行う。調整法が異なるものについては、本文中に記述する。

1 類は器体が丸みもち、口端付近で内に向かっていくぶん屈曲する。2 類は直線的に外傾し、口端の断面形が内・外面で対称形をなす。3 類は口縁が外反し、端部が外面に向かって尖るものである。4 類は直線的に外傾するが、口縁内面が削がれたような断面形をもつ。

**長 甕** ロクロ成形によって整形で製作される。全体形を知りうる資料が皆無のため、器体上半部の器形と口縁部の断面形から区分する。

1 類は体部に最大径をもつ。口縁内面はなだらかで、口端はさほど肥厚しない。2 類は体部が緩やかに膨らむものである。口端は肥厚し、端部を摘み上げる形態が多い。3 類は体部が垂直に下降する。口端形態は 2 類と変わりない。

**小 甕** 口縁部から体部下半までをロクロナデで調整する甕である。長甕と同様の観点から区分を行う。

1 類は口縁部と体部の径がほぼ同一なものである。口縁部の断面形は均一な厚さをもつ。2 類は体部が緩やかに膨らみ、端部を摘んだ肥厚口縁をもつ。3 類は体部の膨らみが弱く、口端は肥厚しない。

##### ② 胎 土 (写真図版 26)

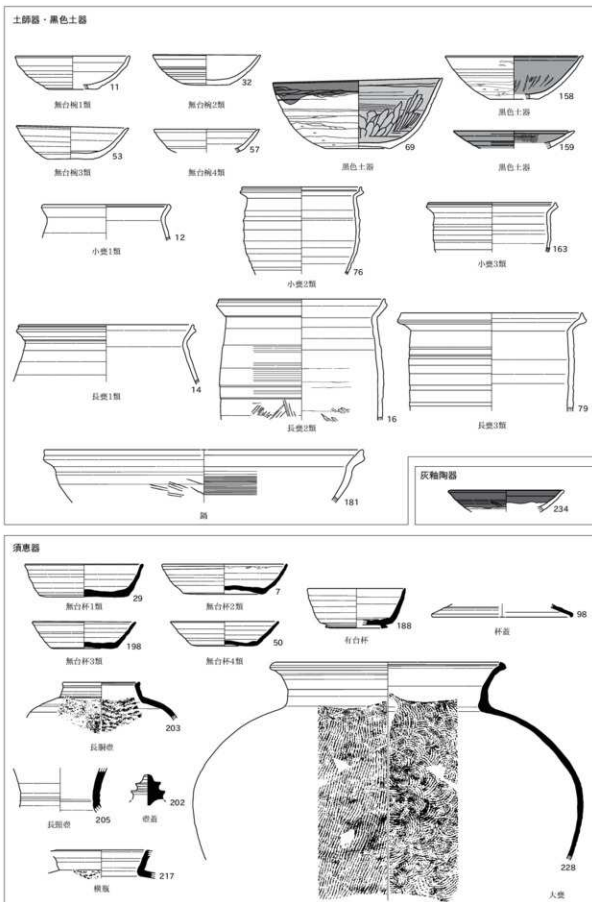
本次調査区から出土した土師器の胎土はバラエティーに富む。石英・長石・岩石の含有量と磨耗の有無から次のような分類を行う。

磨耗した石英・長石や岩石粒子を何らかの形で含むものを I 類とする。磨耗粒子以外の含有物が相対的に乏しい Ia 類と、破砕粒子を多量に伴う Ib 類に細分できる。磨耗粒子を含まず、破砕した石英・長石・岩石を多量に含有するものを II 類とする。破砕した石英・長石・岩石粒子を少量含むものを III 類とする。粉末状の石英・長石を比較的多く含む III a 類、これが皆無に等しい III b 類に細分する。

##### ③ タタキ整形痕 (第 8 図・写真図版 27)

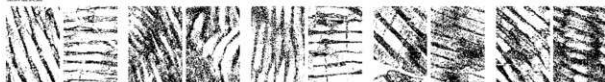
長甕の下半部にはタタキ整形が行われる。外面のタタキ目と内面の当て具痕にあり方から以下の区分を行う。

外面に「平行タタキ目」、内面に「平行圧痕」をもつものを 1 類とする。糸の内部に木口痕を有するものと平滑なものがあり、木口痕がタタキ目だけにみられるものを 1a 類、内外面の両者に見られるものを 1b 類、



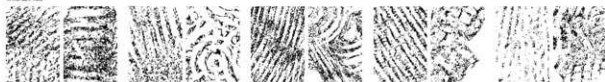
第7図 古代土器分類図

土師器片断



1類 外面平行タタキ目  
内面平行当て具痕  
2類 外面平行タタキ目  
内面同心円当て具痕  
3類 外面平行タタキ目  
内面変形格子目当て具痕  
4類 外面格子タタキ目  
内面平行当て具痕  
5類 外面変形格子タタキ目  
内面平行当て具痕

須臾器片断



1A類 外面平行タタキ目  
内面平行当て具痕  
1B類 外面平行タタキ目  
内面同心円当て具痕  
1C類 外面平行タタキ目  
内面同心円+平行当て具痕  
1D類 外面平行タタキ目  
内面格子目当て具痕  
1E類 外面平行タタキ目  
内面平行+格子目当て具痕



2A類 外面格子タタキ目  
内面平行当て具痕  
2B類 外面格子タタキ目  
内面同心円当て具痕  
2C類 外面格子タタキ目  
内面同心円+平行当て具痕  
2D類 外面格子タタキ目  
内面変形格子目+同心円当て具痕  
3類 外面格子+平行タタキ目  
内面同心円当て具痕

第8図 土師器・須臾器のタタキ整形痕分類

内外面が平滑なものを1c類とする。外面に「平行タタキ目」、内面に「同心円圧痕」をもつものを2類とする。タタキ目の条に木口痕をもつ2a類、平滑な2b類に細分できる。

3類以下はいずれも少数資料にとどまる。3類は外面に「平行タタキ目」、内面に「変形格子目圧痕」、4類は外面に「格子タタキ目」、内面に「平行圧痕」、5類は外面に「変形格子タタキ目」、内面に「平行圧痕」をもつ。木口痕の有無については分類項目から除外し、本文中に記載する。

2 須臾器

① 器種と器形（第7図）

食膳具と貯蔵具に大別できる。食膳具は無台杯（13.4%）・有台杯（2.6%）・杯蓋（1.7%）、貯蔵具は甕類（71.9%）・壺類（9.8%）・壺蓋（0.2%）・横瓶（0.4%）からなる。全体器形がうかがえる資料は、無台杯と有台杯に限定される。復元個体が比較的多く、遺構間での比較が可能な無台杯について器形区分を行う。

**無台杯** 体部から口縁部にかけての器形に基づき4類に区分する。1類は、立ち上り角度が60度以上におよぶものである。50度前半の角度を有する資料には、体部に膨らみをもつものと直線的なものがあり、前者を2類、後者を3類とする。4類は50度に満たないものである。

② 胎土（写真図版26）

須臾器の胎土もバラティエーに富んでおり、以下のように区分する。

白色粒子を多量に含み、鉱物・岩石粒子が皆無に等しいものをI類とする。含有物が白色粒子に限定されるIa類と、これに黒色粒子が加わるIb類に細分できる。磨耗または破砕した石英・長石・岩石粒子を少量含むものをII類とする。含有量が乏しいことから多分に流動的な性格をもつが、石英・長石を含むIIa類と岩石だけを含むIIb類に細分できる。III類は、粗大な石英・長石・岩石を多量に含むものである。磨耗粒子を少量含むものと欠落するものに二分できるが、資料数が乏しいため一括する。このほか含有物が皆無に等しいものがあり、これをIV類とする。

以上のような区分は生産地の別とほぼ対応しており、I類は佐渡小泊、II類は新津丘陵、III類は阿賀北産須臾器と考えられる。

## ③ タタキ整形痕 (第8図・写真図版27)

襖類などの内外面に残るタタキ整形痕を土師器と同様の観点から区分する。圧痕パターンは多岐に及び、第8図のような10種に分けられる。使用される工具には木取りの違いに由来するバリエーションもみられ、条内部の木口痕の有無に基づき細分も可能であるが、きわめて煩雑になるため分類基準から外し、本文中での記述にとどめる。

分類にあたっては、外面に「平行タタキ目」をもつ1類、「格子タタキ目」をもつ2類、両者が共存する3類に大別する。内面に残る当て具痕には「平行」・「同心円」・「格子目」・「変形格子目」の別があり、これらの組み合わせから細分が可能である。1A類と2A類は平行圧痕、1B類と2B類は同心円圧痕、1C類と2C類は同心円圧痕＋平行圧痕を共通した内面当て具痕とする。1D類は格子目圧痕、1E類は平行圧痕＋格子目圧痕、2D類は同心円圧痕＋変形格子目圧痕をもつものとする。

## 2) 遺構内出土土器

遺構内出土資料は、全体の17%を占める。第IV章で述べたように、本次調査区から確認された遺構は、埋積土の在り方からⅠ期～Ⅲ期に大別できた。これに従いⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期の順に出土資料の特徴を記述する。

## Ⅰ 期 (図版23・写真図版19)

区画溝5条、畝状遺構6箇所、土坑6基、ピット7基、性格不明遺構8箇所、流路3箇所から土器が出土した。主要な資料を図版23・写真図版19に示す。いずれもⅠb期の遺構・流路から出土したものである。Ⅰ期の遺構出土資料は総じて乏しく、SD130が最もまとまったものである。

## SD46 (図版23-1・2, 写真図版19)

2点の土師器を示す。1は無台椀の底部、2は長襖の体部破片である。胎土はともにⅠa類にあたる。後者のタタキ整形痕は3類にあたり、外面のタタキ目には木口痕をもつ。条の幅は3mmを測る。本資料は、SD47から出土した図版23-3と同一個体である。

## SD47 (図版23-3・4, 写真図版19)

土師器の長襖(3)と須恵器の大甕(4)を示す。4はSD34出土の図版27-102と同一個体である。13列～22列のⅢ層内に同一個体の破片が分布しており、本遺構埋積土の上部に堆積した資料とみられる。

## SD56 (図版23-5～8, 写真図版19)

土師器の長襖(5)・須恵器の無台杯(6・7)と横瓶(8)を示す。5は土師器長襖の体部下半破片である。胎土Ⅰb類にあたり、タタキ整形痕は2a類に該当する。タタキ目の条は繊細で、幅2mm台にとどまる。6～8の須恵器は、いずれも胎土Ⅰa類にあたる。7の無台杯は口径14.2cm・器高3.4cmを測り、2類に該当する。8は数少ない横瓶の体部破片である。タタキ整形1B類にあたる。タタキ目の条内部に木口痕をもち、内面の同心円圧痕の内面には条と平行した細線が見られる。

## SD62・SX194 (図版23-9, 写真図版19)

9の土師器長襖は、SD62とSX194出土資料が接合したものである。胎土はⅠb類にあたり、外面上部にカキ目、下部に木口痕を伴う平行タタキ目をもつ。条の幅は4mmを測る。内面圧痕は明瞭でない。

## SD129 (図版23-10, 写真図版19)

須恵器の無台杯を示す。10は胎土Ⅱa類にあたり、底面がケズリによって平滑に整形される。

## SD130 (図版23-11～18, 写真図版19)

Ⅰ期の中では最多の資料が出土した遺構である。土師器の無台椀(11)・小甕(12・13)・長襖(14～16)・鍋、須恵器の無台杯(17)・大甕(18)が出土した。

土師器の胎土は、無台椀がⅢa類、長襖16がⅠa類、14・15がⅠb類、小甕がⅠa類にあたる。11は無台椀1類、12は小甕1類、14は長襖1類、16は長襖2類に該当する。14は端部外面がやや肥厚する。15のタタキ整形痕は2b類である。条の幅は2mm台を測る。16は尖測図の上で内面当て具痕が不明瞭であるが、同

心円圧痕をもつ同一個体が存在することから 2b 類とみなされる。15 と同様に繊細なタタキ目をもち、条の幅は 2mm 台を測る。外面のタタキ目に木口痕は見られない。須恵器の胎土は、無台杯が I a 類、大甕が II b 類である。後者はタタキ整形 1B 類に該当し、内外面に木口痕は見られない。

**SD134** (図版 23-19 ~ 22, 写真図版 19)

土師器の長養(19)・小甕(20)と須恵器の無台杯(21)・有台杯(22)を示す。土師器の胎土は、19 の長養が I b 類、20 の小甕が I a 類にあたる。19 は長養 I 類である。端部内部がいくぶん湾曲するが、口縁全体が均一な厚みをもつ。須恵器の胎土は無台杯が I a 類、有台杯が II a 類である。無台杯は 器形 2 類にあたり、口径 13.2cm・高さ 2.9cm を測る。

**SK90** (図版 23-23, 写真図版 19)

23 の須恵器有台杯が単独で出土した。胎土は II b 類である。

**SK233** (図版 23-29 ~ 31, 写真図版 19)

須恵器の無台杯(29)と壺類(30・31)を示す。29 は無台杯 I 類である。口径 13.4cm・高さ 3.7cm を測り、胎土は I a 類にあたる。30 は長頸壺の頸部、31 は壺類の体部下端付近である。胎土は、前者が II b 類、後者が I b 類にあたる。

**P174** (図版 23-24, 写真図版 19)

24 の土師器長養が単独で出土した。胎土 I b 類に該当し、タタキ整形は 2b 類である。本例のタタキ目も繊細で、幅 2mm 台を測るのみである。

**P337** (図版 23-28, 写真図版 19)

28 の須恵器無台杯が単独で出土した。小破片のため、径は明らかでない。使用胎土は I a 類である。

**SX63** (図版 23-25, 写真図版 19)

25 の須恵器大甕破片が単独で出土した。胎土 II a 類、タタキ整形 2A 類に該当するものである。

**SX194** (図版 23-26, 写真図版 19)

須恵器大甕を示す。26 は胎土 II b 類、タタキ整形 1B 類に該当し、内面の当て具痕には木口痕がみられる。

**SX220** (図版 23-27, 写真図版 19)

27 の小甕が単独で出土した。小甕 2 類に該当するものである。本例の端部は肥厚して平坦な面をなす。胎土は III a 類にあたる。

**II 期** (図版 24 ~ 29, 写真図版 20 ~ 22)

井戸 1 基、区画溝 8 条、土坑 4 基、ピット 25 基、性格不明遺構 4 箇所から土器が出土した。1 区のス X29 と SD34 でまとまった出土量があり、図版 24 ~ 26 に主要資料を示す。これ以外の遺構からの出土量は乏しく、図版 29 に 16 点を示す。

**SX29** (図版 24, 写真図版 20)

SD34 に次いで多い資料が出土した。口残値の合計数は 2.77 と算出される。器種別にみた占有率は、土師器無台杯が 66% に達し、以下須恵器無台杯 18%・長養 9%・小甕 4%、黒色土器無台杯 3% の順で続く。

土師器無台杯(32 ~ 42)の胎土は、I a 類(34・36・39・40)と III a 類(32・33・37・38・42)を主体とする。これに II 類(35・41)も付随し、多様なあり方を示す。器形は 33 が I 類、32・36 が 2 類、34・35 が 3 類に該当する。4 類は見られない。底面の回転糸切りは、すべて右回転による。39 の底面には、「+」のヘラ描き沈線、40 の体部下端には、図示のような墨書がみられる。40 は上部が欠損するため、文字の判読が難しい。このほか、3 個体でタール状の黒色付着物が確認できた。付着部位は、33 の内面全体、36 の口縁部内面など、40 の内面の一部である。

小甕(43・44)の胎土は、ともに I a 類である。44 の器形は小甕 3 類に該当し、端部に明瞭な摘みをもつ。43 は底面に右回転による回転糸切り痕をもち、底部内面に溝状をなしたロクロ回転痕が残る。

長甕(46~48)の胎土もすべてⅠa類である。器形は45が2類、46が3類にあたる。ともに端部の摘みが明瞭である。体部下半のタタキ整形痕は、47が1c類、48が1a類に該当する。条の幅はともに4mmを測り、Ⅰ期に較べていくぶん太い。

器形が把握できる須恵器は無台杯1点に限られる。50は口径12.3cm・器高2.8cmを測り、胎土Ⅰa類、器形4類に該当する。実測図左の小破片は、これと同一個体と考えられる黒書土器である。「足」の一部とみられる文字が口縁部に対し横向に記される。

#### SD34 (図版25~28, 写真図版20~22)

本次調査でえられた遺構出土土器の中で最もまとまった資料である。口縁値合計数は10.39と算出される。主体をなすのは、59%を占める土師器無台碗である。これに次いで、長甕が21%の数値を示す。以下10%の小甕、6%の黒色土器無台碗が続くが、鍋・須恵器の無台杯・有台杯・杯蓋は1%にも満たない。

土師器無台碗の胎土はバラエティーに富む。主体を占めるのはⅠa類(55・59・60・63・64・68・69)とⅢa類(51・52・54・61・62・65・66)であるが、Ⅰb類(53・70)やⅡ類(56・67・71)・Ⅲb類(57・58)も定量含まれ、胎土組成の分散化がみられる。器形は2類(51・54・55・59・71)、3類(53・58・60・61・63)、4類(52・56・57・62)からなり、1類は含まれない。底面の回転糸切りは、いずれも右回転による。使用法に関連した資料としては51があげられる。タール状の黒色付着物が内面全体を覆うとともに、口縁部外面のほぼ半分から流下した状態で付着するものである。付着物には石油臭が残っており、灯明具として使用したことがうかがえる。

69・70は黒色土器の無台碗である。69は内面全体と外面の口縁周辺、70は内面全体が黒色を帯びる。前者は口径19.3cm・底径7.8cm・器高7.8cmを測り、鉢状の形状をなす。口縁形態は土師器無台碗4類に類似する。後者は土師器無台碗3類に類似した形態である。69は底面全体にケズリ整形が行われる。内外面の整形法は類似しており、外面下半で横位のケズリ、上半で横位のミガキ、内面下半で縦位のミガキ、上半で横位のミガキが行われる。

土師器小甕の胎土は、Ⅰa類(72・74・77・78)を主体としながらⅠb類(73・76)がこれに付随する。器形は2類(76)と3類(77・78)からなる。3類は口端の肥厚が弱く、体部・口縁部の境界が緩やかなカーブを描く。底面の回転糸切りはいずれも右回転による。73・74の底部内面には、渦状のロクロ回転痕が残る。

長甕の胎土は、Ⅰa類(80・82・84・86~92・94~97)が卓越し、これに若干のⅠb類(79・85)とⅡ類(81・83・93)が付随する。器形は2類(87~89)と3類(79~86)からなり、後者が多数を占める。いずれも口端は肥厚するが、端部を明瞭に摘み上げるものは多くない。体部下半のタタキ整形痕は、1a類(90~93・95・97)・1c類(96)・4類(194)がみられる。条の幅はⅠ期に較べて明らかに広く、91・93・97が4mm、95が4mm~5mm、90・96が5mm、94が5mm~6mmを測る。

須恵器の出土量は僅少で、6点を示すにとどまる。99・100の無台杯は、ともに胎土Ⅰb類にあたる。99は口径12.6cm・底径8cm・器高3cmを測り、器形分類2類に該当する。98の杯蓋も胎土Ⅰa類にあたるが、小破片のため正確な径は明らかでない。101~103に大甕を示す。胎土は102がⅠa類、101・103がⅡa類にあたる。102は体上部から中ほどにかけての大破片である。内外面に1C類に該当するタタキ整形痕をもち、外面の平行タタキ目と内面の同心円当て具痕には木口痕を伴う。体部中ほどではタタキ整形の後ナデが行われ、幅1.5cmほどの無文帯が形成される。101はタタキ整形分類2A類に該当する。内面の平行当て具痕に木口痕は見られない。102は、内外面が平滑なⅠA類にあたる。内面の当て具痕を頻繁に移動させたため、条の走行が錯綜する。

#### SD22 (図版29-105, 写真図版22)

105は底径7cmと推定される土師器無台碗である。胎土はⅢa類にあたる。ロクロ成形の後、外面に横方向のケズリ整形が行われる。底面はケズリによって平滑に整形される。

SD53 (図版 29 - 109 - 110, 写真図版 22)

須恵器の無台杯と杯蓋を示す。胎土は前者がⅠa類、後者がⅡb類にあたる。110は杯蓋のつまみで、形態がわかる本次調査唯一の資料である。全体にボタン状を呈し、中央部が小さく突出する。

SD71 (図版 29 - 111, 写真図版 22)

111は須恵器大甕の体部破片で、胎土Ⅱa類にあたる。タタキ整形1B類に該当し、内外面の条に木口痕は見られない。

SD218 (図版 29 - 112 ~ 116, 写真図版 22)

土師器の長袋 (112)・須恵器の無台杯 (113) と大甕 (114 ~ 116) を示す。

112は土師器長袋の底部で、胎土Ⅰa類にあたる。タタキ整形分類1a類に該当するが、タタキ整形に先行して外面にハケ目調整、内面にナデ整形が行われる。平行タタキ目の条の幅は繊細で、3mm 台を測る。

須恵器の胎土は116がⅠa類、113がⅠb類、114がⅡb類、115がⅢ類にあたる。大甕3個体のタタキ整形は、115がⅠA類、114・116がⅠB類である。このうち115・116の平行タタキ目は木口痕を伴う。前者のタタキ整形痕は内外面ともに浅い。

P9 (図版 29 - 106 ~ 108, 写真図版 22)

土師器の無台碗 (106) と鍋 (107)・須恵器の大甕 (108) を示す。土師器の胎土は、ともにⅠa類である。107の鍋外面には条が平滑な平行タタキ目とカキ目が見られる。108の須恵器大甕は、胎土Ⅱb類、タタキ整形2A類に該当する。内面の平行当て具痕は条の内部に木口痕をもつ。このほか内面には、木口痕を伴う幅1cmほどの帯状の圧痕が平行当て具痕の上に残される。

SK1 (図版 29 - 104, 写真図版 22)

104の須恵器無台杯は、2A・3A・4AのⅢ層出土資料とSK1の第2層出土資料が接合したものである。胎土Ⅱb類、器形2類に該当し、口径14.4cm・底径7.5cm・器高3.5cmを測る。

### Ⅲ 期

本時代の遺構は中世に属す。2基の井戸・3条の区画溝・ピット1基から土器が出土しており、図版 29 - 118 ~ 125 に主要資料を示す。中世土器の出土量は3個体にすぎず、これ以外は古代土器の混在資料である。

SE389 (図版 29 - 125, 写真図版 22)

125は珠洲焼の大甕で、口縁下の頸部から体部上端にかけての小破片である。体上部が大きく張り出す器形をもち、体部外面に横位の平行タタキ目と煎印、内面に平滑な当て具痕が残る。平行タタキ目は繊細で、1cmあたりの条数は5本を数える。13世紀代の製品と考えられる。

SD168 (図版 29 - 123, 写真図版 22)

須恵器大甕の体部破片が1点出土したのみである。123は胎土Ⅱb類、タタキ整形1E類に該当し、平行タタキ目の条に木口痕を伴う。

SD171 (図版 29 - 120 ~ 122, 写真図版 22)

珠洲焼 (120)・甕器系陶器 (121) と須恵器 (122) が混在状態で出土した。

121は珠洲焼大甕の体部破片である。外面に斜位の平行タタキ目、内面に平滑な当て具痕をもつ。タタキ目は概ね繊細で、1.2cmの間に5条を認める。胎土には石英の破砕粒子が少量含まれる。121は四耳壺の肩上部にあたる破片で、外面全体が自然釉で覆われる。胎土には多量の破砕石英が含まれる。中央に残る楕円形の突起は左右に並ぶ把手の剥落部である。13世紀前半に猿沢窯で製作された製品と考えられる。

122の須恵器無台杯は、胎土Ⅰb類、器形2類に該当する。口径12.1cm・底径7.3cm・器高3.3cmを測る。

SD391 (図版 29 - 118, 写真図版 22)

古代の土師器・須恵器が6点出土したにとどまる。118は須恵器長頸壺の頸部である。胎土Ⅰa類にあたり、内外面にロクロナデが行われる。

## P311 (図版 29 - 119, 写真図版 22)

須恵器大甕の体部破片が1点出土したのみである。119は胎土Ia類、タタキ整形1B類にあたる。外面の平行タタキ目と内面の同心円当てで具痕には、木口痕が見られる。

## SX188 (図版 29 - 124, 写真図版 22)

須恵器無台杯が1点出土したのみである。124は胎土III類、器形2類にあたり、口径13cm・底径8.2cm・器高3.1cmを測る。

## 3) 包含層出土土器

## 1 土師器 (図版 30・31, 写真図版 23・24)

重量比で見た各器種の占有率は、無台碗14%・長甕73%・小甕7%・鍋6%からなる。主要な資料を図版30・31に示す。器形がうかがえる資料の大多数は無台碗で、長甕・小甕は良好な資料に乏しい。鍋は遺構内出土資料と同様に散発的な出土にとどまった。

## ① 無台碗 (図版 30 - 130 ~ 157, 写真図版 23)

調査区全体における無台碗の胎土はIa類36%・Ib類5%・II類19%・IIIa類32%・IIIb類8%で、遺構内出土資料と同様に胎土の分散化を見せる。器体上半器形と径が把握できる28個体を示す。3区出土の147・156以外は1区から出土したものである。胎土は130・135・137・146・151・153・156がIa類、147がIb類、136・142・144・152・157がII類、138・141・145・149・154・155がIIIa類、139・148・150がIIIb類にあたる。

器体上半器形は、2類(130・135・138・140・141)・3類(131・133・136・137・139)・4類(132・134・142)からなる。2類~4類の数量に有意な差はみられない。いずれの資料も底面に回転系切痕をもつ。回転方向が把握できる資料は9点あり、152が左回転によるほかは総て右回転である。

132の体部には、図示のような墨書が残る。左側が欠損するため、文字の判別は難しい。155の底面には、SX29の39やSD34の54と類似したヘラ描き沈線が施される。

使用法に関連する資料としては、134・137の内外面に付着したタール状の黒色付着物があげられる。SD34の51と同様に、原油に由来するタール状物質が口縁から流下した状態で付着した資料である。

## ② 長甕 (図版 31 - 173 ~ 180, 写真図版 24)

口径が推定できる資料6個体と底部形態がうかがえる2個体を示す。2区出土の178以外は、いずれも1区から出土したものである。小破片が大多数を占めており、良好な資料は少ない。

調査区全体における長甕の胎土は、Ia類68%・Ib類23%・II類8%・IIIa類2%を示す。掲載資料は173・176・179がIa類、178がIb類、180がII類、177がIIIa類である。

器体上半器形としては2類(173・175・177)が主体を占め、1類(178)と3類(176)は1個体のみである。口端部の断面形態は、1類と2類・3類の間に明確な違いがある。1類の典型資料と言える178では端部の肥厚が全くみられず均一な厚さをもつのに対し、2類・3類では肥厚が著しく、端部を挿込んだような口端形態をなす点が大なる特徴となる。底部はすべて丸底をなしており、遺存率が高い179・180を示した。前者は、円盤状の粘土塊で下底部を成形する資料である。

図版31に示す8個体のうち、体部下半のタタキ整形痕がうかがえる資料は3個体に限られる。175は2a類に該当し、外面に木口痕を伴う平行タタキ目、内面に同心円当てで具痕をもつ。糸の幅は4mmを測り、1期遺構内出土の同類の資料に較べ使用工具が粗大である。179・180は外面に平行タタキ目、内面に平行当てで具痕をもち、木口痕の有無に基づけば前者は1a類、後者は1c類にあたる。糸の幅は、前者が3mm~4mm、後者が4mmを測る。

## ③ 小甕 (図版 31 - 162 ~ 172, 写真図版 23)

器体上半器形と底部形態が把握できる11個体を示す。2区出土の171以外は1区から出土したものである。



小甕の胎土は長甕と類似しており、162・163・165～167・171がⅠa類、168がⅠb類、169・170がⅡ類、172がⅢa類、164がⅢb類にあたる。

器体上半器形がうかがえる3個体は、いずれも3類に該当する。口端は肥厚せず、70度前後に外傾した口縁下部から緩やかなカーブを描いて体部に至る。底部内面には、ロクロ回転痕を明瞭に残すもの(165～167・170)と不明瞭なもの(168・169・171)の別がある。前者の胎土はⅠa類が多いが、後者の胎土は多様な傾向にある。底面の回転糸切は、いずれも右方向からの回転による。このほか、172の底面には広葉樹の葉脈が2.3cmほどの間隔を置いて併走する木葉圧痕が見られる。所属時期は明確でない。

#### ④ 鍋 (図版31-181・182、写真図版24)

2区と3区出土の2個体を示す。口縁部遺存率10%前後の資料である。胎土はともにⅠb類である。181は外傾した口縁の端部が肥厚し、口端が鋭く揃えられる。体部外面にケズリ整形、内面にカキメをもつ。182は外傾した口縁部の端部がやや肥厚し、端部は丸味を帯びる。体部外面にケズリ、口縁内面にカキメをもつ。

#### 3 黒色土器 (図版30-158～161、写真図版23)

主に内面を黒化処理した「内黒土器」である。全体器形や器体上半器形がうかがえる2個体と、底部形態がうかがえる2個体を示す。160は3区、158・159・161は1区から出土した。胎土は土師器無台碗と類似する。

158は口径15.6cm・底径5.6cm・器高4.9cmを測る碗形土器で、内面に黒色処理が行われる。土師器無台碗の器形分類に従えば3類に該当する資料である。外面には、体部の中ほど以下に横位のケズリ、口縁部にミガキ調整を行う。内面全体にミガキ調整が行われるが、下半部に縦方向の削り痕が残る。底面にはケズリ整形が行われる。胎土はⅢa類にあたる。

159は口径13.7cmほどと推定される皿形土器で、口端内面が削られたような断面形をもつ。内外面が黒色を呈し、器面全体にミガキ調整が行われる。ミガキ調整は、外面全体が横位、内面端部が横位、それ以下が縦位である。胎土はⅢa類にあたる。

160・161は内面に黒色処理が行われる。内外面にミガキ調整が行われ、底面はケズリによって平滑に整形される。胎土は前者がⅠa類、後者がⅡ類である。

#### 4 須恵器 (図版32-33、写真図版24・25)

土師器に比べて出土量が乏しく、総重量は1/3にとどまる。器種別にみた重量比は、無台杯12.5%・有台杯2.5%・杯蓋1.8%・壺類10.6%・壺蓋0.3%・横瓶0.4%・甕類71.9%となる。前述のようにⅠ類からⅢ類にわたる胎土区分は生産地とほぼ対応しており、Ⅰ類は佐渡小泊、Ⅱ類は新津丘陵、Ⅲ類は阿賀北産須恵器と考えられる。

##### ① 無台杯 (図版32-192～201、写真図版24)

全体形が明らかな資料を中心に11個体を示す。1区出土の197～199以外は2区からの出土である。調査区全体で見た無台杯の胎土は、Ⅰa類45.6%・Ⅰb類6.5%・Ⅱa類12.4%・Ⅱb類23.9%・Ⅲ類4.5%・Ⅳ類6.8%となり、産地別では小泊55.9%、新津丘陵38.9%、阿賀北4.8%の割合を示す。

199～201は胎土Ⅰa類、197は胎土Ⅰb類にあたる。器体上半器形Ⅰ類～4類の資料からなり、201がⅠ類、199が2類、200が3類、197が4類に該当する。底面のヘラ切り痕は198・199が左回転による。

192～195は胎土Ⅱb類にあたる。器体上半器形Ⅰ類と3類からなり、194・195が前者、192・193が後者に該当する。

196は胎土Ⅲ類である。体部下端に小さな段をもち、底面には回転糸切痕が残る。198は胎土Ⅳ類にあたる。器体上半器形2類に該当し、底面のヘラ切り痕は左回転による。

##### ② 有台杯 (図版32-188～191、写真図版24)

4個体を示す。188が1区、190が2区、189・191が3区からの出土である。調査区全体での胎土分類別占有率は、Ⅰa類38.4%・Ⅰb類16.8%・Ⅱa類28.5%・Ⅱb類7.7%、Ⅲ類8.3%となり、産地構成としては

小泊 55.2%、新津丘陵 36.2%、阿賀北 8.3%の割合を示す。

189・191は胎土Ⅰa類、190はⅠb類にあたる。高台はほぼ垂直に付されており、189は外端が接地する。191は口径14.2cmと推定され、体部は直線的に立ち上がる。

188は胎土Ⅱa類にあたる。本次調査区の中では全体形がわかる唯一の資料で、口径11.1cm・器高7.0cm・底径4.5cmを測る。高台は外部に向かって付されており、内端が接地する。

#### ③ 杯蓋 (図版 32-183～187, 写真図版 24)

5個を示す。全体形を知りうる資料は出土しなかった。調査区全体での胎土分類別占有率は、Ⅰa類 45.4%・Ⅰb類 17.2%・Ⅱb類 37.4%となり、産地別では小泊 62.6%、新津丘陵 37.4%の割合を示す。

184～186は胎土Ⅰa類、187は胎土Ⅰb類にあたる。184・185は推定径16cm台を測り、端部が丸みを帯びる。

183は胎土Ⅱb類にあたる。推定径13cmを測り、端部の断面形は三角形を呈する。

#### ④ 壺類 (図版 32-203～216, 写真図版 25)

1区～3区出土資料の中から14個を示す。調査区全体での胎土分類別占有率はⅠa類 31.0%・Ⅰb類 34.1%・Ⅱa類 7.4%・Ⅱb類 19.7%・Ⅲ類 7.5%となり、産地構成としては小泊 64.1%、新津丘陵 27.1%、阿賀北 7.5%の割合を示す。

208・209・212・215は胎土Ⅰa類、203～207・210・214は胎土Ⅰb類にあたる。203は口径9cmほどと推定される長胴壺である。体部に弱いタタキ整形が行われ、外面に平行タタキ目、内面に同心円当て具痕が残る。204以外は長頸壺の一部である。204～206は頸部、207・208は体上部、209・210・211・213・214は体下部、212・215・216は高台を伴う底部である。213は胎土Ⅱa類、211・216は胎土Ⅱb類にあたる。216の内面にはラフなナデが行われる。

#### ⑤ 壺蓋 (図版 32-202, 写真図版 24)

短頸壺に伴う蓋である。202は2区50Aから出土した。上下二段にわたる宝珠形のつまみで、下段の径は3.8cmを測る。胎土はⅡa類である。

#### ⑥ 横瓶 (図版 33-217, 写真図版 25)

207は2区50Aから出土したもので、依形の体部に付された口縁部である。口端部が欠損するが「く」の状に外傾した口縁形態をもつ。体部外面には浅い平行タタキ目が残る。胎土はⅠa類である。

#### ⑦ 壺類 (図版 33-218～234, 写真図版 25)

調査区全体での胎土分類別占有率はⅠa類 27.9%・Ⅰb類 18.1%・Ⅱa類 6.3%・Ⅱb類 38.8%・Ⅲ類 8.8%となり、Ⅰa類とⅡb類が高率を占める。産地構成としては小泊 46.0%・新津丘陵 45.1%・阿賀北 8.8%の割合を示し、小泊と新津丘陵産須恵器が拮抗した数値を示す。

図版 33に1区～3区出土資料から抽出した17個を示す。胎土は、218・223～226がⅠa類、219～222・227がⅠb類、228～232がⅡb類、233・234がⅢ類である。このうち、220・225は外面に自然釉が付着する。231は1区21Bから出土したもので、SD34出土の図版 27-103と同一個体である。

タタキ整形痕は、胎土Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類の間でそのあり方を異にする(第24図)。Ⅰ類では1B類(220・224)が37%、2A類(222)が27%を占め、1A類(224)・2B類(221)や2C類(225)も定量存在する。223は数少ない2D類である。220内面の同心円当て具痕、222・224・225外面の平行タタキ目は、本口痕に伴う。Ⅱ類では1B類(228・229・232)が80%以上の高率を占め、これに若干の2A類(226)や1A類(231)・2C類(230)などが伴う。226内面の平行当て具痕、229・232外面の平行タタキ目は、本口痕を伴う。Ⅲ類は資料数が乏しいが1B類(233)を主体とし、内面の当て具痕に本口痕を伴う率が高い傾向にある。234は数少ない1D類である。

#### 3 灰軸陶器 (図版 33-235, 写真図版 25)

2区44Aと3区84A・90Aから1個体ずつ出土した。いずれも内外面に灰軸を施した皿である。このうち、

器形がうかがえる1個体を示す。235は推定径12cmを測る。口端が丸みを帯び、器体上部の内外面に軸が薄く漬けがけされる。

#### 4 中世土器

##### ① 陶器 (図版33-237・238, 写真図版25)

2区出土の播鉢2点を示す。このほか、阿賀北の製品と見られる壺1個体が2区から出土した。

237は珠洲焼の体下部破片である。微細な岩石粒子とともに海綿骨針を比較的多く含む。破片の右側と左端に3.5cmほどの間隔において播目条線が施される。播目の単位幅は不明であるが、右側では1.8cmの間に11条の播目が確認できる。238は下半に播目をもった口縁部下の体部破片である。石英・長石の破砕粒子を多量に含むことから阿賀北の製品とみなされる。2単位の播目条線が1.8cmの間隔において施される。播目条線の密度は8mmの間に5本を数える。

##### ② 中世土師器 (図版33-236, 写真図版25)

236は1区14Bから出土した皿である。口径12cmと推定される。ロクロ成形によって製作される。タール状の物質が内面全体と外面の一部に付着する。外面には口縁部から液体が流下した状態で付着する。

## B 土製品

本次調査区から出土した土製品は、管状土鍾と羽口の2種からなる。後者については次項で述べる。狭義の土製品とは異なるが、焼成粘土塊が出土しており、本項で取上げる。

### 1) 管状土鍾 (図版34-2~7, 写真図版28)

微高地下平坦面に位置する1区17列~2区54列の範囲から8点出土した。すべて破損品である。最大径は6mm~8mm台各1点、9mm台5点を数える。各資料の胎土は、前述のような土師器の分類に従えばIa類5点・IIIa類2点・IIIb類1点からなり、糞類と類似したあり方を示す。所属時期の特定は困難であるが、古代土器の中心的な分布域と概ね重複的な区域から出土したことから、古代に属す可能性が高い資料と考えられる。

### 2) 焼成粘土塊 (図版34-8・9, 写真図版28)

何らかの理由で粘土塊が被熱したものである。総重量86.6gを測り、2区北部の39列から4区中央の117列までの範囲から合計12点出土した。このうち半数が2区39列~49列に分布する。

12点はいずれも不整形な形状をなす。大きさは様々で、最大長では1.6cm~4.0cm、重量では2.0g~24.9gの幅をもつ。各資料には鉱物・岩石粒子が含まれており、土師器の胎土分類に従えば、Ib類1点・II類2点・IIIa類9点からなる。主体を占めるIIIa類は、粉末状の石英・長石粒子を多く含む、無台碗で一般的に使用される胎土である。II類は破砕粒子を多量に含むもので、無台碗の中に比較的多く見られる。Ia類は磨耗した石英や各種岩石を含み、糞類に多用される胎土である。第VIII章で述べるように、Ia類やII類の含有物は意図的な混入物と見なされる。少数ながらも存在する焼成粘土塊は、本遺跡内で土器製作が行われた可能性を示唆する資料となる。

## C 鍛冶関連遺物

調査区全体で羽口2点、鉄滓382.8g、炉壁41gが出土した。

### 1) 羽口 (図版34-1, 写真図版28)

1区南部の21Bと2区北部の42Aから出土した。1は先端部にあたる資料で、1/4ほどが遺存する。強い被熱によって内外面全体が黒化する。器厚が不均一なため正確な径は不明であるが、直径7cm前後の小型品とみられる。

### 2) 鉄滓・炉壁 (写真図版28-27)

鉄滓は4区SE418の第2層から出土した9gを除き、1区北部の1列~2区北部の45列までのIII層から出

土した。グリッド別では、2区44Aの105gが最多出土例となる。写真図版28-27は、2区37Bから出土した碗形滓で、最大長6.5cm・最大厚1.4cm、重さ51gを測る。

炉壁はいずれも細片化しており、長さ3cm台を最大破片とする。1区・2区・3区から分散して出土した。出土グリッド別の重量は、1区14Bで5g、2区36A・37Bで20.6g、3区86A・88Bで14gを測る。

## D 金属製品

### 1) 鉄 斧 (図版34-20, 図版28)

2区北部の37A III層から出土した。基部に断面「C」字形のソケットをもつ袋状鉄斧である。背面と基部内面に錆の付着が著しいが、現状に基づく実測図を示す。袋状をなした基部の幅は2.8cmを測る。縦位断面形は中央部の先端寄りで主面側に緩やかに折れ曲がり、刃部に向かって厚さを減じていく。先端部付近の横断面形は主面側にいくぶん湾曲した表裏非対称形をなす。刃部が欠損し、現存長は7.9cmを測る。

### 2) 銭 貨 (図版34-21~26, 図版28)

2区中ほどの50Aから5点、北部の34Aから1点出土した。21~26が全資料である。21はP136の覆土第2層、24・25はP136の東32cmから密着した状態で出土した。21は1023年初鋳の「天聖元宝」、22は1068年初鋳の「熙寧元宝」、23・24は1078年初鋳の「天聖通宝」、25・26は1086年初鋳の「天祐通宝」である。以上5点の銭貨については、特定グリッドへの集中やビット内からの出土からみて、何らかの祭祀行為に伴う遺物の可能性がある。

## E 石製品

研磨や磨耗を認める礫を「石製品」とする。礫面の状況や石質に基づき、砥石類・磨耗礫・研磨礫に大別する。

### 1) 砥石類 (図版34-10~15, 写真図版28)

表面に強度な磨耗痕や線状痕を有するものである。定型的な砥石をA種、小形の円礫や破損礫を使用するものをB種とする。

#### A 種 (図版34-10~13, 写真図版28)

4点出土し、全資料を図示した。使用石材はいずれも泥岩である。11・13は1区III層からの出土で、古代に属す可能性が高い。12はIII層遺構のSX188最下部から出土した。10は4区III層から出土しており、古代・中世の別は明らかでない。

4点はいずれも中ほど付近から欠損する。10・11は平面からの衝撃によって破損したものである。各資料は、使用期間の多寡によって形状に異なりがあり、角柱状をなした使用初期のもの(12)、磨耗が進み大きく湾曲するもの(11)、極めて扁平化したもの(10・13)の別がある。

A種に見られる使用痕は、面的な磨耗痕と線状痕に分けられる。磨耗痕は表裏二面と両側面に例外なく残されており、12・13では破損面にも磨耗痕が及ぶ。線状痕の部位は磨耗痕のあり方と異にしており、側面(10・11・13)・基部(11~13)・破損面(11~13)に高い頻度で確認できる。

#### B 種 (図版34-14・15, 写真図版28)

8点出土し、このうち2点図示した。使用礫は小形の円礫と大形の亜角礫に二分される。前者は1区から4点、後者は1区から1点、3区から2点出土した。完存礫は3点あり、いずれも小形円礫である。

14は凝灰岩を石材とした扁平円礫を使用する。両面に線状痕が残り、右側平面の縁辺に微弱な磨耗痕を伴う。15は流紋岩の亜角礫を使用する。平面の剝離痕は使用以前に生成されたものである。表裏二面に磨耗痕と線状痕をもち、右側平面中央からの衝撃によって大きく破損する。

### 2) 磨耗礫 (図版34-16~18, 写真図版28)

円礫の表面に平滑な磨耗痕をもつものである。砂岩などの硬質岩を使用するA種と軽石を石材とするB種に

分けられる。

**A 種** (図版 34-16・17, 写真図版 28)

1区から7点出土しており、うち2点を示した。ともに平坦面の広い範囲に磨耗が見られる。強度の磨耗を認める範囲を矢印で示した。いずれも被熱した破損資料で、ススの付着が著しい。

**B 種** (図版 34-18, 写真図版 28)

1区・2区から各1点出土した。18は不整形な軽石の表面に微弱な磨耗痕をもつ。碟中央の破損面は比較的平滑で、網かけ部分の長さ3cm、幅1cmの範囲に黒褐色を呈するアスファルトが付着する。

**3) 研 磨 碟** (図版 34-19, 写真図版 28)

19は1区SD34の南端付近から出土した。粘板岩を石材とし、図示のような形状を呈する碟面に主として研磨痕をもつ資料である。研磨は上端と下端に残る凹凸以外の全ての範囲に及び、表裏両面と側面下部に平坦な整形研磨が行われ、上部のクビレ周辺は丸みをもって整形される。平坦面の中央には、表裏両面にわたり緩やかな窪みがタテ方向の研磨によって形成される。このほか、側面のクビレ上端や右側下部、先端周辺では短い線条痕が複数にわたり残される。本資料の具体的な性格は明らかでない。

**F 搬 入 碟**

本次調査区が位置する沖積地内微高地から出土した碟は、すべてが人為的に持ち込まれた資料とみなされる。前述のような石製品を除く出土碟は調査区全体で15,822gにのぼる。このうち完存状態にある円碟は28点、総重量で1,988g (12.6%)にとどまる。

搬入碟は多様な石材からなるが、この中には花崗岩が597g (3.8%)含まれる。花崗岩の完存碟は5点 (203g)を数え、重量比において34%を占める。最大長は1cm台から4cm台たらずである。これらは土器の胎土含有物として利用される破砕鉱物の母岩となりうる石材であり、焼成粘土塊の含有物のあり方とともに本道跡内での土器製作の可能性を示唆する遺物として留意すべき存在となる。

**G 木 製 品**

II期の遺構内から木製用具 (火鑽臼・板・建築材 (木柱根・礎板)、III期の遺構内から木製用具 (曲物・下駄・箸)と木羽板が出土した。板類については保存状態が良好でないため図示できなかった。

**1) 木 製 用 具**

**1 火鑽臼** (図版 35-1, 写真図版 29)

1は4区SD417の覆土第3層から出土した。本次調査区で唯一となる古代の木製品である。スギ材を使用し、榎目取りによる角柱材を素材とする。長さ26.3cm・幅2.8cm・厚さ2.1cmを測る。

本資料は、使用後一端が斜めに截断され、側面も平滑に削られる。回転痕は完存する一方で8箇所、欠損した反対側面で5箇所遺存する。回転痕の径は1.3cmほどを測る。深さは最大2.6cmにおよび、下部が被熱によって炭化する。

**2 下 駄** (図版 35-2, 写真図版 29)

2は4区SE418の第16層 (木羽板層) から出土した「連歯下駄」である。スギ材を使用し、榎目取りの板を素材とする。縦方向に割れた資料で、歯と横緒穴が遺存する。上下側面と歯の内外面にラフな加工痕を明瞭にとどめることから、製作途中において何らかの理由で破損した資料と考えられる。長さ26.6cm・現存幅7.5cmを測る。

**3 箸** (図版 35-3~5, 写真図版 29)

SE418の第16層から5点出土した。このうち3点を示す。いずれもスギ材とみられる。3は唯一の完形品で長さ18.8cm、最大幅6mmを測る。上端には微細なアスファルト塊が付着する。

## 4 曲物 (図版 37・38, 写真図版 30・31)

SE418の下部から4個体が埋設された状態で出土した。いずれも側板だけからなる資料である。底板との固定痕が欠落することから、主として井戸側としての使用を目的に製作されたものとみられる。4個体はいずれも複数の曲物を組み合わせており、個々の資料名を外側から順にアルファベットで示した。使用される樹種は、14・16C・17Aがスギである。肉眼的な観察によれば、これ以外についてもスギ材とみられる。計11点の曲物は、木取り、厚さ、ケビキ、整形痕のあり方いくつかのバリエーションがみられる。

木取りは2種に大別できる。板目取りをA種、柾目取りをB種とする。厚さは大きく3種に区分できる。最大・最小値が1mm～3mmの範囲内にあるものを「薄型」、3mm～7mmの範囲内にあるものを「中型」、7mm～9mmを「厚型」とする。内・外面の状態が観察できた9点では、繊細に切り込まれた「ケビキ」が何らかの形で確認できる。部位と形状に基づけば、縦じ合わせ部の内面のみタテ方向に施す1類、内面の全体ないしは広い範囲にナメに施す2類、縦じ合わせ部付近の外面上部にナメに施す3類、内面全体にタテ、外面全体に格子目状に施す4類に分けられる。整形痕としては、内外面が平滑な1類と、ケズリ痕が凌をなして残る2類に大別できる。後者については、ケズリ痕が内面に限定される2a類と内外面に認める2b類に分けられる。

以下に各資料の特徴を述べる。各個体はいずれも土圧によって変形し、平面形が不整形ないし楕円形を呈する。本来は円形をなしたと考えられることから、径の把握にあたっては周囲の全長を計測して推定した。なお、取上げ時に遊離した資料については、原則として内面も図示した。平面図の内部に示す実測図は内面の状態で、18Bが正位、これ以外は天地逆位で図示してある。

最上部から出土した14とその下部から二重をなして出土した15A・15Bを曲物1とする。15Bは推定径63cm、器高22.4cmを測る。15Bの下半を取り巻く15Aは器高11.8cm、その上部に位置する14は器高12.7cmを測る。木取りは15BがA種、14・15AがB種、器厚は15B・14が「中型」、15Aが「薄型」にあたる。ケビキは、14・15Aが1類、15Bが3類、整形法は15Bが1類、15Aと14が2a類にあたり、器体外面は平滑に整形される。縦じ合わせは15Bで3箇所、15Aで2箇所、14で5箇所みられる。このうち14の3箇所は補助的な結合にとどまる。

三重をなして出土した16A～16Dを曲物2とする。曲物本体となる16Dは径62cm、器高31.7cmを測る。木取りA種、器厚「中型」、ケビキ1類、整形1類にあたり、縦じ合わせは1箇所である。16Dの周囲を二重に取り巻く16A・16B・16Cはいずれも木取りB種、器厚「中型」にあたり、それぞれ2箇所の縦じ合わせをもつ。各資料の器高は、16Aが9.6cm、16Bが17.8cm、16Cが8.5cmである。16Cはケビキ1類、整形1類に該当するが、16A・16Bのケビキや整形法は明らかでない。

入子をなして出土した17A・17Bを曲物3、18A・18Bを曲物4とする。このうち17Aと18A、17Bと18Bは木取りや器厚、ケビキの特徴が類似する。両者の結合状況は互いに補完的なあり方を示し、本来セットの関係にあった可能性が高いが、それぞれの曲物が完存状態にあることから個別に取り扱う。

曲物3にあたる17Bは、推定径44cm、器高16cmを測る。木取りA種、器厚「厚型」、ケビキ4類、整形法2b類にあたり、縦じ合わせは1箇所に限定される。外部を取り巻く17Aは発掘時に遊離していた資料が接合した。器高28cmを測り、木取りB種、器厚「中型」、ケビキ2類、整形法2b類にあたる。縦じ合わせは3箇所ある。両者の器面上部には、径1cm前後の円～楕円を呈する孔が8cm～16cmの間隔を置いて12箇所穿たれる。孔に棒を渡し敷物が置かれた可能性が高く、「蒸し器」として使用されたことをうかがわせる資料である。

18Bは推定径44cm、器高34cmを測る。木取り・器厚・ケビキ・整形法は17Bとほぼ同一であるが、9箇所におよぶ縦じ合わせをもつ。このうち8箇所は下端に限定される。本例も16Aに類似しており、器厚が「薄型」に当たる点や3箇所の縦じ合わせをもつ点以外は同様の特徴をもつ。

## 2) 建築材

## 1 木柱根 (図版 35・36、写真図版 29・30)

2区と4区のピット内から合計8点出土した。このうち保存状態が良好な7点を図示する。いずれも樹皮が除去された丸木柱で、所属時期は、古代(8~11)、古代もしくは中世(12・13)、中世(7)に大別できる。

古代に属す4点の樹種は、クリ(8)・コナラ(9)・カツラ(10・11)からなる。最大径は10.7cm(8)~16.9cm(10)、現存長は55cm(8)~72cm(10)を測る。下端部の加工痕は、それぞれ異なる特徴をもつ。8は全周から加工され、先端が斜行する。10は半分弱が腐朽するため全体的な加工法は明らかでないが、下端面が突レンズ状に作出される。9は二方向から加工され、中央に稜をもつ。11は一方向から加工され、下端がきわめて平坦な形状をなす。このほか、カツラを使用する10・11では、側面の一部が平坦に加工される。

古代~中世に属す2点は、樹種や加工法の上で古代の木柱と類似する。12はカツラを使用し、最大径18cm、現存長51cmを測る。下端の加工は全周から行われ、平坦に作出される。側面下端の突出部に幅広い加工を行なう点も特徴的である。13はクリを使用し、最大径14cm、現存長52cmを測る。下端の加工は全周から行われるが、左右非対称形をなし、中央に稜をもつ。

中世に属す7はコナラを使用する。最大径8cm 現存長20cm弱の小型柱で、全周からの加工によって先端が尖る。

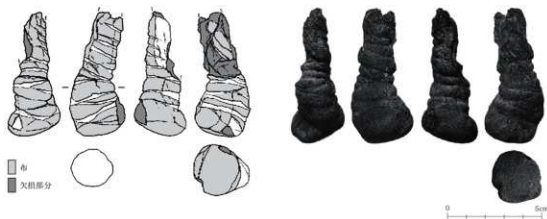
## 2 礎板 (図版 35-6、写真図版 29)

図版 35-6 は、1区 P27 で確認された礎板の一つである。半割材の一边を分割し、最大幅 5cm ほどの厚手の柘目板を作出したものである。最大長 22.2cm・最大幅 15.8cm を測る。樹種は広葉樹である。

## H 漆要具

2区 40A のⅢ層から第9図に示す資料が出土した。端面に最大幅をもったいびつな棒状をなし、表面全体と破断面の一部に布の存在が確認できる。一端が欠損するが、現存長 6.5cm、最大幅 2.8cm、重量 6g を測る。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈する。次章で述べるアスファルト塊に較べ緻密さに欠け、明らかに軽量である点から、漆と判断できた。布の材質はアサとみられる。平織で、1cmあたりの織糸数は12本を数える。所属時期は古代の可能性が高い。

本例は生漆採取時の濾し布と考えられるが、採取時の振れが見られず、太さ 2mm ほどの紐状圧痕が一部交差しながら螺旋状にあぐる。漆滓を包んで布を折り込む点も一般的な濾し布とは異なる特徴である。端部は平滑で、側面形は凸レンズ状をなす。手で保持しやすい太さをもつところから、端部の平坦面を生漆の塗布に使用した可能性もある。いずれにしても古代に属す数少ない漆要具であり、大沢谷内遺跡における森林資源の活発な利用を示す意味でも重要な資料である。



第9図 漆濾し布

## 第VI章 土壌内堆積物

### 第1節 概 要

一部に人為的な関与を認めるものの、大多数が自然堆積物とみなされる資料を本章で取り扱う。取りあけるのは種実とアスファルト塊である。前者は、1区SX29・SD34・SD52と4区SE418・SE433の埋積土で行った篩選別作業をつうじて大半が検出された。後者は発掘作業の段階で多数確認されていたが、上記5遺構の土壌水洗資料の中からも微細な資料が多量に検出された。

土壌水洗は、SD34・SD52・SX29が幅20cmのセクションベルト、SE433が第1層の一部、SE418が曲物内部の埋積土すべてと曲物上面に広がる木羽板層の西半部で行った。水洗作業では1mm・5mmメッシュ篩を使用し、種子やアスファルトを抽出した後、同定・集計にあたった。

種実については、本遺跡2008年調査区出土資料をもとに火山灰研究所が作成した種実標本と石川茂雄1994『原色日本植物種子写真図鑑』に基づき同定を行った。作業にあたっては、6倍ルーペと実体顕微鏡を用いた。第10図に示す種実写真は、新潟市文化財センターのオリンパスズーム式実体顕微鏡SZ6とオリンパス顕微鏡デジタルカメラDP25を使用して撮影した。

### 第2節 種 実

#### A 同 定 種 実

4箇所の遺構内から検出された種実、2,300点あまりにのぼる。このうち91%にあたる2,152点について同定できた。内訳は第3表のとおりである。破片化して個体数の把握が困難な資料については「+」で表示した。

##### 木本種実

トチ・クルミ・モモ・ヤマブドウ・ヤマブドウ・サルナシ・アカメガシワ・オオカメノキの8種が同定された。トチとクルミは被熱しており、前者は内果皮、後者は核が細片化したものである。他の種実はいずれも生の状態にある。モモ・ヤマブドウ・オオカメノキには、半分に割れたものが含まれる。これについては0.5個体として扱った。アカメガシワは微細な破片が1点検出されたのみである。参考資料として、上記標本の完形個体を第10図7bに示した。

##### 草本種実

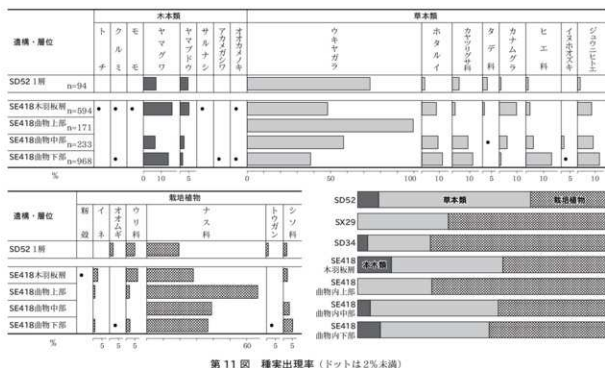
カヤツリグサ科・タデ科・カナムグラ・ヒユ科・イヌホオズキ・ジュウニヒトエ・ヒシ類が同定された。カヤツリグサ科は、粒形・大きさからウキヤガラ・ホタルイ・その他に細分した。種の特定が困難な個体は、カヤツリグサ科と表記した。ヒシ類はいずれも被熱した破片である。刺棘や種実下端の環状突起の大きさから、ヒシもしくはオニビシと見られる。第3表には、刺棘点数を示した。

##### 栽培植物

イネ・オオムギ・ウリ科・ナス科・トウガン・シソ科が同定された。イネは籾殻と炭化米からなる。オオムギはすべて被熱資料である。ウリ科としたものにはキュウリ類似種などもみられるが、区分が困難な個体が多いことから一括した。ナス科の中には明らかに小さな個体も含まれる。少数資料にとどまることから便宜的に一括した。シソ科についても多種にわたる個体が見られるが、細分は行わなかった。







第11図 種実出現率 (ドットは2%未満)

草本類2種・栽培植物3種が確認された。いずれも被熱資料である。木本類はトチの微細な内果皮破片である。上記のSX29と同様に、草本類ではヒシ・栽培植物では炭化米が主体を占める。

#### SE418

総数2,177点が検出された。本遺構では、4ブロックに区分して土壌水洗を行ったことから、ブロックごとに特徴を述べる。

##### ① 木羽板層 (16層・18層)

井戸下部に埋設された曲物の上面周囲には、多量の木羽板が厚さ5cm前後の粘土層を挟んで2層にわたり堆積していた。本ブロックは、このうち西半部を一括して採取したものである。検出総数は628点にのぼる。種実の内容も多種にわたり、木本類7種・草本類7種・栽培植物5種からなる。トチの内果皮破片とクミの微細な核破片が被熱しているほかは生の種実である。木本類ではヤマブドウ、草本類ではウキヤガラ、栽培植物ではナス科が主体を占める。

##### ② 曲物内上部堆積土 (14層)

曲物上面から20cm下位までの間である。IV層(基盤層)ブロックを多量に含む黒色粘土で、人為的な埋め立てとみられる。本遺構の中では最も少ない199点が検出された。構成種は単純で、草本類1種・栽培植物3種にとどまる。草本類はウキヤガラに限定され、栽培植物のほとんどすべてがナス科によって占められる。被熱資料は2点の炭化米だけである。

##### ③ 曲物内中部堆積土 (15層上半)

上面から20cm～60cmの間にあたり、総数271点が検出された。木本類2種・草本類7種・栽培植物2種からなる。木本類の数はきわめて少なく、9点のヤマブドウが目立つ程度である。草本類ではウキヤガラ、栽培植物ではナス科が卓越する。被熱個体は見られない。

##### ④ 曲物内下部堆積土 (15層下半)

曲物上面下90cmの下底面までの堆積土である。本遺構の中では最も多い1,079点が検出された。木本類5種・草本類7種・栽培植物6種からなる。木本類ではヤマブドウ、草本類ではウキヤガラ、栽培植物ではナス科が主体を占める。被熱資料は、トチの微細な内果皮破片と炭化米・オオムギに限られる。栽培植物の中では57点を

数えるシソ科が比較的高い割合を示す。

### C 種実の位置づけ

前項で記した種実の性格を明確にしておく。5箇所の遺構から検出された種実のあり方は、数量や種の構成、被熱個体の割合に異なるが見られる。SX29とSD34では構成種が単純で、大多数が被熱個体によって占められる。SD52とSE418で多量に検出されたウキヤガラやナス科が二遺構で皆無に等しい点も大きな特徴となる。これに対し、SD52・SE418では、被熱個体が一部の木本類や栽培植物に限定されるとともに、多種にわたる種実から構成される。前者で確認された種実の大半は食用種実にあたり、人為的に選択された廃棄資料と考えるのが妥当である。

SE418から検出された種実には、採取ブロックごとに数量や構成種に差異が見られた。曲物上面レベルの木羽板層は平坦なテラスをなすことから、曲物内部の種実と堆積時期が重なる資料と考えられる。曲物内部は堆積要因を異にしており、種実量の少ない上部層は人為的な埋土にあたる。自然堆積による中部～下部層において種実が下部に偏る現象は、種実が沈殿したためと考えることもできる。中部層における木本類の乏しさは、本遺跡の遺構全般に認める木本類の乏しさから見て、絶対量の少なきゆえの見かけ上の減少と考えるべきであろう。したがって、9世紀前半と推定されるSD52と13世紀代と推定されるSE418の種実内容には根本的な差が存在しておらず、古代・中世集落における利用植物のあり方を知るうえで等質の資料と考えられる。

## 第3節 アスファルト塊

調査区全体で3,761gのアスファルト塊が出土した。これらは、原油の揮発性成分が失われて固化化したものである。発掘調査時に出土した資料と遺構覆土の土壌水洗によってえられた資料からなり、その内訳は前者3,196g(85%)、後者565g(15%)である。両者は採取条件を異にするため、別個に記述する。

### A 発掘時出土資料

包含層から2,347g、遺構内から849g出土した。図版22に示すように、包含層出土資料は調査区北部の1区に集中する。地区別の重量は、1区1,436g(61%)・2区752g(32%)・3区97g(4%)・4区62g(3%)である。遺構内からは、1区のSD2・SD34・P35・P37・SX29、2区のP60・P64、4区のSE389・SE417・SE418・P349・P380・P411から出土した。このうち出土量が多いのは、1区のSD34(314g)とSX29(288g)である。両者は多量の土器に混じって出土しており、出土状況と分布を図版10・写真図版7に示した。遺構内からの出土頻度は井戸が最も高く、4基中3基から確認できた。

第12図に代表的な資料の平面写真を示す。各資料の形状は様々である。表面が平滑なものは見られず、大多数の凹凸で覆われる。組織圧痕が確認できるものはなく、人為的な関与をうかがわせる資料はみられない。右上は最も大きなもので、長さ15.5cm・厚さ3cm・229gを測る。SX29の覆土から出土した(写真図版7)。

出土資料の中には、発掘時の破損品が少なからず含まれるため、第13図には本来の形状が明らかな104点に基づき、各資料の大きさや重量分布を示した。出土資料の大きさは様々であるが、長さは1cm～3cm台、幅は1cm～4cm台を中心をもつ。最大厚は1cm未満が最も多く、概ね扁平な形状をなすことが特徴的である。抽出資料104点の色調は、黒色50%・黒褐色41%・灰黄褐色6%・褐色3%からなる。

### B 篩選別資料

1区SD52・SX29・SD34のセクションベルト、4区SE418の下部・SE433の一部から採取した土壌からえられたものである。遺構別に見た出土点数と重量の内訳は、SD52が90点(19g)、SX29が220点(3g)、

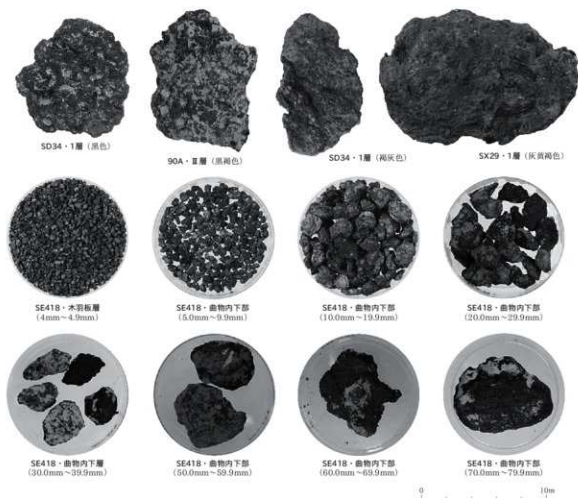
SD34が952点(18g)、SE433が96点(12g)、SE418が5,276点(514g)で、SE418からの検出量が圧倒的に多い。

1個体あたりの大きさは、いずれの遺構も1cm以下の粒子が大多数を占めており、SD52以外は5mm未満に集中する。各個体の色調は、遺構間で異なる。SE418では黒色が卓越する。SE433・SX29・SD34では黒褐色を主体とし、上記の順に黒色個体の占める割合が低下する。SD52では約半数が黒色を呈するが、他の遺構に乏しい褐灰色～灰黄褐色の個体が20%以上を占める。

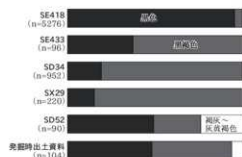
取上げ土砂を4区分したSE418では、含有量と粒度においてブロック間の異なりが見られた。ブロックごとの出土点数は、木羽板層3234点(69%)・曲物内上部795点(15%)・曲物内中部581点(11%)・曲物内下部666点(13%)である。検出重量では、木羽板層176g(34%)・曲物内上部38g(7%)・曲物内中部69g(13%)・

第4表 遺構内検出アスファルト塊の最大長(単位:mm)

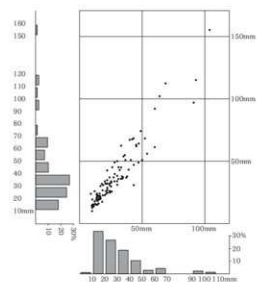
遺構・層位	0.1～4.9	5.0～9.9	10.0～19.9	20.0～29.9	30.0～39.9	40.0～49.9	50.0～59.9	60.0～69.9	70.0～79.9	TOTAL
SD52 1層	23	51	11	4	1					90点
SX29 1～3層	182	35	3							220点
SD34 1層	813	110	25	3	1					952点
SE433 1層	70	16	8	2						96点
SE418 木羽板層	2613	488	123	20	4	1				3234点
SE418 曲物上部	580	165	43	7						795点
SE418 曲物中部	369	161	41	6	2	1	1			581点
SE418 曲物下部	247	258	131	21	5		2	1	1	666点



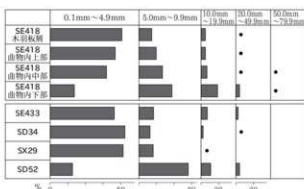
第12図 アスファルト塊



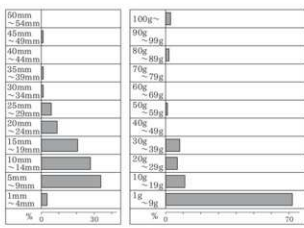
アスファルト塊の色調



最大長と最大幅  
(発掘時出土資料)



土壌水洗資料におけるアスファルト塊のサイズ (ドットは2%未満)



最大厚の分布  
(発掘時出土資料)

1個体重量の分布  
(発掘時出土資料)

第13図 アスファルト塊のサイズと色調

曲物内下部 230g (45%) となる。1個体あたりの大きさは、木羽板層～曲物内中部で5mm未満の微細粒子が多数を占める。曲物内部では2cmまでの間に分散する傾向が強く、5cm以上的大型個体も少数ながら含まれる。

### C アスファルト塊の位置づけ

本次調査区から出土したアスファルト塊の所属時期を明確にしておく。埋積土区分Ⅰ期・Ⅱ期の遺構から出土した土器は、前者が9世紀前半、後者が9世紀半ば～10世紀初頭に位置づけられる。アスファルト塊の中心的な分布域にあたる1区のⅢ層からは、主として後者に属する時期の土器が多量に出土した。埋積土区分Ⅲ期の遺構は13世紀代を中心とすると考えられる。土壌水洗を行ったSD52はⅠ期、SX29・SD34・SE433はⅡ期、SE418はⅢ期の遺構にあたる。したがって、調査区内から出土した多量のアスファルト塊は、この区域における遺跡形成期間をすべてカバーするものとみなされる。

出土したアスファルト塊は多様な色調からなる。Ⅰ期のSD52では黒灰色～灰黄褐色の個体が多量に、Ⅱ期の三遺構では黒褐色を主体とする。1区を主とした包含層資料は両者の中間的な様相をみせる。これに対しⅢ期のSE418では黒色～黒褐色が大層を占める。以上のようなあり方は、時間の経過とともにアスファルト塊が淡色化する過程を示しており、全時期をつうじてこれらの利用が行われたことがうかがわれる。

## 第七章 自然科学分析

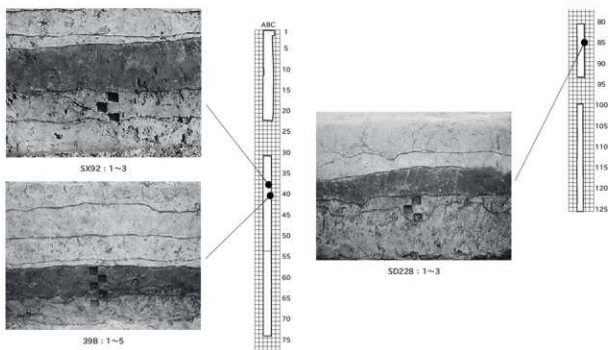
### 第1節 概要

本次調査では、古代に属する多数の区画溝と畝状遺構が確認された。このほか2区の北部には、耕作痕とみられる窪みが密集状態で分布していた。前章第2節で述べたように、古代の遺構覆土から検出された種実の中には穀類や畑作物が安定的に存在しており、上記の遺構との関連性が想定できる。各遺構が水田や畑として機能した可能性を検討するため、東壁3箇所て土壤を採取し、プラント・オパール分析と花粉分析を行った。前者の分析試料は、「耕作痕」が密集する39Bの区画溝と区画溝に接したSX92の埋積土、後者は畝状遺構2の一部にあたるSD228の埋積土である。3地点における土壤採取状況を第14図に示す。各サンプルは5cm角で採取し、上から順に土壤番号を付した。

プラント・オパール分析の結果は第2節のとおりである。分析を行った2地点のうち、39Bでイネのプラント・オパールが確認された。検出量は1gの土壤内で7,500個におよび、付近で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。至近距離にあるSD71は耕作痕と同一の堆積土で覆われる区画溝であり、40列付近の区画溝内に畦畔が存在した可能性を示唆している。

第3節に花粉分析の結果を示す。SD102の埋積土からは比較的まとまった量の花粉が検出された。しかし、主体を占めるのはイネ科とヨモギ属で、畑作物としてはアブラナ科が微量に検出されたにとどまる。

調査区内からは、礎板や木柱根を伴うピットが確認された。SE417とSE418からは木製品が出土しており、このうち保存状態が良好な木柱根7点と火鑽白・下駄・曲物について樹種同定を行った。結果は第5節のとおりである。曲物・火鑽白・下駄はいずれもスギと判明し、木製品におけるスギ材の多用が明らかになった。木柱はカツラ3点・クリ2点・コナラ2点からなり、用途に応じた樹木利用がうかがえる。



第14図 土壤サンプル採取地点

## 第2節 プラント・オパール分析

### A 分析試料

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したもので、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで水田跡 (稲作跡) の検証や探査が可能である (藤原・杉山 1984、杉山 2000)。

分析試料は、2区 SX92 から採取された土壌 1 と土壌 3、および 2区 39B から採取された土壌 3、土壌 4、土壌 5 の計 5 点である。

### B 分析方法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法 (藤原 1976) を用いて次の手順で行った。

- ① 試料を 105°C で 24 時間乾燥 (絶乾)。
- ② 試料約 1g に対し直径約 40  $\mu\text{m}$  のガラスビーズを約 0.02g 添加 (電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量)。
- ③ 電気炉灰化法 (550°C・6 時間) による脱有機物処理。
- ④ 超音波水中照射 (300W・42kHz・10 分間) による分散。
- ⑤ 沈底法による 20  $\mu\text{m}$  以下の微粒子除去。
- ⑥ 封入剤 (オキセット) 中に分散してプレパラート作成。
- ⑦ 検鏡・計数。

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。また、計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中のプラント・オパール個数を求めた。

おもな分類群については、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位: 10 - 5g) をかけて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山 2000)。

### C 分析結果

水田跡 (稲作跡) の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ・ムギ類 (穎の表皮細胞)・ヒエ属型、ヨシ属・ススキ属型・タケ亜科 (チマキザサ節型・ミヤコザサ節型) の主要な 7 分類群に限定した。分析結果を第 5・6 表および第 16 図に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を第 15 図に示す。

#### 1) 水田跡 (稲作跡) の検討

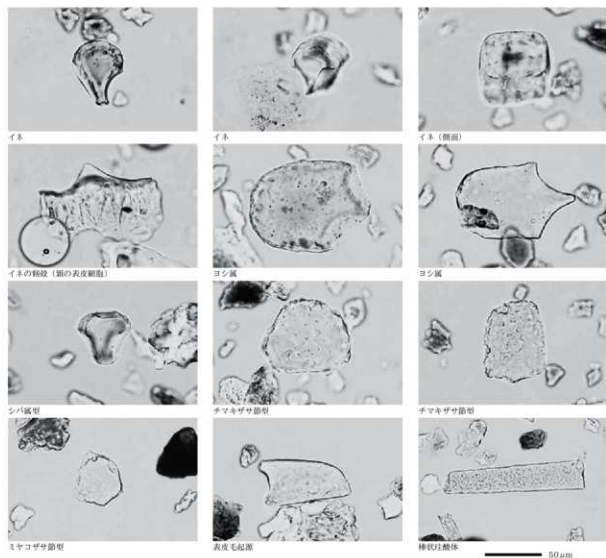
水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料 1g あたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している (杉山 2000)。ただし、密度が 3,000 個 /g 程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000 個 /g としして検討を行った。

#### 2区 SX92

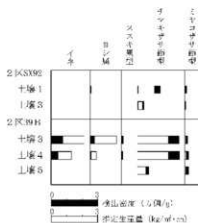
土壌 1 と土壌 3 について分析を実施した。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

#### 2区 39B

土壌 3、土壌 4、土壌 5 について分析を行った。その結果、土壌 3 と土壌 4 からイネが検出された。このうち、



第15図 プラント・オバールの顕微鏡写真



第16図 プラント・オバールの検出量

第5表 植物珪酸体一覧

分類群	学名	検出密度 (単位: ×100個/g)				
		2)KX92		2)K99H		
イネ科	Gramineae					
イネ	<i>Oryza sativa</i>			73	45	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	6		27	6	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>			7	6	
タケ亜科	Bambusoideae					
チマキザサ属型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	146	41	274	276	75
ミヤコザサ属型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	13	7	20	26	23
植物珪酸体総数	Total	165	48	400	359	98

第6表 おもなプラント・オバール分類群の推定生産量

分類群	学名	推定生産量 (単位: kg/m <sup>2</sup> ・年)			
		2)KX92		2)K99H	
イネ	<i>Oryza sativa</i>		2.16	1.32	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.40	1.68	0.40	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.08	0.08		
チマキザサ属型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	1.10	0.31	2.05	2.07
ミヤコザサ属型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.04	0.02	0.06	0.08
タケ亜科の比率 (%)					
チマキザサ属型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	97	94	97	96
ミヤコザサ属型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	3	6	3	4
メダケ率	Medake ratio	0	0	0	0



土壌3では密度が7,300個/gと高い値で、土壌4でも4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

## 2) イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

プラント・オパール分析の結果、2区39Bの土壌3と土壌4ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

# 第3節 花粉分析

## A 分析試料

花粉分析は、一般に低温地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

分析試料は、3区SD228から採取された土壌2と土壌3の2点である。

## B 分析方法

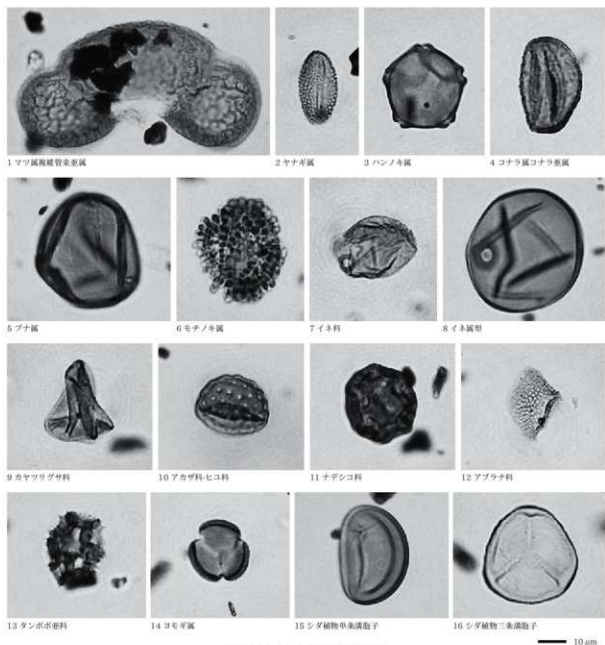
花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに以下の手順で行った。

- ① 試料から1cm<sup>3</sup>を秤量。
- ② 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎。
- ③ 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去。
- ④ 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置。
- ⑤ 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- ⑥ 再び氷酢酸を加えて水洗処理。
- ⑦ 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成。
- ⑧ 検鏡・計数。

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

第7表 検出花粉一覧

学名	和名	3区SD228	
		2	3
Arboreal pollen	樹木花粉		
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属復縁管束密属	1	
<i>Salix</i>	ヤナギ属		10
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	15	28
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属・アサダ		1
<i>Castanea crenata</i>	クリ	1	
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ密属	3	2
<i>Ilex</i>	モチノキ属	1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Saxifragaceae	ユキノシタ科		1
Araliaceae	ウコギ科		1
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Gramineae	イネ科	41	28
<i>Oryza ryp</i>	イネ属型	9	4
Cyperaceae	カヤツリグサ科	12	3
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科・ヒユ科	4	10
Caryophyllaceae	ナデシコ科	4	
Cruciferae	アブラナ科	1	1
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属	3	2
Lactucoideae	タンポポ科	3	1
<i>Asterias</i>	ヨモギ属	34	23
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単葉状胞子	12	9
Trilate type spore	三葉状胞子	3	1
Arboreal pollen	樹木花粉	22	41
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	108	72
Total pollen	花粉総数	130	115
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	9.4	5.8
		$\times 10^2$	$\times 10^2$
Unknown pollen	未同定花粉	4	9
Fern spore	シダ植物胞子	15	10
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)



第 17 図 花粉・胞子顕微鏡写真

## C 分析結果

### 1) 分類群

出現した花粉・胞子の分類群は、樹木花粉 8、樹木花粉と草本花粉を含むもの 2、草本花粉 9、シダ植物胞子 2 形態の計 21 である。なお、寄生虫卵は認められなかった。分析結果を第 7 表に示し、花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 18 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複雑管束亜属・ヤナギ属・ハンノキ属・クマシデ属-アサダ・クリ・ブナ属・コナラ属コナラ亜属・モチノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

ユキノシタ科・ウコギ科



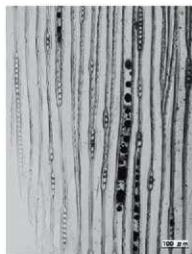


横断面

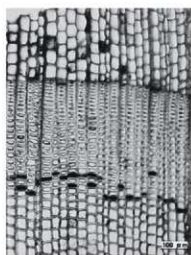
1 No.11 4区 SE417 火燧白スギ



放射断面

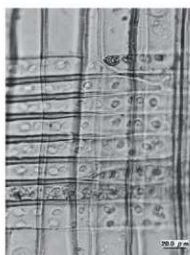


接線断面

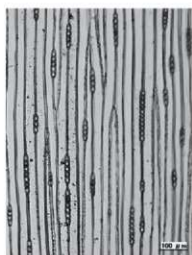


横断面

2 No.12 4区 SE418 下駄スギ



放射断面

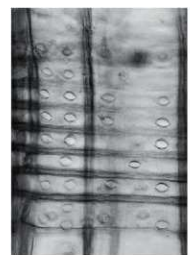


接線断面



横断面

3 No.10 4区 SE418 曲物3スギ

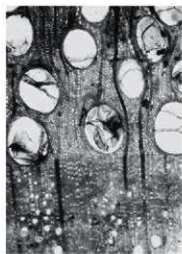


放射断面



接線断面

第19図 樹種同定図1



横断面 0.5 mm

4 No.7 4区 P392 柱根 クリ



放射断面 0.2 mm



径線断面 0.2 mm

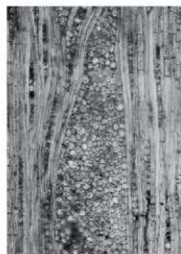


横断面 0.5 mm

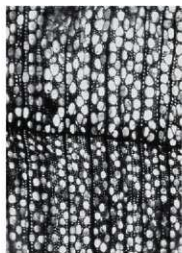
5 No.6 4区 P326 柱根 コナラ属コナラ節



放射断面 0.2 mm

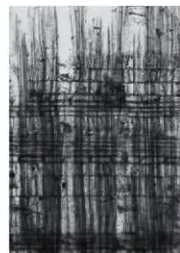


径線断面 0.2 mm



横断面 0.5 mm

6 No.1 2区 P69 柱根 カツラ



放射断面 0.2 mm



径線断面 0.2 mm

第20図 樹種同定図2

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 (第19図1~3)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州・四国・九州・屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 (第20図4)

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具・器具・土木・船舶・彫刻・薪炭・椎茸ほだ木など広く用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 (第20図5)

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1~数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものも大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ・コナラ・ナラガシワ・ミズナラがあり、北海道・本州・四国・九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 (第20図6)

横断面：小型で薄壁の角張った道管が単独ないし2~3個複合してかなり密に散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20~40本ほどである。放射組織は異性である。道管内にチロースが多数存在する。接線断面：放射組織は異性放射組織型で2細胞幅である。

以上の形質よりカツラに同定される。カツラは北海道・本州・四国・九州に分布する。落葉高木で、通常高さ15~20m、径50~60cmであるが、大きいものは高さ35m、径2mに達する。材は軽軟で弱性であり加工しやすく、建築材などに用いられる。

樹種同定の結果、柱根7点はカツラ3・クリ2・コナラ属コナラ節2と同定された。カツラの木材は軽軟均質で、耐朽性や保存性は低いが、切削および加工が極めて容易な材である。クリの木材は重硬で保存性が良い材である。コナラ属コナラ節の木材は靱して強靱で弾力に富む。柱根はいずれも大木になる樹種である。

曲物3点はいずれもスギと同定された。スギの木材は加工工作が容易で大きな材がとれる良材である。スギはヒノキとともに曲物によく用いられる樹種である。

いずれの樹種も当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

第8表 同定樹木一覧

番号	遺構	樹種	結果(学名/和名)
No.1	2区 P09	杜松	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc. カツラ
No.2	2区 P106	杜松	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc. カツラ
No.3	4区 P367	杜松	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
No.4	4区 P372	杜松	<i>Quercus sect. Prinus</i> コナラ属コナラ節
No.5	4区 P386	杜松	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc. カツラ
No.6	4区 P326	杜松	<i>Quercus sect. Prinus</i> コナラ属コナラ節
No.7	4区 P392	杜松	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
No.8	4区 SE418	曲物1	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
No.9	4区 SE418	曲物2	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
No.10	4区 SE418	曲物3	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
No.11	4区 SE417	大横白	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
No.12	4区 SE418	下駄	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ

## 第Ⅷ章 総 括

### 第1節 古代の土器について

#### A 編年的位置づけ

大沢谷内遺跡の北部で行った本次調査では、1区を中心に古代の土器が比較的多く出土した。良好な遺構出土一括資料がSD34に限られるという難点はあるものの、近接するSX29および時期的に先行する埋積土1期の遺構出土資料との比較をつうじ所属時期の大枠を明らかにしておきたい。

I期遺構群とII期のSX29・SD34における口縁部残存残値に基づく器種構成割合を第21図に示す。I期遺構群の数は、資料数の乏しさを補うためSD56・SD130・SD134・SK90・P337・SX220・SX337出土資料を一括して集計した。I期遺構群とII期のSX29・SD34では、土師器無台碗と須恵器無台杯の占有率に大きな違いがある。I期では食膳具の大半を須恵器が占めるのに対し、II期ではその率が大幅に低下し、土師器無台碗に大きく偏る組成内容へと変化する。

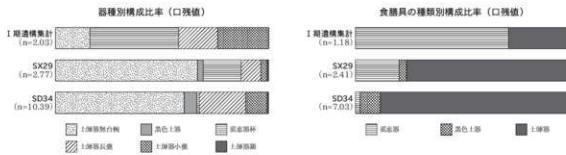
第23図に須恵器無台杯を示す。I期の遺構内から出土した資料は、立ち上がり角度が急な1類と50度前後の2類・3類からなる。胎土は1類(佐渡小泊産)が主体を占め、II類(新津丘陵産)も定量存在する。II期では、2類と3類を主体とし、立ち上がりの緩やかな4類がこれに加わる。I期に存在した1類は見られない。II期の遺構から出土した無台杯は、すべての資料が胎土I類によって占められる。






















第22図上段に土師器無台碗を示す。器体上部に丸みをもった1類は、I期のSD130とII期のSX29から少数ながら出土した。資料数が多いII期のSD34に1類は存在しない。口縁部が直線的に立ち上がる2類と外反ぎみの3類はSX29とSD34の主体を占め、口端内部が削られたような形態をもつ4類はSD34に限定される。







第22図下段に長甕を示す。体部に最大径をもつ1類はI期のSK90・SD130に限定される。口縁径と体部最大径が接近する2類は各遺構に存在するが、口縁部に最大径をもつ3類はSD34の主体資料をなし、I期の遺構では確認できない。口端の形態を見ると、I期では肥厚が弱いのに対し、II期のSX29・SD34では端部を積み上げるものや肥厚する個体が大多数を占める。















第22図中段に小甕、同図上段右に黒色土器を示す。小甕は資料数が乏しいことから多分に流動的ではあるが、口径と体部径が接近した1類がI期のSD130、口端が肥厚した2類がII期のSD34にのみ存在する。黒色土器はSX29に無台碗の小破片が1個体存在する。SD34では一定の割合を示しており、個体量の増加をうかがわせる。

以上のように、遺構内出土資料にはI期遺構群とII期のSD34に偏る形態が見られ、SX29ではI期的な様相を示す器種もある。遺構内出土資料に見られる以上のような土器様相の異なりは越後平野周辺における平安時代



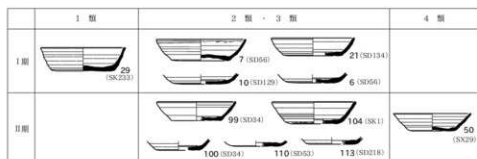
	黒台碗1類	黒台碗2類	黒台碗3類	黒台碗4類	黒色土器
SD130					
SX29		 	 		
SD34		    	   	   	 

	小壺1類	小壺3類	小壺2類
SD130 SX230	 		
SX29			
SD34		 	

	長壺1類	長壺2類	長壺3類	
SK30 SD130	 			
SX29				
SD34		  	  	  

第 22 図 遺構別にした土師器の形態





第23図 I期・II期遺構出土の須恵器無台杯

の土器変遷観と矛盾するものでなく、春日真実の編年〔春日1999・2005〕に照らせば、I期遺構資料がV1期～V2期、II期の遺構資料(SX29・SD34)がVI1期～VI2期に概ね対応するものと考えられる。このほか少数ながら出土した灰釉陶器は、施釉の手法からVI2期土器群に伴う資料とみなされる。

## B 胎 土

本次調査区から出土した古代土器の胎土はバラエティーに富んでおり、第V章において土師器と須恵器の胎土分類を行った。

須恵器については胎土含有物のあり方から3つのグループに大別した。白色粒子を多量に含みながら鉱物・岩石粒子が乏しいI類、破砕した石英・長石・岩石破片や磨耗粒子を概して少量含むII類、粗大な破砕石英・長石を多量に含み、若干の磨耗粒子も伴うIII類、の別である。これまでの知見によれば、I類は佐渡小泊産、II類は近隣の新津丘陵産、III類は阿賀北産須恵器と概ね対応する。

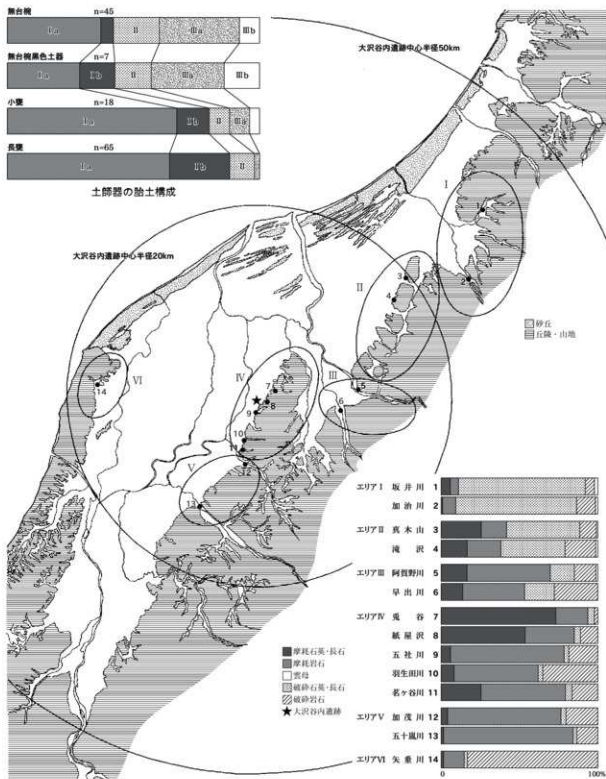
産地ごとに見られる胎土含有物の異なりを、混和材の利用環境をもとに検討する。第24図右下は、越後平野周辺の13地点から採取した砂粒のあり方を示したものである。各地点の組成は5mmおよび1mmメッシュ篩で採取した砂粒のうち後者でえられた100gあまりを対象とし、磨耗の有無を観察しながら石英・長石・雲母・各種岩石の占有割合を計量・集計した。

13箇所の採取地点は、砂粒組成のうえで6つのエリアに分けられる。新発田市周辺のエリアIでは、破砕した石英・長石が卓越する。笹神丘陵周辺のエリアIIもこれと似た傾向を示すが、磨耗粒子が40%前後含まれる点で新発田市周辺とは異なる。阿賀野川水系のエリアIIIでは、磨耗粒子の割合が60%～70%にまで増加する。これにともない、エリアI・IIを特徴づける破砕石英・長石の割合は低下する。新津丘陵周辺のエリアIVでは磨耗粒子の割合がきわめて高く、地点によっては磨耗石英・長石が卓越する。加茂川から五十嵐川に至るエリアVでは、磨耗粒子が卓越するものの石英・長石の割合はきわめて低い。角田山東麓のエリアVIでは破砕凝灰岩が卓越し、いずれのエリアとも異なる内容をみせる。

以上のあり方に基けば、本遺跡が位置する新津丘陵周辺で手近に利用できる混和材は、磨耗した石英・長石や各種岩石粒子とみなされる。本次調査で出土した新津丘陵産と阿賀北産須恵器の胎土含有物の特徴を上記の状況と比較すると、整合・不整合の両面が見いだせる。両者の差異は、二つの空間における混和材利用環境の異なりと密接に関連する。阿賀北産須恵器の胎土には、破砕状態にある石英や長石が多量に含まれ、エリアIIの砂粒組成と酷似する。新津丘陵産須恵器では破砕鉱物の含有量が相対的に乏しい点において前述のような砂粒組成のあり方と符合する。一方、新津丘陵産須恵器には磨耗粒子が客体的な存在にとどまり、同地を特徴づける砂粒組成と同一の内容とは言いがたい。こうした現象の要因としては、非現地産の鉱物を粘土に混入させたことが考えられ、阿賀野川水系などから搬入した花崗岩を粉砕し、混和材として利用したケースが想定される。

土師器の胎土もバラエティーに富んでおり、第V章で6種にわたる区分を行った。磨耗した鉱物・岩石粒子を含むグループをI類とした。このうち破砕粒子が乏しいIa類は新津丘陵周辺を特徴づける砂粒組成と一致し、

近隣で入手した砂粒を利用した土器とみなされる。これに破砕した石英・長石が多量に加わるⅠb類は、新津丘陵産須恵器と同様に粉砕した花崗岩を混和材として利用した可能性が高い。磨耗粒子が欠落し、破砕した石英・長石を多量に含むグループをⅡ類とした。これについてもⅠb類と同様に粉砕した花崗岩を利用した可能性が高い。破砕粒子を少量含むグループをⅢ類とした。このうち、微細な石英・長石を多量に含むⅢa類は、新津丘陵



第 24 図 越後平野周辺の砂粒組成と土師器の胎土構成

の基盤粘土の含有物に類似する。本次調査区から出土した焼成粘土塊の多くが胎土Ⅲa類に該当する点からも、Ⅲa類が新津丘陵で採取した粘土に由来することは明らかである。

以上のように、本次調査区から出土した土師器の胎土は新津丘陵産の粘土と砂粒組成を反映した資料が大半を占めており、これに非現地産の破砕粒子を混和材として利用したものも少なからず含まれる。越後平野周辺における土師器の胎土については、これまで具体的な検討がなされておらず、提示される情報量もきわめて限定されていた。しかし、砂粒組成に見られる空間的な差異を手がかりに製作地を推定することがある程度可能であり、土師器における流通実態の把握に際しても有効な手法となりうることを指摘したい。

## C タタキ整形

本次調査で出土した平安時代の土器について、須恵器喪類と土師器長巻におけるタタキ整形痕を同一の視点から観察した。両者のあり方を第25図に示す。

須恵器喪類の内・外面に残るタタキ目と当て具痕の複合パターンは、産地ごとに異なりがみられる。第25図中段に産地別の占有率を示す。小泊産須恵器では、1B類（外面平行タタキ目・内面同心円当て具痕）と2A類（外面格子タタキ目・内面平行当て具痕）が主体となる。他の産地に比べ2B類（外面格子タタキ目・内面同心円当て具痕）や2C類（外面格子タタキ目・内面平行・同心円当て具痕）の占有率が高く、全体的に分散傾向にある点も特徴的である。新津丘陵産須恵器では1B類（外面平行タタキ目・内面同心円当て具痕）が卓越する。阿賀北産須恵器は資料数が乏しいが、1B類（外面平行タタキ目・内面同心円当て具痕）を主体としながら1A類（外面平行タタキ目・内面平行当て具痕）も高い占有率を示す傾向にある。

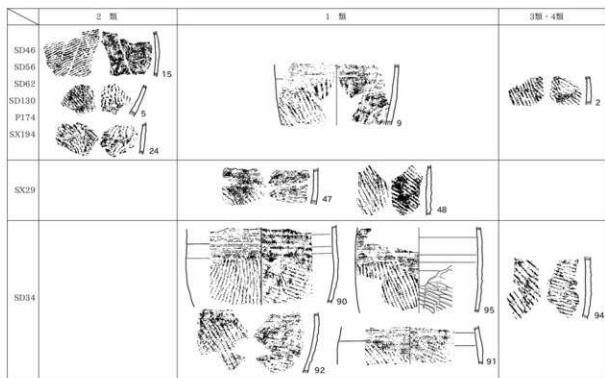
タタキ整形痕には、使用される工具の木取りに由来した異なりが見られる。①条の内部に木口痕を伴うもの、②条と平行した細線をもつもの、③条の内部が平滑なもの、の別である。これらの構成割合を産地間で比較すると、小泊と新津丘陵産須恵器では、内面平行当て具に違いがある。前者が①を主体とするのに対し、後者は③に偏る傾向が強く、条の内部が平滑な当て具の多用が新津丘陵の特徴点としてあげられる（第25図下段）。

土師器長巻の下半部に見られるタタキ整形痕については、第V章では5種にわたる区分を行った（第25図上段）に出土遺構別に見たタタキ整形のあり方を示す。I期遺構出土資料は1類（外面平行タタキ目・内面平行当て具痕）・2類（外面平行タタキ目・内面同心円当て具痕）・4類（外面平行タタキ目・内面変形格子当て具痕）からなり、2類が主体を占める。一方、II期のSX29やSD34では1類が卓越し、I期に特徴的な2類は見られない。

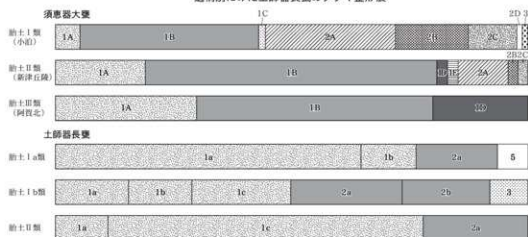
両時期の長巻には、胎土や使用工具の条線幅にも異なりがある。I期では胎土1a類と1b類の量が拮抗する。この段階の条線は繊細で、幅3mm台が一般的である。これに対し、II期では胎土1a類が大多数を占め、条線幅は5mm前後を主体とする点で明らかに粗大化する。

I期とII期の長巻に見られる以上のようなあり方は土器製作手法の時間的な変化を表わすものと考えられるが、I期の主体をなしたタタキ整形2類が時間的に平行する新津丘陵産須恵器の卓越パターンと一致する点は重要な特徴である。I期の土師器長巻を特徴づける胎土1b類は新津丘陵産須恵器の胎土に通じることがあり、その条線幅も須恵器に類似する。また、II期の土師器長巻に多用される内面平行当て具には条の内部が平滑な工具（土師器タタキ整形類1a類・1c類）が使用され、新津丘陵産須恵器期の伝統が継承されている。

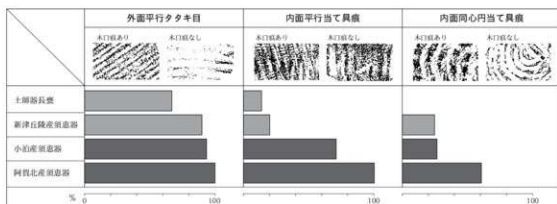
土師器長巻に見られる須恵器との類似性は、須恵器の製作集団によって土師器も製作されたことを物語る。草水町2丁目窯跡から確認された土師器焼成遺構（望月1997）は、両者の密接な関連性を示す直接的な事例となる。本次調査区から出土した土師器の製作地は現時点において不明であるが、平安時代の須恵器窯跡とされる六兵衛窯跡が至近距離に位置する点は留意される。本次調査区出土の搬入礫に含まれる花崗岩は、土器の混和材となりうる。粉砕した花崗岩を利用した可能性が高い胎土1b類やII類が焼成粘土塊の中に存在することも、土師器焼成遺構が今後の調査をつうじ木遺跡から発見される可能性を示唆する意味で注目すべき遺物と言える。



遺構別にみた土師器長巻のタタキ整形痕



胎土分類別にみた須恵器大甕と土師器長巻のタタキ整形痕



木口痕をもつタタキ整形工具の出現率

第 25 図 須恵器・土師器のタタキ整形痕

## 第2節 曲物の製作と流通

13世紀代の井戸とみられるSE418に4個体の曲物が埋設されていた。側板の木取りには共通点があり、いずれも板目取りの本体に柵目取りの薄板曲物を重ね合わせたものである。整形法としては、ケビキが内面もしくは外面の縦じ込み部付近に限定される2個体と、内面全体に縦方向、外面全体に格子目状のケビキを施す2個体に分けられる。後者は、成形時の削り痕が内・外面に明瞭に残される資料でもある。本節では、新潟市内の古代・中世井戸から出土した曲物を概観するなかで、SE418出土資料の位置づけを考える。

1994年に行われた山木戸遺跡の調査を契機として、新潟市内では多数の曲物井戸が確認されるようになった。比較資料として取上げるのは、信濃川の河口に近い東区山木戸遺跡〔謙山2004〕、亀田砂丘周辺に位置する江南区駒首湯〔渡邊<sup>2009</sup>・日本〔今井2007〕・三王山〔朝岡2010〕・牛道〔立木由理子1999〕の4遺跡、越後平野西部の西蒲区和納館跡〔川上1997〕および、本遺跡2005年調査区からの出土例である。このうち平面形が方形をなす製品は除外し、SE418出土資料と同様の円形曲物29個体を観察した。この中には所属時期が明確でないものが少なからず含まれることから、古代・中世資料として便宜上一括する。各遺跡の位置と分類別の内訳などは第26図のとおりである。

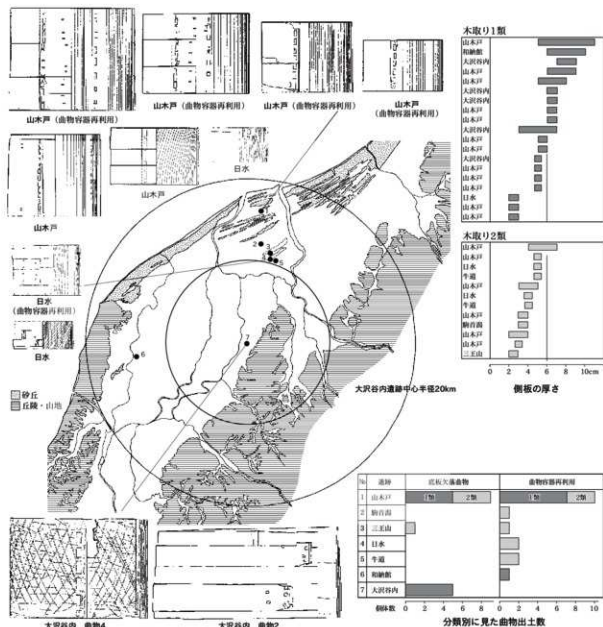
SE418から出土した曲物は、いずれも底板固定痕が確認できず、井戸側としての使用を意図して製作されたものとみなされる。これに対し、新潟市内の6遺跡では底板固定用の木釘や小孔をとどめ、曲物容器を転用したことが明らかな資料が17個体出土している。該当資料が確認できるのは、山木戸遺跡、亀田砂丘周辺に分布する駒首湯・山王山・日本・牛道の4遺跡と和納館跡である。各遺跡から出土した曲物は大半がスギ材を使用する。上記6遺跡は砂丘地周辺や平野の中央部に位置することからスギの生育に不向きな環境に置かれており、曲物製品の消費地に当たると考えられる。このうち山木戸遺跡ではすべての井戸で曲物が使用されるとともに、転用品の占める割合が相対的に低い傾向にある。この遺跡では輸入陶磁器を含む多様な遺物が豊富に出土した。信濃川の河口に近い地理的環境からみて当時の物流拠点となした可能性が高く、上記のような曲物利用は、物資の潤沢な供給環境を背景とした特殊な事例と考えるべきであろう。

新潟市内から出土した曲物は、いずれも複数の個体を重ね合わせて製作されている。側板の木取りにいくつかの組み合わせが見られる。①板目+柵目、②板目+柵目+板目、③板目+板目、④柵目+柵目、の別である。②は山木戸遺跡、③は日本遺跡で1例ずつ確認できた。ともに小数にとどまることから①の範囲とみなし、以下では板目材を使用する①～③を1類、柵目材に限定される④を2類とする。第26図右上に示すように、両者は厚さ6mmを境に占有率が異なる。1類では幅広い分布を示すのに対し、2類の大多数は6cmに満たず、総じて華奢な印象を与える。1類は重厚な作りで、木取りが異なる柵目板を併用するケースが一般的な点からも、耐久性に優れた製品と言える。

1類と2類の割合は遺跡ごとに異なる。一方、曲物の消費地と考えられるエリアでは、亀田砂丘周辺の4遺跡で2類が卓越する。これに対し、山木戸遺跡では1類12点・2類5点を数え、和納館の1例も1類に該当する。一般的な農村集落とは異なる両遺跡において1類の占有割合が高い現象は、曲物の流通時に製品ランクが存在した可能性を想起させる。

29個体の曲物には、すべての資料でケビキが観察できた。そのあり方は画一的で、いずれの製品も内面全体に縦方向のケビキを施す。これに斜位のケビキが部分的に加わるものもあるが、山木戸遺跡・日本遺跡・牛道遺跡で1～2例ずつ見られるだけである。いずれの資料も外面全体が平滑に整形されており、斜位や斜行格子目状のケビキを部分的に認める資料が山木戸・駒首湯遺跡で散見できる程度である。

以上のような特徴からなる周辺遺跡出土の曲物は、SE418出土資料に備わるいくつかの特異性を明らかにしてくれる。大沢谷内遺跡の曲物は、2005年調査区出土の1例を含め、全ての資料が1類にあたる。SE418出



第 26 図 新潟市域における古代・中世の井戸側利用曲物

土の 4 個体と同様のケビキパターンは周辺遺跡で確認することができず、内・外面に削り痕をとどめる資料も皆無である。このうち、外面に明瞭な削り痕を残す 2 個体は、越後平野に流通する製品とは明らかに異なる資料であり、自家消費を意図して本遺跡内で製作されたものであろう。類別に欠ける他の 2 個体も同様の性格をもつ資料の可能性が高い。SE418 では曲物上面の小テラスにスギ材と見られる木羽板が多数敷かれており、その一角からはスギを使用した下駄の未成品も出土した。製材から製品製作に至る一連の作業が遺跡内で行われていた可能性を示唆する意味で重要な遺物である。

本次調査区の東 200m ほどに位置する 2008 年調査区では、7 世紀代の埋没谷から多数の伐採木や製作半ばの各種木製品が出土した。この中にはケビキを施す曲物側板未成品も含まれる。以後中世に至るまでの間に本遺跡内で行われた木工活動の実態は明らかでないが、本次調査で確認された漆要具の存在は、近傍に丘陵地帯が広がる地理条件を背景に木器製作の伝統が受け継がれてきたことを示す間接的な資料となる。

北東 250m に位置する 2005 年調査区では、1 個体の曲物が井戸側として使用されていた。内面全体に縦方

向のケビキを施し、外面を平滑に整形したスタンダードな資料である。大沢谷内遺跡における上記のような状況を考慮した場合、この資料もまた遺跡内で製作されたことも考えられる。こうした想定が妥当であるとすれば、周辺遺跡から出土した同一形態の製品が本遺跡で製作された可能性も生じてくる。越後平野周辺における曲物の製作・流通を考える上で端緒となりうる資料としてSE418出土の曲物を位置づけたい。

### 第3節 アスファルト塊をめぐる

遺物包含層にあたるI層と遺構内から、古代から中世に属するアスファルト塊が大量に出土した。総重量にして3.76 kgにのぼり、823m<sup>2</sup>たらずの調査区域からの出土量としては特筆に値するものである。

第VI章で述べたように、出土したアスファルト塊は大小さまざまなサイズからなる。いずれも不整形な形状をなし、中型～大型個体では厚さ1cm～3cm台の偏平な資料が大多数を占める。遺構に伴う資料としては、9世紀前半と推定されるSD52、9世紀後半～10世紀初頭と推定されるSD34・SX29、SE389、13世紀代のSE389・SE418などから出土し、本次調査区における古代・中世の全期間にわたり存在することが確認できた。

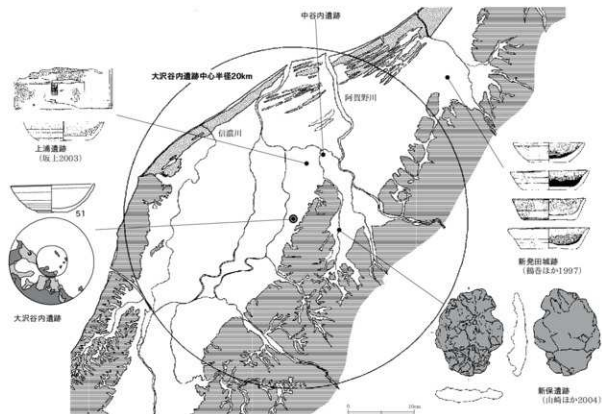
今回の調査では微細種実の採取を目的とした土壌水洗を5箇所の遺構覆土で行い、これらの全てから微細なアスファルト粒子が多量に検出された。調査区の広い範囲に微細なアスファルト塊が分布していたことをうかがわせるとともに、この近辺に原油が湧出し、自然生成したアスファルトが各所に放置または廃棄された可能性を強く示唆している。

多量に出土したアスファルト塊のなかでとりわけ重視されるのは、井戸の中からもまとまった資料が検出されたSE418でのあり方である。この井戸は下部に4個体にのぼる曲物が埋設されており、曲物上面から最下部に至る土砂内を中心に337gのアスファルト塊が堆積していた。曲物内部の自然堆積土からは、木片・炭化物・微細種子も出土した。こうした状況に基づけば、この井戸は機能時に開口しており、アスファルト塊が絶えず落下・堆積する環境に置かれていたのであろう。予想される水質や4個体もの曲物を使用した入念な作りから見、飲料水や農業用水などの確保を目的に利用した施設とは考えにくいところである。

SE418の性格を考えるうえで、中段から確認された木羽板層（第16・18層）は少なからず重要である。それらは曲物の上面周囲を取り巻くように2層にわたり堆積し、人為的に敷かれた状況を示していた。木羽板の分布範囲は幅30cm～40cmのテラスをなしており、何らかの作業が可能なる広さをもつ。同層におけるアスファルト塊の推定堆積量は300g以上にのぼる。アスファルト塊は埋積土の上部からも出土した。しかしその量は20gにすぎず、井戸内部のアスファルト塊の大半が木羽板層で自然生成したことをうかがわせる。本次調査区では、石油に由来する黒色付着物が土師器無台碗で確認された。この中には外部に流出した状態で付着するものがあり（図版25-51等）、原油の利用が遺跡内で行われていたことを明示する。ここに記述したようなことがらを考え合わせるならば、この井戸では当時原油が湧出していた可能性が高く、その採取を行う「油井」として機能していたことも十分考えられる。

越後平野の周辺では、古代・中世に属するアスファルトの出土がいくつかの遺跡で確認されている。本遺跡の2008年調査区では、古代・中世の井戸などからアスファルト塊が確認され、中世の井戸から出土した漆器碗にはアスファルトが付着していた。新津丘陵東麓の沖積地に位置する五泉市新保遺跡では、古代の土坑内から扁平なアスファルト塊が出土した（山崎<sup>註29</sup>2004）。本次調査区出土資料と形状が類似するものである。本遺跡の北9kmの沖積地に立地する秋葉区上浦遺跡では、古代の井戸からタール状の原油が湧出していた。井戸側に利用された曲物や井戸の中から出土した漆器碗にもそれらが付着することから、油井の可能性が指摘されている（坂上2003）。このほか、上浦遺跡に近い中谷内遺跡では石油臭をとどめるタール状物質が須恵器長頸壺の内部に付着していた（立木<sup>註30</sup>1999）。

以上のように、新津丘陵周辺に分布する古代・中世遺跡では、石油に関連した資料が徐々に増加したり、その



第27図 越後平野周辺における古代・中世の石油関連資料

利用が一般的に行われていたことをうかがわせる。しかし、越後平野周辺における石油資源の使用状況については現時点で明らかでない。今後は古代・中世土器の内・外面に残るタール状付着物の検討をつうじ、新津丘陵産石油の流通実態を明確にしていく必要がある。

ところで、大沢谷内遺跡では2009年の調査に際し、縄文時代晩期に遡るアスファルト塊が大量に出土した。これらは本次調査で出土した資料に形状が類似する。同地区では掘立柱建物の一部をなした打ち込み柱の下端からもアスファルト塊が出土しており、本次調査区と同様に原油が周囲に湧出していたことをうかがわせる。内部にアスファルトが付着した土器が出土したことから、遺跡内で石油資源の利用が行われていたことは確実である。2010年調査区の晩期終末集落や北150mに位置する晩期中葉の大沢谷内北遺跡とともに、各地区は「交易拠点」的な色彩が強く(前山2010・2011)、アスファルトの流通において中核的な役割を担った遺跡と考えられる。その後の大沢谷内遺跡では、弥生・古墳時代の集落が未だ確認されていないが、限定された調査範囲を考慮すれば、中世に至るまで利用地点を変えながら連絡と営まれた可能性がある。さらには、石油資源の利用もまた継続的に行われていたことも想定できる。

大量のアスファルト塊が出土した2009年調査区の上層には、飛鳥～奈良時代の集落が形成されていた。各種祭祀具や円面硯・丸木筒を伴う点から官的色彩をもつ遺跡とみられ、越後平野の周辺では現時点において数少ない7世紀代の集落でもある。この集落では、各種木製品の製作が行われていた。井戸の中には丸木舟を転用するものがあり、当時存在した「浮足棚」に内水面経由で物資を供給する手工業生産基地として機能した可能性も指摘できる。これに関連して注目されるのは、天智7年(668)年に「越国」から「燃水・燃土」が献上されたという『日本書紀』の記述である。献上地の所在場所については諸説をみるが、具体的な根拠に基づく立論には至っていない(新潟市2008)。大沢谷内遺跡からえられた一連の知見は未だ断片的な情報にとどまるものであるが、献上地の所在をめぐめる問題を大きく前進させる重要な資料を提供することになろう。



## 第4節 古代・中世集落の植物食利用

本次調査区では、微高地下に広がる平坦面に水田遺構の可能性があるⅠ期の区画溝が多数分布していた。しかし、この段階におけるイネのプラント・オパールは土壌内に存在しておらず、自然科学的な分析手法から水田遺構を確認することはできなかった。一方、耕作痕とみられる窪地の密集域からイネのプラント・オパールが多量に検出され、発掘調査時に認識できなかった水田遺構がⅢ層内に存在した可能性を示唆している。調査区内の微高地や微高地下平坦面では、畑とみられる畝状遺構も多数分布していた。このうち畝状遺構2から採取した土壌で行なった花粉分析では畑作を示す情報はえられず、遺構の性格を明確にすることはできなかった。

こうしたなかで、5箇所の遺構覆土で実施した土壌水洗作業をつうじ多量の種実がえられた。検出された種実には栽培植物を含む食用植物が多種類にわたって存在し、古代・中世集落の生業を考えるうえで有益な情報を提供してくれた。種実が遺存していた4箇所の遺構出土資料は、その内容から人為的な関与を強く認めるSX29・SD34（9世紀後半～10世紀初頭）と自然堆積物とみられるSD52（9世紀前半）・SE418（13世紀代）に二分できる。

遺跡周辺の植生をある程度反映すると考えられるのは、後者のあり方である。2箇所の遺構出土種実における大きな特徴は木本類の種類や量が総じて乏しい点にあり、山麓部の自然堆積層で一般的に見られるエゴノキ・アカメガシワ・コブシなどは皆無に等しい状況にある。周辺部でこれまで行なった花粉分析によれば、縄文時代の大沢谷内遺跡周辺ではハノキなどの湿生樹木が高い出現率を示していた〔バリノ・サーヴェイ2010〕。同様のあり方は本次調査で行なった古代遺構覆土の花粉構成にも現れており、本遺跡の存続期間をつうじ類似した植生環境に置かれていたことをうかがわせる。検出された木本類には、澱粉や脂質に富んだトチ・クルミ、果肉が食用となりうるヤマグワ・ヤマブドウ・サルナシといった有用樹木が多量含まれており、調査区周辺で想定される植生とはその特徴を大きく異にする。おそらくこれらは集落内ないしはその近辺に移植・管理された樹木や人為的に持ち込まれた種実に由来するものであろう。

木本種実の中にはトチが含まれる。いずれも被熱破片として検出されたものである。トチの内果皮は硬質で、自然堆積層では完存状態で出土するケースが一般的である。本次調査で検出されたトチの量は少ないが、比較的高い頻度で確認できるところから、古代・中世をつうじ食料資源として利用されていたことも十分考えられる。越後平野西縁の角田山麓に位置する西蒲区御井戸遺跡では、縄文時代晩期の捨場から打ち割られた状態のトチが大量に出土した〔前山1996〕。これに対し、古墳時代前期の層から出土した多量のトチの実に利用の形跡は見られず、木器の用材などに变化したことをうかがわせる〔前山2004〕。越後平野周辺の古代・中世の段階において、トチの利用法に地域差が存在した可能性を指摘したい。

9世紀後半～10世紀初頭に属するSX29やSD34では、検出された種実が単純な構成を示し、大半の資料が被熱していた。これらのほとんどが可食種にあたることから、利用後の廃棄物と考えのが妥当である。両遺構の草本類の中には炭化したヒシの実が含まれていた。2009年の調査区では、縄文時代晩期の埋没谷から炭化したヒシの実が多量に出土しており、大沢谷内北遺跡や本遺跡2010年調査区からも同様な資料の存在が確認された。ヒシは沼地に生育する一年草で、夏後半から晩秋にかけて結実する。種実にアクがなく、3ヶ月にわたる採集も可能なことから、近代化以前の蒲原平野で重要な食料資源となっていた。SX29とSD34で検出された炭化種実は、連絡と受け継がれてきたヒシの実利用の一端を示す資料となる。

栽培植物はすべての水洗選別資料から検出された。周辺植生を反映する資料と考えられる9世紀前半のSD52と13世紀代のSE418では、いずれもナス科が主体を占める。なかでも後者からは600粒におよぶ種子が検出された。各資料には、これに加えてウリ科・トウガン・シソ科といった畑作物が少数ながらも安定的に存在する。穀類では炭化米とともにオオムギも比較的高い頻度で検出された。これらは微高地やその周囲に設けた水田・畑で栽培されたものと考えられ、多様な作物から成り立つ古代・中世の農業形態の一端をうかがわせる。

## 引用・参考文献

- ア 相田 泰臣 2012 『史跡 古津八幡山古墳』『平成23年度 新潟市遺跡発掘調査速報会—最新調査成果が語る新潟市の歴史』新潟市文化財センター
- 青葉 高 2000 『日本の野菜』 八坂書房
- 秋田 裕毅 2010 『井戸』もの人間の文化史 150 法政大学出版局
- 朝岡 政康 2010 『三王山遺跡Ⅱ 第4・7次調査』新潟市教育委員会
- イ 石川 茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会
- 諫山えりか 2004 『新潟市山木戸遺跡』新潟市教育委員会
- 伊藤 秀和 2005 『馬越遺跡』新潟県加茂市教育委員会
- 今井さやか 2007 『日本遺跡 第3次調査』新潟市教育委員会
- 岩井 宏實 1994 『曲物』もの人間の文化史 75 法政大学出版局
- ウ 潮田 憲幸 2011 『大沢谷内遺跡7区』『平成22年度 新潟市遺跡発掘調査速報会—最新調査成果が語る新潟市の歴史』新潟市埋蔵文化財センター
- 潮田 憲幸 2012 『大沢谷内遺跡』『平成23年度 新潟市遺跡発掘調査速報会—最新調査成果が語る新潟市の歴史—』新潟市文化財センター
- 宇野 隆夫 1992 『食器計量の意義と方法』『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
- オ 小黒 博史 2002 『神積地の遺跡(5) 東山丘陵』『新潟考古』第13号 新潟県考古学会
- カ 春日 真実 1997 『古代集落の展開—越後を事例として—』『新潟県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』
- 春日 真実 1999 『第4章 古代 第2節 土器編年と地域性』『新潟県の考古学』古志書院
- 春日 真実 2000 『第5章 まとめ』『吉田町史 資料編1 考古・古代・中世』吉田町
- 春日 真実 2003 『第7章 まとめ』『磐越自動車道関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡Ⅲ(C地区)』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金原 正明 1993 『花粉分析による古環境復原』『新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法』角川書店
- 柿田 祐二 2001 『須恵器窯の叩き目から』『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
- 川上 貞雄 1981 『山崎須恵器窯址緊急発掘調査報告書』五泉市教育委員会
- 川上 貞雄 1989 『大沢谷内遺跡発掘調査報告書』小須戸町教育委員会
- 川上 貞雄 1996 『金津丘陵製鉄遺跡群 居村B・D地区』新津市教育委員会
- 川上 貞雄 1997 『和納館遺跡発掘調査報告書』岩室村教育委員会
- コ 小林 巖雄いさ 2002 『新潟県地盤図説明書』社団法人新潟県地質調査組合
- 小林 正吾 1998 『森の生い立ちとその行方』『里山の植物』財団法人新潟県都市緑化センター
- サ 斉藤義信・山名正平 18983 『序章 小須戸町の自然』『小須戸町史』小須戸町
- 坂上 有紀 2003 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 上浦遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤 賢次 1983 『第二章 近世農村の展開 第四節 天ヶ沢草水の開発』『小須戸町史』小須戸町
- シ 島倉巳三郎 1973 『日本植物の花形形態』大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集
- 島地 謙いさ 1985 『木材の構造』文永堂出版
- 島地 謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺物出土木製品総覧』雄山閣
- ス 杉山 真二 2000 『植物珪酸体(プラント・オパール)』『考古学と植物学』同成社
- 鈴木 郁夫 1989 『第一編 自然』『新津市史 資料編第1巻 原始・古代・中世』新津市
- タ 田畑 弘 1996 『保明浦遺跡Ⅱ—埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—』南蒲原郡田上町教育委員会
- ツ 立木 宏明いさ 1999 『中谷内遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 立木 宏明いさ 2008 『沖ノ羽遺跡Ⅳ 第15次調査』新潟市教育委員会
- 立木由理子 1999 『国道49号線横雲バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 牛道遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 鶴巻 康志<sup>12)</sup> 1997 『新発田城跡発掘調査報告書Ⅱ』 新発田市教育委員会
- ナ 中島 栄一 1983 「第一編 古代・中世の郷土 第一章 郷土のあけぼの 第三節 町内における遺跡」『小須戸町史』小須戸町
- 中村 純 1967 『花粉分析』 古今書院
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について—とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として—」『第四紀研究』13
- 中村 純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』10
- 中村 純 1980 『日本産花粉の標鑑』 大阪自然史博物館収蔵目録第13集
- ニ 新潟県 1975 『地形分類図 新津』
- 新潟県 1984 『地形分類図 加茂』
- 新潟市 2008 『石油王国・新潟』 新潟歴史双書3
- ハ バリノ・サーヴェイ株式会社 『第六章第4節 古植生の復原』『大沢谷内北遺跡 第3次調査』 新潟市教育委員会
- フ 藤原 宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—」『考古学と自然科学』17
- マ 前山 精明 1996 「縄文時代晩期集落の経済基盤」『遺跡の保護と考古学』 甘粕健先生退官記念論文集刊行会
- 前山精明<sup>13)</sup> 2003 『御井戸遺跡1』 巻町教育委員会
- 前山 精明 2009 「大沢谷内遺跡」『平成20年度 新潟市遺跡発掘調査報告会資料』 新潟市埋蔵文化財センター
- 前山 精明 2010 「大沢谷内遺跡」『平成21年度 新潟市遺跡発掘調査報告会資料』 新潟市埋蔵文化財センター
- 前山 精明 2011 「大沢谷内遺跡6区下層」『平成22年度 新潟市遺跡発掘調査速報会—最新調査成果が語る新潟市の歴史—』 新潟市埋蔵文化財センター
- 前山精明・伊比博和<sup>14)</sup> 2010 『大沢谷内北遺跡 第3次調査』 新潟市教育委員会
- モ 望月 精司 1997 「第4節 北陸」『古代の上師器生産と焼成遺構』 真陽社
- ヤ 山崎 天<sup>15)</sup> 2004 『新保遺跡・住吉田東遺跡』 五泉市教育委員会・山武考古学研究所
- 山田 昌久 1993 『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史—』 植生史研究特別1号 植生史研究会
- ワ 波邊 朋和 1991 『長沼遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 波邊 朋和<sup>16)</sup> 1997 『金津丘陵製鉄遺跡発掘調査報告書Ⅱ 居村E・A・C地点、大入遺跡A地点』 新津市教育委員会
- 波邊 朋和<sup>17)</sup> 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 波邊ますみ<sup>18)</sup> 2009 『駒首遺跡 第3・4次調査』 新潟市教育委員会
- 波邊美穂子<sup>19)</sup> 2001 『坂ノ沢遺跡Ⅱ(平安時代編)』 新発田市教育委員会



路線No	区 区 画	区 画 種 別	道路分類	現況上 区 分	グランド	時 代	構造種	主軸方位	幅 員 (m)			断面 厚 度 (m)	形 態		出 入 通 路	備考	
									上 側		下 側		平 面	断 面			
									上 幅	下 幅	下 幅						
11	208	SD55	区画線	1	328, 344R, 354B	古代	瓦葺	N-25°-E	2.50	0.77	2.50	0.29	0.41	2.16	—	台形状	
11	208	SD70	区画線	1	378, 380	古代	瓦葺	N-12°-E	2.25	0.09	2.25	0.00	—	—	—	—	—
11	208	SD73	区画線	1	374, 38A, 38B	古代	瓦葺	N-90°-E	3.70	0.44	3.70	0.17	0.24	2.36	—	台形状	
11	208	SD79	区画線	1	388R, 390R, 400	古代	瓦葺	N-16°-W	2.23	0.42	2.23	0.38	0.09	2.54	—	—	
11	208	SD80	区画線	1	40A, 40B, 41A, 41B	古代	瓦葺	N-6°-E	0.73	0.72	0.73	0.25	0.28	2.50	—	—	上線階台(1), 断面形長階型(1)
11-12	208	SD92	区画線	1	42A, 43A, 43B	古代	瓦葺	N-75°-W	3.75	0.67	3.75	0.41	0.33	2.55	—	—	深窓状
12	208	SD97	区画線	1	44B	古代	瓦葺	N-80°-E	0.78	0.35	0.78	0.14	—	—	—	—	
12	208	SD98	区画線	1	44A, 44B	古代	瓦葺	N-12°-E	5.12	0.45	5.12	0.00	0.06	2.60	—	—	直状
12	208	SD100	区画線	1	45A, 45B, 46A, 46B	古代	瓦葺	N-71°-W	2.28	0.39	2.28	0.18	—	—	—	—	
12	208	SD101	区画線	1	44A	古代	瓦葺	N-34°-W	0.90	0.90	—	—	—	—	—	—	
12	208	SD112	区画線	1	46A, 46B	古代	瓦葺	N-60°-E	2.54	—	2.54	—	—	—	—	—	
12	208	SD118	区画線	1	46A, 47A	古代	瓦葺	N-76°-E	2.40	0.50	2.40	0.30	0.17	2.45	—	—	半円状
12	208	SD127	区画線	1	47A, 47B, 48B	古代	瓦葺	N-1°-E	1.70	0.22	1.70	0.13	—	—	—	—	
12	208	SD127	区画線	1	47A, 47B, 48B	古代	瓦葺	N-82°-W	2.55	0.33	2.55	0.18	0.12	2.46	—	—	半円状
12-13	208	SD131	区画線	1	48A, 49A	古代	瓦葺	N-15°-W	1.90	0.34	1.90	0.22	0.14	2.47	—	—	半円状
12	208	SD133	区画線	1	48A, 49A	古代	瓦葺	N-80°-E	0.35	0.31	0.35	0.12	—	—	—	—	上線階台(1)
13	208	SD157	区画線	1	47B	古代	瓦葺	N-79°-E	0.50	0.28	0.50	0.06	—	—	—	—	
13	208	SD161	区画線	1	54A, 55A	古代	瓦葺	N-85°-W	3.20	0.38	3.20	0.17	0.12	2.34	—	—	深窓状
13	208	SD162	区画線	1	55A	古代	瓦葺	N-53°-E	5.40	0.17	5.40	0.06	0.17	—	—	—	
14	208	SD172	区画線	1	59A, 60A, 61A, 61B	古代	瓦葺	N-28°-W	4.95	0.60	4.95	0.26	0.07	2.60	—	—	直状
14	208	SD203	区画線	1	66B, 67A	古代	瓦葺	N-24°-E	3.28	0.24	3.28	0.16	0.09	2.60	—	—	半円状
14	208	SD297	区画線	1	68B	古代	瓦葺	N-56°-W	1.90	0.34	1.82	0.16	—	—	—	—	
14	208	SD212	区画線	1	71B, 72A, 72B	古代	瓦葺	N-61°-E	2.13	0.52	2.13	0.33	0.09	2.65	—	—	深窓状
14	208	SD214	区画線	1	72R, 73A, 73B	古代	瓦葺	N-10°-W	3.03	0.41	2.22	0.22	—	—	—	—	
14	208	SD215	区画線	1	73A, 73B	古代	瓦葺	N-80°-W	1.63	0.42	1.03	0.14	0.17	2.63	—	—	
14	208	SD215	区画線	1	73A, 73B	古代	瓦葺	N-35°-E	1.97	0.34	1.97	0.16	0.20	2.57	—	—	
15	208	SD438	区画線	1	46A, 47A	古代	瓦葺	N-77°-W	1.00	0.24	1.00	0.10	—	—	—	—	
15	208	SD71	区画線	1	42A, 43B	古代	瓦葺	N-28°-E	0.36	0.70	0.30	0.47	0.14	2.46	—	—	深窓状
14	208	SD179	区画線	1	59A, 59B, 60A, 60B	古代	瓦葺	N-52°-E	2.24	0.22	2.24	0.14	0.04	2.64	—	—	直状
14	208	SD180	区画線	1	60A, 61A, 61B	古代	瓦葺	N-71°-E	2.68	0.28	2.65	0.12	0.11	2.64	—	—	台形状
14	208	SD189	区画線	1	62A, 63B, 63B	古代	瓦葺	N-79°-E	3.03	0.46	3.03	0.35	0.08	2.62	—	—	直状
14	208	SD190	区画線	1	63A	古代	瓦葺	N-3°-W	1.18	0.22	1.09	0.04	0.04	2.64	—	—	直状
14	208	SD195	区画線	1	64B	古代	瓦葺	N-80°-E	1.22	0.38	1.24	0.04	0.02	2.62	—	—	深窓状
14	208	SD200	区画線	1	64A, 66A, 66B	古代	瓦葺	N-84°-E	3.24	0.44	3.24	0.32	0.09	2.64	—	—	深窓状
13	208	SD168	区画線	1	56A, 57A, 57B	中世	瓦葺	N-72°-E	2.80	1.22	2.80	0.18	0.60	1.99	—	—	扇形状
13-14	208	SD171	区画線	1	58A, 58B, 59A, 59B	中世	瓦葺	N-60°-E	2.80	2.00	2.80	0.90	0.37	2.22	—	—	深窓状
16	308	SD218	区画線	1	81A	古代	瓦葺	N-11°-E	0.97	0.61	0.97	0.36	0.14	2.74	—	—	直状
16	308	SD222	区画線	1	83B	古代	瓦葺	N-64°-E	0.84	0.26	0.15	0.36	0.78	—	—	—	直状
16	308	SD296	区画線	1	93A	古代	瓦葺	—	0.98	—	0.64	—	0.21	2.97	—	—	深窓状
18	408	SD343	区画線	1	105B, 105AR, 107A, 108A	古代	瓦葺	N-3°-W	0.64	0.56	0.64	0.28	0.08	2.90	—	—	直状
20-21	408	SD391	区画線	1	115A, 116A, 116B	中世	瓦葺	N-70°-W	2.98	1.08	2.98	0.47	0.30	2.80	—	—	深窓状
12-13	208	SD129	敷状直線1	1	48A, 48B, 49A, 50A	古代	瓦葺	N-1°-W	0.52	0.44	0.52	0.26	0.10	2.66	—	—	直状
12-13	208	SD130	敷状直線1	1	47B, 48A, 49A, 49B	古代	瓦葺	N-4°-W	0.66	0.40	0.66	0.27	0.13	2.54	—	—	深窓状
12-13	208	SD134	敷状直線1	1	48R, 49B, 50AR, 51A	古代	瓦葺	N-4°-W	7.60	0.48	6.14	0.17	0.10	2.54	—	—	深窓状
13	208	SD135	敷状直線1	1	50B, 51A, 51B, 52A	古代	瓦葺	N-2°-W	4.39	0.48	4.39	0.26	—	—	—	—	深窓状
13	208	SD151	敷状直線1	1	52A, 52B, 52A	古代	瓦葺	N-3°-W	2.80	0.40	4.39	0.14	0.02	2.56	—	—	直状
13	208	SD152	敷状直線1	1	52B, 53A, 54B	古代	瓦葺	N-5°-W	0.66	0.14	0.66	0.09	0.09	2.53	—	—	半円状
12	208	SD154	敷状直線1	1	54B, 55B	古代	瓦葺	N-7°-W	5.72	0.40	5.72	0.22	0.17	2.46	—	—	半円状
16	308	SD225	敷状直線2	1	85A	古代	瓦葺	N-1°-E	0.28	0.11	0.26	0.04	0.03	2.94	—	—	半円状
16	308	SD236	敷状直線2	1	85A	古代	瓦葺	N-17°-E	1.44	0.23	1.32	0.07	0.03	2.94	—	—	深窓状
16	308	SD227	敷状直線2	1	85A, 85B, 86A	古代	瓦葺	N-22°-E	2.28	0.22	2.21	0.11	0.03	2.97	—	—	直状
16	308	SD228	敷状直線2	1	85B, 86A, 86A, 86B	古代	瓦葺	N-28°-E	2.74	0.21	2.42	0.07	0.02	2.97	—	—	直状
16	308	SD230	敷状直線2	1	86A, 86B	古代	瓦葺	N-27°-E	1.98	0.19	1.98	0.09	0.02	2.97	—	—	直状
16	308	SD230	敷状直線2	1	86A, 86B	古代	瓦葺	N-29°-E	1.72	0.16	1.72	0.08	0.03	3.02	—	—	直状
16	308	SD250	敷状直線3	1	87A, 88A	古代	瓦葺	N-10°-E	1.24	0.24	1.24	0.12	0.04	3.36	—	—	直状
16	308	SD251	敷状直線3	1	87A, 87B, 88A	古代	瓦葺	N-18°-E	2.52	0.23	2.52	0.09	0.04	3.37	—	—	直状

測線No	区	区	測線分類	測線上下区分	ブイコード	時代	観測所	主観方位	観測値 (cm)				観測精度 (cm)	断面		出工遺物	備考	
									上層		下層			断面	傾斜			
									長軸	短軸	長軸	短軸						
16	308	SD252	継続観測点	1a	88A, 88B	古代	互層	N-20°-E	3.05	0.27	3.05	0.14	0.05	2.96	-	埋没状		
16	308	SD253	継続観測点	1a	88A, 88B, 89A	古代	互層	N-18°-E	3.05	0.23	3.05	0.12	0.04	2.99	-	埋没状		
16	308	SD261	継続観測点	1a	88A, 90A	古代	互層	N-3°-E	2.19	0.16	2.19	0.11	0.04	3.01	-	埋没状		
16	308	SD262	継続観測点	1a	88A, 90A	古代	互層	N-10°-E	1.34	0.23	1.34	0.12	0.04	3.38	-	埋没状		
16	308	SD283	継続観測点	1a	88A, 89B, 90A	古代	互層	N-6°-E	2.68	0.18	2.68	0.06	0.08	3.02	-	埋没状		
16	308	SD298	継続観測点	1a	91B, 90A, 92B, 90A	古代	互層	N-1°-E	2.15	0.27	3.15	0.13	0.08	3.02	-	埋没状		
16	308	SD300	継続観測点	1a	92B, 90B	古代	互層	N-2°-E	1.32	0.26	1.32	0.14	0.08	3.02	-	埋没状		
16	308	SD301	継続観測点	1a	92B	古代	互層	N-4°-E	0.81	0.27	0.81	0.19	0.06	3.06	-	埋没状		
16	308	SD260	継続観測点	1b	88A, 88B, 89A	古代	互層	N-79°-W	2.74	0.32	3.74	0.22	0.03	3.02	-	埋没状		
16	308	SD284	継続観測点	1b	88A, 90A	古代	互層	N-82°-W	1.53	0.55	1.53	0.39	0.07	3.01	-	埋没状		
16	308	SD305	継続観測点	1a	89A, 89B, 90A, 90B	古代	互層	N-9°-E	2.54	0.24	3.25	0.13	0.18	2.93	-	埋没状		
16	308	SD290	継続観測点	1b	90A, 90B, 91A, 91B	古代	互層	N-25°-E	3.14	0.58	3.14	0.40	0.12	3.08	-	埋没状	土層断面(1)・(2) [1]; 底土層断面(1)・(2)	
16	308	SD291	継続観測点	1b	91A, 92A	古代	互層	N-9°-E	3.78	0.46	3.78	0.28	0.07	3.04	-	埋没状		
16	308	SD295	継続観測点	1b	91B	古代	互層	N-85°-W	2.06	0.37	2.06	0.30	0.16	2.90	-	平円状		
16	308	SD297	継続観測点	1b	91A, 92A, 91B, 92A	古代	互層	N-5°-E	3.13	0.34	3.13	0.22	0.09	3.01	-	埋没状		
16	308	SD445	継続観測点	1b	90A, 91A, 91B	古代	互層	N-77°-W	2.87	0.03	2.87	0.45	0.08	3.04	-	平円状		
16	308	SD449	継続観測点	1b	91A	古代	互層	N-89°-W	0.84	0.46	0.84	0.36	0.09	3.00	-	埋没状		
18	408	SD316	継続観測点	7a	102A	古代	互層	N-13°-E	1.50	0.39	1.50	0.16	0.04	2.97	-	埋没状		
18	408	SD318	継続観測点	7a	102A, 103A	古代	互層	N-8°-E	1.82	0.30	1.80	0.18	0.08	3.01	-	埋没状		
18	408	SD319	継続観測点	7a	102A, 102B, 103A	古代	互層	N-2°-E	2.66	0.16	3.66	0.12	0.05	2.99	-	埋没状		
18	408	SD320	継続観測点	7a	102B, 102A, 103B	古代	互層	N-5°-E	2.94	0.18	2.03	0.66	0.03	3.00	-	埋没状		
18	408	SD321	継続観測点	7a	103A, 103B	古代	互層	N-11°-E	1.28	0.23	1.20	0.12	0.05	2.99	-	埋没状		
18	408	SD322	継続観測点	7a	103A, 103B, 104A	古代	互層	N-4°-E	0.97	0.23	0.90	0.10	-	-	-	-	-	
18	408	SD323	継続観測点	7a	103A, 104A, 104B	古代	互層	N-10°-E	0.93	0.21	0.78	0.09	-	-	-	-	-	
18	408	SD332	継続観測点	7a	104A	古代	互層	N-1°-E	11.06	0.20	0.98	0.11	0.07	2.91	-	埋没状	土層断面(2)	
18	408	SD333	継続観測点	7a	104A, 104B	古代	互層	N-8°-E	0.83	0.14	0.56	0.06	-	-	-	-	-	
18	408	SD335	継続観測点	7a	104B, 105B	古代	互層	N-3°-E	0.80	0.14	0.75	0.12	0.03	2.94	-	埋没状		
18	408	SD336	継続観測点	7a	104B, 105B	古代	互層	N-1°-E	0.18	-	0.10	-	0.03	2.93	-	平円状		
18	408	SD339	継続観測点	8a	104A, 105A	古代	互層	N-19°-W	2.11	0.49	1.92	0.14	0.10	2.94	-	埋没状	土層断面(小)	
18	408	SD344	継続観測点	8a	105A, 106A, 107A	古代	互層	N-17°-W	3.90	0.35	3.79	0.18	0.08	2.92	-	埋没状	土層断面(小)	
19	408	SD353	継続観測点	9a	108A, 109A	古代	互層	N-39°-E	1.63	0.20	1.57	0.11	0.06	3.01	-	埋没状		
19	408	SD354	継続観測点	9a	108B, 109B	古代	互層	N-80°-W	1.01	0.13	0.93	0.10	0.05	2.95	-	平円状		
19	408	SD355	継続観測点	9a	109A	古代	互層	N-50°-W	0.46	0.17	0.30	0.10	0.03	2.96	-	埋没状		
19	408	SD356	継続観測点	9a	109A	古代	互層	N-52°-W	1.37	0.20	1.28	0.12	0.03	2.99	-	埋没状		
19	408	SD358	継続観測点	10a	109A, 109B, 110A	古代	互層	N-8°-W	0.80	0.14	0.78	0.07	0.04	3.03	-	平円状		
19	408	SD361	継続観測点	10a	110A	古代	互層	N-1°-E	2.43	0.21	2.38	0.16	0.10	2.95	-	埋没状	土層断面(小)	
19	408	SD364	継続観測点	10a	110A	古代	互層	N-2°-E	1.54	0.14	1.44	0.06	0.03	3.00	-	埋没状	土層断面(小)	
19	408	SD369	継続観測点	10a	111A, 111B, 112A	古代	互層	N-5°-W	2.16	0.18	3.14	0.06	0.06	2.94	-	平円状	土層断面(小)	
19	20	408	SD377	継続観測点	11a	112A, 112B	古代	互層	N-1°-W	1.53	0.16	1.44	0.06	0.07	2.98	-	平円状	
19	20	408	SD379	継続観測点	11a	113A, 114A	古代	互層	N-2°-W	1.36	0.12	1.48	0.04	0.02	3.06	-	埋没状	
19	20	408	SD381	継続観測点	11a	113A, 114A	古代	互層	N°-E	0.44	0.12	0.41	0.03	0.02	3.08	-	平円状	
19	20	408	SD382	継続観測点	11a	114A	古代	互層	N-1°-E	0.52	0.07	0.42	0.04	0.03	3.07	-	埋没状	
19	20	408	SD383	継続観測点	11a	114A	古代	互層	N-1°-E	0.40	0.10	0.40	0.04	0.05	3.03	-	平円状	
19	20	408	SD384	継続観測点	11a	114A, 114B	古代	互層	N-12°-E	0.98	0.10	0.94	0.03	0.02	3.08	-	埋没状	
19	20	408	SD385	継続観測点	11a	114B	古代	互層	N-10°-E	0.43	0.11	0.38	0.04	0.02	3.00	-	埋没状	
20	21	408	SD394	継続観測点	12a	116A	古代	互層	N-15°-W	0.58	0.16	0.48	0.04	0.04	3.00	-	埋没状	
20	21	408	SD395	継続観測点	12a	116A, 117A	古代	互層	N-4°-W	0.48	0.08	0.44	0.02	0.04	3.00	-	埋没状	
20	21	408	SD396	継続観測点	12a	116A, 117A	古代	互層	N-5°-W	0.16	0.12	0.62	0.04	0.02	3.00	-	埋没状	
20	21	408	SD397	継続観測点	12a	116A, 117A	古代	互層	N-1°-E	0.50	0.13	0.48	0.04	0.02	3.00	-	埋没状	
20	21	408	SD398	継続観測点	12a	116A, 117A	古代	互層	N-4°-E	0.38	0.09	0.36	0.02	0.02	3.00	-	埋没状	
20	21	408	SD399	継続観測点	12a	117B	古代	互層	N-1°-E	0.32	0.08	0.30	0.04	0.02	3.00	-	埋没状	
20	21	408	SD400	継続観測点	12a	117B	古代	互層	N-1°-E	0.32	0.07	0.28	0.04	0.03	3.00	-	埋没状	
20	21	408	SD402	継続観測点	12a	117B, 118A	古代	互層	N-8°-W	1.18	0.27	1.00	0.12	0.04	3.00	-	埋没状	
20	21	408	SD403	継続観測点	12a	117B, 118A	古代	互層	N-4°-W	1.13	0.16	0.98	0.08	0.03	3.00	-	埋没状	
20	21	408	SD404	継続観測点	12a	117B, 118A, 118B	古代	互層	N-4°-E	12.00	0.18	11.21	0.19	0.10	2.98	-	埋没状	
20	21	408	SD405	継続観測点	12a	117B, 118A	古代	互層	N-8°-E	1.09	0.13	1.02	0.03	0.04	2.98	-	埋没状	
20	21	408	SD406	継続観測点	12a	117B, 118A, 118B	古代	互層	N-1°-W	1.03	0.12	0.96	0.03	0.04	2.96	-	埋没状	
20	21	408	SD407	継続観測点	12a	118A	古代	互層	N-12°-W	0.42	0.10	0.33	0.04	0.03	2.97	-	埋没状	
20	21	408	SD408	継続観測点	12a	118A	古代	互層	N-17°-W	0.82	0.08	0.72	0.05	0.03	2.98	-	平円状	

路線%	区 道 種	道路分類	現況上 区分	グランド	時代	構造	主軸方位	幅 員 (m)				道路 幅員 (m)	形 態		出 入 通 物	備考		
								上 部		下 部			深 度	平 面			側 面	
								左幅	右幅	左幅	右幅							
20-21	48	SD-609	新設連続13	1a	118A	古代	互置	N-10°-W	0.42	0.10	0.42	0.05	0.02	2.96	—	直状		
20-21	48	SD-410	新設連続13	1a	118B	古代	互置	N-8°-W	0.42	0.10	0.32	0.04	0.02	3.93	—	深直状	上線路長(3)	
20-21	48	SD-412	新設連続13	1a	118A, 119A	古代	互置	N-11°-W	0.39	0.08	0.32	0.03	—	—	—	U字状		
20-21	48	SD-413	新設連続13	1a	118A	古代	互置	N-8°-W	0.63	0.12	0.67	0.07	0.04	2.97	—	深直状		
20-21	48	SD-415	新設連続13	1a	119A	古代	互置	N-11°-W	0.74	0.12	0.63	0.04	0.04	3.96	—	深直状		
8	18	SD-7	改路	1b	3A, 3B, 4A, 4B	古代	互置	N-63°-E	3.74+	2.06	3.74+	1.74	0.30	2.98	—	直状	上線路側台幅(1)-小横(1)-横(1), アスファルト	
11	12	SD-16	改路	1b	3A, 3B, 35A, 35B	古代	互置	N-96°-E	3.22+	1.07	3.30+	0.31	—	—	—	直状	上線路側台幅(1)-小横(2)-小横(4), 道路幅員計(10)-横(1)-長横(1)	
14	26	SD-62	改路	1b	63A, 63B, 64A, 64B	古代	互置	N-37°-E	3.32+	1.30	3.32+	0.44	0.52	2.61	—	深直状	上線路側台幅(2)-小横(2)-小横(4)-横(1)	
13	26	SD-167	改路	1b	55B, 56AB, 57AB	古代	互置	N-17°-E	4.28+	(1.10), 4.28+	(1.00), 4.28+	0.11	2.44	—	—	深直状	上線路長(1)	
14	26	SD-206	改路	1b	68A, 68B, 69A, 70A	古代	互置	N-16°-E	4.84+	0.94	4.84+	0.38	0.31	2.51	—	深直状		
14	26	SD-448	改路	1b	60A, 61A, 62A	古代	互置	N-39°-E	3.22+	1.43	3.22+	0.49	0.65	2.32	—	—	上線路側(2)	
16	26	SD-242	改路	1b	56A, 60A, 67A, 67B	古代	組直	N-30°-E	1.40+	1.40	1.40+	1.36	0.12	3.93	—	—	直状	
8	18	Pg 7	1b	6A	古代	互置		0.36	0.33	(0.18), (0.14)	0.14	0.22	2.34	不整河原	平河状			
8	18	Pg 8	1b	6B	古代	互置		0.29	(0.28)	0.11	0.07	0.27	2.34	不整河原	U字状			
8	18	Pg 12	1b	7B	古代	互置		0.30	0.22	0.11	0.08	0.17	2.34	橋河原	V字状			
9	18	Pg 38	1b	15B	古代	互置		0.30	0.26	0.11	0.09	0.21	2.38	不整河原	平河状			
9	18	Pg 39	1b	15B	古代	互置		0.28	0.23	0.13	0.10	0.26	2.34	不整河原	扇状			
9	18	Pg 40	1b	15B	古代	互置	(0.38), (0.27), (0.13)	(0.12), (0.12)	0.30	0.21	—	—	—	不整河原	V字状			
9	18	Pg 41	1b	16A	古代	互置		0.38	0.36	0.09	0.09	0.20	2.40	不整河原	V字状			
9	18	Pg 42	1b	16B	古代	互置		0.14	0.12	0.07	0.07	0.10	2.48	不整河原	V字状			
9	18	Pg 43	1b	16B	古代	互置		0.38	0.27	0.28	0.20	0.33	2.24	不整河原	台形状			
9	18	Pg 44	1b	16B, 17B	古代	互置		0.24	0.23	0.14	0.11	0.17	2.42	不整河原	U字状			
10	18	Pg 49	1b	19B	古代	互置		0.44	0.40	0.06	0.06	0.36	2.26	河原	扇状			
8	18	Pg 3	0	4B, 5B	古代	互置	(0.40), (0.43), (0.25)	(0.24)	0.68	1.96	—	—	—	不整河原	直線状	上線路小横(5)		
8	18	Pg 4	0	5B	古代	互置	0.36	(0.35)	0.25	0.22	0.23	2.28	—	河原	台形状	上線路長(1)		
8	18	Pg 5	0	5B	古代	互置	0.44	0.41	0.31	0.23	0.35	2.16	—	不整河原	U字状			
8	18	Pg 9	0	7A	古代	互置	0.64	0.45	0.40	0.29	0.25	2.32	—	不整河原	台形状	上線路長(1)-小横(2)-横(2), 道路幅員長(2)		
8	18	Pg 10	0	8A	古代	互置	(0.25), (0.18), (0.15)	(0.11), (0.11)	0.24	0.26	—	—	—	—	—	—	—	
8	18	Pg 11	0	8A	古代	互置	0.22	0.20	0.13	0.10	0.25	2.32	—	不整河原	直線状			
8	18	Pg 13	0	7B	古代	互置	0.41	0.32	0.27	0.24	0.26	2.30	—	不整河原	台形状			
8	18	Pg 14	0	8B	古代	互置	0.25	0.22	0.18	0.15	0.26	2.28	—	不整河原	台形状			
8	18	Pg 15	0	8B	古代	互置	0.30	0.27	0.15	0.12	0.19	2.36	—	不整河原	U字状			
8	18	Pg 16	0	9A	古代	互置	0.32	0.30	0.08	0.08	0.26	2.34	—	不整河原	扇状			
8	18	Pg 17	0	9B	古代	互置	0.30	0.28	0.19	0.15	0.33	2.34	—	不整河原	直線状			
8-9	18	Pg 18	0	10A	古代	互置	0.28	0.24	0.27	0.22	0.18	2.40	—	不整河原	台形状			
8-9	18	Pg 19	0	10B	古代	互置	0.29	0.19	0.27	0.17	0.21	2.41	—	不整河原	台形状			
9	18	Pg 23	0	11A	古代	互置	0.35	0.33	0.13	0.11	0.30	2.37	—	不整河原	U字状			
9	18	Pg 24	0	11A, 11B	古代	互置	0.34	0.29	0.12	0.11	0.22	2.40	—	河原	直状		相状	
9	18	Pg 25	0	12A	古代	互置	0.30	0.28	(0.19)	0.13	0.39	2.20	—	河原	U字状		相状	
9	18	Pg 26	0	12A	古代	互置	0.46	0.38	0.29	0.24	0.21	2.38	—	不整河原	台形状	上線路小横(1)		
9	18	Pg 27	0	12A, 13A	古代	互置	0.31	0.26	0.13	0.13	0.28	2.37	—	—	—	直状		
9	18	Pg 28	0	13A	古代	互置	0.28	0.25	0.18	0.16	0.29	2.26	—	不整河原	U字状			
9-10	18	Pg 30	0	11B, 12B	古代	互置	0.23	0.22	0.19	0.14	0.33	2.12	—	河原	直線状			
9-10	18	Pg 31	0	12B	古代	互置	0.27	0.22	(0.16), (0.16)	0.35	0.19	—	—	不整河原	直線状			
9	18	Pg 32	0	13A	古代	互置	0.27	0.25	0.14	0.08	0.42	2.21	—	不整河原	直線状			
9	18	Pg 33	0	14A	古代	互置	0.22	0.20	0.18	0.13	0.28	2.26	—	不整河原	直線状			
9	18	Pg 35	0	13C	古代	互置	0.34	0.28	0.28	0.19	0.31	2.24	—	不整河原	直状	上線路側台幅(3)-長横(1), アスファルト		
9	18	Pg 36	0	14B	古代	互置	0.33	0.23	0.21	0.17	0.28	2.30	—	不整河原	直状		相状	
9	18	Pg 37	0	15B	古代	互置	0.30	0.25	0.22	0.17	0.19	2.36	—	不整河原	U字状	アスファルト		
9	18	Pg 45	0	17A	古代	互置	0.27	0.25	0.21	0.17	0.41	2.21	—	不整河原	直状		相状	
11	26	Pg 59	1b	35A	古代	互置	0.30	0.20	0.12	0.10	0.22	2.30	—	不整河原	直線状			
11	26	Pg 65	1b	37A	古代	互置	0.27	0.24	0.24	0.12	0.18	2.45	—	不整河原	U字状			
11	26	Pg 72	1b	38B	古代	互置	0.49	0.28	0.16	0.13	0.27	2.34	—	不整河原	U字状			
11	26	Pg 81	1b	39A, 39B, 40A, 40B	古代	互置	0.43	0.34	0.24	0.16	0.26	2.39	—	不整河原	U字状			
11	26	Pg 82	1b	40A	古代	互置	0.23	0.21	0.20	0.19	0.29	2.38	—	不整河原	U字状			
11	26	Pg 85	1b	40B	古代	互置	0.18	0.15	0.06	0.06	0.11	2.38	—	不整河原	扇状			
11	26	Pg 86	1b	40B	古代	互置	0.47	0.37	0.12	0.10	0.31	2.34	—	不整河原	U字状			
11-12	26	Pg 93	1b	42A	古代	互置	0.23	0.19	0.16	0.11	0.23	2.46	—	橋河原	U字状			
11-12	26	Pg 94	1b	42A	古代	互置	0.21	0.26	0.16	0.08	0.29	2.40	—	橋河原	V字状			

鋼種%	区 道 種	規格分類	規格上 区分	ブランド	時 代	製造所	主軸方位	幅 間 (mm)				断面 厚さ (mm)	形 態		出 工 通 物	備 考		
								上 幅	下 幅		厚 度		平 面	側 面				
									短 幅	長 幅							短 幅	
12	20k	Pe 95	1φ	430B	古代	互磨		0.25	0.23	0.09	0.04	0.40	2.26	平巻内巻	U字状			
12	20k	Pe 96	1φ	440B	古代	互磨		0.28	0.24	0.13	0.10	0.42	2.30	平巻内巻	砲弾状			
12	20k	Pe 104	1φ	45A	古代	互磨		0.28	0.24	0.14	0.13	0.39	2.25	平巻内巻	砲弾状			
12	20k	Pe 111	1φ	45A	古代	互磨		0.23	0.17	0.14	0.11	0.23	2.62	巻内巻	U字状			
12	20k	Pe 119	1φ	46B, 47B	古代	互磨		0.46	0.41	0.32	0.26	0.22	3.60	平巻内巻	砲弾状			
13	20k	Pe 156	1φ	54B	古代	互磨		0.38	—	0.06	—	0.26	2.62	平巻内巻	U字状			
14	20k	Pe 173	1φ	59A	古代	互磨		0.41	0.39	0.20	0.18	0.22	2.56	平巻内巻	台形状			
14	20k	Pe 174	1φ	59A	古代	互磨		0.41	0.28	0.31	0.18	0.11	2.58	平巻内巻	U字状	上線部巻内巻(1)		
14	20k	Pe 175	1φ	59A	古代	互磨		0.36	0.26	0.21	0.11	0.11	3.58	平巻内巻	平円状			
13-14	20k	Pe 176	1φ	59A	古代	互磨		0.36	0.27	0.07	0.06	—	—	—	平巻内巻	—		
14	20k	Pe 178	1φ	59B	古代	互磨		0.26	0.19	0.10	0.09	0.14	2.24	平巻内巻	平円状			
14	20k	Pe 184	1φ	62B	古代	互磨		0.26	0.23	0.12	0.09	0.11	2.60	平巻内巻	U字状			
14	20k	Pe 185	1φ	62B	古代	互磨		0.34	0.22	0.17	0.13	0.09	2.62	平巻内巻	深溝状			
11	20k	Pe 27	φ	34A	古代	互磨		0.40	0.37	0.15	0.13	0.47	2.15	内巻	U字状			
11	20k	Pe 58	φ	30B	古代	互磨		0.50*	—	—	—	0.51	2.12	平巻外巻	U字状	アスファルト	粗粒	
11	20k	Pe 60	φ	30B	古代	互磨		0.33	0.27	0.20	0.21	0.21	2.12	平巻内巻	台形状	上線部巻内巻(2)-線(1), アスファルト		
11	20k	Pe 64	φ	37A	古代	互磨		0.53	0.56	0.25	0.23	0.56	2.11	平巻内巻	扇形状	底面部丸座(1)		
11-10	20k	Pe 67	φ	37A	古代	互磨		0.29	0.28	0.28	0.16	—	—	—	平巻内巻	平円状		
11-10	20k	Pe 68	φ	37A	古代	互磨		0.36	0.30	0.30	0.11	0.35	2.29	平巻内巻	U字状			
11-10	20k	Pe 69	φ	37B, 38B	古代	互磨		0.56	0.52	0.52	0.26	0.46	2.20	内巻	台形状	本粒	本粒粗	
11	20k	Pe 74	φ	38A, 38B	古代	互磨		0.25	0.23	0.12	0.10	0.41	2.16	内巻	砲弾状			
11	20k	Pe 75	φ	38B	古代	互磨		0.36	0.22	0.07	0.05	0.16	2.42	平巻内巻	U字状			
11	20k	Pe 78	φ	39A	古代	互磨		0.37	0.30	0.21	0.19	0.40	2.23	平巻内巻	U字状			
11-10	20k	Pe 83	φ	40A	古代	互磨		0.35	0.33	0.08	0.06	0.49	2.19	扇形状	U字状			
11-10	20k	Pe 89	φ	42B	古代	互磨		0.14	0.12	0.04	0.03	0.18	2.61	平巻内巻	U字状			
11-10	20k	Pe 91	φ	42A	古代	互磨		0.29	0.23	0.13	0.10	0.21	2.49	平巻内巻	U字状			
12	20k	Pe 102	φ	45A	古代	互磨		0.32	0.29	0.11	0.09	0.33	2.36	平巻内巻	U字状	上線部丸座(1)		
12	20k	Pe 103	φ	45A	古代	互磨		0.36	0.28	0.20	0.19	0.33	2.36	平巻内巻	U字状			
12	20k	Pe 105	φ	45B	古代	互磨		0.42	0.36	0.15	0.08	0.37	2.32	平巻内巻	巻内巻/平巻内巻			
12	20k	Pe 106	φ	45A	古代	互磨		0.37	0.36	0.16	0.15	0.39	2.04	平巻内巻	砲弾状	本粒	本粒粗	
12	20k	Pe 110	φ	45A	古代	互磨		0.28	0.26	0.07	0.06	0.45	2.22	平巻内巻	台形状	上線部丸座(1)		
12	20k	Pe 116	φ	46A	古代	互磨		0.23	0.18	0.19	0.11	0.13	2.55	巻内巻	台形状			
12	20k	Pe 117	φ	47A	古代	互磨		0.18	0.16	0.14	0.10	0.10	2.09	(内巻)	平円状			
12	20k	Pe 120	φ	46B, 47B	古代	互磨		0.62(0.62)	0.55	0.24	0.20	0.42	2.26	平巻内巻	U字状	上線部丸座(3)		
12	20k	Pe 121	φ	47A	古代	互磨		0.79	0.52	0.62(0.62)	0.41	0.60	2.09	(内巻)	巻内巻/巻内巻			
12	20k	Pe 123	φ	47B	古代	互磨		0.48	0.26	0.21	0.19	0.36	2.28	平巻外巻	砲弾状			
12	20k	Pe 124	φ	47B	古代	互磨		0.26	0.26	0.12	0.10	0.13	2.56	平巻内巻	U字状			
12	20k	Pe 125	φ	47B	古代	互磨		0.34	0.19	0.09	0.06	0.16	3.00	平巻内巻	U字状	上線部巻内巻(1)		
12	20k	Pe 128	φ	47A, 48A	古代	互磨		0.45	0.32	0.18	0.11	0.30	2.38	平巻内巻	U字状			
13	20k	Pe 136	φ	50A	中世	互磨		0.31	0.28	0.10	0.09	0.32	2.32	平巻内巻	扇形状	粗粒		
13	20k	Pe 137	φ	50A	古代	互磨		0.42	0.29	0.35	0.21	0.40	2.28	(巻内巻/内巻)	U字状			
13	20k	Pe 138	φ	51A	古代	互磨		0.35	0.26	0.24	0.14	—	—	—	—	上線部巻内巻(1)		
13	20k	Pe 139	φ	51A	古代	互磨		0.34	0.19	0.11	0.07	0.43	2.24	—	砲弾状			
13	20k	Pe 140	φ	50B	古代	互磨		0.32	0.27	0.13	0.10	0.42	2.24	平巻内巻	砲弾状			
13	20k	Pe 141	φ	51B	古代	互磨		0.38	0.21	0.09	0.06	0.33	2.26	巻内巻	砲弾状			
14	20k	Pe 177	φ	59A	古代	互磨		—	—	—	—	0.18	2.48	巻内巻	平円状			
14	20k	Pe 208	φ	69A	古代	互磨		0.43	—	(0.27)	—	0.18	2.64	—	平円状			
16	20k	Pe 221	1φ	83A	古代	互磨		0.34	0.22	0.09	0.04	0.18	2.73	内巻	扇形状			
17	20k	Pe 234	1φ	85A	古代	互磨		0.21	0.18	0.25	0.21	0.13	2.88	平巻内巻	U字状			
17	20k	Pe 237	1φ	85A	古代	互磨		0.15	0.14	0.05	0.04	0.16	2.91	平巻内巻	U字状			
17	20k	Pe 238	1φ	85A	古代	互磨		0.39	0.31	0.19	0.14	0.17	2.84	巻内巻	平円状			
17	20k	Pe 239	1φ	86A	古代	互磨		0.14	0.13	0.08	0.07	0.06	2.62	平巻内巻	深溝状	上線部巻内巻(1)		
17	20k	Pe 246	1φ	87A	古代	互磨	N-89-E	0.50	0.34	0.09	0.09	0.30	2.79	平巻内巻	U字状	黒色上線部巻内巻(1)-丸座(1)		
17	20k	Pe 248	1φ	87A	古代	互磨	N-83-W	0.33	0.31	0.11	0.10	0.13	2.93	平巻内巻	深溝状			
17	20k	Pe 254	1φ	88A	古代	互磨		0.23	0.23	0.07	0.09	0.07	2.97	平巻内巻	台形状			
17	20k	Pe 256	1φ	88A	古代	互磨		0.32(0.32)	0.29(0.29)	0.14	0.14	0.23	2.79	平巻内巻	台形状			
17	20k	Pe 258	1φ	88B	古代	互磨		0.20	0.19	0.08	0.06	0.15	2.93	内巻	U字状			
17	20k	Pe 266	1φ	89A	古代	互磨		0.24	0.22	0.10	0.09	0.25	2.83	内巻	砲弾状			
17	20k	Pe 267	1φ	89B, 90B	古代	互磨	N-87-W	0.26	0.34	0.16	0.15	0.17	2.97	内巻	平円状			



別添% 区	区 道 種	道幅(分)	現況上 区分	グランド	時代	構造形式	主軸方位	橋 脚 (m)				総延長 (m)	形 状		出 入 通 物	備考		
								上 部		下 部			深 度	平 面			断 面	
								矢 跨	矢 跨	矢 跨	深 度							
17-38A	Pc 558	1φ	90A	古代	互置			0.25	0.23	0.12	0.10	0.13	2.01	円形	深張状			
17-38A	Pc 570	1φ	90A	古代	互置			0.24	0.22	0.07	0.06	0.27	2.85	円形	U字状	土線形橋(1)		
17-38A	Pc 572	1φ	90A	古代	互置			0.23	0.17	0.11	0.07	0.46	2.66	不整形円形	U字状			
17-38A	Pc 574	1φ	90A	古代	互置			0.17	0.16	0.08	0.08	0.09	3.04	円形	半円状			
17-38A	Pc 575	1φ	90B	古代	互置			0.21	0.30	0.14	0.12	0.15	2.95	円形	半円状			
17-38A	Pc 579	1φ	90B	古代	互置		N-24°-W	0.23	0.20	0.30	0.30	0.07	3.10	(長方形)	半円状			
17-38A	Pc 583	1φ	90A, 91A	古代	互置			0.33	0.27	0.16	0.12	0.17	2.36	不整形円形	深張状			
17-38A	Pc 584	1φ	91A	古代	互置			0.15	0.13	0.06	0.05	0.06	3.05	楕円形	深張状			
17-38A	Pc 592	1φ	91B	古代	互置			0.30	0.18	0.12	0.08	0.15	3.02	不整形円形	U字状			
17-38A	Pc 599	1φ	92A	古代	互置		N-18°-W	0.18	0.16	0.08	0.07	0.06	3.05	不整形円形	深張状			
17-38A	Pc 446	1φ	90A	古代	互置		N-60°-E	0.47	0.42	0.15	0.13	0.38	2.66	方形	U字状			
16-38A	Pc 216	B	81A	古代	互置			(0.34)	—	(0.14)	—	0.27	2.74	—	深張状			
17-38A	Pc 217	B	81A	古代	局部埋			(0.47)	—	(0.20)	—	0.19	2.80	—	半円状			
17-38A	Pc 273	B	90A	古代	互置			0.20	0.19	0.06	0.05	0.24	2.98	不整形円形	V字状			
17-38A	Pc 278	B	90B	古代	互置		N-69°-E	(0.27)	(0.22)	(0.14)	(0.12)	0.14	3.04	不整形円形	U字状	土線形橋(1)	(長張(1))	
17-38A	Pc 281	B	90A	古代	互置			0.21	0.20	0.11	0.08	0.13	3.04	不整形円形	U字状			
17-38A	Pc 293	B	91B	古代	互置			0.24	0.19	0.07	0.04	0.21	2.94	不整形円形	特殊-半円橋状	土線形橋(1)	(長張(1))	
17-38A	Pc 294	B	91B	古代	互置			(0.20)	(0.17)	(0.10)	(0.10)	0.05	3.06	不整形円形	箱状			
17-38A	Pc 299	B	92A	古代	互置			0.23	0.20	0.07	0.06	0.07	3.04	円形	深張状			
17-38A	Pc 304	B	92B	古代	互置			0.22	0.16	0.09	0.08	0.22	2.77	—	特殊状	土線形橋(1)	(長張(1))	
18-48A	Pc 331	1φ	104A	古代	互置			0.41	0.32	0.30	—	0.07	2.96	(長方形)	深張状			
18-48A	Pc 337	1φ	104A, 104B	古代	互置			0.27	0.14	0.17	0.15	0.10	2.93	円形	深張状	断面橋脚(1)		
18-48A	Pc 338	1φ	105B	古代	互置			0.17	0.16	0.09	0.07	0.34	2.70	楕円形	線形橋			
20-21-48A	Pc 401	1φ	117B	古代	互置			(0.34)	(0.31)	(0.16)	(0.14)	0.11	2.92	不整形円形	深張状			
18-48A	Pc 312	1φ	101A	中世	互置			0.21	0.16	0.12	0.07	0.10	2.87	楕円形	U字状			
18-48A	Pc 313	1φ	101A	中世	互置			0.21	0.20	0.12	0.10	0.17	2.82	不整形円形	U字状			
18-48A	Pc 317	1φ	102A	中世	互置			0.22	0.18	0.13	0.10	0.13	2.88	不整形円形	台形状			
18-48A	Pc 320	1φ	104B	古代	互置			0.39	0.31	0.29	0.30	0.11	2.89	楕円形	深張状	土線形橋(1)		
20-21-48A	Pc 423	1φ	120A, 121A	古代	互置			0.24	0.21	0.14	0.10	0.13	2.93	不整形円形	半円状			
20-21-48A	Pc 424	1φ	121A	古代	互置			0.25	0.21	0.14	0.10	0.20	2.88	楕円形	U字状			
20-21-48A	Pc 425	1φ	121A	古代	互置			(0.29)	(0.27)	(0.05)	(0.06)	0.47	2.64	(方形)	U字状			
20-21-48A	Pc 430	1φ	121A	古代	互置			0.25	0.23	0.07	0.07	0.28	2.80	不整形円形	特殊状			
18-48A	Pc 310	B	100B	古代	互置			(0.44)	(0.40)	(0.33)	(0.28)	0.37	2.68	円形	線形橋	土線形橋(1)		
18-48A	Pc 314	B	102A	中世	互置			0.22	0.19	0.18	0.12	0.10	2.90	不整形円形	深張状			
18-48A	Pc 315	B	102A	中世	互置			0.30	0.18	0.09	0.07	0.10	2.90	不整形円形	深張状			
18-48A	Pc 324	B	102A	中世	互置			—	—	—	—	0.12	2.95	—	U字状			
18-48A	Pc 334	B	104B	古代	互置			(0.23)	—	(0.18)	—	0.63	2.40	—	U字-特殊橋状	土線形橋(1)	(長張(1))	
18-48A	Pc 345	B	105A, 106A	古代	互置			0.52	0.50	0.12	0.07	0.44	2.59	不整形円形	特殊-併存橋状	土線形橋(1)	(長張(1))	
18-48A	Pc 348	B	106A	古代	互置			—	—	—	—	0.18	3.10	—	(楕円状)			
18-48A	Pc 349	B	106B	古代	互置			(0.32)	(0.29)	(0.14)	(0.13)	0.34	2.69	—	特殊状	土線形橋(1)	アスファルト	
18-48A	Pc 350	B	107A, 107B	古代	互置			0.50	0.49	0.32	0.30	0.38	2.68	不整形円形	台形状			
18-48A	Pc 351	B	107A	古代	互置			(0.29)	(0.26)	(0.12)	(0.10)	0.37	2.62	—	U字状			
18-48A	Pc 352	B	107A, 107B	古代	互置			0.66	0.60	0.23	0.19	0.23	2.55	不整形円形	V字状	断面橋脚(1)		
19-48A	Pc 359	B	109B	古代	互置			—	—	—	—	0.61	2.85	—	U字状	本柱		
19-48A	Pc 363	B	116A, 110B	古代	互置			0.32	0.47	0.34	0.30	0.19	2.79	不整形円形	U字状	土線形橋(1)		
19-48A	Pc 366	B	116A, 110B	古代	互置			0.28	0.26	0.08	0.06	0.24	2.70	不整形円形	線形橋			
19-48A	Pc 367	B	111A	古代	互置			0.37	0.34	0.10	0.10	0.65	2.36	不整形円形	U字-併存橋状	本柱		
19-48A	Pc 368	B	111B	古代	互置			—	—	—	—	0.22	2.80	—	台形状			
19-48A	Pc 371	B	112A	古代	互置			0.23	0.19	0.19	0.11	0.44	2.58	不整形円形	特殊状			
19-48A	Pc 373	B	112A	古代	互置			—	—	—	—	0.36	2.72	—	U字状			
19-48A	Pc 375	B	112A	古代	互置			0.33	0.28	0.09	0.08	0.10	3.17	不整形円形	深張状			
19-20-48A	Pc 376	B	113B	古代	互置		N-22°-E	0.33	0.23	0.11	0.09	0.38	2.79	不整形円形	V字状			
19-20-48A	Pc 378	B	113A	古代	互置			0.25	0.24	0.19	0.18	0.43	2.63	円形	特殊状			
19-20-48A	Pc 380	B	113A	古代	互置			0.34	0.25	0.09	0.06	0.26	2.84	不整形円形	U字状	アスファルト		
19-48A	Pc 386	B	114A, 113B, 114A, 113B	古代	互置			0.21	0.24	0.10	0.09	0.20	2.60	不整形円形	U字状	本柱		
20-48A	Pc 387	B	114A	古代	互置			0.24	0.18	(0.14)	(0.06)	0.09	3.00	—	深張状			
20-21-48A	Pc 390	B	115A, 115B	古代	互置			0.19	0.07	0.18	0.05	0.18	2.94	不整形円形	U字状			
20-21-48A	Pc 393	B	116A	古代	互置			0.36	0.30	0.14	0.08	—	—	—	不整形円形	深張状		
20-21-48A	Pc 411	B	118A	古代	互置			0.30	0.30	0.15	0.12	0.50	2.53	不整形円形	特殊状	アスファルト		



別表2 土器観察表

凡 例 1 出土位置 遺構名・グリッド名を記した。  
2 器 種 番号に記した。  
3 器 高 器高/口径×100。  
4 器径 器径/口径×100。

5 法 重 口径-底径-器高を示す。  
6 胎 土 器V事に記した。( )内の数字は和明標を併記する。  
7 色 澤 土器色。標準土色番号(TS)の数字を併記する。  
8 焼 成 焼成温度帯-還元/酸化の状況を示した。

9 季 法 特徴的な土法のみを記し、網羅的な記載についてはない。底面の「赤切り」「ヘタ切り」は必ずしも同層を用いたものである。  
同層とは同層のみの方法を示す。底面露出はロクロ土器・ロクロ土器から判断した。タタキメと当て具については、器V事に記した。  
10 遺 存 率 百分数で遺存割合を示した。

図層	器高/口径	出土位置		器形	器種	器径	器高	器径/口径	器高/口径	胎土	色 澤	焼成	土 法		遺 存 率		付 着 物		備 考				
		区	遺構名										断面	底面	底面	底面	底面	底面		底面	底面		
23	1	1K	SD 46	15A	1	土器類	瓶白陶		6.0	1a	新津 押(5YR6/6)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器	赤切り	右	11/36						
23	2	1K	SD 46	15A	1	土器類	長瓶			1a	新津 押(5YR6/6)	酸化	タタキメ	当て具									
23	3	1K	SD 47	190	1	土器類	長瓶			1a	新津 押(5YR6/6)	酸化	タタキメ	当て具						3と同層体			
23	4	1K	SD 47	190	1	土器類	大壺			1a	小胎 灰(7.5Y6/1)	還元	タタキメ	当て具						底面露1層			
23	5	2K	SD 56	35B	1	土器類	長瓶			1b	新津 仁(4R-黄橙)(10YR7/2)	酸化	タタキメ	当て具						102と同層体			
23	6	2K	SD 56	35A	1	土器類	瓶白陶		6.0	1a	小胎 灰(7.5Y6/1)	還元	ロクロ土器	ロクロ土器									
23	7	2K	SD 56	35A	1	土器類	瓶白陶	2層	14.2	9.4	3.4	24	66	1a	小胎 灰(7.5Y6/1)	還元	ロクロ土器	ロクロ土器	ヘタ切り	左	8/36	32/36	29/36
23	8	2K	SD 56	35A、35B 33A、33B	1	土器類	横瓶			1a	小胎 灰(7.5Y6/1)	還元	タタキメ、タタキメ	当て具						底面露1層			
23	9	2K	SD62 SX194	63B、63E	2,2	土器類	長瓶			1b	新津 灰(10YR5/1)	酸化	タタキメ	当て具						外面平目タタキ目			
23	10	2K	SD 129	47B	1	土器類	瓶白陶		8.2	0a	新津 灰白(10YR7/1)	還元	ロクロ土器	ロクロ土器	タタキ					17/36			
23	11	2K	SD 130	48B	1	土器類	瓶白陶	1層	13.0	6.2	3.8	29	48	0a	新津 仁(4R-黄橙)(10YR7/2)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器	赤切り	11/36	10/36	10/36	
23	12	2K	SD 130	48B	1	土器類	小瓶	1層	14.7	1a	新津 仁(4R-黄橙)(5YR6/3)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器						7/36			
23	13	2K	SD 130	48B	1	土器類	小瓶		7.6	1a	新津 仁(4R-黄橙)(10YR7/2)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器						36/36			
23	14	2K	SD 130	48B	1	土器類	長瓶	1層	20.3	1b	新津 仁(4R-黄橙)(10YR7/2)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器						4/36			
23	15	2K	SD 130	48B	1	土器類	長瓶			1a	新津 仁(4R-黄橙)(10YR7/2)	酸化	タタキメ	当て具						1層露2層			
23	16	2K	SD 130	48B	1	土器類	長瓶	2層	19.4	1a	新津 仁(4R-黄橙)(10YR7/4)	酸化	タタキメ、タタキメ	当て具						3/36			
23	17	2K	SD 130	48B	1	土器類	瓶白陶		9.0	1a	小胎 灰(7.5Y6/1)	還元	ロクロ土器	ロクロ土器	ヘタ切り						5/36		
23	18	2K	SD 130	48B	1	土器類	大壺			1b	新津 灰白(N6/0)	還元	タタキメ、タタキメ	当て具						底面露1層			
23	19	2K	SD 134	51A	1	土器類	長瓶	1層	17.5	1b	新津 仁(4R-黄橙)(10YR7/2)	酸化	タタキメ	タタキメ						5/36			
23	20	2K	SD 134	51A	1	土器類	小瓶		7.4	1a	新津 仁(4R-黄橙)(10YR7/2)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器	赤切り					7/36			
23	21	2K	SD 134	52A	1	土器類	瓶白陶	2層	13.2	9.3	2.9	22	71	1a	小胎 灰(7.5Y6/1)	還元	ロクロ土器	ロクロ土器	ヘタ切り		5/36	5/36	5/36
23	22	2K	SD 134	52A	1	土器類	瓶白陶		13.9	0a	新津 灰(N6/0)	還元	ロクロ土器	ロクロ土器						8/36			
23	23	2K	SK 90	42B	1	土器類	瓶白陶		15.0	1b	新津 灰(7.5Y6/1)	還元	ロクロ土器	ロクロ土器						6/36			
23	24	2K	SK 194	59A	1	土器類	長瓶			1b	新津 仁(4R-黄橙)(5YR7/4)	酸化	タタキメ	当て具						1層露2層			
23	25	2K	SK 63	36B	1	土器類	大壺			0a	新津 灰(7.5Y6/1)	還元	タタキメ	当て具						底面露2層			
23	26	2K	PK 174	63B	2	土器類	大壺			1b	新津 灰(7.5Y6/1)	還元	タタキメ	当て具						底面露1層			
23	27	2K	SK 220	83A	1	土器類	小瓶	2層	14.8	0a	新津 押(5YR6/6)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器						4/36			
23	28	4K	PK 337	104A	1	土器類	瓶白陶		14.5	1a	小胎 灰(7.5Y6/1)	還元	ロクロ土器	ロクロ土器						2/5			
23	29	2K	SK 253	84A	1	土器類	瓶白陶	1層	13.4	10.2	3.7	28	78	1a	小胎 灰(7.5Y6/1)	還元	ロクロ土器	ロクロ土器	ヘタ切り	左	6/36	17/36	12/36
23	30	2K	SK 253	84A	1	土器類	長頸壺			1b	新津 灰(N5/0)	還元	ロクロ土器	ロクロ土器									
23	31	2K	SK 253	84A	1	土器類	壺			1b	小胎 灰(7.5Y6/1)	還元	ロクロ土器	ロクロ土器									
24	32	1K	SK 29	12B	1	土器類	瓶白陶	2層	12.2	4.8	3.4	28	39	0a	新津 仁(4R-黄橙)(10YR7/2)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器			23/36	36/36	29/36
24	33	1K	SK 29	12B	1	土器類	瓶白陶	1層	12.1					0a	新津 灰(10YR5/1)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器			9/36		
24	34	1K	SK 29	12A	1	土器類	瓶白陶	2層	12.3	1a	新津 仁(4R-黄橙)(10YR7/2)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器							9/36		
24	35	1K	SK 29	12A	1	土器類	瓶白陶	2層	12.3	0	新津 押(5YR6/6)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器							8/36		
24	36	1K	SK 29	12B	1	土器類	瓶白陶	2層	13.7	1a	新津 仁(4R-黄橙)(10YR7/2)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器							4/36		
24	37	1K	SK 29	12B	1	土器類	瓶白陶			0a	新津 灰(10YR5/1)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器									
24	38	1K	SK 29	12B	1	土器類	瓶白陶			0a	新津 押(5YR6/6)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器	赤切り						4/36		
24	39	1K	SK 29	12A	1	土器類	瓶白陶		6.0	1a	新津 押(5YR6/6)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器	赤切り	右					36/36		
24	40	1K	SK 29	12B	1	土器類	瓶白陶		3.5	1a	新津 仁(4R-黄橙)(5YR6/3)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器	赤切り	右					36/36		
24	41	1K	SK 29	12B	1	土器類	瓶白陶		5.9	0	新津 明赤(5YR5/6)	酸化	ロクロ土器	ロクロ土器	赤切り	右					13/36		

国産/輸入	種別	加工品		種別	説明	分割	重量(kg)	樹高	産地	産地	産地	加工	加工	包装		包装		包装		包装		備考							
		品名	サイズ											内容	内容	内容	内容	内容	内容	内容	内容		内容						
24	42	IK	SK	29	126	1	1.5	樹高	4.4	1a	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右			17/36									
24	43	IK	SK	29	126	1	1.5	樹高	6.7	1a	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右			36/36									
24	44	IK	SK	29	126	1	1.5	樹高	14.6	1a	新津	IC-6A-規格(10YR6/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ					4/36		黒色付着物							
24	45	IK	SK	29	13C	1	1.5	樹高	22.1	1a	新津	IC-6A-規格(5YR6/3)	規格	カキメ	カキメ					5/36									
24	46	IK	SK	29	126	2	1.5	樹高	21.0	1a	新津	IC-6A-規格(5YR6/3)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ					4/36									
24	47	IK	SK	29	126	1	1.5	樹高		1a	新津	標(5YR6/6)	規格	カキメ、タタキメ	カキメ							1.5層物1.5層							
24	48	IK	SK	29	126	1	1.5	樹高		1a	新津	標(5YR6/6)	規格	カキメ、タタキメ	カキメ							1.5層物1.5層							
24	49	IK	SK	29	12A	1	1.5	樹高	8.0	1a	新津	真白(10YR7/1)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ							2.36							
24	50	IK	SK	29	12B	1	1.5	樹高	12.3	7.4	2.8	2.3	60	1a	小島	真白(7.5Y6/1)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ							黒青・12B黒青			
25	51	IK	SD	34	156	1	1.5	樹高	12.9	4.7	4.2	33	36	1a	新津	真黒藍(10YR6/2) 藍(10YR5/1)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右			34/36	36/36	35/36	黒色付着物	黒色付着物	
25	52	IK	SD	34	156	1	1.5	樹高	12.6	12.6				1a	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
25	53	IK	SD	34	156	1	1.5	樹高	12.8	5.5	3.7	29	43	1b	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右			21/36	36/36	28/36			
25	54	IK	SD	34	5B	1	1.5	樹高	13.0	4.8	4.1	32	37	1a	新津	真黒藍(10YR6/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ									黒色付着物	
25	55	IK	SD	34	156	1	1.5	樹高	12.9					1a	新津	標(5YR6/6)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
25	56	IK	SD	34	140	1	1.5	樹高	12.0					1b	新津	IC-6A-規格(5YR6/3)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
25	57	IK	SD	34	140	1	1.5	樹高	11.9					1b	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
25	58	IK	SD	34	156	1	1.5	樹高	12.0	5.3	4.4	34	41	1b	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右			23/36	36/36	29/36			
25	59	IK	SD	34	126	1	1.5	樹高	17.0					1a	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
25	60	IK	SD	34	140,15A	1	1.5	樹高	16.3	6.1	5.2	32	37	1a	新津	IC-6A-規格(5YR6/3)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右			7/36	36/36	21/36			
25	61	IK	SD	34	136	1	1.5	樹高	14.0					1a	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
25	62	IK	SD	34	140	1	1.5	樹高	14.0					1a	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
25	63	IK	SD	34	156	1	1.5	樹高	14.3	5.0	5.4	38	35	1a	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右			22/36	36/36	29/36			
25	64	IK	SD	34	156	1	1.5	樹高	5.0					1a	新津	IC-6A-規格(5YR6/3)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
25	65	IK	SD	34	140	1	1.5	樹高	6.1					1a	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右								
25	66	IK	SD	34	156	1	1.5	樹高	4.6					1a	新津	真黒藍(10YR6/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右								
25	67	IK	SD	34	136	1	1.5	樹高	5.2					1b	新津	標(5YR6/6)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右								
25	68	IK	SD	34	15A	1	1.5	樹高	6.0					1a	新津	真黒藍(2.5Y4/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右								
25	69	IK	SD	34	156	1	1.5	樹高	19.3	7.8	7.8	40	40	1a	新津	真白(10YR7/1)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右			9/36			黒色付着物	黒色付着物	
25	70	IK	SD	34	136	1	1.5	樹高	15.0					1b	新津	標(5YR6/6)	規格	カキメ、タタキメ	カキメ										
25	71	IK	SD	34	166	1	1.5	樹高	16.0					1b	新津	藍黒藍(2.5Y4/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
25	72	IK	SD	34	140	1	1.5	樹高						1a	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
25	73	IK	SD	34	156	1	1.5	樹高	7.0					1b	新津	真白(10YR7/1)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右								
25	74	IK	SD	34	140	1	1.5	樹高	7.2					1a	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右								
25	75	IK	SD	34	156	1	1.5	樹高	7.2					1a	新津	標(5YR6/6)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ	裏面	右								
26	76	IK	SD	34	136,15B	1	1.5	樹高	14.0					1b	新津	IC-6A-規格(10YR7/2) 標(5YR6/6)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
26	77	IK	SD	34	140	1	1.5	樹高	16.6					1a	新津	IC-6A-規格(5YR6/4)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
26	78	IK	SD	34	15A	1	1.5	樹高	16.5					1a	新津	IC-6A-規格(5YR6/3)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
26	79	IK	SD	34	136	1	1.5	樹高	21.4					1b	新津	標(5YR6/6)	規格	ロクロナデ	ロクロナデ										
26	80	IK	SD	34	136	1	1.5	樹高	20.9					1a	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	カキメ	カキメ										
26	81	IK	SD	34	136	1	1.5	樹高	24.9					1b	新津	標(5YR6/6)	規格	カキメ	カキメ										
26	82	IK	SD	34	140	1	1.5	樹高	24.0					1a	新津	標(5YR6/6)	規格	カキメ	カキメ										
26	83	IK	SD	34	15A	1	1.5	樹高	20.0					1b	新津	IC-6A-規格(10YR7/2)	規格	カキメ	カキメ、ロクロナデ										
26	84	IK	SD	34	15A	1	1.5	樹高	23.0					1a	新津	標(5YR6/6)	規格	カキメ	カキメ										
26	85	IK	SD	34	136	1	1.5	樹高	22.3					1b	新津	標(5YR6/6)	規格	カキメ、裏面にして半割	カキメ										
26	86	IK	SD	34	140	1	1.5	樹高	25.2					1a	新津	標(5YR6/6)	規格	カキメ	カキメ										
26	87	IK	SD	34	166,14B	1	1.5	樹高	25.0					1a	新津	標(5YR6/6)	規格	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ										
26	88	IK	SD	34	136	1	1.5	樹高	25.5					1a	新津	真黒藍(10YR6/2)	規格	カキメ、ロクロナデ	ロクロナデ										
26	89	IK	SD	34	136	1	1.5	樹高	23.0					1a	新津	IC-6A-規格(10YR6/2)	規格	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ										
27	90	IK	SD	34	126	1	1.5	樹高						1a	新津	IC-6A-規格(10YR7/2) 藍(10YR5/1)	規格	カキメ、タタキメ	ロクロナデ										







別表3 土製品・石製品・金属製品観察表

図録No	発掘 跡地	区	出土位置		単位	時代	器種	石種	法			備考	
			層深	ウツロシ					長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)		重量(g)
34	1	254	42A	Ⅲ	古代・中世	瓶口		33.50+	27.00+	13.00	13.85		
34	2	254	54B	Ⅲ	古代・中世	管状土罐		47.50+	6.50	2.00	3.67	動土1a層	
34	3	116	17C	Ⅲ	古代・中世	管状土罐		47.50+	9.00	4.00	4.50	動土1a層	
34	4	254	37B	Ⅲ	古代・中世	管状土罐		30.00+	7.00	3.00	2.36	動土1a層	
34	5	254	43B	Ⅲ	古代・中世	管状土罐		23.00+	8.00	2.00	1.37	動土1a層	
34	6	254	30A	Ⅲ	古代・中世	管状土罐		26.00+	9.50	3.00	3.00	動土1a層	
34	7	254	43A	Ⅲ	古代・中世	管状土罐		28.00+	9.00	3.50	3.17	動土1a層	
34	8	254	42A	Ⅲ	古代・中世	瓶底刻字瓦		46.50	40.00	22.00	24.85	動土1a層	
34	9	254	49B	Ⅲ	古代・中世	瓶底刻字瓦		41.00	35.00	14.50	25.19	動土1a層	
34	10	254	114B	Ⅲ	古代・中世	瓶底石	灰石	53.00+	23.00	20.00	42.00		
34	11	116	9B	Ⅲ	古代・中世	瓶底石	灰石	41.00+	41.00	22.50	48.83		
34	12	254	SX 188A	7	中世	瓶底石	灰石	72.00+	51.00	32.00	104.87		
34	13	116	12B,14B	Ⅲ	古代・中世	瓶底石	灰石	40.00+	38.00	14.50	31.26		
34	14	116	10A	Ⅲ	古代・中世	瓶底石	灰石	77.50	42.00	22.50	76.28		
34	15	254	83A	Ⅲ	古代・中世	瓶底石	陶磁質	125.00+	60.00+	37.00	274.04		
34	16	116	14B	Ⅲ	古代・中世	磨石	砂岩	137.00	106.00	57.00	144.09	磨石・スス付着	
34	17	116	13B	Ⅲ	古代・中世	磨石	砂岩	102.00+	83.00+	43.50+	400.77	磨石・スス付着	
34	18	254	SD 171	5B3	3	中世	磨石	砂岩	93.50	60.00	45.00	72.77	アスファルト付着
34	19	116	SD 34	16A	1	古代	磨石	186.00	27.00	17.00	140.98		
34	20	254	37A	Ⅲ	古代	鉄片		78.10+	33.10	20.40	23.42		
34	21	254	50A	Ⅲ	中世	鉄片		25.00		1.00	2.67	天智元年(約第1023年)	
34	22	254	Ph 136	50A	2	中世	鉄片	24.00	1.00	2.75	天智元年(約第1068年)		
34	23	254	50A	Ⅲ	中世	鉄片	26.00	1.00	3.30	天智元年(約第1078年)			
34	24	254	50A	Ⅲ	中世	鉄片	25.00	1.00	1.67	天智元年(約第1078年)			
34	25	254	50A	Ⅲ	中世	鉄片	24.00	1.50	2.97	天智元年(約第1066年)			
34	26	254	50A	Ⅲ	中世	鉄片	26.00	1.50	3.23	天智元年(約第1086年)			
写真掲載 跡地-27	254	37B	Ⅲ	古代・中世	輪形印		6.50	1.40	0.20				

別表4 木製品観察表

図録 No	発掘 跡地	区	出土位置		単位	時代	器種	素材	形状	本取り	分類	法		備考		
			層深	ウツロシ								長さ(cm)	幅(cm)			
35	1	408	5E, 417	110B	3	古代	木製	スズ	板目			26.3	2.8	2.1		
35	3	408	5E 418	120B	16	中世	木製	スズ	板目			26.6	7.5	4		
35	3	408	5E 418	120B	16	中世	木製	葎	針葉樹	板目		18.8	0.6	0.3		
35	4	408	5E 418	120B	16	中世	木製	葎	針葉樹	板目		7.6	0.6	0.4		
35	5	408	5E 418	120B	16	中世	木製	葎	針葉樹	板目		3.9	0.5	0.5		
35	6	116	Ph 27	13A		古代	漆	漆器	板目			22.2	15.8	4.7		
35	7	408	Ph 372	112A		中世	木製	コナラ	丸木			19.8	16.7	8.3		
35	8	408	Ph 359	109B		古代	木製	コナラ	丸木			55.2	16.7			
35	9	408	Ph 367	111A		古代	木製	クワ	丸木			64.6	12.8			
36	13	254	Ph 69	37B		古代	木製	カツラ	丸木			72.3	14.9			
36	11	254	Ph 106	45A		古代	木製	カツラ	丸木			66.8	14.6			
36	12	408	Ph 326	116A		古代・中世	木製	カツラ	丸木			51.0	18.0			
36	13	408	Ph 392	120B		古代・中世	木製	クワ	丸木			52.8	14.6			
37	14	408	5E 418	120B	14	中世	漆物	スズ	板目	タビキ2層		121.7	0.3	-0.2	漆物No.1	
37	15A	408	5E 418	120B	14	中世	漆物	葎	針葉樹	板目	タビキ1層	160.9	11.8	0.1	-0.3	漆物No.1
37	15B	408	5E 418	120B	14	中世	漆物	葎	針葉樹	板目	タビキ3層	160.0	12.4	0.3	-0.7	漆物No.1
37	16A	408	5E 418	120B	15	中世	漆物	葎	針葉樹	板目		165.3	16.6	0.6	0.3	漆物No.2
37	16B	408	5E 418	120B	15	中世	漆物	葎	針葉樹	板目		164.3	17.8	0.4	0.4	漆物No.2
37	16C	408	5E 418	120B	15	中世	漆物	スズ	板目	タビキ1層		162.9	16.5	0.3	0.4	漆物No.2
37	16D	408	5E 418	120B	15	中世	漆物	葎	針葉樹	板目	タビキ1層	162.1	16.3	0.5	0.4	漆物No.2
38	17A	408	5E 418	120B	15	中世	漆物	スズ	板目	タビキ2層		164.0	16.2	0.3	-0.5	漆物No.3
38	17B	408	5E 418	120B	15	中世	漆物	葎	針葉樹	板目	タビキ4層	144.4	16.1	0.7	-0.9	漆物No.3
38	18A	408	5E 418	120B	15	中世	漆物	葎	針葉樹	板目	タビキ2層	145.3	16.2	0.2	0.4	漆物No.4
38	18B	408	5E 418	120B	15	中世	漆物	葎	針葉樹	板目	タビキ4層	144.7	16.4	0.6	-0.9	漆物No.4

別表5 遺構出土古代土器種構成表

- 凡 例 1 古代土器(土器類・漆器土器)・新石器時代(新石器)の4つ全ての遺構の構成比率を示した表である。  
2 土器の口縁部は口縁部保存率(宇野1992)とそれに応じた口縁部保存率(宇野)に分断した。併せて口縁部・底面数を示した。  
3 口縁部保存率によって得られた断面は7.36を示し、それを用いて底面数を算出した。

区	遺構	時期	分類	器種	新石器				新石器				新石器				合計
					土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
408	No. 417	Ⅲ	古代	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
408	No. 389	Ⅲ	中世	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
408	No. 418	Ⅲ	中世	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
116	SX 1	Ⅲ	古代	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
116	SX 6	Ⅲ	古代	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	
				新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	土器類	漆器土器	新石器	新石器	







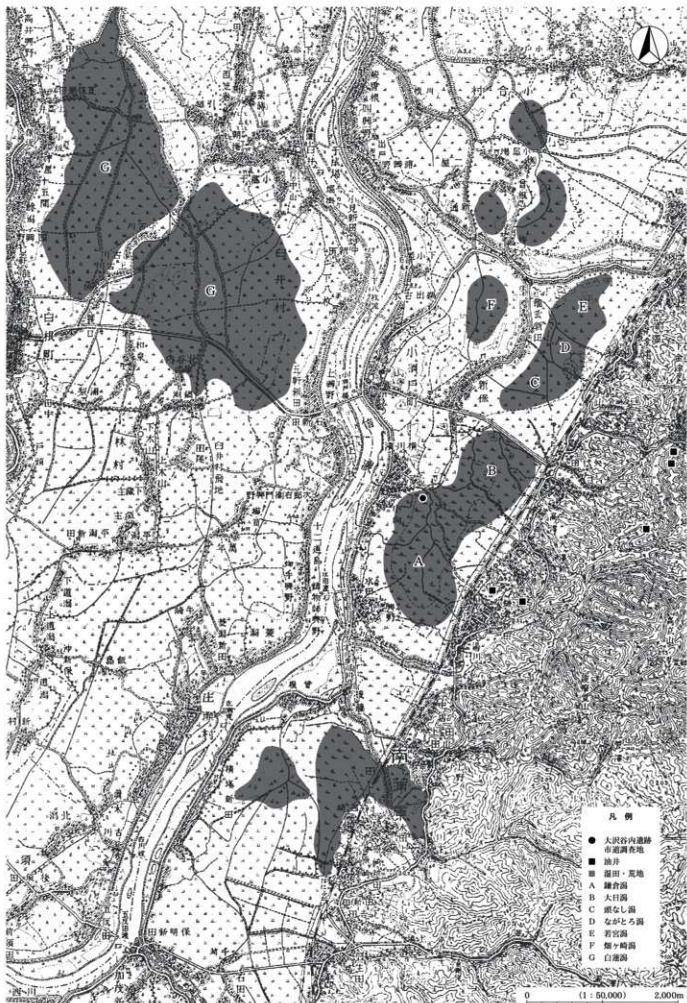




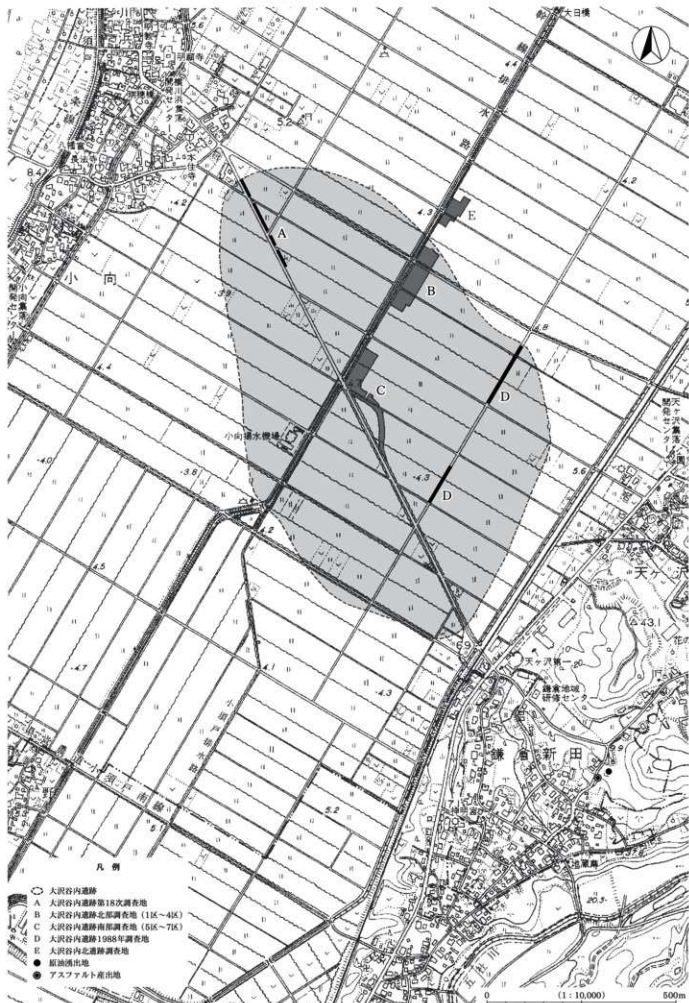
次	通称	类别	分期	用途	类 别 目 录					款 项 目			部 门 目 录			合 计		
					上 级 目 录	基 本 上 级	类 别 目 录	基 本 类 别	部 门 目 录	部 门	款 项	上 级 目 录	部 门	款 项	部 门 目 录	部 门	合 计	合 计
				计划外													0.08	100.0%
				计划内													1	100.0%
438	YH 337		1-4	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
439	YH 338		1-4	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
440	YH 339		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
441	YH 340		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
442	YH 341		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
443	YH 342		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
444	YH 343		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
445	YH 344		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
446	YH 345		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
447	YH 346		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
448	YH 347		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
449	YH 348		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
450	YH 349		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
451	YH 350		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
452	YH 351		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
453	YH 352		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
454	YH 353		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
455	YH 354		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
456	YH 355		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
457	YH 356		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
458	YH 357		11	计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
459	YH 372		11	计划外													0.26	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													1	100.0%
				计划内													1	100.0%
				计划外													0.7	100.0%

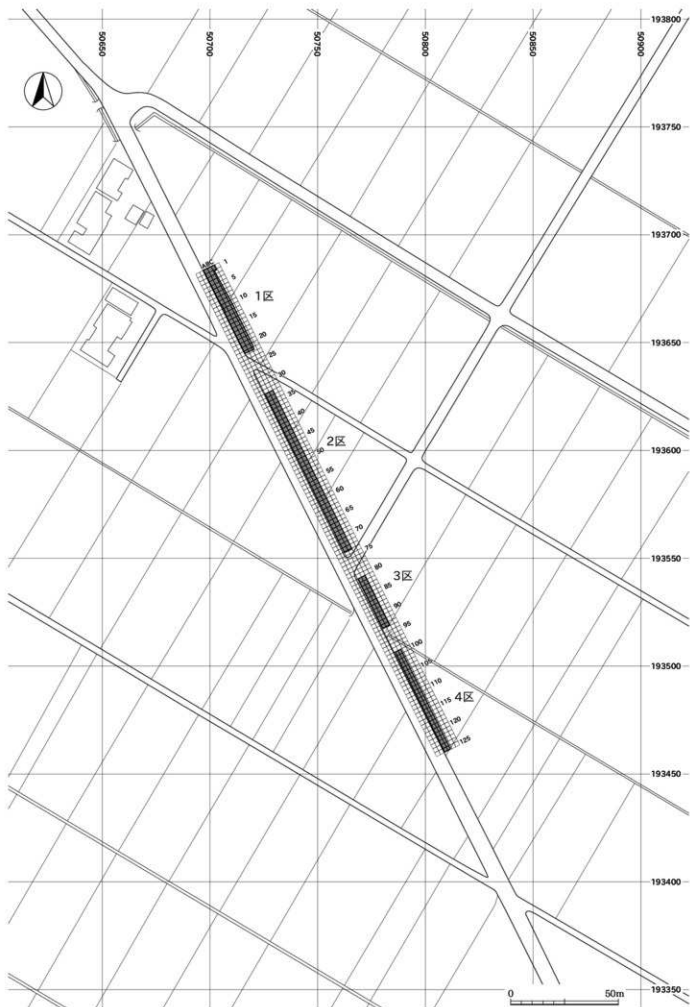


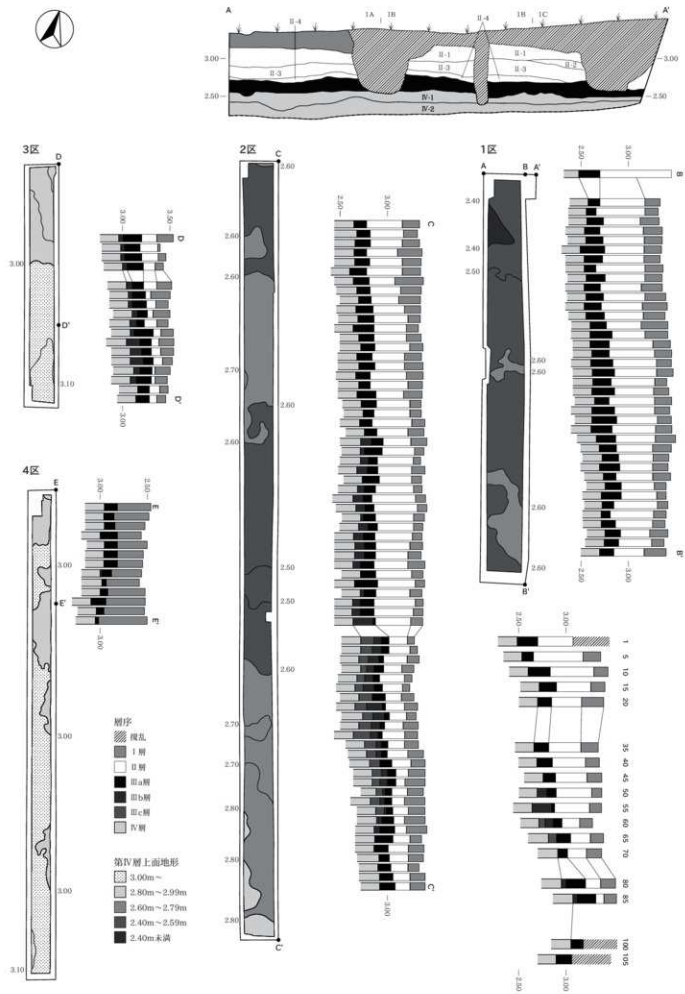
## 圖 版







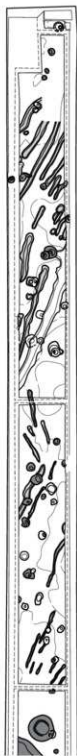
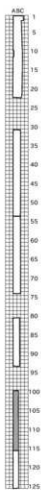
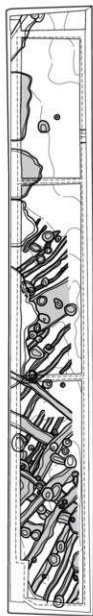
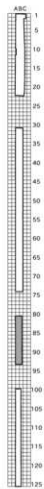




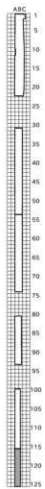
4区北部



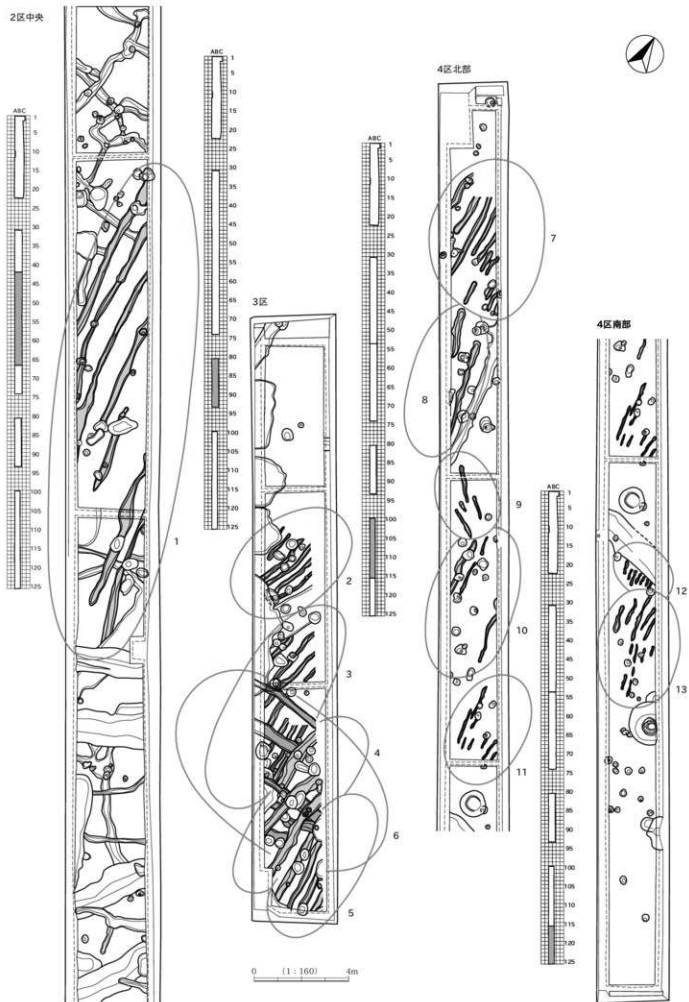
3区



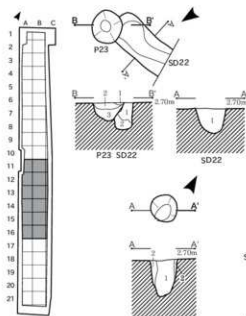
4区南部



- 層土Ⅰ (古代)
- 層土Ⅱ (古代～中世)
- 層土Ⅲ (中世)



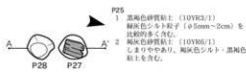




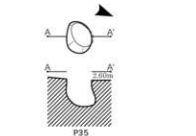
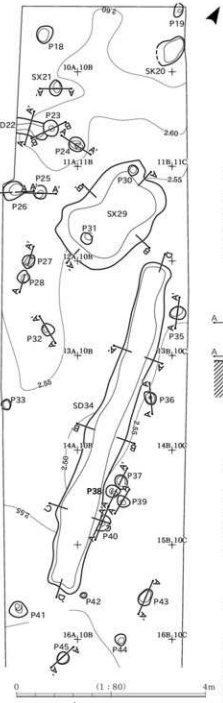
- SD22**
- 1 黒褐色粘土 (10YR3/3) しまりや中あり、シルト粒子 (φ5mm前後) を多量に含む。
  - 2 黒褐色シルト (10YR5/1) しまりや中あり、黒褐色粘土ブロック (φ3cm~5cm) を少量含む。
- P23**
- 1 黒褐色砂質粘土 (10YR4/1) しまりなし、黒褐色シルトブロック (φ3cm~5cm) を含む。
  - 2 黒褐色砂質粘土 (10YR3/1) しまりや中あり、黒褐色シルトブロック (φ3cm前後) を含む。
  - 3 黒褐色砂質粘土 (10YR3/1) しまりや中あり、黒褐色シルトブロック (φ3cm~5cm) を少量含む。



- SX21**
- 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) しまりや中あり、黒褐色シルトブロック (φ5mm~3cm) を少量含む。
  - 2 黒褐色砂質粘土 (10YR5/1) しまりなし、1層を含む。



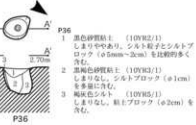
- P25**
- 1 黒褐色砂質粘土 (10YR3/1) 黒褐色シルト粒子 (φ5mm~2cm) を少量含む。
  - 2 黒褐色砂質粘土 (10YR5/1) しまりや中あり、黒褐色シルト・黒褐色粘土を含む。
- P26**
- 1 黒褐色粘土 (10YR2/1) しまりや中あり、黒褐色シルトブロック (φ3cm) を多量に含む。
  - 2 黒褐色砂質粘土 (10YR3/1) しまりなし、黒褐色シルト・黒褐色粘土を含む。
- P27**
- 1 黒褐色砂質粘土 (10YR3/1) しまりなし、黒褐色シルト粒子 (φ5mm) を少量含む。
  - 2 黒褐色砂質粘土 (10YR5/1) しまりや中あり、黒褐色シルト・黒褐色粘土を含む。



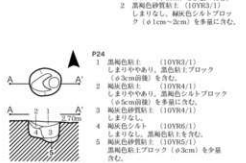
- P35**
- 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) しまりや中あり、シルト粒子シルトブロック (φ5mm~3cm) を比較的多く含む。
  - 2 黒褐色砂質粘土 (10YR4/1) しまりなし、シルトブロック (φ3cm前後) を少量含む。
  - 3 黒褐色シルト (10YR5/1) しまりなし、粘土ブロック (φ2cm) を含む。



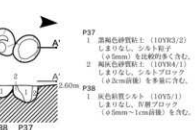
- P28**
- 1 黒褐色粘土 (10YR2/1) しまりや中あり、黒褐色シルトブロック (φ3cm) を多量に含む。
  - 2 黒褐色砂質粘土 (10YR3/1) しまりなし、黒褐色シルト・黒褐色粘土を含む。
- P27**
- 1 黒褐色砂質粘土 (10YR3/1) しまりなし、黒褐色シルト粒子 (φ5mm) を少量含む。
  - 2 黒褐色砂質粘土 (10YR5/1) しまりや中あり、黒褐色シルト・黒褐色粘土を含む。



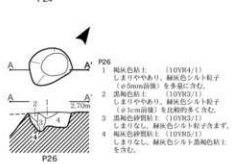
- P36**
- 1 黒褐色砂質粘土 (10YR3/1) しまりや中あり、シルト粒子シルトブロック (φ5mm~3cm) を比較的多く含む。
  - 2 黒褐色砂質粘土 (10YR4/1) しまりなし、シルトブロック (φ3cm前後) を少量含む。
  - 3 黒褐色シルト (10YR5/1) しまりなし、粘土ブロック (φ2cm) を含む。
- P37**
- 1 黒褐色砂質シルト (10YR5/1) しまりなし、粘土ブロック (φ5mm~1cm前後) を含む。



- P24**
- 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) しまりや中あり、黒褐色シルトブロック (φ3cm前後) を含む。
  - 2 黒褐色粘土 (10YR4/1) しまりや中あり、黒褐色シルトブロック (φ5cm前後) を多量に含む。
  - 3 黒褐色砂質粘土 (10YR4/1) しまりなし。
  - 4 黒褐色シルト (10YR5/1) しまりなし、黒褐色粘土を含む。
  - 5 黒褐色砂質粘土 (10YR5/1) 黒褐色シルトブロック (φ3cm) を少量含む。



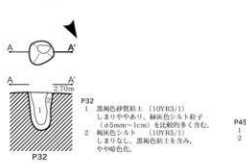
- P38**
- 1 黒褐色シルト (10YR5/1) しまりなし、粘土ブロック (φ3cm前後) を含む。
- P39**
- 1 黒褐色砂質シルト (10YR5/1) しまりや中あり、粘土ブロック (φ3cm前後) を含む。
  - 2 黒褐色砂質シルト (10YR5/1) しまりあり、1層を構成に含む。



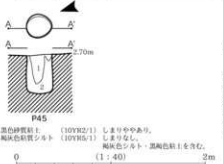
- P26**
- 1 黒褐色粘土 (10YR4/1) しまりや中あり、黒褐色シルト粒子 (φ5mm前後) を多量に含む。
  - 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) しまりや中あり、黒褐色シルト粒子 (φ3~5mm前後) を比較的多く含む。
  - 3 黒褐色砂質粘土 (10YR3/1) しまりなし。
  - 4 黒褐色砂質粘土 (10YR5/1) しまりなし、黒褐色シルト・黒褐色粘土を含む。



- P39**
- 1 黒褐色砂質シルト (10YR5/1) しまりや中あり、粘土ブロック (φ3cm前後) を含む。
  - 2 黒褐色砂質シルト (10YR5/1) しまりあり、1層ブロック (5mm前後) を含む。
- P40**
- 1 黒褐色砂質シルト (10YR4/1) しまりや中あり、粘土ブロック (φ3cm前後) を少量含む。
  - 2 黒褐色砂質シルト (10YR5/1) しまりあり、1層ブロック (5mm前後) を含む。



- P32**
- 1 黒褐色砂質粘土 (10YR3/1) しまりや中あり、黒褐色シルト粒子 (φ5mm~1cm) を比較的多く含む。
  - 2 黒褐色シルト (10YR5/1) しまりなし、黒褐色粘土を含む、中々暗色含む。



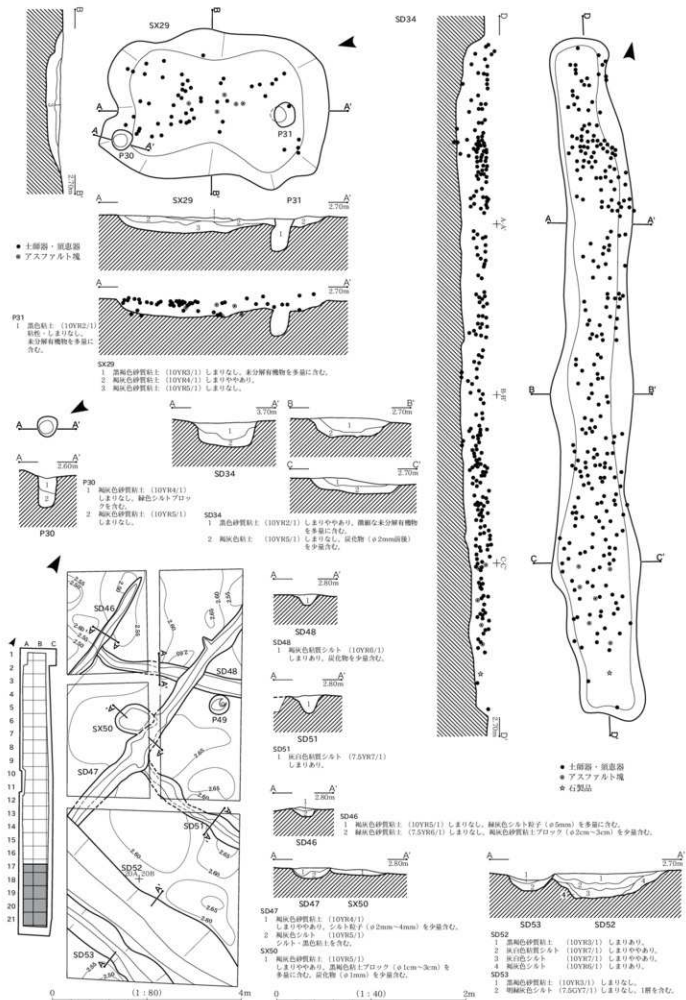
- P45**
- 1 黒褐色砂質粘土 (10YR2/1) しまりや中あり、黒褐色シルト・黒褐色粘土を含む。
  - 2 黒褐色砂質シルト (10YR5/1) しまりなし、黒褐色シルト・黒褐色粘土を含む。



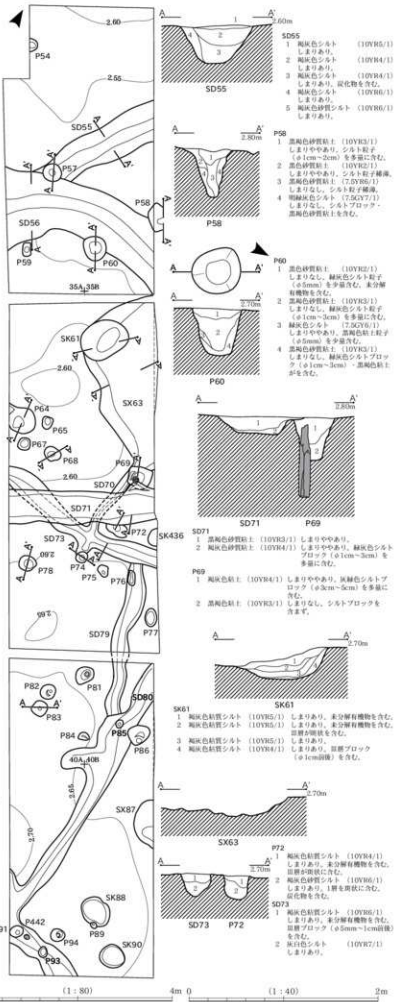
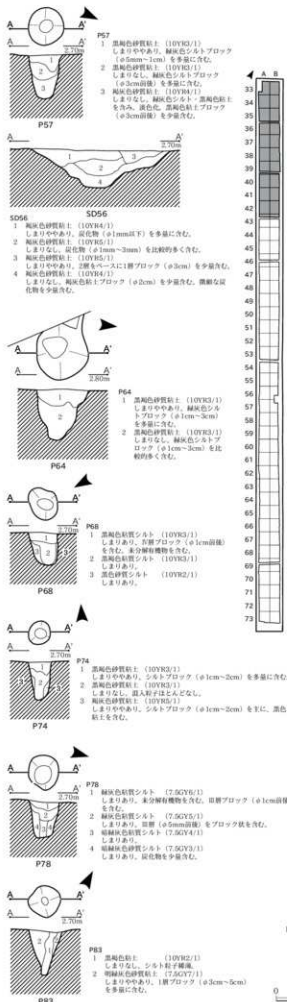
- P41**
- 1 黒褐色砂質シルト (10YR5/1) しまりや中あり、粘土ブロック (φ3cm前後) を含む。
- P42**
- 1 黒褐色砂質シルト (10YR5/1) しまりや中あり、粘土ブロック (φ3cm前後) を含む。



- P43**
- 1 黒褐色砂質シルト (10YR4/1) しまりや中あり、多量のシルト粒子 (φ5mm前後) と少量の黒褐色粘土ブロック (φ3cm~3cm) を多量含む。
  - 2 黒褐色シルト (10YR5/1) しまりなし、シルト・黒褐色粘土を含む。



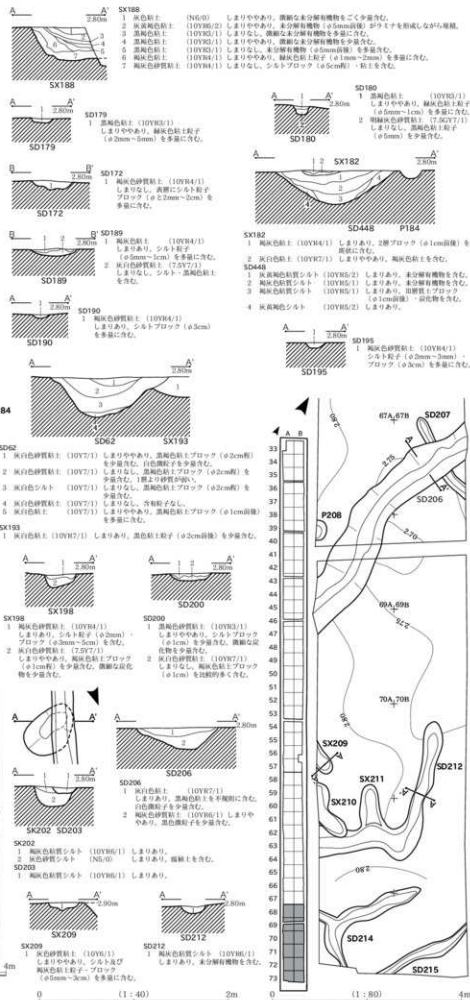
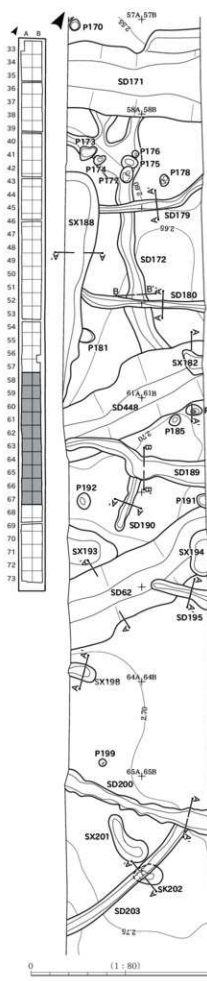




0 (1:80) 4m 0 (1:40) 2m



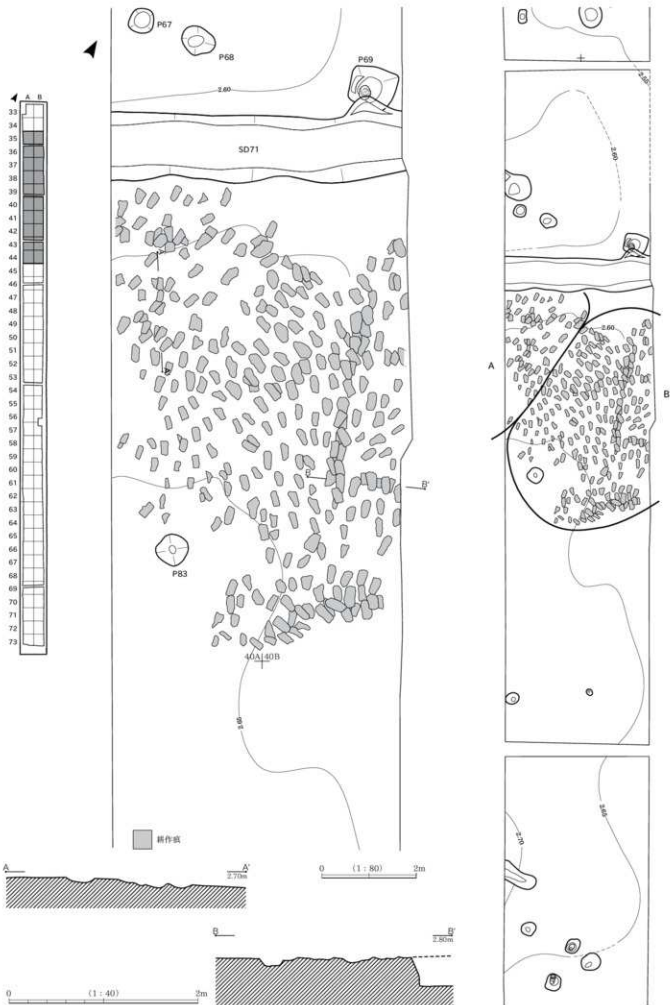




(1:80) 4m

(1:40) 2m

(1:80) 4m

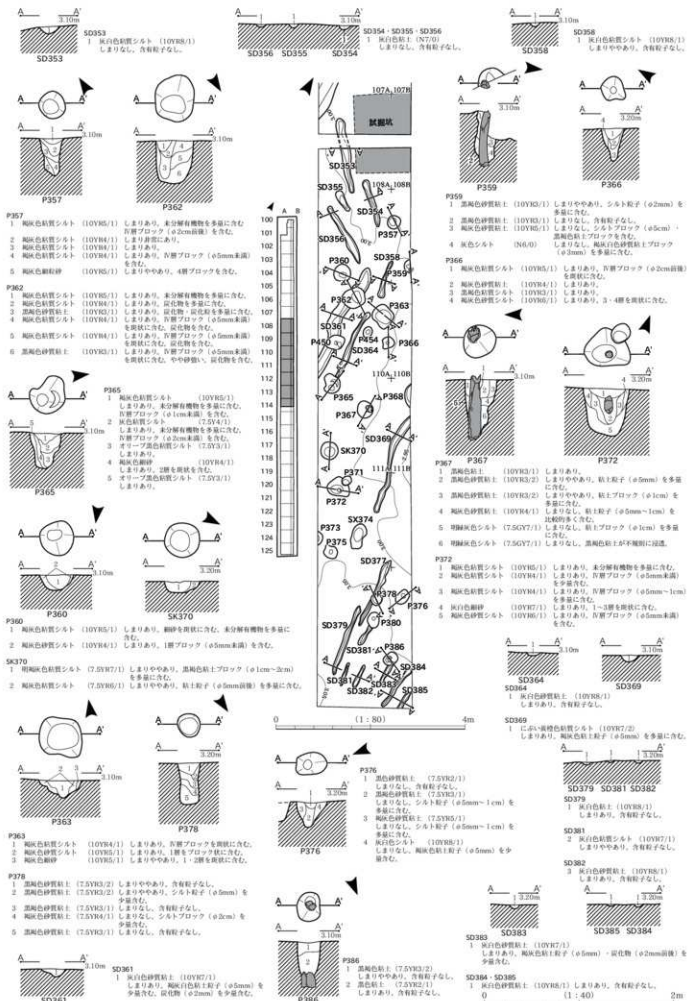


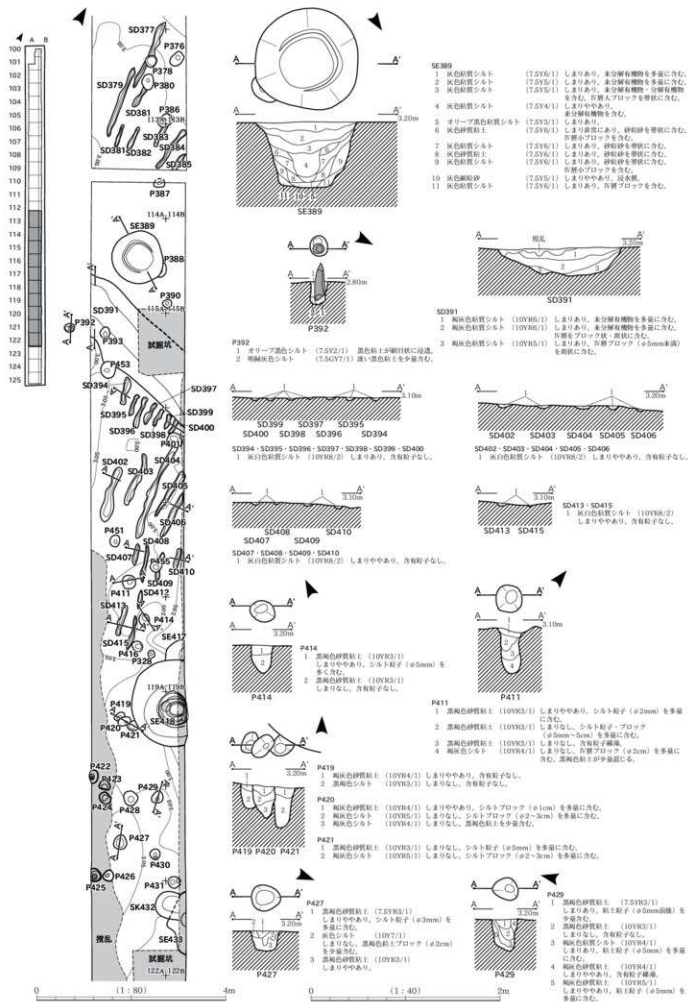




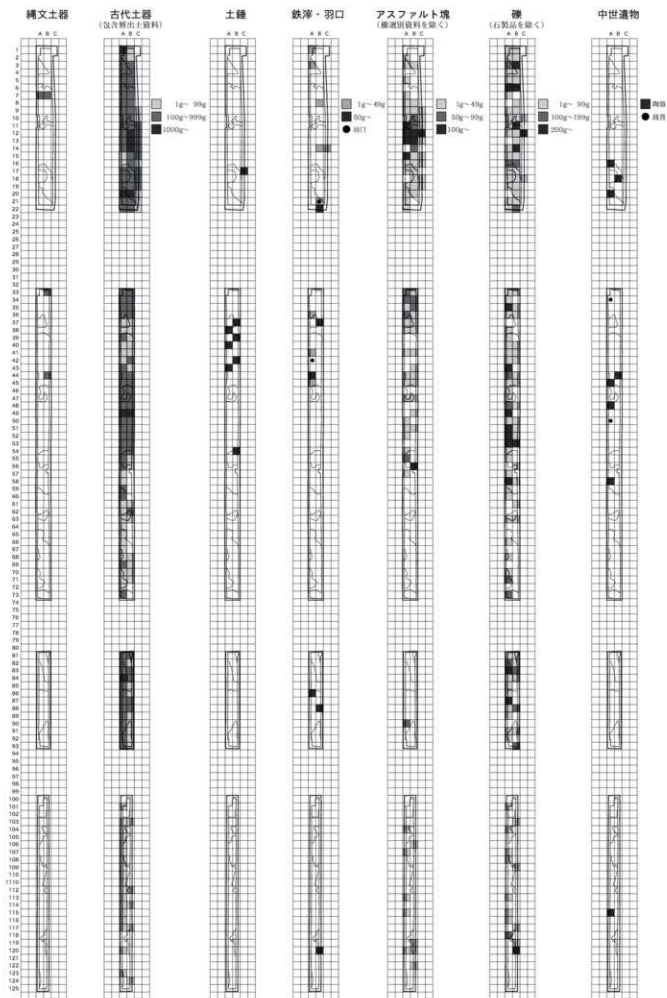


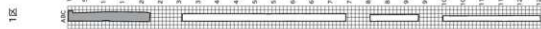
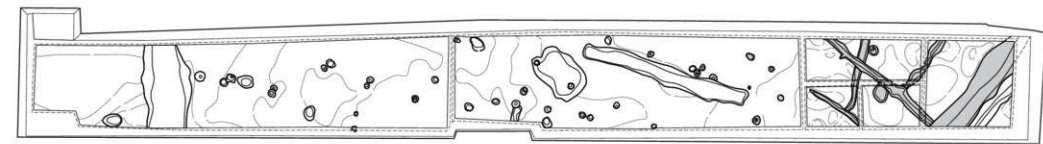
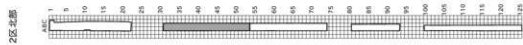
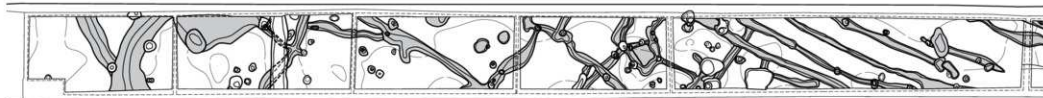
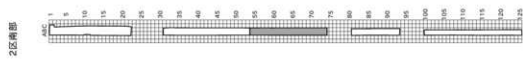
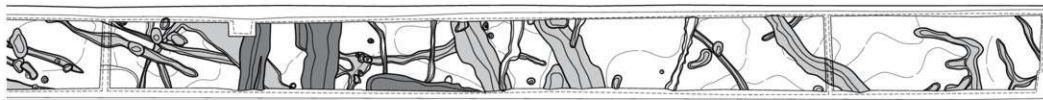




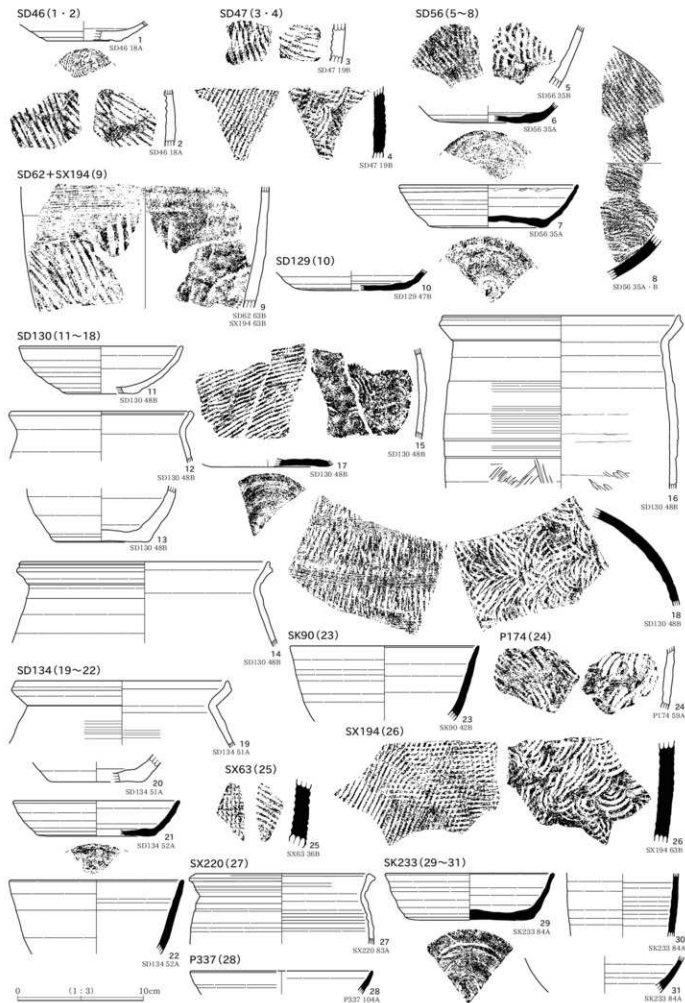




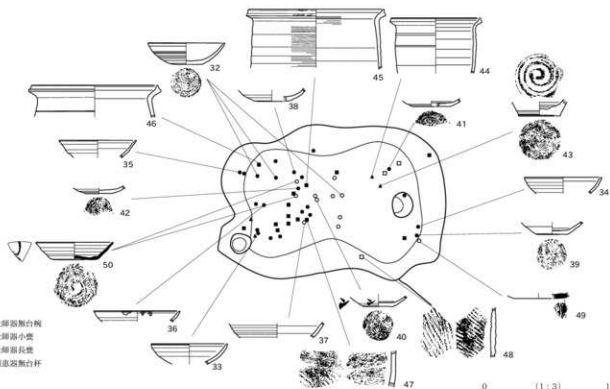
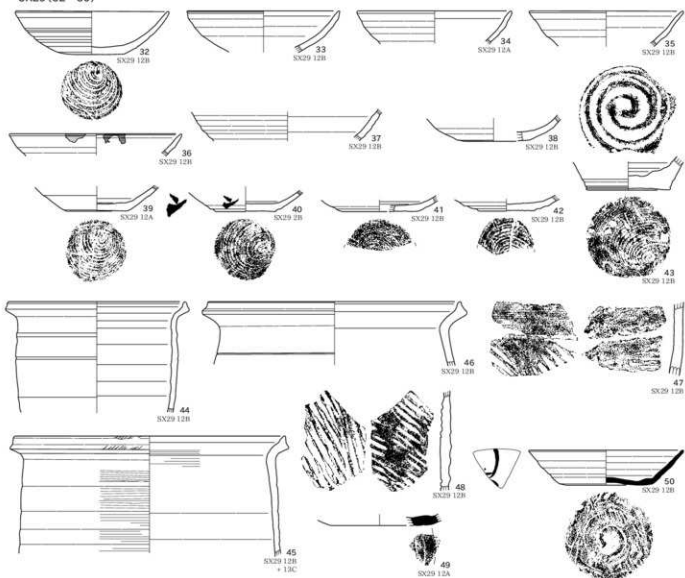




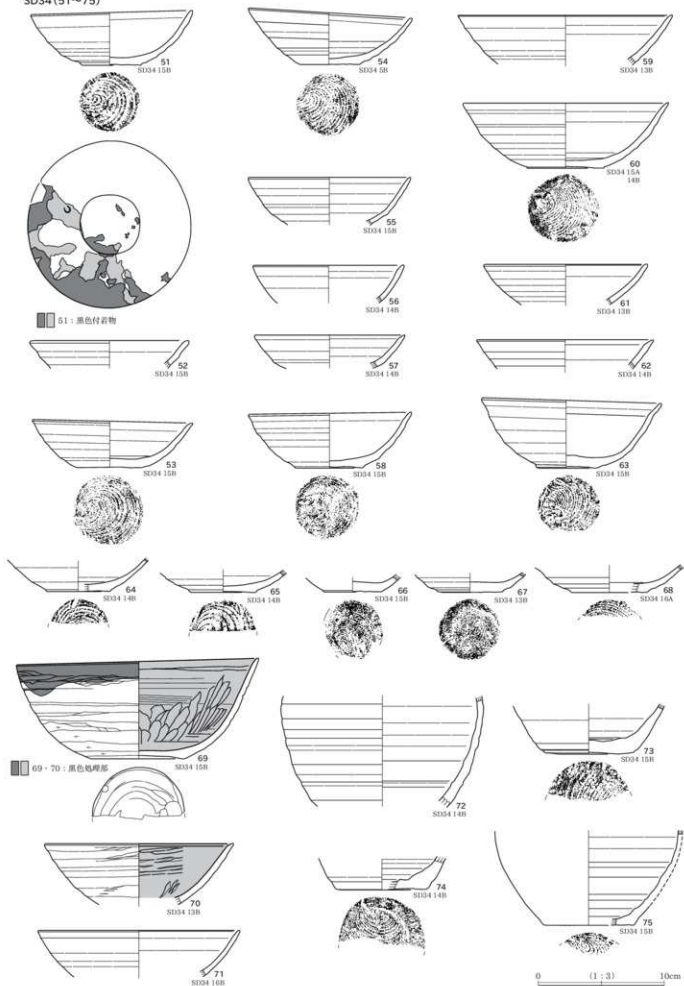
0 10 20 30 40m  
1:100



SX29 (32~50)

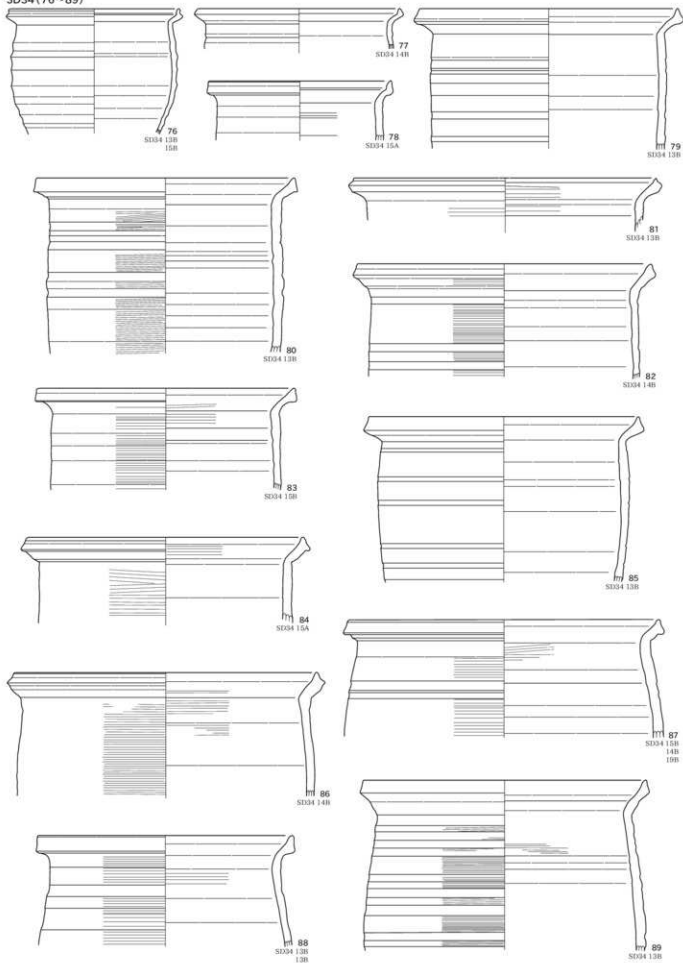


SD34 (51~75)

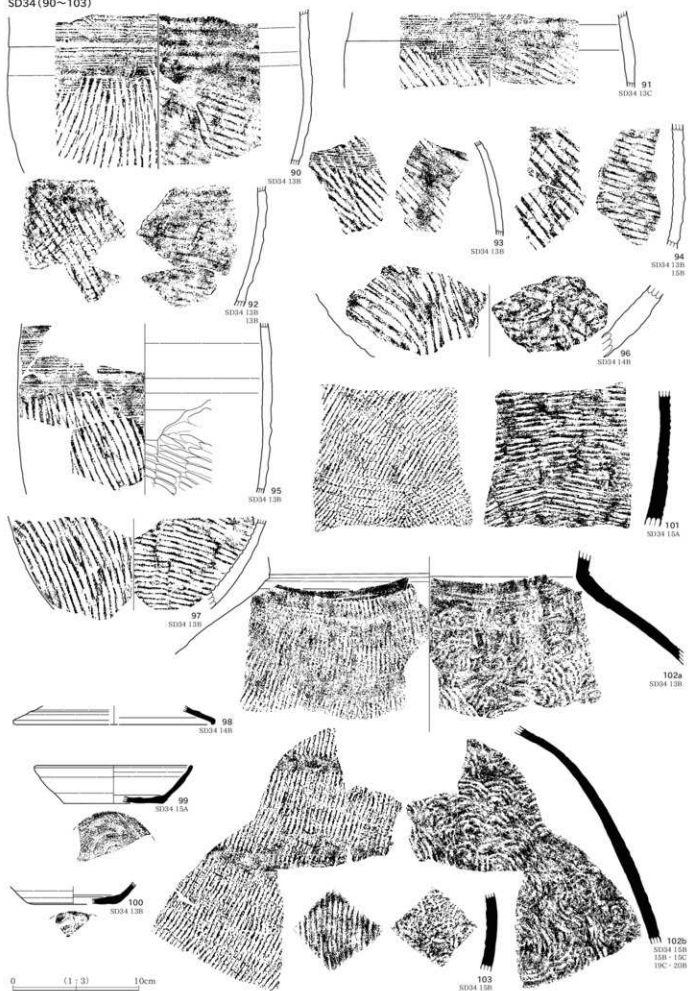


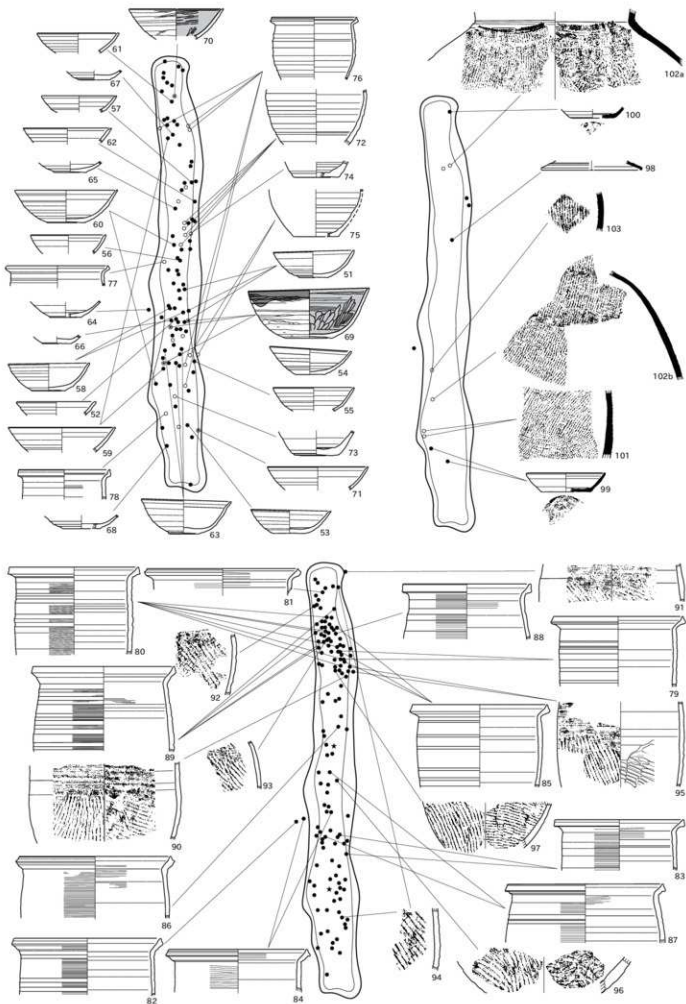


SD34 (76~89)



SD34(90~103)



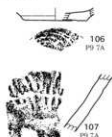


SK1 (104)



104  
SK1 2A  
+2A  
+4A

P9 (106~108)



106  
P9 7A

107  
P9 7A



108  
P9 7A  
+8A

SD22 (105)



105  
SD22 11A

SD53 (109・110)



109  
SD53 21A



110  
SD53 21A

SD71 (111)



111  
SD71 38A

SD218 (112~116)



112  
SD218 81A



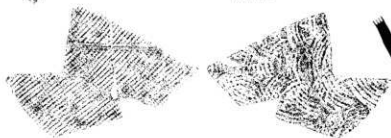
113  
SD218 81A



114  
SD218 81A



115  
SD218 81A



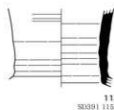
116  
SD218 81A

SK277 (117)



117  
SK277 90B

SD391 (118)



118  
SD391 115A

P311 (119)



119  
P311 101A

SD171 (120~122)



120  
SD171 98A



121  
SD171 98B



122  
SD171 98A

SD168 (123)



123  
SD168 97A



121 : ■ 自然釉 ■ 被刷面

SX188 (124)



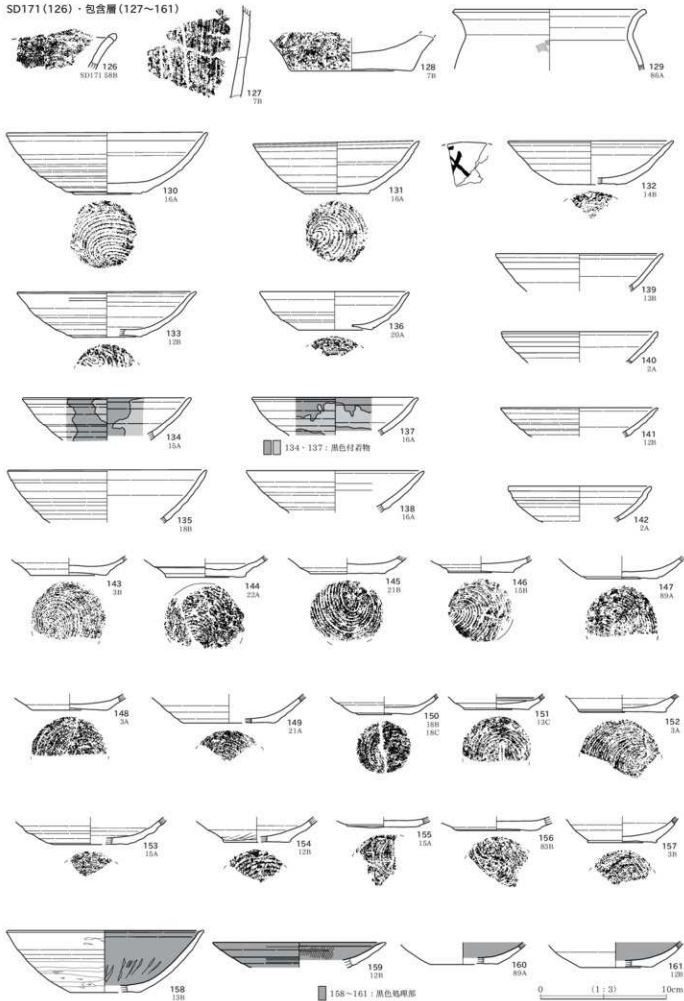
124  
SX188 60A  
60A

SE389 (125)

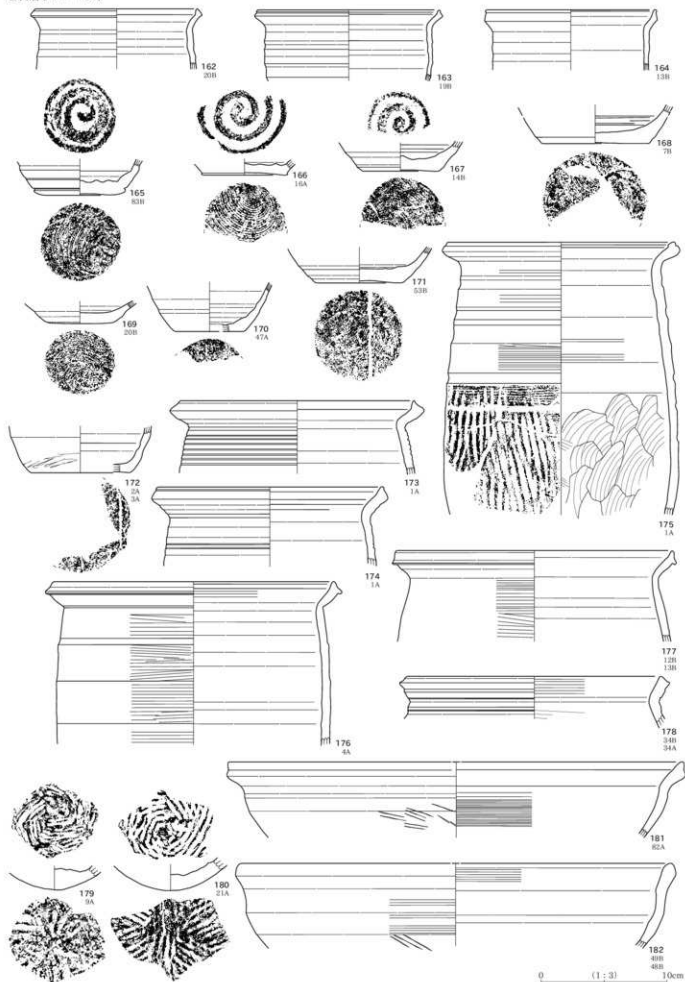


125  
SE389 115A

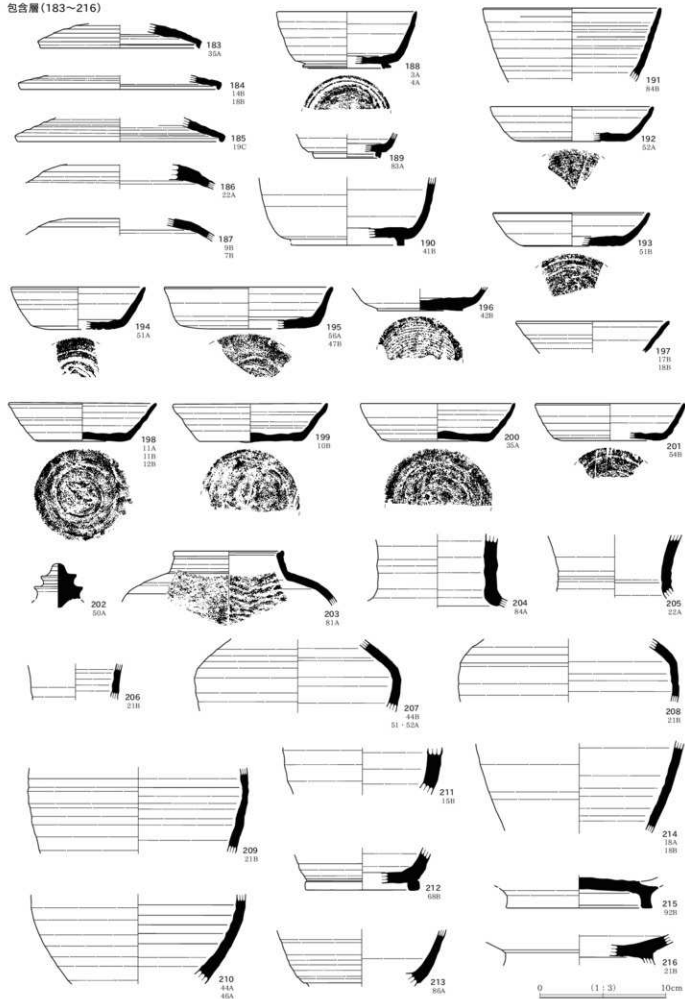
SD171 (126)・包含層 (127~161)



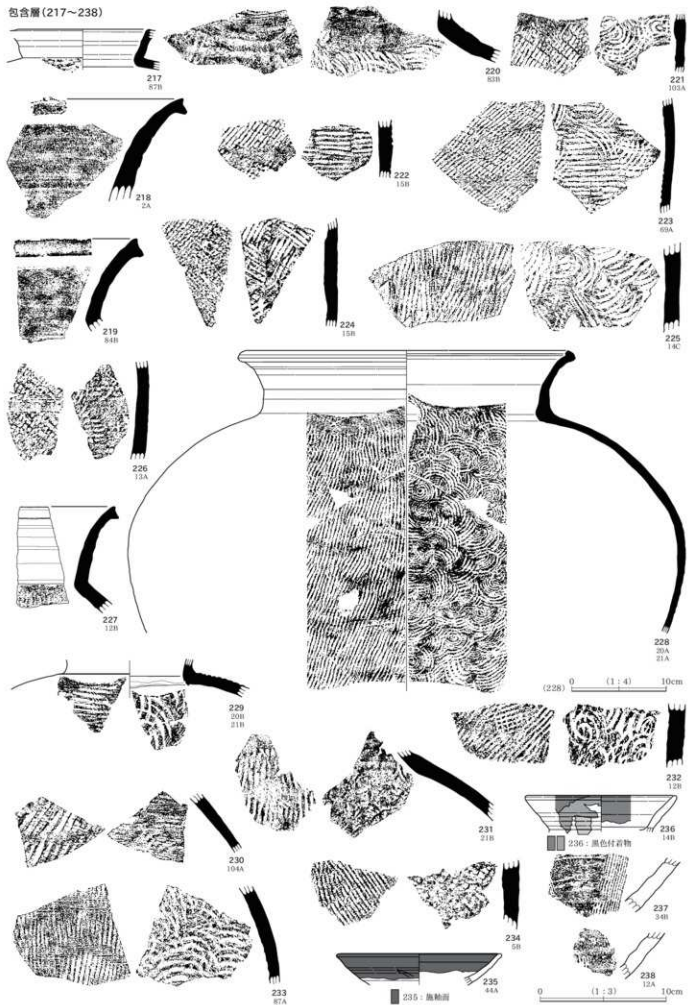
包含層(162~182)



包含層 (183~216)

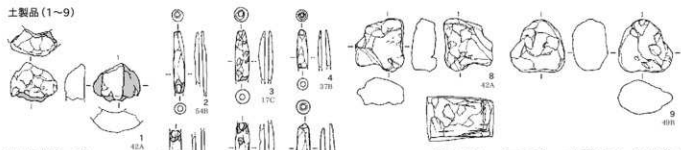


包含層(217~238)

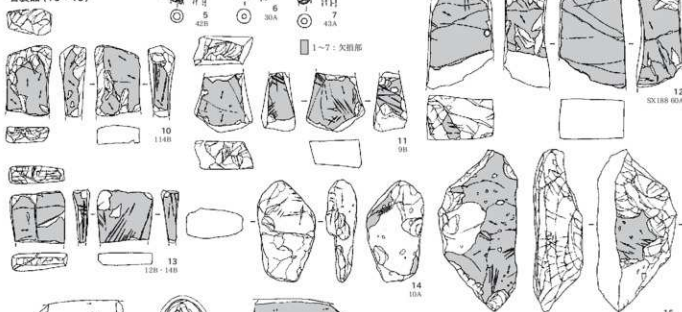




## 土製品 (1~9)

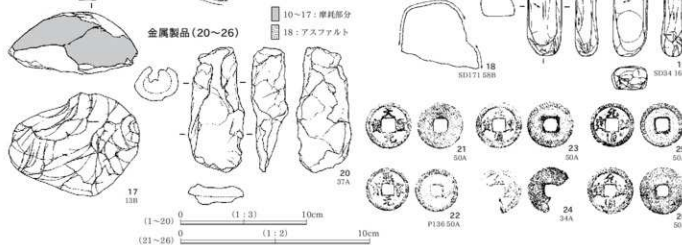


## 石製品 (10~19)



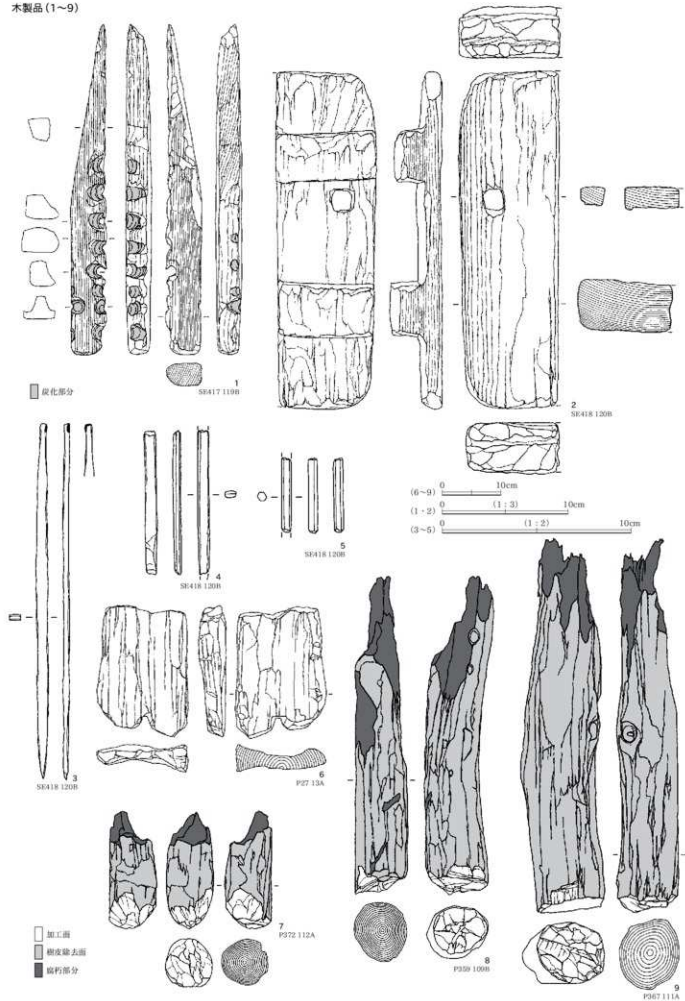
1~7: 欠損部

## 金属製品 (20~26)

10~17: 摩耗部分  
18: アスファルト

(1~20) 0 (1:3) 10cm  
(21~26) 0 (1:2) 10cm

木製品 (1~9)



炭化部分

1  
SE417 1100

2  
SE418 120B

4  
SE418 120H

5  
SE418 120B

3  
SE418 120H

6  
P97 13A

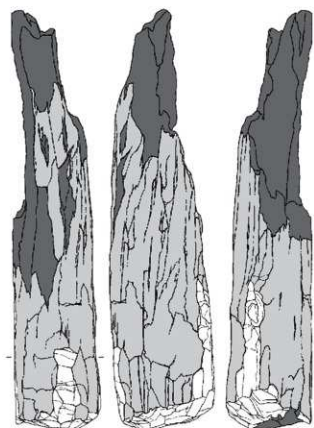
7  
P972 112A

8  
P339 100B

9  
P367 111A

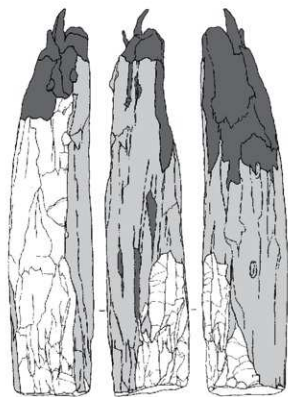
□ 加工面  
■ 樹皮剥去面  
■ 腐朽部分

## 木製品 (10~13)



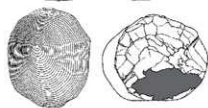
10

P100 375

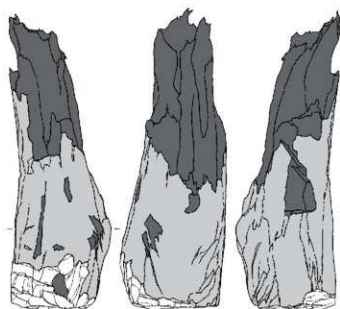


11

P106 45A

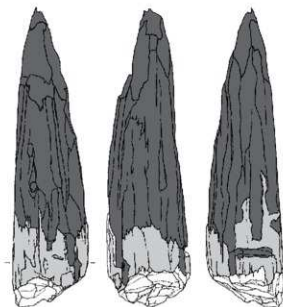


0 (1:8) 20cm



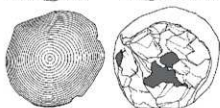
12

P106 116A

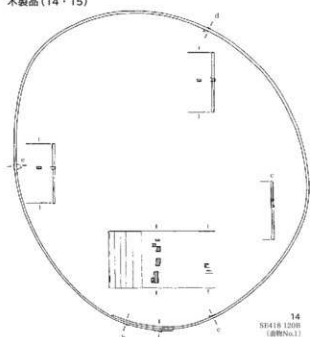


13

P102 120B



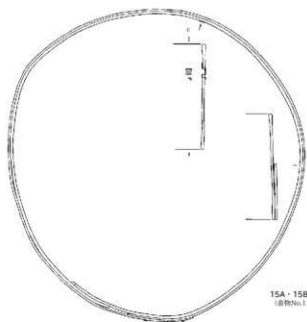
木製品 (14・15)



14  
SE418 120B  
(遺物No.1)



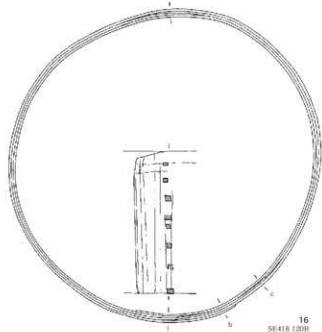
0 (1:8) 20cm



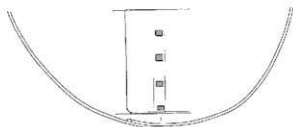
15A・15B  
(遺物No.1)



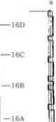
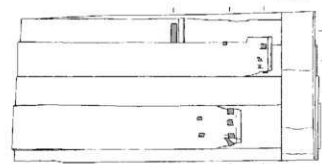
15A  
SE418 120B  
(遺物No.1)



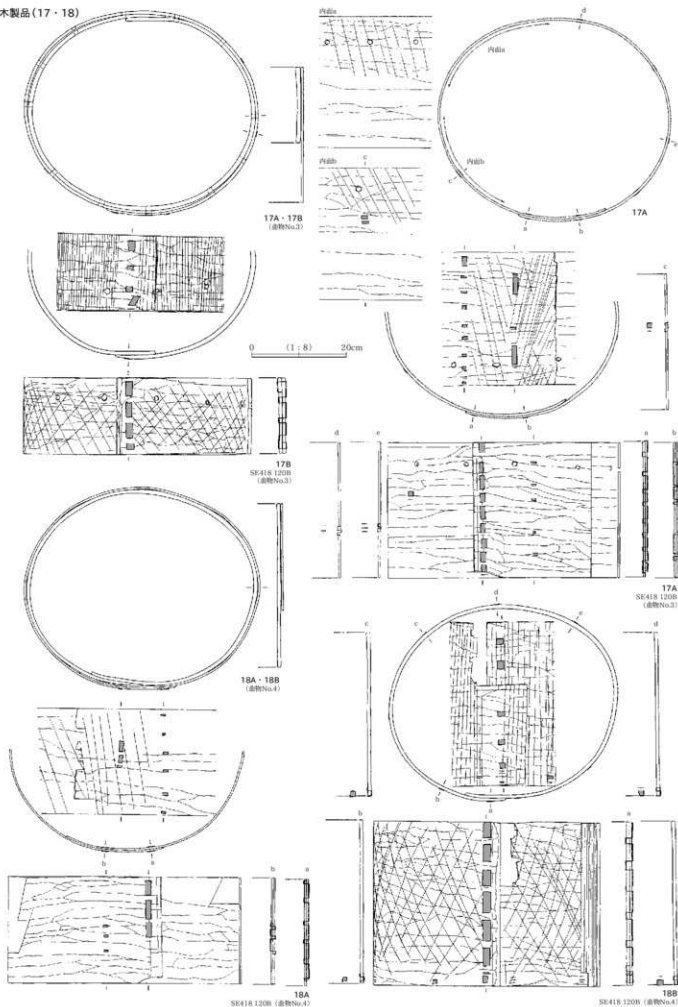
16  
SE418 120B  
(遺物No.2)



15B  
SE418 120B  
(遺物No.1)



## 木製品 (17・18)





調査地全景空中写真（北→南）



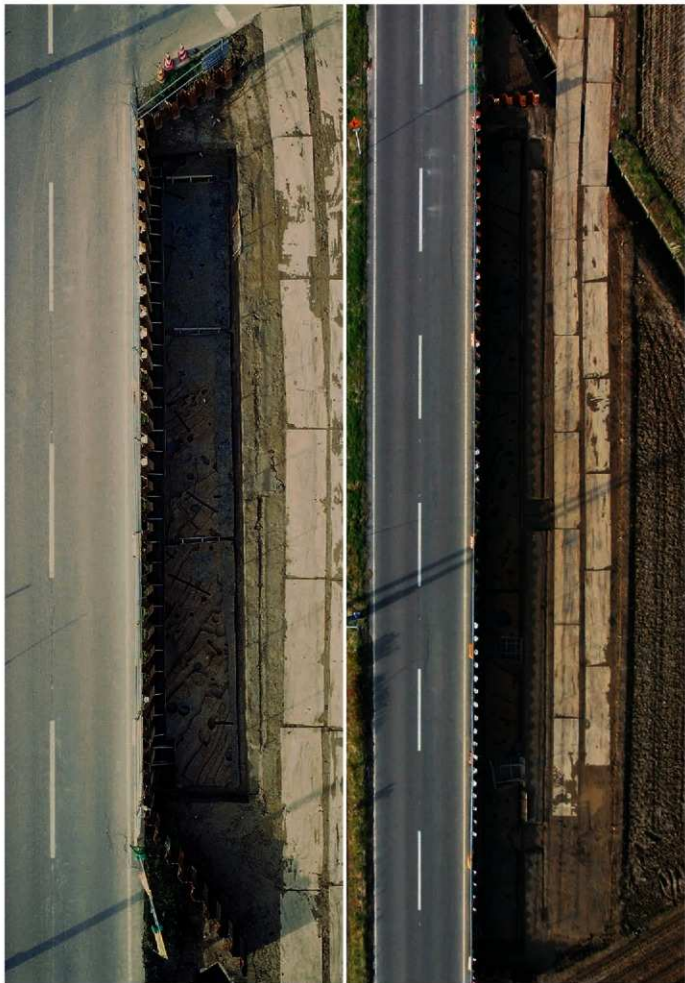
調査地全景空中写真（南→北）



1区全景空中写真



2区全景空中写真



3区全景空中写真

4区全景空中写真





1区北壁 1A・1Bの層序（南→北）



1区北壁 1B・1Cの層序（南東→北西）



2区東壁 39Bの層序（西→東）



2区東壁 68Bの層序（西→東）



2区東壁 73Bの層序（西→東）



3区東壁 83Bの層序（西→東）



3区東壁 84Bの層序（西→東）



3区東壁 86Bの層序（西→東）



1区 SD52 (1b期) 断面 (東→西)



1区 SD47・48・51 (1b期) 完掘状況 (西→東)



1区 SD46 (1b期) 断面 (北→南)



1区 SD47 (1b期) 断面 (北→南)



1区 SD2 (Ⅱ期) 断面 (西→東)



1区 SK1 (Ⅱ期) 断面 (南→北)



1区 SX29 (Ⅱ期) 断面 (西→東)



1区 SX29 (Ⅱ期) 完掘状況 (西→東)



1区SD34（Ⅱ期）完掘状況（南西→北東）



1区SD34（Ⅱ期）遺物出土状況（北東→南西）



1区SD34（Ⅱ期）中央南部の遺物出土状況（西→東）



1区SD34（Ⅱ期）南端部の遺物出土状況（西→東）



1区SD34（Ⅱ期）北端部の遺物出土状況（西→東）



1区SD34（Ⅱ期）中央北部の遺物出土状況（西→東）



1区SD34（Ⅱ期）中央セクションベルトの層序（北→南）



1区SD34（Ⅱ期）南セクションベルトの層序（北→南）



1区 P35・36・37（Ⅱ期）分布状況（西→東）



1区 P37（Ⅱ期）断面（北→南）



1区 P27（Ⅱ期）断面と礎板の出土状況（東→西）



1区 P27（Ⅱ期）底面の剝材出土状況（東→西）



1区 21A Ⅲ層下部の須恵器大甕出土状況（北→南）



1区 SX29（Ⅱ期）の土師器・アスファルト塊出土状況（南→北）



1区 SX29（Ⅱ期）南セクションベルトの大形アスファルト塊  
出土状況（東→西）



1区 12B Ⅲ層のアスファルト塊出土状況（南→北）



2区畝状遺構1(1b期)完備状況(北→南)



2区SD129・130(1b期)遺物出土状況(東→西)



2区SD130(1b期)遺物出土状況(東→西)



2区SD130(1b期)土層断面(南→北)



2区SD131(1b期)土層断面(北→南)



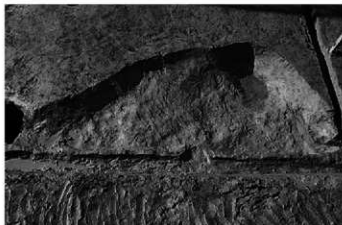
2区SD134(1b期)土層断面(北→南)



2区45列～46列の遺構(東→西)



2区54列～56列の遺構(東→西)



2区 SX63（1b期）完掘状況（東→西）



2区 SD56（1b期）遺物出土状況（東→西）



2区 SD448（1b期）完掘状況（東→西）



2区 SD448（1b期）断面（西→東）



2区 SD62（1b期）完掘状況（東→西）



2区 SD62（1b期）断面（北西→南東）



2区 SD206（1b期）完掘状況（東→西）



2区 SD206（1b期）断面（南→北）



2区 SD71（Ⅱ期）断面（東→西）



2区 SD71（Ⅱ期）と耕作痕（東→西）



2区 39列の耕作痕（東→西）



2区耕作痕全景（西→東）



2区 39Aの耕作痕（東→西）



2区耕作痕断面（西→東）



2区 SD179・180（Ⅱ期）と SX188（Ⅲ期）完掘状況（東→西）



2区 SD189・190・195（Ⅱ期）完掘状況（西→東）



2区 SD179 (Ⅱ期) 断面



2区 SD180 (Ⅱ期) 断面



2区 SD189 (Ⅱ期) 断面



2区 P58 (Ⅱ期) 断面



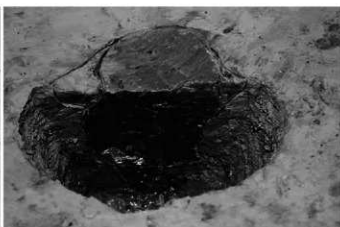
2区 P64 (Ⅱ期) 断面



2区 P69 (Ⅱ期) 断面



2区 P106 (Ⅱ期) 断面



2区 P141 (Ⅱ期) 断面





2区 P136（Ⅱ期）と銭貨の出土状況（北→南）



2区 P136（Ⅱ期）断面（北→南）



2区 SD168（Ⅲ期）完掘状況



2区 SD168（Ⅲ期）断面（東→西）



2区 SD171（Ⅲ期）完掘状況（東→西）



2区 SD171（Ⅲ期）断面（東→西）



2区 SX188（Ⅲ期）完掘状況（西→東）



2区 SX188（Ⅲ期）断面（北→南）



3区畝状遺構2（1a期）完掘状況（北→南）



3区SD226（畝状遺構2）断面（北→南）



3区SD227・228・229（畝状遺構2）断面（南→北）



3区畝状遺構3（1a期）完掘状況（北→南）



3区SD252・253（畝状遺構3）断面（南→北）



3区SD253・262（畝状遺構3）断面（南→北）



3区畝状遺構3南部完掘状況（北→南）



3区SD250・251・252（畝状遺構3）断面（南→北）



3区畝状遺構5(1b期)完掘状況(南→北)



3区SD290(畝状遺構4)断面(南→北)



3区畝状遺構4(1b期)・5(1a期)・6(1b期)完掘状況(北→南)



3区SD260(畝状遺構6)断面(西→東)



3区SD290(畝状遺構4)・SK285・443(1b期)断面(南→北)



3区SD218(Ⅱ期)・P216・217(Ⅱ期)断面(南→北)



3区SD242(1b期)断面(西→東)



3区SX224(Ⅱ期)断面(北→南)



4区畝状遺構 7 (Ia期) 完掘状況 (西→東)



4区畝状遺構 11 (Ia期) 完掘状況 (南→北)



4区畝状遺構 11 (Ia期) 完掘状況 (東→西)



4区畝状遺構 11 (Ia期) 完掘状況 (東→西)



4区畝状遺構 11 (SD379・377) 断面 (南→北)



4区畝状遺構 12 (Ia期) 断面 (南→北)



4区畝状遺構 13 (Ia期) 完掘状況 (北→南)



4区畝状遺構 13 (SD407・408) 断面 (南→北)



4区畝状遺構8（Ⅰa期）・SD343（Ⅱ期）完掘状況（北→南）



4区 SD343・P351・P350（Ⅱ期）断面（北→南）



4区 P334（Ⅱ期）断面（西→東）



4区 P345（Ⅱ期）断面（西→東）



4区 P359（Ⅱ期）断面（西→東）



4区 P367（Ⅱ期）断面（南→北）



4区 P386（Ⅱ期）断面（北→南）



4区 SE433（Ⅱ期）完掘状況（東→西）



4区 SE433（Ⅱ期）板出土状況（西→東）



4区 SE417（Ⅱ期）土層断面（南→北）



4区 SD391（Ⅲ期）土層断面（東→西）



4区 P372（Ⅲ期）断面（南→北）



4区 P341・P342（Ⅲ期）断面（南東→北西）



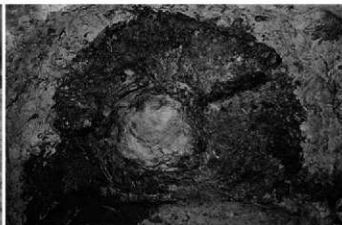
4区 SE389（Ⅲ期）完掘状況（東→西）



4区 SE389（Ⅲ期）断面（北東→南西）



4区 SE418（Ⅲ期）上部断面（西→東）



4区 SE418（Ⅲ期）曲物上面確認状況（西→東）



4区 SE418（Ⅲ期）木羽板層（第16・18層）断面（西→東）



4区 SE418（Ⅲ期）木羽板層上面



4区 SE418（Ⅲ期）曲物 No.4 上面の木羽板出土状況（西→東）



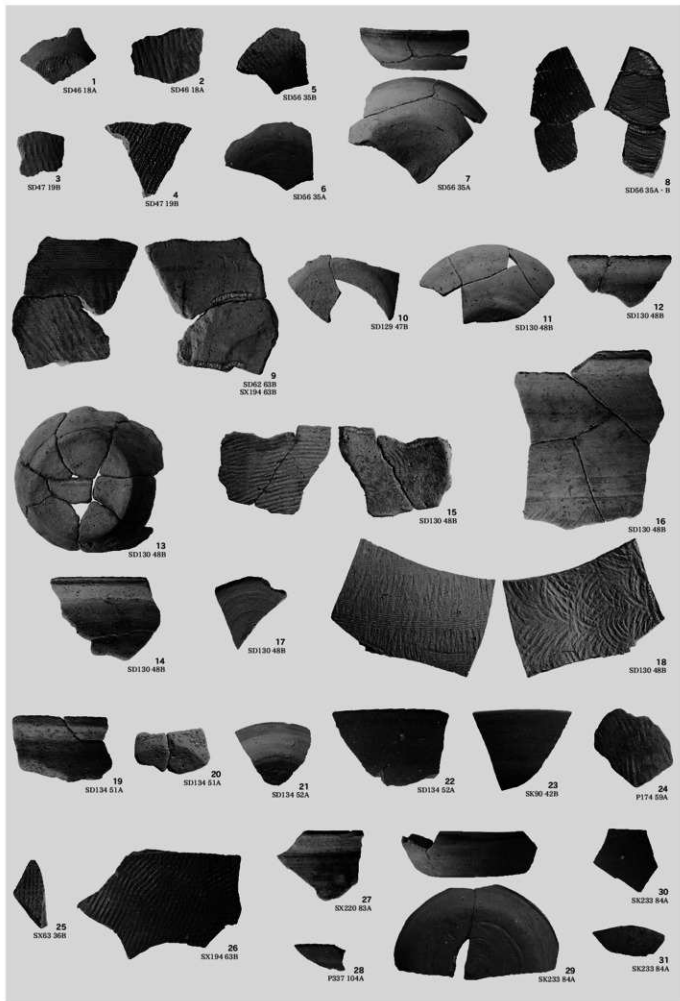
4区 SE418（Ⅲ期）曲物内部断面（西→東）



4区 SE418（Ⅲ期）曲物 No.3～4 の木羽板出土状況（西→東）

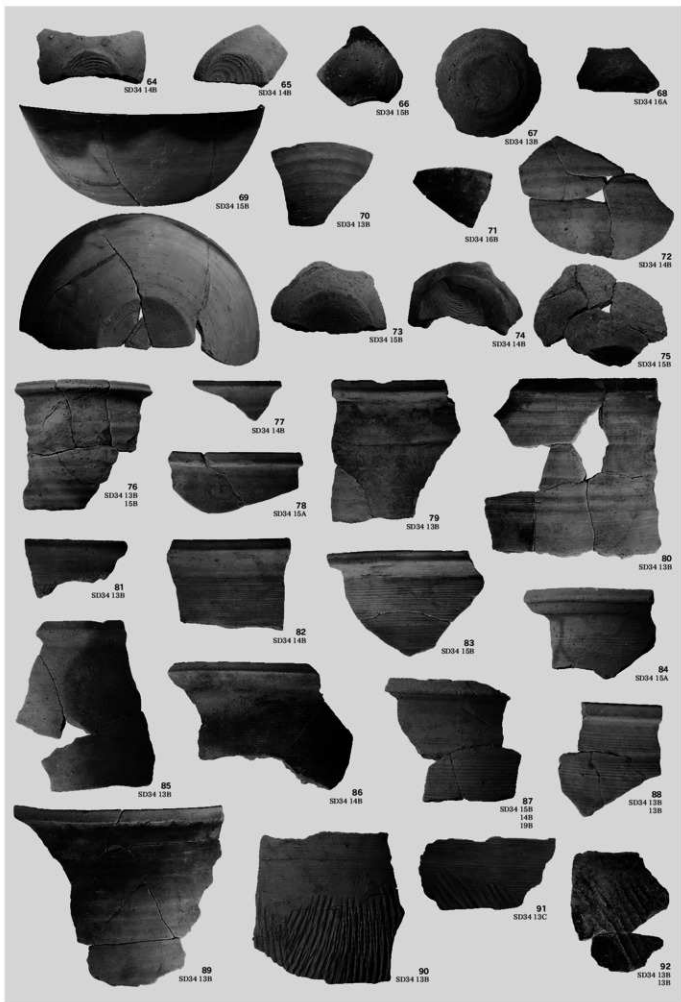


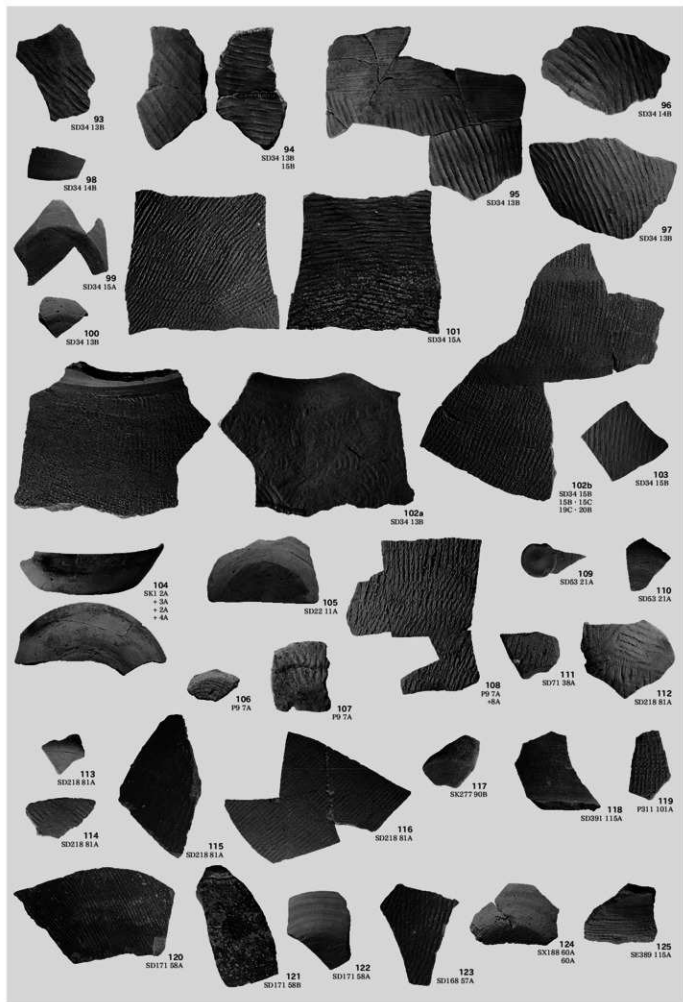
4区 SE418（Ⅲ期）曲物内部完掘状況（南→北）

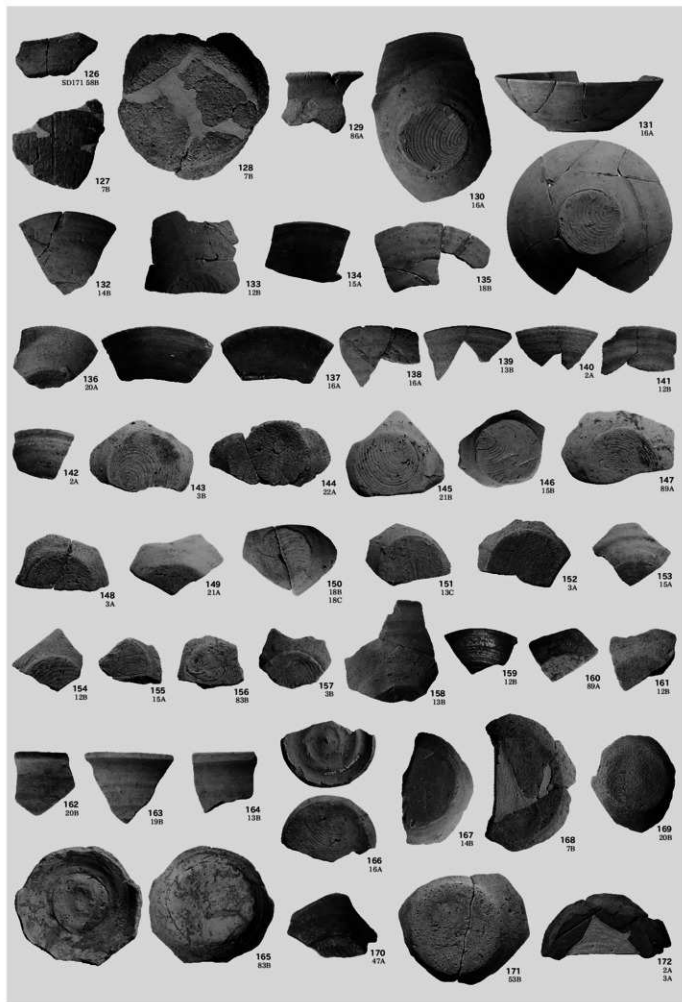


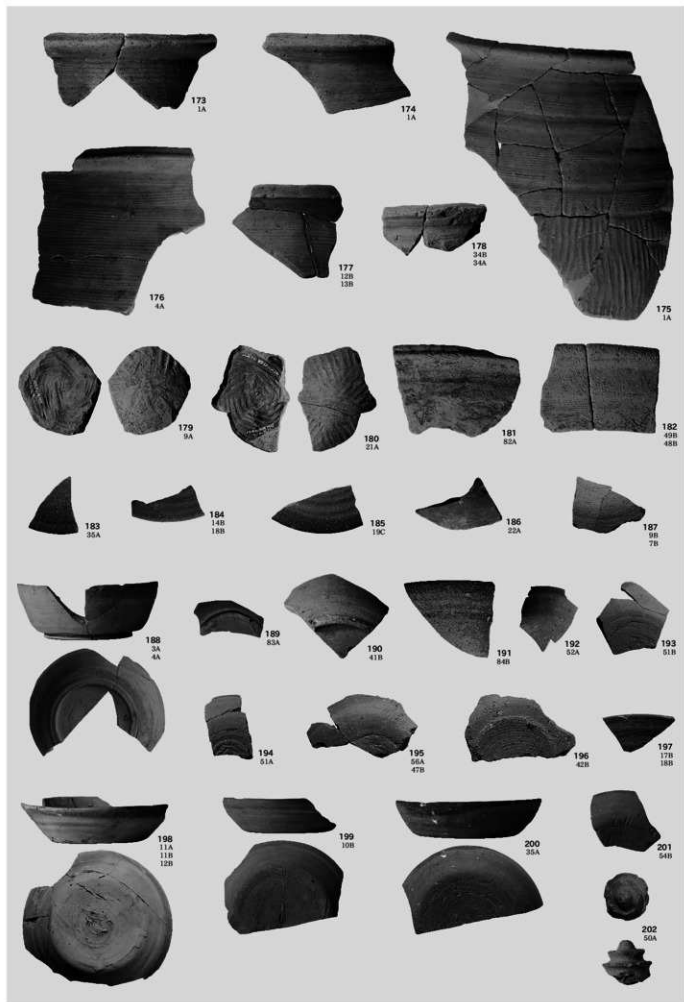


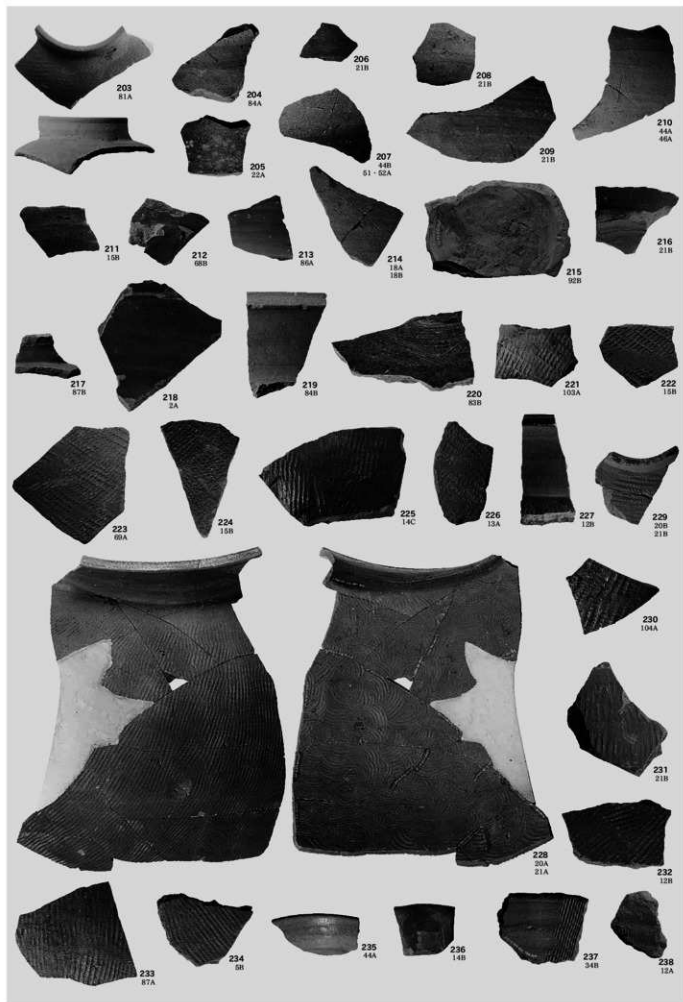














木口痕をもつ平行タタキメ (土師器78)



平行タタキメ (土師器77)



格子タタキメ (土師器75)



同心円当て具痕 (土師器5)



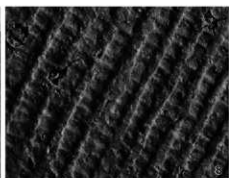
木口痕をもつ平行当て具痕 (未掲載土師器)



平行当て具痕 (土師器78)



菱形格子当て具痕 (未掲載土師器)



木口痕をもつ平行タタキメ (須恵器234)



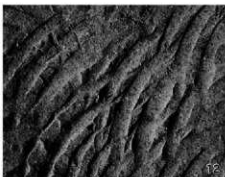
平行タタキメ (須恵器231)



格子タタキメ (須恵器223)



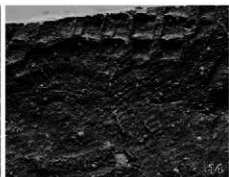
木口痕をもつ同心円当て具痕 (須恵器233)



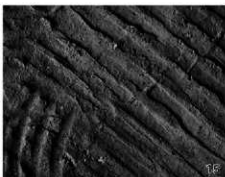
同心円当て具痕 (須恵器26)



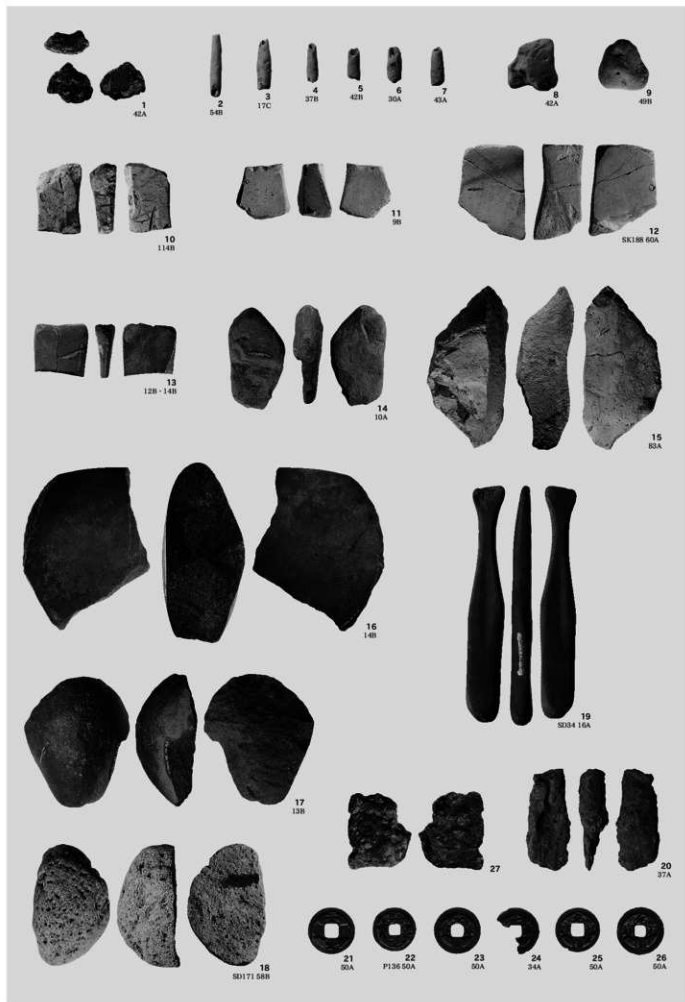
同心円+平行当て具痕 (須恵器221)



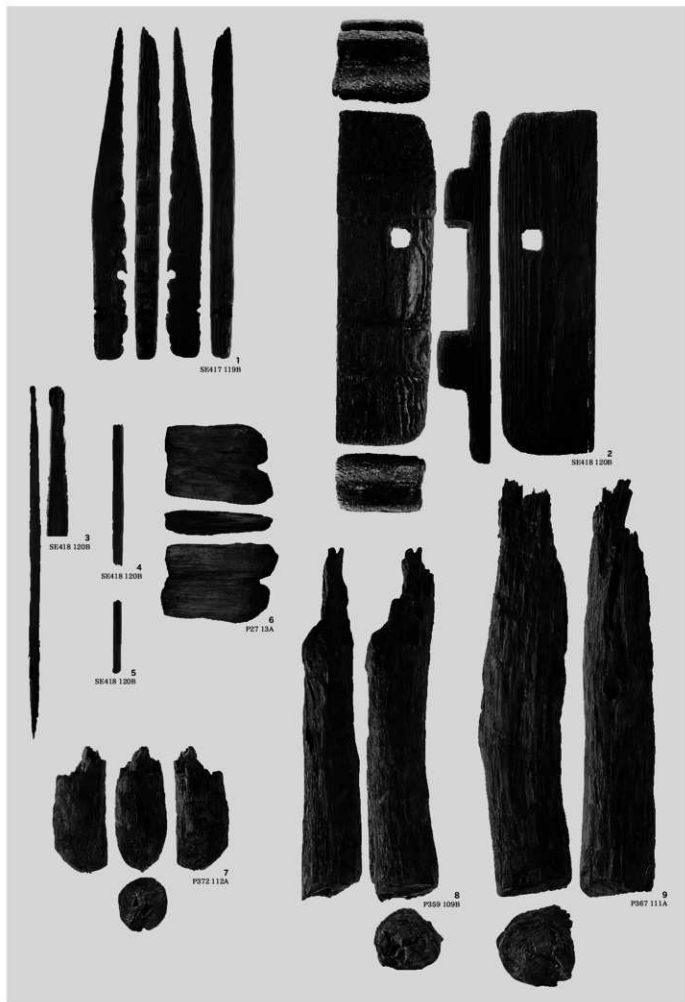
格子+木口痕をもつ同心円当て具痕 (須恵器123)

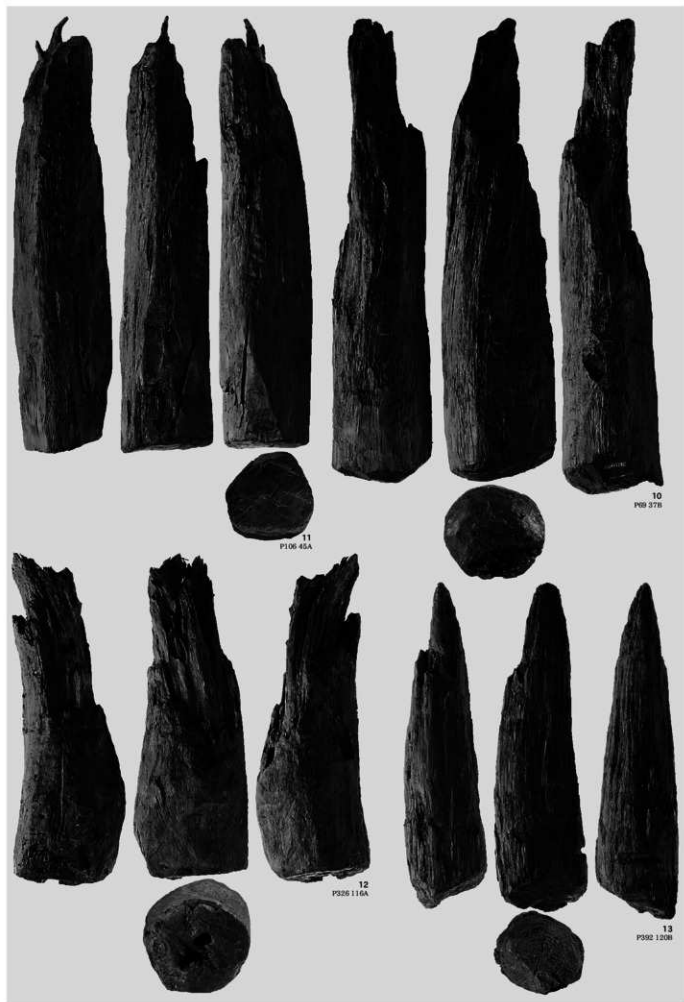


菱形格子+同心円当て具痕 (須恵器224)











14  
SF418 120B  
(曲物No.1)



15A  
SF418 120B  
(曲物No.1)



15B  
SF418 120B  
(曲物No.1)



16  
SF418 120B  
(曲物No.2)



17A  
SF418 120B  
(曲物No.3)



17B  
SF418 120B  
(曲物No.3)



17A  
SF418 120B  
(曲物No.3)



18B  
SF418 120B  
(曲物No.4)



18A内面  
SF418 120B  
(曲物No.4)



17B内面  
SF418 120B  
(曲物No.3)



18B内面  
SF418 120B  
(曲物No.4)



土師器Ⅰa類 無台椀 133



土師器Ⅰa類 長甕 174



土師器Ⅰb類 長甕 66



土師器Ⅰb類 小甕 168



土師器Ⅱ類 長甕 180



土師器Ⅲa類 無台椀 138



土師器Ⅲb類 無台椀 139



須恵器Ⅰa類 無台杯 200



須恵器Ⅰa類 杯蓋 185



須恵器Ⅰb類 長須甕 210



須恵器Ⅱa類 大甕 111



須恵器Ⅱa類 有台杯 188



須恵器Ⅱb類 壺蓋 202



須恵器Ⅲ類 無台杯 196



須恵器Ⅲ類 大甕 233

# 報告書抄録

ふりがな	おおさわやちいせき だいじゅうはちじちようき							
書名	大沢谷内遺跡 第18次調査							
副書名	市道鎌倉横川線改良工事に伴う大沢谷内遺跡第2次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編者名	前山精明・興火山匠考古学研究所							
編集機関	新潟市文化観光・スポーツ部 文化財センター							
所在地	〒950-1122 新潟県新潟市西区本場2748番地1 TEL 025-378-0480							
発行年月	西暦2012年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
大沢谷内遺跡	新潟市秋葉区 横川浜字牛ヶ島 26-1 ほか	15105	342	37° 44' 37"	139° 04' 31"	20100924 ～ 20101206	823	市道鎌倉横川1号線 道路改良工事に伴う
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大沢谷内遺跡	集落	中世(13世紀)	井戸・ピット・溝	中世陶器・中世土師器・石製品(砥石)・木製品(曲物・下駄・箸)・銭貨			多量のアスファルト塊を伴う井戸。特異な整形磁をもつ曲物	
	集落	古代(9世紀～10世紀初頭)	井戸・ピット・溝・畝状遺構	土師器・須恵器・灰釉陶器・土製品(管状土師)・石製品(砥石)・金属製品(鉄斧)・木製品(火鑽白木柱)・漆妻具・アスファルト塊			多量のアスファルト塊。漆妻具の出土	
	遺物包含地	古代(8世紀)	なし	土師器・須恵器				
	遺物包含地	縄文時代晩期	なし	縄文土器				
要約	<p>大沢谷内遺跡は越後平野の東縁に連なる新津丘陵西麓の沖積地に立地する。調査地は遺跡の北端付近に位置し、既設道路の拡幅が予定される全長200m、幅4mほどの範囲を対象とした。基盤層上面における海拔は、3.1m～2.6m ならずである。調査地における遺跡の形成期間は9世紀前半から13世紀代を中心とする。9世紀前半の遺構は水田の一部とみられる区画溝や畑に類似した畝状遺構などからなり、主として生産の場として機能していたようである。9世紀後半になると掘立柱建物や井戸が現われ、居住空間に変貌したことがうかがえる。若干の空白期間を置いた後、13世紀代においても同様の利用形態がとられていた。出土遺物で特筆されるのは、総重量3.7kgにおよぶ古代・中世のアスファルト塊と特異な形態をもつ中世の曲物および漆妻具である。前者は石油の産出地として知られる新津丘陵の地理的特性によるもので、油井とみられる中世の井戸も確認された。後者は山林資源の利用に適した地理条件を背景に、本遺跡が各種木製品の製作・流通に関与した可能性を示唆する資料となる。</p>							

## 大沢谷内遺跡Ⅲ 第18次調査

— 市道鎌倉横川線改良工事に伴う大沢谷内遺跡第2次発掘調査報告書 —

2012年3月15日印刷

2012年3月26日発行

編集 新潟市文化財センター

〒950-1122 新潟市西区本場2748番地1

TEL 025 (378) 0480

発行 新潟市教育委員会

〒951-8550 新潟市中央区学校町通一番町602番地1

TEL 025 (228) 1000

印刷・製本 新高速印刷株式会社

〒950-0963 新潟市中央区南出来島2丁目1番25号

TEL 025 (285) 3311